

サイコロ・くじ引き転
生【短編集】（改題）

しやしやしや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(旧題・「サイコロ振ってください、転生先を決めます」「くじを引いてください特典を決めます」)

転生者たちの転生する前、転生先と転生特典を決めて転生するまでと、その後の人生を描く短編集。

人によっては、不快に感じる方もいらっしゃるかもしれませんが。

感じた人は、ブラウザバック推奨です。

転生後の人生は後書きにざっくりと

.....

タイトル前にある星と四角のマークは転生者についてを表しています。

星マーク：性根を表す（転生前の）

☆ 善人。一般人レベルならここに入る。

★ 腐れ外道。

（小）悪党。

必要なら罪を犯すことも殺すことも厭わない。

自分が至上。

四角マーク：世界への影響

□ 平凡な人生。周囲も幸せに生きた。

■ 周囲を巻き込んで不幸にした。――規制――な感じ。

.....

作者の知識は足りない部分があります。ここは原作の設定と違うぞ、という点もあるかと思いますが暖かい目で見守ってくださいと思えます。

例：ISは8巻まで所有。以降は感想サイトなどであらずじ読む。

D×Dは19巻まで。それ以降については二次小説でなんとなく知っている感じ。

(4月6日 追記)

目次

第一部

☆ □	23番	田中幸夫	享年19歳	1
☆ □	10番	宮本悠希	享年24歳	16
☆ □	321番	長野将彦	享年1	29
★ ■	42番	山本 犀	享年22歳	40
★ ■	547番	古金勉	享年15歳	56
☆ □	492番	水澤ふたば	享年3	

4歳の場合

☆ □ 666番 伊藤仁 享年6歳の

場合 80

基本設定 + 各話目次(転生先と一

言)《ネタバレ》 94

第二部

☆ □ 1番 高野誠 享年17歳の場

合 121

☆ □ 2番 川上朝陽 享年22歳の

場合 130

★ ■ 3番 羽田野栄太 享年12歳

の場合 140

★ ■ 4番 坂井東磨 享年19歳の

場合
——
148

★□ 5番 霜越洸 享年18歳の場

合
——
159

☆□ 6番 星野快仁 享年27歳の

場合
——
167

★■ 7番 木村俐人 享年21歳の

場合
——
178

★□ 8番 井上凱斗 享年16歳の

場合
——
187

☆□ 9番 土田水人 享年20歳の

場合
——
195

☆□ 10番 服部弓太 享年24歳の

場合
——
204

☆□ 11番 芦村義隆 享年23歳の

場合
——
213

☆□ 12番 豊田正人 享年15歳の

場合
——
235

★■ 13番 鈴木快凜(かいり) 享年

14歳の場合
——
242

★□ 14番 古見亮 享年21歳の

場合
——
251

☆□ 15番 前田愛秀 享年7歳の

場合
——
258

☆□ 16番 佐藤実 享年16歳の

場合
——
270

★□ 17番 八木涼晴 享年19歳の

の場合
|
276

☆■ 18番 渡邊義幸 享年25歳

の場合
|
282

★□ 19番 白井俊樹 享年12歳

の場合
|
291

☆□ 20番 笹木こうき 享年17

歳の場合
|
306

☆■ 21番 北崎深谷(たかや) 享

年18歳の場合
|
319

☆■ 22番 黛克英(兵藤一誠) 享

年20歳の場合
|
329

☆□ 23番 今井恵太 享年18歳

の場合
|
348

☆■ 24番 二階堂順平(二階堂の

ぞみ) 享年27歳(0歳)の場合

355

☆□ 25番 浦戸和成 享年25歳

の場合
|
363

☆□ 25番 浦戸和成 享年25歳

の場合
|
386

★■ 26番 小野智一 享年14歳

の場合
|
415

☆■ 27番 上野義光(よしみつ)

享年20歳の場合
|
426

☆■ 28番 能山北斗 享年19歳

の場合
|
438

☆ ■ 29番 潮谷光人 享年17歳

の場合 | 445

☆ □ 30番 太田信夫 享年11歳

の場合 | 457

★ □ 31番 林実 享年14歳の場

合 | 464

★ ■ 32番 滝川駿 享年27歳の

場合 | 477

☆ ■ 33番 黒岩勇悟 享年22歳

の場合 | 485

☆ □ 34番 小原直希 享年32歳

の場合 | 500

☆ ■ 35番 福田正晴 享年10歳

の場合 | 508

☆ □ 36番 後藤旭 享年22歳の

場合 | 519

☆ □ 37番 田中一喜 享年11歳

の場合 | 527

★ ■ 38番 石松幹 享年18歳の

場合 | 537

☆ ■ 39番 佐橋之二 享年24歳

の場合 | 552

★ □ 40番 銅田弥 享年17歳の

場合 | 569

☆ □ 41番 吉原照孝 享年14歳

の場合 | 580

☆□ 42番 青木純 享年21歳の

場合 | 589

☆■ 43番 荒井将太郎 享年20

歳の場合 | 601

☆□ 44番 川上珠 享年16歳の

場合 | 615

☆□ 45番 吉田識 享年12歳の

場合 | 631

★■ 46番 竹本康 享年26歳の

場合 | 639

☆□ 47番 広川琢磨 享年13歳

の場合 | 649

★■ 48番 白澤ゆきと 享年27

歳の場合 | 663

☆□ 49番 金森慎吾 享年16歳

の場合 | 677

☆□ 50番 五十嵐空 享年20歳

の場合 | 686

★■ 51番 木村明生 享年22歳

の場合 | 704

★■ 52番 多賀始 享年14歳の

場合 | 716

☆■ 53番 久里次郎 享年26歳

の場合 | 731

★■ 54番 梶原洋平 享年12歳

の場合 | 745

☆ □ 55番 森山恋 享年21歳の
場合

第一部

☆□ 23番 田中幸夫 享年19歳の場合

「…

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を」

「。――」

???????

「……ふう。キャラ作りも大変だなあ。やっぱ素で対応したほうが楽かも」

「さて、次はっ」と

ガチャ

「――?」

「どうも初めまして えー23番 田中幸夫さん、享年19歳でよろしいですね?」

「?!――!」

「ええお亡くなりになりました。就寝中の突然死ですね。一人暮らしたため発見が遅れた…と。とりあえずこちらにどうぞ。あ、ドアは閉めてくださいね」

バタン

「――?」

「うふふふ。そうですよ、神様転生というやつです。まあ私は神じゃないですが、神の使いです」

「……………」

「あ、大丈夫ですよ。ご安心を。田中さんの考えてるような陥れる系や、神が邪悪…的な物ではありませんので、普通にあなたを転生させて、その物語を見ようというだけなので。うちは、そうですね、娯楽目的の神様転生です」

「!」

「はい、心を読みました。……ああ、そんなにおびえなくて大丈夫ですよ。言ったじゃない

いですか娯楽目的って。別にあなたでなければならぬ理由はありませんが、転生者に選ばれた人を消すような真似はしませんよ」

「……………」

「ああ、いえ。選ばれたというのは少し違いますね。正しくは無作為に選んだ中の一人です。23番とお呼びしたのはそういう意味です。今更ですが、転生拒否なさいますか？」

「……………」

「ですか。ちなみに拒否された方は今まで一人もおりません。やっぱり生きたいって思いが皆さん強いんですかね」

「……………」

「おっと、それでは転生なさるということで。ではまずは転生先を決めてもらいます

—————これを使って……！」

「……………」

「サイコロです。カラフルでしょうか？ 青と赤、黄色と緑もあるんですが使うのは2個なので。？ ああ見たことがある…：そうですね、これは100円ショップで買ったものです」

「……………」

「このサイコロを田中さんに振ってもらい、出た目に対応する世界に転生してもらいます。まさに人生のかかった賽ですね、100円ショップのサイコロに人生をかけて、どうぞ！」

「……………」

「おっと、失礼しました。出目に対応する世界はこんな感じになっています」

青 : 赤

?? ? : ? ? ↓ ONE PIECE

?? ? : ? ? ↓ BLEACH

?? ? : ? ? ↓ IS

?? ? : ? ? ↓ ハイスクールDXD

?? ? : ? ? ↓ 魔法少女リリカルなのは

?? ? : ? ? ↓ TO LOVEる

?? ? : ? ? ↓ Fate /

?? ? : ? ? ↓ ポケットモンスター

?? ? : ? ? ↓ なんちゃってファンタジー世界

? ~ ? : ? ↓ 自由

? ~ ? : ? ↓ 自由

? ~ ? : ? ↓ 自由

「ざつとこんな感じですよ。最後3つの組み合わせが当たりですね」

「——。——?」

「いえ、これを決めたのは神様です。転生先の世界は、神様の作った箱庭世界です。ほんものそっくり、物語そのままの世界です。原作通りに世界が動くかはあなた次第です。介入すればかわるかもしれませんが。それと、朗報ですよ、田中さん。どの世界もちゃんと二次元の世界ですよ」

「?」

「つ・ま・りっ！ 女の子もちゃんとかわいいということですよっ！ 実写化で全然可愛くなくて絶望した…ということにはならないということですよ。おお、喜色満面の感情が伝わってきます」

「さてそろそろ振ってみてください、どうぞ！」

「——!!」

から、からからから

? : ?

「っ！」

「おめでとうございまくす！ 大当たり。これで田中さんは自由な世界に転生する権利を獲得しました」

「——！」

「ぱちぱちぱち。では、何の世界に転生しますか？」

「……………。」

「はい、この後はお決まりの特典を選び、転生ですね。はじめは“アイテム特典”これも自由に選べるわけではありません。今度はいくじ引きで選んでもらいます。そして、もう一度サイコロを振ってもらい、“特典能力”を選んでもらいます。そして転生です」

「——？」

「それは、まだ言えません。さあ、あなたは何の世界に転生しますか？」

「……………」。

『池袋発、全セカイ行き！』でお願いします」

「はいはい、えーと。なかなかマイナーな作品ですね。どうしてこれを？」

「まず、日常系の作品がよかったです。転生物でバトル系に転生して戦える精神を僕はもっていないと思うので」

「ふむふむ」

「次に、せっかくならかわいい子のいる作品がいいな…と。でも僕が知ってる作品で日常系で女の子が可愛いって、これかきさら系作品しかなかったの」

「なぜきさら系の作品にしなかったの？」

「いやあ、きさらは『あんハピ』ぐらいしか漫画もってなくてアニメでしか知りませんし、その…………」

「ああ…。まあ、そうですね。この作品作者が作者ですし可愛いというか」

「それ以上はやめてください！ 恥ずかしいです…」

「それでは次に、特典を決めます。初めは『アイテム特典』です」

「——？」

「漫画やアニメの特殊な武器や道具を特典として与えるということです。このくじの中から選んで、このリストの番号に照らし合わせ、当たったアイテムを与えます」

「……………」

「これですか？ くじです。私のお手製の。厚紙に一つ一つ番号を書き、はさみで切つて、大変でした。それと、ノートです。Tの書店で買いました。こう見えて常連なのですよ？ ほら見てくださいポイント、すごいでしょ」

「——！……………」

「おっと、横道にそれてしまいましたね。与えられた『アイテム特典』はハイスクールD×Dの神器のように任意に出現させたり消えさせたりすることができます。盗まれることはないでしょう。では、よろしいですか？」

「——」

「まずはくじを引く回数を決めます。サイコロをどうぞ。出た目の数が、あなたが得ることのできる特典の数になります。リストの中には普通に便利なものもあります。で

「は、どうぞ！」

「！！」

「から、からからから」

「はい、では3回くじをお引きください、どうぞ
がさごそがさごそ

1 3 2 2 . . . 3 6 4 . . . 1 7 4

「？」

「はい、えーと、少々お待ちを…」

「まずは、1 3 2 2番、これは『クマシユンの入ったモンスターボール』ですね
「……………ポケモン？」

「はい、ポケモンです。氷タイプのひょうけつポケモンですね」

「いや、ポケモンは生き物では？」

「あくまでボールが特典です。文句なら神様に言ってください。リストを作ったのは私ですが、内容をリストアップしたのは神様ですから」

「はい…あの、ポケモンフーズとかどうすればいいんでしょうか」

「えーっと、普通の食べ物で大丈夫なようです。あくまでポケモンそっくりのモンスターなので。それと、体力が消耗したら、ボールに戻して、自分の中に戻せばいいみたいですね。いわばあなた自身がポケモンセンターと言ったところですかね」

「では、つき364番は『ペイズリー・パークのスタンドDISC』です」

「……スタンドじゃないですか」

「そうですね。『ジョジョリオン』の広瀬康穂さんのスタンド。自分や他人に行くべき方向や場所に導く能力をもつスタンドですね」

「ええ…」

「この特典は、とりだし不可となっています。与えられた時点であなたにはスタンド能

力として『ペイズリー・パーク』を使うことができるようになります」

「……………」

「あなたの忌避感は理解できます。しかしこれは神様の作ったそっくりのコピー品です。あまり気にしない方がいいですよ」

「…そうですか…そうですね」

「では最後、174番は『滅火皇子』^{エステインギル}ですね」

「うん？」

「『BLEACH』に出てくる破面の一人ワンダーワイス・マルジェラの帰刃の名前ですね」

「ワンダーワイスって誰でしたっけ…？」

「あれですよあれ、あーとかうーとか言ってた、浮竹さん貫いたアレです」

「あー…。この特典、なんなんですか？」

「はい、形状はワンダーワイスの持っていた十字架のような斬魄刀ですね。そしてその斬魄刀がワンダーワイス・マルジェラでもあります」

「…それはあれですか、破面にとつて斬魄刀は一部だから、それだけでは何にもならない。ならいつそ斬魄刀＝破面にして特典にしよう…という」

「その通りです。神様のせいです。ツ私は悪くありません」

「はあ」

「田中さんの言うように、『滅火皇子』エステインギルⅡワンダーワイズ・マルジエラです。死神の皆さま

んが行っていたように刃禪を行えば対話も可能です。そうしたら、帰刃も可能です」

「帰刃というと、あれですか、控えめに言って化け物ですが、というか実体なんですか？

」

「いえ、霊体です。帰刃時のみ霊体となるとのことですよ。あと、この特典のおまけというか、副次効果というか、否応にも霊圧が高まり、幽霊が見えるようになるので、ご了承ください」

「はい？ え、幽霊いるんですか？ 『池袋発、全セカイ行き！』はそういう世界じゃないはずなんですけど」

「いますね。逆に、いないと明言されている世界でないと幽霊はいます。まあ霊圧が高まれば幽霊なんて消滅していくようになりますよ、たぶん」

「ええ…」

「さて、〃アイテム特典〃の次は〃能力特典〃です。これはサイコロの出目によって便利な能力を一つ手にできます」

「――」

「はい、これが対応する能力となっています」

? アイテムBOX（内容量無限）（内部時間停止）（中身把握）（生物不可）

? 鑑定（名前など基本的な内容が丸わかり）（人の名前忘れちゃったとき便利だね）

? 翻訳（どんな言葉も理解できるよ）（読めるし書けるし聞けるし喋れるよ）（on/off可能だよ）

? リスタート×1（不慮の事故など寿命以外の原因で死亡した時、回避可能な時間に戻って1度だけやり直しができるよ）

? ○○○コントロール（アレを自由に動かせるよ）（○倫男になれるよ）（たったやってたあがれない時に便利だね）

? はずれ（残念外れだよ、アイテムで我慢してね）

「……………」

「○の中には私じゃありません。神様です。神様のせいです」

「では、これで最後です。どうぞ」

「」

「からん、からから」

「4ですね。リスタート×1です。おめでとうございます」

「できれば翻訳が欲しかった…」

「そうなんですか」

「はい、僕 英語苦手なので…」

「まあ、仕方ないですよ」

「あーミスったなあ…」

それでは転生です。

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございました。行ってきます」

「いってらっしゃい」

☆■ 10番 宮本悠希 享年24歳の場合

「…

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を」

「――」

「はい、あなたの人生に幸運がありますように」

???????

「んー…。ふう、次の方どうぞ」

ガチャ

「……………」

「初めまして宮本悠希さん。享年24歳。あなたは10番目の転生者です。これから転生のための説明等を行います」

「……………」

「はい、残念ながら。お悔やみを申し上げます」

「……………」

「はい、ご家族の皆さんはあなたの死を悲しんでいます」

「……………」

「残念ながら、それはできません。「家族に一言」というのは出来ないのです。申し訳ありません」

「……………」

「いえ、あなたは称賛されるべき人です。なら、私がこうするのも当然です」

「では、説明をさせていただきます。宮本さんにはまず、このサイコロを振ってもらいます」

「?」

「ありがとうございます。そしてそのサイコロの出目によって転生する世界が決められます」

「?」

「ああ、えつとですね。転生です。わかりますか? 神様転生というやつです」

「。」

「はい、あなただけです。転生者は複数いますが、それぞれが別々の世界に転生しています。あなたがどの世界に転生してもその世界にあなた以外の転生者はいませんし、将来的にやってくることもありません」

「?」

「内訳はこのようになっています」

青 : 赤

? ? ? ? : ? ? ? ? ↓ ONE PIECE

? ? ? ? : ? ? ? ? ↓ BLEACH

? ? ? ? : ? ? ? ? ↓ IS

? ? ? ? : ? ? ? ? ↓ ハイスクールD×D

? ? ? ? : ? ? ? ? ↓ 魔法少女リリカルなのは

? ~ ? : ? ↓ To LOVEる

? ~ ? : ? ↓ Fate /

? ~ ? : ? ↓ ポケットモンスター

? ~ ? : ? ↓ なんちゃってファンタジー世界

? ~ ? : ? ↓ 自由

? ~ ? : ? ↓ 自由

? ~ ? : ? ↓ 自由

「?」

「これはその通り、自由です。あなたは自身で転生する世界を選べるという意味です。もちろんこの中にもない世界でも問題ありません」

「では、よろしいですか?」

「」

からん、からん

?…?

「おお、はい。宮本さんの転生する世界は『T。LOVEる——とらぶる——』の世界に決定しました」

「これはどうなんでしょうか。危険とは言えないのかどうなのか、確かえつちな漫画だとは聞いたことあるんですが、読んでなくて」

「どうでしょう…基本的にはラブコメディの世界ですが、バトル要素もある世界ですし、何より宇宙人が存在し、危険な相手がわんさかいる世界ですから。安全かどうかは…」

「いえ、ありがとうございます」

「はい、では次に『アイテム特典』の数をサイコロで決めてもらいます」

「——?」

「『アイテム特典』とは漫画やアニメの特殊な武器や道具を特典として与えるものです例えば、22世紀からやってきた猫型ロボットのひみつ道具とか」

「——。」

「はい、ではお願いします」

「——!」

からからから

「ふ…ですね。ではどうぞ」

「——？」

「あ、これはくじです。これで引いた番号と同じ道具があなたの“アイテム特典”になります」

「——」

「あ、ありがとうございます。じつは、これ自作でして…あ、特典を決めたのは神様なんですけどー」

「——」

「はい、ではどうぞ」

がささ(そ)がささ(そ)

2081・・・235・・・1441

」

「えーつと、まずは2081番は、『キングキタン』ですね」

「それはっ…! 『天元突破グレンラガン』のガンメンの、キタンさんの『キングキタン』ですか?」

「はい」

「では、頂けません」

「えっ! なぜですか?!」

「『キングキタン』はキタンさんのものです。僕が使っているものではありません」

「あ、うう…えつと、これはあくまで神様が原作をもとにして作った贋作です。コピー品です。だから、その、あの…」

「……………わかりました。これはコピー品で『キングキタン』ではない。そう思うことにします。ところで動力はどうなるのですか? やはり電力ですか?」

「ああ、いえ。螺旋力です。この特典を得た人は螺旋力を用いることができるようになるので」

「…それは」

「どうしましたか？」

「いえ…何でもありません。それで次は」

「あ、はい。次、235番は『愚者のスタンドDISC』です」

「…スタンドですか」

「はい…。えっとこれもそのコピーと言いますかその…」

「いえ、大丈夫です。もう割り切りましたので。確認ですが、3部の、イギーの、砂のスタンドの『愚者』で、間違いないですね？」

「はい。間違いありません」

「ふむ…」

「えっと…」

「あ、失礼しました。最後、お願いします」

「はい、最後1441番は『絶霧』です」

「…それはなんでしょうか」

「えっとこれはハイスクールD×Dに出てくる「聖書の神」が作ったシステムで、不思議な能力を所持者へ与える異能の一種です。そしてこれはその中でも神器の中でも、神すら滅ぼすことが可能な力を持つと言われる特殊な神器《神滅具》で、上位神滅具の1つです。

所有者を中心に無限に霧を生み出す神器で結界系神器では最強の力を持ち、対象を霧で包み込むことで防御したり、霧に触れた者を任意の場所に強制転移させることもできます。直接的な攻撃力はありませんが、霧で上半身だけ転移させて断絶したり、消滅させることなどもできるため、使い方次第で国1つ滅ぼすことも可能な力を持つアイテムです」

「それはすごい」

「あと、神器は使い手の思いによって禁手と言ってさらにパワーアップすることもあります」

「そんなものがあるのですか」

「まあ、宮本さんには必要ないですね」

「そうですね…電車賃節約できそうですね」

「では、次は『能力特典』を決めてもらいます」

「――?」

「はい、『能力特典』というのは神様が選んだ便利な特殊能力をサイコロの出目によって与える、というもので、その能力がこちらになります」

? アイテムBOX（内容量無限）（内部時間停止）（中身把握）（生物不可）

? 鑑定（名前など基本的な内容が丸わかり）（人の名前忘れちゃったとき便利だね）

? 翻訳（どんな言葉も理解できるよ）（読めるし書けるし聞けるし喋れるよ）（on/off可能だよ）

? リスタート×1（不慮の事故など寿命以外の原因で死亡した時、回避可能な時間に戻って1度だけやり直しができるよ）

? ○○○コントロール（アレを自由に動かせるよ）（○倫男になれるよ）（たっちやつてたちあがれない時に便利だね）

? はずれ（残念外れだよ、アイテムで我慢してね）

「…」

「あう…。こ、これは神様が書いたんです。だから、その私じゃないんです」

「――」

「うう…で、ではサイコロをどうぞ」

「……………!!」

からっん からから

「……………」

「……………」

「その、うちの神様が本当に申し訳ありません」

「い、いえ。これも、あー、便利ですし、きっと、その…朝とか」

「…」

「あー…うう…」

で、では転生を行います。

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「さようなら、あなたはきつと立派な人になるのでしょうか。でも、少しは自分のために生きてもいいと思いますよ？」

「はい、本当にありがとうございます。今度は少し自分に素直に、自由に生きようと

☆□ 321番 長野将彦 享年17歳の場合

「…」

君がこれから手にする力で何をして、それは君の自由だカク。

ボクたちは君が亡くなった後に、君の人生を閲覧するけど、評価するわけじゃないカク。

君の人生に三度目はないカク。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかは君次第カク。

転生を行うカク。それではいい人生をくカクー ばいばいカクー！」

「――」

「うるさいカク。これはキャラ付けカク。ほつといてほしいカク」

「…やっぱり間違えたかな」

???????

「次の方どうぞカクー」

ガチャ

「……。!?」

「321番、長野将彦さん、享年17歳カクね。凍結した階段を滑って転落、事故死カクね……」

「……………?」

「そこは触れないでもらえるかな、自分でも無理を感じているから、とりあえず今回はこのキャラで行くって決めているんだ。触れないでくれ。∴触れないでほしいカクな」

「」

「では、説明を始めるカク。長野さん、あなたの察している通り、これは神様転生というやつカク。特典を神様からもらい、転生して、第二の人生を送ってもらうカク」

「!」

「先に言っておくカク。あなたの死は神様のミスとかではないカク。文句を言わないでほしいカク。転生先・特典はサイコロとくじで決めるカク。ショーもないのが当たるか

もしれないけどゴネないでほしいカク」

「よかつたカク。たまににいるのカク。ごねていい条件を引き出そうとしたり、ひたすらこつちを責め立てて話を聞こうとしない人が」

「。」「
「ありがとカク。元氣出たカク。それじゃあ転生先を決めるカク！」

「サイコロカク。この出目の組み合わせで転生する世界を決めるカク。組み合わせの内訳はこんな感じカク」

青 : 赤

???:?↓ONE PIECE

???:?↓BLEACH

???:?↓IS

???:?↓魔法少女リリカルなのは

???:?↓TOLLOVEる

???:?↓Fate／

?…?…?…?↓ポケットモンスター

?…?…?…?↓なんちやつてファンタジー世界

?…?…?…?↓自由

?…?…?…?↓自由

?…?…?…?↓自由

「ボクとしては、後ろ3つが当たりカク。それでは、どうぞ！…カク！」

「——！！」

からっん ころころ

?…?…?

「おお、長野さんの転生先は『IS ヘインフィニット・ストラトス』の世界カク」

「うわちやー、ISですかー…」

「やつぱり、嫌カク？」

「いや…つていいですか、その、この世界女尊男卑ですよ？ そんな世界にはなるべく

行きたくないっていうか、ほら俺、こんな顔ですし」

「うーん、ノーコメント カク」

「男は顔じゃない、と言ってくれないんですね…」

「残酷だけど結局顔カク。他は金カク」

「おうふ。なら、原作開始前に転生することは…」

「ごめんカク。できないカク。主人公の織斑一夏と同じ年で生まれるカク」

「そうですか…」

「ま、まあ元氣出すカク！ さあ次は『アイテム特典』カク！」

「———？」

「『アイテム特典』とは漫画やアニメの特殊な武器や道具を特典として与えるものカク。それこそISだつてあるカク。では、特典を決めるくじを引く回数をサイコロで決めてもらうカク」

「———」

「あー、カク。ま、まあとりあえずどうぞカク。振つてみてカク」

「———！！」

からっ からからからからん

「おお、2個カクか…」

「——？」

「問題ないカク！ ISの世界は危険がそれほどあるわけじゃないし、2個で十分なんじゃないかなカク」

「……——」

「じゃあくじ引きカク！ アイテム特典”どうぞカク！”」

「——！！」

がさいそがさいそ

2331・・・641

「さ、まずは2331番カク。えーと『No. 074 賢者のアクアマリン』カク」

「えーと…ん？ なんですか、それ。俺全然聞いたこともないんですけど」

「んーっと、これは『HUNTER×HUNTER』グリードアイランド(G・I)編に出てきた指定ポケットカードの一枚カクね。機能は《所有している者は、一生を通して付き合うこと》の出来る、知識豊かな友人を何人も得るだろう。《だそうカク》」

「要は、未来の親友と引き合わせてくれる宝石というわけですか」

「そういうことカクね。ISの世界でこれは心強いカク！」

「そうですね」

「では、2つ目カク。641番『天道宮』カク」

『『天道宮』…それって『灼眼のシャナ』のでっかいあれですか」

「でっかいあれカク。移動要塞型宝具『星黎殿』に連なる移動城砦型宝具『天道宮』

…カク」

「正直、どうしろというのですか！ なんですけど…まあ仕方ないですね。ともかくこの2つが俺の特典でいいんですね」

「あ、うん。そうカク」

「じゃあ最後に、〃能力特典〃カク」

「？」

「〃能力特典〃とは神様が選んだ便利な能力を特典としてもらえるということカク。これもサイコロで決めるカク」

「？」

「ああ、違うカク。特典の種類は5つカク。内訳はこんな感じカク」

？ アイテムBOX（内容量無限）（内部時間停止）（中身把握）（生物不可）

？ 鑑定（名前など基本的な内容が丸わかり）（人の名前忘れちゃったとき便利だね）

？ 翻訳（どんな言葉も理解できるよ）（読めるし書けるし聞けるし喋れるよ）（on/off可能だよ）

？ リスタート×1（不慮の事故など寿命以外の原因で死亡した時、回避可能な時間に戻って1度だけやり直しができるよ）

？ ○○○コントロール（アレを自由に動かせるよ）（○倫男になれるよ）（たつ

ちやつてたちあがれない時に便利だね)

? はずれ(残念外れだよ、アイテムで我慢してね)

「……………」

「うん。言いたいことはわかる。口にしないで。ただでさえメンタル弱ってるから。お願い」

「さあ! サイコロを投げるカク!」

「?」

「なにを言ってるかわかんないカク! ボクはなんともないカク! さあ!」

「!!」

からっころろろろ

「残念、はずれカク…」

「うがあ…ついてないなあ。アイテムBOX 欲しかったんだけどなあ…」

「では転生カク」

君は2つの神からの贈り物をもって別世界に転生するカク。

今の君の自我を保ったまま、赤ん坊から君は人生をやり直すカク。

これから君の生きる世界にボクたちは関与しませんカク。

君がこれから手にする力で何をして、それは君の自由だカク。

ボクたちは君が亡くなった後に、君の人生を閲覧するけど、評価するわけじゃないカク。

君の人生に三度目はないカク。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかは君次第カク。

転生を行うカク。それではいい人生をくカクー ばいばいカクー！」

「ありがとうカク（ありがとうございました）」

「ぐふう…カク　なんてもう二度とつけないい…」

★ ■ 42番 山本 犀 享年22歳の場合

「…」

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を」

「——!!」

「……」(耳をふさいで目をつぶっている)

???????

「あゝ、づがれだゝ。無差別選別つってももう少しましな人はいなかったものかね

く。さて次はっと」

ガチャ

「……………」

「42番 山本 犀さんですね。ドア閉めて、お掛けになってください」

「……………」

バタン

「ああ、すみませんこれ“さい”じゃなくて“せい”って読むんですね。失礼しました」

「…?!」

「はい、心読めます。あなたが喋るのが得意でないことも分かっていますので、そのまま

でいいですよ」

「……………」

「いえいえ」

「そうですね、あなたの考えはおおむねあっています。あなたにはこれから異なる世界に力を持って転生してもらいます。転生モノの主人公というのは正しいです」

「……………」

「大丈夫ですよ、転生者同士で戦うとか、試練が与えられるとかそんなことはないですから。確かにあなたの他にも転生者はいます。しかしそれぞれが独立した世界で転生ライフを謳歌しています。あなたと関わることはありません」
「……………」

「はい、ではまず転生先を決めます。これをどうぞ」

「……………? ……?」

「はいサイコロです。何の変哲もない青と赤のサイコロ。これの出目の組み合わせで転生先を決めることになります」

「……………?」

「はい、これがリストです」

青 : 赤

? ~ ? : ? ~ ? ↓ ONE PIECE

? ~ ? : ? ~ ? ↓ BLEACH

? ~ ? : ? ~ ? ↓ IS

? ~ ? : ? ~ ? ↓ ハイスクールD×D

? ~ ? : ? ↓魔法少女リリカルなのは

? ~ ? : ? ↓To LOVEる

? ~ ? : ? ↓Fate /

? ~ ? : ? ↓ポケットモンスター

? ~ ? : ? ↓なんちゃってファンタジー世界

? ~ ? : ? ↓自由

? ~ ? : ? ↓自由

? ~ ? : ? ↓自由

「……………」

「ではどうぞ、サイコロを振って、転生先を決定してください」

「」

から。ころ。ころ

? : ? ?

「……………!!」

「おめでとうございます。大当たり。あなたの生きたい世界に行くことができます。

ではどこにしますか？」

「いま（決めるん）ですか…？」

「はい、今決めてください。決まりでして、転生する世界を決めてからでない特典を選んでいただくことができないんです」

「（どうするか、もしも特典がしよぼいものだったらD×Dの世界なんかだとひどい目に合うかもしれない。でもせっかく転生するのに…。んん…いやまてよ。もしかして転生先つて二次元が三次元に実写化されたようなものなんじゃ）」

「いいえ？ 違いますよ？ その作品の作者さんの絵をそのまま現実にしたような、そんな世界です。あなたの心配するようなことにはなりませんよ、きつと」

「（な、なるほど。じゃあ、転生する時期はどうなんですか、こっちで設定出来たり？」

あと主人公の立場になりかわったり、憑依転生したりとかは）」

「はい…まず転生する時期は原作開始時に主人公と同じ年齢になるように転生します。主人公の立場に、というのとはあなた自身の手で介入してそうする以外にありませんね。憑依転生は扱っておりません」

「（そうか…）」

「ただ、原作に関わることができる素質は転生先によつてですが与えられることになつていきます」

「？」

「えつと例えばISであればIS適正ですね。原作の舞台がIS学園なので？でしょう。他にはFate／のGrand Orderの世界に転生する場合にはレイシフト適性とか魔術回路とかですね」

「（それなら、——？——？）」

「えつと、それは…はい。…ありました…ここに、するんですか？」

「はい、お願いします」

「では次に『アイテム特典』を決めてもらいます」

「……？」

「『アイテム特典』とは漫画やアニメの特殊な武器や道具を特典として与えるというもので、サイコロを振つて出た目の数くじを引き、その引いたくじに書かれた番号のアイテムを手に行けるといふものです」

「……？」

「すみません。それはお教えできません。引いてからのお楽しみです」

「……………」

「はい、えっと特典はD×Dの神器のように【その実の内に秘める】という形式で与えられます。仮に破損しても戻せば直ります」

「ではよろしいですか？」

「……………」

「あ、サイコロは一つでお願いします」

「…。」

「からん、からん」

「4、ですね。すごいですね、山本さん、4しか出していませんよ。もしかして『異常』アブノーマルですか？ サイコロもう2個ありますし振ってみますか？」

「……! ……」

「冗談です。では4枚くじをお引きください、どうぞ」

「……………」

がさ(そがさ(そがさ(そがさ(そ

166・・・1029・・・313・・・1594

「はい、まずは166番。これは『巨象兵(マムート)』です」

「え」

「あ、『BLEACH』の十刃、バラガン・ルイゼンバーンの従属官の一人ニルゲ・パルドウツクの持つ斬魄刀の帰刃の名前ですね」

「??? (だれだっけ)」

「あー、二番隊副隊長の大前田さんと戦った象です」

「(あーあの機敏なジャンプ野郎)」

「はい。彼の斬魄刀、ひいては破面としての力が特典となります」

「(破面としての力? もしかして破面になるの?)」

「いえ、そうではなく、死神の、斬魄刀の意思っているじゃないですか、アレがニルゲ・パルドウツクになってあなたの持つ斬魄刀の中にいるというわけです。そして、刃禪を行うことで対話し、帰刃可能になります。帰刃している間はあなたは霊体となり、破面となるというわけです」

「ん、んーなる、ほど？」

「他には、おまけというか、副次効果というか、否応にも霊圧が高まり、幽霊が見えるようになるというのがありますね」

「え（ゆ、幽霊？ いるの？」

「おそらく」

「（だ、大丈夫、怖くない、斬魄刀で斬るか魂葬すればいいだけの話…）」

「そうですね、では次です。1029番、これは『ケーシイの入ったモンスターボール』ですね」

「（ケーシイ？ ポケモン？ え、生き物？」

「はい、ポケモンのケーシイです。特典としては、あくまでボールが特典なのであって、ポケモンをアイテムとみなしているわけではない、とのことですよ」

「?」

「神様がそう言っていました」

「(…進化とか、どうするんだ?)」

「えっと、進化はレベルを上げて、ですね。レベルのあげ方はバトルです。動物をボコらせるか、あなたがボコるのをケイシーに見せれば経験値が上がり、16になると進化します」

「(言い方つてもんが…)」

「いや、ここう書いてあるんです…」

「……………」

「……………」

「さて、気を取り直して3つ目、313番は『サバイバーのスタンドDISC』です」

「(スタンド! ん? サバイバー? 何部のだろう)」

「サバイバーは6部に登場したスタンドで、説明させていただくと、

まず形は地面に出現する円盤状のスタンドです。

次に能力は濡れた地面を通じて微弱な電気信号を送り、周囲の人間の闘争本能を刺激

させることで、死ぬまで殺し合いをさせるといふものです。

このスタンドの影響を受けた人間は相手の「最も強い部分（長所）」が輝いて見え、ダメージを受けた部分は黒ずんでいくように見えます。

DIO曰く「最も弱い手に余るスタンド」

これがスタンド・サバイバーです」

「……（い、いらねえ。というかせめて人型のスタンドがよかった）」

「残念ですがこの特典は手にした時点で同化し、あなたのもになります。発現させないという選択肢もありません」

「（しかたない、か。最後のは厄介なのじゃないといいんだが）」

「では最後、4つ目の特典です1594番は『明日せんたく機』です」

「（洗濯機？ もしかしてひみつ道具？）」

「洗濯機ではなく、せんたく機 ですね。選ぶ選択と洗濯機がかかっているんですね。そしてその通り、某猫型ロボットのひみつ道具の一つです」

「聞いたことない：明日ってことは未来改変系のやつかな」

「うーん、そうですね。ドラえもんも「運命を変える」と言っています。このひみつ道具は運命を捻じ曲げるものなんでしょうね。あと、その捻じ曲げた明日を夢として見ることもできることから、未来予測系ともいえるでしょう」

「なるほど。で、説明は？」

「はい、このひみつ道具のふたを開けると、うずのような物が回っており、その中が《あした》になっています。Tシャツを象った白いカードに、あした自分が混ざりたいことを書き、うずの中へ入れる。うまく混ざると赤ランプが青ランプに変わり、混ざったことを音声で知らせてくれます。本来であれば自分が混ざらないはずのことを、未来をねじ曲げて混ざるようにするので、混ざったおかげで物事が順調に運ばずに予想外の危険を受けるおそれもあります」

「原作では、例によつて「スネ吉兄さんの車は5人乗りなんだ。僕らと兄さんと、あとバーベキューセットを積むから、のび太をピクニックには連れていけないよ」と仲間外れにされたのび太が「僕もピクニックに行きたい！」とドラえもんに駄々をこね、使われました

「のび太もいく」

と書いたカードを入れ、その結果ピクニックには行けたのですが、ジュースが本来の4人分しかなかったり、のび太を乗せるために、バーベキューセットを置いてきたため、バーベキューできなかつたりといったアクシデントがありました」

「(うむむ…)」

「まあ、それはシミュレートした夢で、結局キャンセルしたという落ちがあるのですが」
「(わかりました。ありがとうございます)」

「さて、最後は『能力特典』です」

「…？」

「はい、サイコロを振って出た目の便利な能力を手に行けるといいます」
「……………」

「はい、内訳はこんな感じですよ」

？ アイテムBOX (内容量無限) (内部時間停止) (中身把握) (生物不可)

? 鑑定（名前など基本的な内容が丸わかり）（人の名前忘れちゃったとき便利だね）

? 翻訳（どんな言葉も理解できるよ）（読めるし書けるし聞けるし喋れるよ）（on/off可能だよ）

? リスタート×1（不慮の事故など寿命以外の原因で死亡した時、回避可能な時間に戻って 1度だけ やり直しができるよ）

? ○○○コントロール（アレを自由に動かせるよ）（○倫男になれるよ）（たったやってたあがれない時に便利だね）

? はずれ（残念外れだよ、アイテムで我慢してね）

「……………」

「あう」

「……………」

「え、あ、はい。そうですね。山本さんの考え通りですね当たれば、確かに大活躍だと思います」

「!!!!」

「うわっ びっくりした」

からん からから

「1番ですね、残念…でもこれはこれで」

「あ、（確かに、こつちも悪くはない。そもそも原作時に食糧あつてもずっと腐らない訳ないし、これなら必要なものを前もって確保しておける…うん、これが一番だったな）」
「よかったですね。では『能力特典』も決定したということで、転生に移ります。よろしいですね？」

「(はい)」

それでは転生です。

あなたは4つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「…………… ありがとうございます」

「はい、さようなら」

「あくダルイワ」

★□ 547番 古金勉 享年15歳の場合

「…」

君がこれから手にする力で何をして、それは君の自由。

ボクたちは君が亡くなった後に、君の人生を閲覧するけど、評価するわけじゃない。君の人生に三度目はないよ。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかは君次第だ。

転生を実行する。それではいい人生を ばいばい！」

「」。

???????

「よし、完了つと。お菓子食べた〜い。漫画読みた〜い。 アニメ見た〜い」

「ふう、次はつと」

ガチャ

「!!」

「はい。547番 古金勉 享年15歳 さんですネ？」

「はいはい騒がないで、とりあえず席についてください。あ、ドア閉めてくださいね」

「……………（反抗期だなあ）」パチンツ

ばたんっ！

「……………」

「まってね、確かにコレは神様転生だけど、ボク神様じゃないし、特典も好きなものあげるわけじゃないから。ちゃんとルールがあるの。聞いて（というか、聞け）」

「はいはいお役所でごめんね。あと、君は知らないみたいだけど、最近の神様転生物では、神の怒りを買って悲惨なことになる転生モノもあるんだよ？」

「……………」

「（理解したし、恐怖しているけど収まりつかず謝れない、と。反抗期だなあ）」

「じゃあ、説明するよ。(最低限ね)」

「これから君にはサイコロを振ってもらう。そのサイコロの出目で転生する世界を決める」

「?! ——!」

「そうだよ。転生する世界は選べない。ただボクたちが勝手に決めるわけじゃないだけましだろ？」

「!!」

「——君はわがままだね」

「! ——」

「うん、とりあえず振って。あと、君の死はボクや神様のせいじゃない。君自身の不注意だ」

「——?」

「いいから、ほら」

「——っ!」

から、からから

? : ?

「? ——!」

「あ、これはおめでどう? 君は『ONE PIECE』の世界に転生することが決まった」

「! ——!!」

「(うわあ、喜んじやってまあ。 あらら、頭ん中ピンク色だ。こいつ、うわあ)」

「夢とロマン、海賊の漫画。君にびったりだね(小悪党っぽくて)」

「。 ——」

「ああ、うん。そうだね。じゃあ次は特典だね。サイコロ一つ振って、それで出た目の数くじを引いて、引いたくじに書いてある番号のアイテムが、特典として与えられるという仕組みだから」

「? ——?」

「(ちっ、気づいたか。面倒だなあ、でも質問されたら答えないわけにいかないし)」

「君に与えられる転生特典は2種類あるんだ。『アイテム特典』と『能力特典』。アイテ

ムは漫画やアニメの特殊な武器や道具を最大6個まで手にできる。能力は6つの中から一つだけ、便利な力を手にできる、という感じ、わかった？」

「あーうん。そういう決まり何で、サイコロ振って？ 別に要らないなら拒否してくれてもいいんだぜ？」

「——！！——！！——！！——！！——！！」

から、からからー

「はい、出目は2だね。じゃあ2枚くじ引いて」

「——！！——！！——！！——！！——！！」

「だめだよ、もう一度なんてない。ごねるなら引かせないよ？ ボクは別にどつちでもいいんだよ？」

「~~~~ツツ！！——！！——！！——！！——！！——！！」

がさ()そがさ()そ

1017・・・1884

「？」

「はい、えつとあー、ふむふむ」

「！」

「はいはい、まず1017番 これは『ふしぎなアメ×∞個』だよ」

「『ふしぎなアメ』？ ポケモンのあれか？」

「そうだよ。ポケモンのあれ、ポケモンのレベルを1アップさせるキャンディ。君はそれを∞個手に入れたわけだ」

「なんだそりゃ！ そんなのが特典だったのか！」

「まあ、仕方ないよ。恨むんならこれを特典に加えた神様が、引いた自分自身を恨むんだね」

「くそっ!!」

「(“この”アメはポケモンだけでなく、人間でも食べればレベルが上がるってのは、言わなくていいかな。聞かれなかったしね)」

「じゃあ次だ、1884番。これは『ひきのぼしローラー』だね」

「『ひきのぼしローラー』？ ひみつ道具か？」

「そうだよ、某猫型ロボットの持つひみつ道具の中の一つさ」

「なんだそりやつ！ くそつ！ こんなじやつ！」

「なんだっていうなら教えるよ。『ひきのぼしローラー』はその名の通りひきのぼすことのできる道具。このローラーを転がすと、物、場所などを何でも引き伸ばすことができるというものだ。作中では室内を野球ができる大きさに拡張したりしていたね」

「ふざけんな！ こんなのでどうやって戦えっていうんだ！ できるわけないだろ！」

「別にボクたちは君に戦ってほしいわけじゃないよ？ 転生して、新たな人生を歩んでみたらどうだいと提案してるだけさ。バトル漫画の世界に転生したって、別に戦わなきゃいけない訳じゃない。一市民として天寿を全うするのもありだとボクは思うけどね」

「！ ～～～～！ くそつ！」

「ともかくこれで『アイテム特典』決まったわけだ。次は『能力特典』、さあサイコロ振って」

「——！——」

「へえ…（慎重になったのかな？　なんてね、ただ単に不安なだけだねこの子は、しようがないね中学生のガキなんだから）」

「——?!——」

「はいはい。特典の内訳はこんな感じだよ」

？ アイテムBOX（内容量無限）（内部時間停止）（中身把握）（生物不可）

？ 鑑定（名前など基本的な内容が丸わかり）（人の名前忘れちゃったとき便利だね）

？ 翻訳（どんな言葉も理解できるよ）（読めるし書けるし聞けるし喋れるよ）（○

n／off可能だよ）

？ リスタート×1（不慮の事故など寿命以外の原因で死亡した時、回避可能な時間に戻って 1度だけ やり直しができるよ）

？ ○○○コントロール（アレを自由に動かせるよ）（○倫男になれるよ）（たったやってたあがれない時に便利だね）

？ はずれ（残念外れだよ、アイテムで我慢してね）

「――！」

「だから、決めたのは神様なんだって。はずれがあるのはボクもひどいと思うよ」

「――！」

「無理だよ、さあこれで最後だ、サイコロを振って、さあ！」

「くくくっ！――！」

「からん、から、から」

「……………そんな、そんな」

「あく、残念だったね。いや、うん。本当に。でも、出目は6はずれだ。君は『能力特典』なしだ。本当に残念だったね」

「っ！ 頼む！ もう一度振らせてくれ！ 何もなくて嘘だろ！ そんな、そんなのつてない！ 俺は転生者で！ 主人公なんだろう！ なあ！」

「そうだね。君は確かに転生者で、主人公だ」

「だろうつ！ だったら！」

「——でも、君のほかに転生者は何百何千人と存在している、そしてこれからも増え続ける。君だけが特別じゃないんだ。君が主人公なのも君の人生においてはという意味でなら、だ」

「なんでだっ！ 俺はっ！ くそっ！」

「受け入れなよ。君は転生する機会を得て、第二の人生を送ることができる。それは幸福なことだろうか？」

「うるさい！ 俺はこんなんじゃない！ 何もできない！ 俺はだめなままだ！」

「……………（力があつたら君は何かになれたのか？ つて聞きたい。でも逆切れするかもだし

黙ってよ」

「気は済んだかい？ そろそろ転生させるよ」

「――！」

「だめだね、待たない。

ゴホン

それでは転生です。

あなたは2つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。転生を實行します。それではよき人生を」

「ははっ！ びつくりしたかい？ まあイケメンが美女に変わったら驚くよね、残念だったね。その性格治した方がいいよ。ばいばーい」

「こっの…くそがー！！」

「さてと、次はどんな人がくるのやら…次の人ドゾー」

☆□ 492番 水澤ふたば 享年34歳の場合

「…」

君がこれから手にする力で何をして、それは君の自由。

ボクたちは君が亡くなった後に、君の人生を閲覧するけど、評価するわけじゃない。君の人生に三度目はないよ。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかは君次第だ。

転生を実行する。それではいい人生を ばいばい！」

「――！」

「はいはい。アデュー」

「ウチくるの変態ばつかなんだけど、なにこれ」

???????

「さてと、次は」

ガチャ

「……」

「はいこんにちは。492番、水澤ふたばさんですね。享年34歳、おおう……」

「っ……」

「いやごめんなさいね。あーん……とりあえずドア閉めて席についていただけますか？」

「」

「」

「ではまずは説明を」

「……？」

「おう、わかっちゃいますか……。ですよね……。そうです神様転生です」

「」

「いえ、これは神様のミスから始まるものではないです。第一水澤さんが死んだのって僕たち関与していませんし」

「？」

「あれ、わからないんですか？　自分が死んだ理由」

「」

「たまにいますよね……知りたいですか？」

「じゃあ、コホン。水澤さんあなたが死んだのは殺されたからです」

「！」

「母親にね。寝ているところをぐさつと」

「！——！！」

「なぜか……わかりませんか？」

「」

「はあ」

「」

「はい、わかりました。わかったよ」

「じゃあ、説明を始めようか」

「」

「これから君にはサイコロを振ってもらう。そのサイコロの出目で転生する世界を決める」

「――」

「そう。ボクらが決めるわけでもないし、君が自由に決められるわけでもない」

「さ、振って」

「――？」

「いや転生の選択肢は12通りです。他に質問はある？」

「――」

「そうですか（ないんだ。何の世界に転生するか聞かないんだ）」

「じゃ、どうぞ」

「――！！」

「……？」

「――？」

「この出目は、『ハイスクールD×D』の世界だね」

「……………！！」

「オメデトー（殺意とインフレ厳しい世界なんだけどなー）」

「（や、やったD×Dの世界に転生！ 妄想が現実に、やった！）」

「いいですか？ 次に転生特典となる『アイテム特典』を決めるよ。サイコロを一つ振って。その出目で、特典の数を決めるから」

「——？」

「あい。『アイテム特典』っていうのはこの神様転生の神様が決めたと、漫画やアニメの特殊な武器や道具を特典として転生者に与えて転生させようっていうの、のことだよ」

「——？」

「例えば、ドラえもののひみつ道具とか。君の転生するD×Dの神器もリストの中にはあるよ」

「！——？」

「あるよ。具体的には答えられないけど。リストも見せられないからね」

「さあ、振って」

「……——！！」

「っ！ そんなっ！」

「あー。まあ3つでもいいのが引ければチャラだよ。どんまいどんまい」

「さ、引いて」

「…？」

「そうだよ、文句ある？」

「—。—」

がさ(そがさ(そ

1591・・・956・・・274

「—」

「はいはい、まずは1591番はく…あー…」

「ど、どうしたんですか？」

「いや…1591番は『アゲタイ』だ」

「アゲタイ？ 鯛ですか？」

「いや、ネクタイのタイだね。察しの通りひみつ道具で、『ぼくのすべてをアゲタイ』と

「うお話に登場したひみつ道具だ」

「え、それって（まさか）」

「うん。これを着けると自分の物を誰かになんでもあげたくなくなるっていう道具だね。のび太くんもこれを着けたせいで、ママにお使い頼まれて買った饅頭あげちゃうし、靴も服も眼鏡もあげて、最終的に家まで人にあげようとしちやったからね」

「完全にはずれじゃないですか！」

「うん残念だったね。どんまい」

「（くそ！ だ、大丈夫だ。あと二つある）」

「次、956番は『エレファント・フォルト・ピオツジャ巨 象 × 3 と おまけの雨のリング』ですね」

「リングってことはリボーンのこと」

「そうだね。ジャンプで連載されていた『家庭教師ヒットマンREBORN!』の未来編に登場した匣兵器の一つだよ」

「えっと…あれですよね、あの、王子の兄の執事の…」

「うん言いたいことはわかるよ。それで合ってる。×3個なのは、その執事のオルゲイトが3つ使ってたから、神様が3個セットにしたんだろうね」

「なるほど…（あれ、俺大丈夫か？ 俺雨属性の波動ちゃんと流れてるのか？）」

「そうだ、言い忘れてたけど、炎の属性については心配いらぬよ。転生するときちゃんと特典が機能するように条件整えるから」

「ありがとうございます（よかった）」

「じゃあ最後、274番は『パール・ジャムのスタンドDISK』でーす」

「スタンド？ というかパール・ジャム？ それってトニオさんの？」

「ほい、その通り、4部に登場した料理人。イタリア人のトニオ・トラサルディーさんの、『料理に混入させることで、食べた者の身体の不調を治癒する能力』を持つスタンドだ
よ」

「……………（なんてことだ…全くこれっぽちも戦闘に向いてない。3つの特典の内 戦力になるのは1つだけ…死ぬ気の炎と匣だけで生き残れるのか…？）」

「さて、これで『アイテム特典』は選択完了。次行くよ」

「……………」

「次は『能力特典』だ」

「――?」

「うん。『能力特典』というのは神様が選んだ便利な特殊能力をサイコロの出目によって与える、というもので、その能力が……こちらです！」

どん!

? アイテムBOX (内容量無限) (内部時間停止) (中身把握) (生物不可)

? 鑑定 (名前など基本的な内容が丸わかり) (人の名前忘れちゃったとき便利だね)

? 翻訳 (どんな言葉も理解できるよ) (読めるし書けるし聞けるし喋れるよ) (on

／off可能だよ)

? リスタート×1 (不慮の事故など寿命以外の原因で死亡した時、回避可能な時間に戻って 1度だけ やり直しができるよ)

? ○○○コントロール (アレを自由に動かせるよ) (○倫男になれるよ) (たっちゃってたちあがれない時に便利だね)

? はずれ (残念外れだよ、アイテムで我慢してね)

「おお」

「こんな感じですよ。はい、サイコロ一つ張りきってどうぞ！」

「——！！」

からん、から から かららん

「っ！」

「おめでどうく？ 『リスタート×1』でくす」

「これは、あれなのか？ 死ぬけど頑張れよ！ 的な？」

「いやいや。サイコロの出目にボクら干渉してないから。君自身が引き当てた能力だよ」

「……………（死んでも大丈夫ってそもそも死にたくねえよ。というかこの世界で死ぬような目にあったら回避してもまた殺されそうなんですけどッ！）」

「あはは……。まあうん。D×Dの世界は結構物騒だからね。でも大丈夫。平穩に人生を送った転生者も前例あるから」

「ほんとですか？ その人の特典も力不足だったんですか……？」

「いやあ、それは……あはは」

「……………」

「……………」

……………

「では転生だ。」

「これから君は3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生する。」

「今の君の自我を保ったまま、赤ん坊から君は人生をやり直す。」

「これから君の生きる世界にボクたちは関与しない。」

「君がこれから手にする力で何をして、それは君の自由だ。」

「ボクたちは君が亡くなった後に、君の人生を閲覧するけど、なにも評価するわけじゃ

ない。

この転生に三度目はない。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかは君の行動次第だ。転生を実行。それでは良い人生を」

「……………ああ！ やってやる！ 成功してやるさ！ 俺は！

ありがとうございましたッ！」

「はいはい。オモシロオカシク過ごしてね」

☆□ 666番 伊藤仁 享年6歳の場合

「…

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を」

「――」

「ええ、仲良くしてくださいね」

???????

「やっぱり男性体は敵愾心持たれちゃうなー。でも女性体だと脳内でキモイ風にされる
ことがあるしなー。うーん」

「次の方どうぞー」

ガチャ

「……？」

「……こんにちは、666番（不吉な……）、伊藤仁くん、6歳でいいかな」

「……！」

「うんよろしくねー。えっと、仁くんのパパとママは、今えらいひとお話ししてるの。仁く
んのこと、少しの間よろしくってお姉さん頼まれたの」

「……？」

「ほんと ほんと。……ほら、仁くんに「ヨーグレット」あげてって。前に買ってあげられ
なかつたからって」

「……！」

「うん……仁くんここに来る時のこと覚えてる？」

「……？」

「そっかそっか（覚えていない、つと。幸か不幸か……転生した先で思い出してパニックに

なるかもなー…しんどいですわー」

「……………」

「大丈夫だよ。じゃあちよつとおしやべりするから仁くんそのまま聞いていてね」

『『これからあなたには神の力のもと、異世界に転生してもらいます。転生した先で自由に楽しく過ごせるように神様は道具と能力を贈ります。しかしその贈り物や転生する世界を神と人どちらか一方が決めるのはつまらないと、サイコロとくじで決めることとしました。これからあなたにはサイコロを振ってもらい、くじを引いてもらいます。そうして、転生していただきます』』

「……………」

「ううん、なんでもないよ。練習してたの。私ね、テレビの人なんだよ」

「……………」

「あはは…はい、「うまい棒」あげる」

「……………」

「おいしい？ よかったー」

……………

「…仁くん、ちょっとこのサイコロ振ってみてくれない？」

「—？」

「あ…パパとママはもう少しかかるって。振ってくれたらリンゴジュースあげる」

「—！」

から、からからから

？…？

「(リリカルなのはの世界か…ならもう一回)」

「3と5でた！ お姉さんリンゴジュース！」

「はいはい。今持つてくるから、その間に青いサイコロもう一回投げてて」

「ええ。わかった…」

「じゃ、やっててね」

「はいリンゴジュース。(サイコロは…)」

「ありがとう！」

「(??は無印で海鳴市に転生。??なら s t s 始まりでミッドに。??なら v i v i d 始まりでミッドに、さて)」

「ーだったんだね」

「うん。おい しー！」

『魔法少女リリカルなのは無印の世界に転生』つと

「？」

「にばー」

.....

「もう一回サイコロ振ってくれる？」

「。？」

「まあそういわずに。オモチャあげるから」

「。！」

「！！」

「がつん！ からからから」

「…（強運っ！）」

「6でたー！ これすごい？ すごい？」

「うん、すごいねー。はい、じゃあこの箱から紙を6個取ってくださいーい」

「はーい」

「クッキー食べたい」

「あとでねー（箱やつぱもつとちゃんとしたのでつくるべきだったかな）」

がさ()そがさ()そ

515・・・458・・・1672・・・291・・・828・・・753

「ひいたよー」

「はーい、じゃあぶどうジュース飲むー？」

「のむー！」

・・・・・・・・

「……………」ウトウト

「(睡眠薬きいてきたな)では説明します。515番は『仮面ライダーメイジのベルトとウィザードリング各種』です」

「…めいじ？」ウトウト

「はい、仮面ライダーウィザードに登場するメイジに変身できるアイテム特典です。姿は劇場版のメイジを基本としています。リングは

チェンジ

ドライバードン

キックストライク

テレポート

コネクト

ガルーダ

バリア

グラビティ

チェイン

ホーリー

ジャイアント

スペシャル

エクスペロージョン

ブリザード

サンダー

の15個です」

「うん…うん…」ウトウト

「そして、おまけというか副作用というか、ファントムが付いてきます。あなたのアン

ダーワールドに魔力用（変身用）としてファントムを飼うようにさせていただきます」
「ふぁんとむ？」

「はい。飼っていたのは白い魔法使いの人工ファントム『カーバンクル』です。本来は違うのですが、まあこれはウチの神様が作ったものなので」

「……………」ウトウト

「はい、では次行きますね」

「次は458番『ホッパーメモリ』です」

「めもり…」ウトウト

「はい『仮面ライダーW』に登場する人を超人に変える魔性の小箱「ガイアメモリ」の一本《飛蝗の記憶》を持ったメモリですね」

「……………」ウトウト

「生体コネクタは左腕です。そして、暴走しないよう適合率を過剰にならない程度に上げさせていただきます。毒素に負けないかはあなた次第です」

「ぼくしだい…」ウトウト

「は…」

「3つ目は1672番、『鬼は外ビーンズ』です」

「びーんず？」 ウトウト

「はい。ひみつ道具の一つでその機能は『この豆を人に投げつけると、テレポーテーションによってその人を家の内から外へと瞬時に追い出すことができる。また本来は人から追い出すためのもの。家の外で使うと、人を服の中から外へ追い出して全裸にする』というものです」

「ぜんら…」 ウトウト

「はい全裸です。裸、らー」

「らー？」 ウト

「おつとと、では次」

「4つ目は291番『スティッキイ・フィンガーズのスタンドDISC』です（ほんと何なんだこの子 当たりばつかじちゃん）」

「すたんど…」 ウトウト

「ジヨジヨの奇妙な冒険第5部に登場する近距離パワー型の人型スタンドです。能力は

『触れた対象（生き物も可）にジッパーを取り付ける。このジッパーは遠隔からも開閉が
することが出来る』というかなり応用の利く能力です」

「おうよう…」ウトウト

「別の空間を作り出して人や物を隠したり、ジッパーを開ききって切断・逆に閉じてくっ
ついたりとか、ですな」

「……………」ウトウト

「仁くんがジョジョ知ってたらなあ。もったいないなあ」

「……………」ウトウト

「つぎ、5つ目の『アイテム特典』は823番、『坂田金時（狂）のセイントグラフ』で
す」

「……………」ウトウト

「この特典は3つの使い方ができます（プリズマ☆イリヤとFGO混ざってる。という
かどこかで見たことあるような…気のせいにして）。微妙に違うしね。無銘の救世主
とは」

「二つ目は『限定召喚』^{インクルード}。金時さんの武器『黄金喰い』こと雷神の力を秘めたマサカリを
召喚します。」

二つ目は『夢幻召喚』^{インストールド}。あなたの体を媒介にバーサーカー坂田金時の力を具現化し、デミ・サーヴァントのようになり能力・技術を付与します。プリズマ☆イリヤの『夢幻召喚』ではバーサーカーは正気を失いますが、FGO materialにのっとり狂化：Eの通り、ダメージを受けることに幸運度判定ということになります。

三つ目は『英霊召喚』。バーサーカー坂田金時をサーヴァントとして召喚します。ただし令呪はありません。セイントグラフを介してパスは繋がっていますが、令呪がないため強化や抑制ができません」

「……………」ウトウト

「では最後、6つ目です」

「6つ目は753番、『無尽俵』です」

「たわら？……………」ウトウト

「はい、ランク：EXの対“宴”宝具、俵藤太の宝具。

美味しいお米が

どんどん出てくる

です」

「おこめ…」ウトウト

「はい。この特典では「米の尽きることがない俵」と「海幸山幸が無限に出てくる鍋」が一つの宝具として設定され形作られています。なので米だけでなく他の食材もドーンドーンします」

「ドーン…ドーン…」ウトウト

「おつとど。……………」よし」

ぱんっ！

「ふあああ…あれ？」

「うとうとしていたけど大丈夫？ 寝てる？」

「うん…寝る…」

「ああ、じゃあその前にサイコロ振ってくれる？ これで最後だから」

「……………」

から…

「3、翻訳…（本当に強運…なにこれ、いや、ええ…）」

「くう くう」スピー

「うん

『それでは転生です。』

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは

ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を。』

どうか幸せな人生を」

「う…」ムニユムミユ

「あなたの人生に幸多からんことを」

基本設定 + 各話目次 (転生先と一言) 《ネタバレ》

転生・・・神の力で創作物の世界に生前の記憶を保ったまま生まれ変わること。

↓神様・・・本編には登場しない。

転生者が手にする特典、転生する世界、すべて作って死人を転生者として送り込んでいる。転生する世界の選択肢や特典の内容は神様の趣味で選んだもの。転生させる目的は娯楽目的。

↓天使(仮称)・・・天の使い。本作のストーリーテラー。転生案内人。

転生者となる死者に転生と特典についての説明を行う。姿は男性だったり女性だったりする。基本的に女性体で接するが、自分に過度な欲情するような不愉快な相手は男性体で接する。

性格・口調がころころ変わる。

説明を省略したりボカしたりすることがある。

『聞かれなかったからさ』

転生者の人生の閲覧もしている。不幸になったか幸福になったか、そこを気にしてい

る。

転生する世界・・・転生者自身がサイコロを振ることによって決める。運任せ。

特典を選ぶ前に決める。そのための程度の特典をもらえるのかわからない転生者は当たりを引いても迷う。

↓転生先←

青 : 赤

? ~ ? : ? ↓ ONE PIECE

? ~ ? : ? ↓ BLEACH

? ~ ? : ? ↓ IS

? ~ ? : ? ↓ ハイスクールDxD

? ~ ? : ? ↓ 魔法少女リリカルなのは

・・・?? 無印

?? sts

?? vivid

? ~ ? : ? ↓ TO LOVEる

? ~ ? : ? ↓ Fate /

・・・・? stay night

? zero

? EXTRA

? Apocrypha

? kaleid liner プリズム☆イリヤ

? Grand Order

? ？? : : ? ↓ポケットモンスター

・・・・? カントー・ジョウト地方

? ホウエン地方

? シンオウ地方

? イツシュ地方

? カロス地方

? アローラ地方

? ？? : : ? ↓なんちやってファンタジー世界

? ？? : : ? ↓自由

? ？? : : ? ↓自由（神が勝手に決めます）↑（○）内に2部より変更

? ？? : : ? ↓自由（特典決定後、自由選択）↑（○）内に2部より変更

↓転生先の世界・・・転生する世界は転生者一人につき一つ。

Ⅱ「転生者複数」にはならない。

転生先は二次元世界。そこで暮らす人々はその作品の絵やイラストのままの姿かたちをしている。

Ⅲ「実写化」ではない。ガツカリではない。

転生者の行動によって原作崩壊は起こり得る。

転生者の転生する場所は原作主人公の生まれた地域。

転生者の生まれる時代は原作に関われる時代。（基本的に主人公と同一年。ただ、主人公が人外だったりして、原作開始時に主人公ウン百歳とかの場合は、原作開始時に10代後半から20代後半ぐらいになるように生まれる）

原作開始時には転生者は主人公と同じ地域にいる（町単位で）。

転生先（主人公の世界）が、物語の舞台でない作品、例えば『ゼロの使い魔』のような、主人公が生まれとはまた別の世界に転移して物語が始まる作品では、転生者は主人公と同じタイミングで原作の舞台となる世界に転移する。（一緒に、ではない。同じ時間には別の場所に転移する）。強制的。世界を越えるような特典を持っていけば帰還可能。

転生者の生まれる家庭は転生時点で、一般的に善良で貧しくない家庭である。つまり世界水準で見ても幸福な家庭。普通に親として尊敬できる父親と母親のもと産まれる。ただし、その幸せな家庭も転生者の行動によつては破綻させてしまう可能性もある。

転生先の両親の苗字は同じで、前世と同じ名前を付けられる。よつて、名前は変わらない。

転生特典

“アイテム特典”・・・転生者に送られる、神様からの特典。

神様がリストアップした漫画やアニメの不思議な力を持った道具。

オリジナルではなく、神様が作ったコピー品。

そのため、微妙に設定が違っていたり、無理やり道具に落とし込まれていたたりするものもある。

特典は、ハイスクールD×Dの神器のように出し入れ可能。盗まれることもなく、損壊したとしても、一旦身の内に収めれば修復される。

※ “アイテム特典” は転生者の死と共に消滅する。（特典の力で生み出されたものは

残る 例：『ハツメイカー』で設計・組み立てした道具（）

特典の数はサイコロの出目で決める。最少一個。最多六個。

でた目の数だけ、くじを引き、そのくじに書かれた番号をリストと照らし合わせ、番号の「アイテム特典」が転生者に贈られる。

「能力特典」・・・サイコロの出目によって便利な能力を一つ手にできる。

? アイテムBOX（内容量無限）（内部時間停止）（中身把握）（生物不可）

? 鑑定（名前など基本的な内容が丸わかり）（人の名前忘れちゃったとき便利だね）

? 翻訳（どんな言葉も理解できるよ）（読めるし書けるし聞けるし喋れるよ）（on/off可能だよ）

? リスタート×1（不慮の事故など寿命以外の原因で死亡した時、回避可能な時間に戻って1度だけやり直しができるよ）

? ○○○コントロール（アレを自由に動かせるよ）（○倫男になれるよ）（たっちやつてたあがれない時に便利だね）

? はずれ（残念外れだよ、アイテムで我慢してね）

転生者・・・死者。神様が転生者にするために拾われた者たち。

選別要素・男性であること・6歳以上35歳以下・日本生まれ日本育ち

（10代が多い）

と、こんな感じですよ。後々追加するかもしれません。

他に気づいたこと、質問や疑問点がありましたら、感想欄で聞いてください。

追加

斬魄刀系（BLEACH）の特典は斬魄刀を使う（出す）ことで死神の力や破面の力を使うことができるようになります。

↓霊子操作で空中に足場作る、霊圧探知、瞬歩・響転、虚閃など

死神の場合は

死神化↓始解↓卍解

破面の場合は

破面化↓↓帰刃　です。

魂を義魂丸や悟魂手甲などで抜かなければ死神化・破面化しても霊体にはなりません。霊視能力のない者にも姿が見えます。

『BLEACH』の世界に転生した者に限り、肉体が霊体に自動変換されるオプションが付いてきます。

目次：ネタバレ

第一部は転生の番号ではなくページ番号です

第一部

1 / 田中幸夫 ☆□

転生先『池袋発、全セカイ行き!』

・最善のルート

2 / 宮本悠希 ☆■

転生先『T O L O V E るーとらぶるー』

・宇宙ハーレム王

3 / 長野将彦 ☆□

転生先『I S』

・賢人サロン「天道宮」主人

・天災のダチ

4 / 山本 犀 ★■

転生先『感染く世界で唯一抗体を持った俺はゾンビの王様になった』

・ゾンビハーレム主

・ポケモンにドン引かれていた男

5 / 古金勉 ★□

転生先『O N E P I E C E』

・海に出ず。

6 / 水澤ふたば ☆□

転生先『ハイスクールD×D』

・料理人志望

・自死

7 / 伊藤仁 ☆□

転生先『魔法少女リリカルなのは』

・母親が宗教にはまる

・「結婚はいいぞ（お前らいつ結婚するの？）」

第二部

1番 高野誠 ☆□

転生先『ひなこのーと』

・らぶってこめってごーるいん

2番 川上朝陽 ☆□

転生先『なんちやってファンタジー』

・勇者が死んだ！く略く

・A/Bルート分岐

3番 羽田野栄太 ☆■

転生先『（カロス地方）ポケットモンスターXY』

・カロスリーグ優勝

・時の人↓ストーリーカー↓犯罪者↓…

4番 坂井東磨 ★■

転生先『エデンの檻』

・準備！ 準備！ 準備！

・3人の嫁持ち男

5番 霜越洗 ★□

転生先『名探偵コナン』

・大企業の出世株

・浮気男

6番 星野快仁 ☆□

転生先『ハイスクールD×D』

・原作消滅

7番 木村俐人 ★■

転生先『IS』

・むしやむしや

・眠らせて……………

・押さえさせて……………

・乗っ取り、

・『つまらない不注意』で死ぬ

8番 井上凱斗 ★□

転生先『ヒメノスピア』

・女王の男妾

・ヒモ

・主夫

9番 土田水人 ☆□

転生先『ニセコイ』

・原作ブレイク

・ドクター(微狂)

10番 服部弓太 ☆□

転生先『BLEACH』

・大虚マスター⇒破面マスター

・引きこもりブリーダー

11番 芦村義隆 ☆□

転生先『ハイスクールD×D』

・ 縄文時代の日本生まれ

・ 不老不死（期限付き）

・ 教祖

・ 良妻狐（ハーレム肯定派）持ち

12番 豊田正人 ☆□

転生先『なんちやってファンタジー』

・ ジョブ：村人↓奴隷↓暗殺者

13番 鈴木快凜 ★■

転生先『心配ちゃんは今日も汗だく』

・ 魔法少女のステッキ（未使用）

・ 地球撲滅軍 武装（未使用）

・ 平気で人を消せるサイコ野郎（罪悪感皆無）

14番 古見亮 ★□

転生先『TOLLOVEるーとらぶるー』

・ コソ泥（クレクレ）↑足を洗う

・ もぐもぐされた男

15番 前田愛秀 ☆□

転生先『IS』

・まじかるー？

・台風のフー子

・「授かりの英雄」に育てられた少年

16番 佐藤実 ☆□

転生先『最終兵器彼女』

・運がなかった転生者

・焼死

17番 八木涼晴 ★□

転生先『けもつ娘どーぶつえん！』

・小説家（何万部を年数回安定して売り上げる安定作家）

・〃結局フィジカル・・・〃盗みつて・・・〃最期は結局フィジカル・・・〃

//

18番 渡邊義幸 ☆■

転生先『魔法少女リリカルなのはStrikers』

・「自分が砕ける音を聞きな！」

・氷に縁がある

・大犯罪者

19番 白井俊樹 ★□

転生先『(イツシユ地方)ポケッタモンスターBW/B2W2』

・ドーピングパーティー↑解☆散。

・黄金律：EX(仮称)↓大富豪すら凌駕する。一生金から逃れることができない。

・ドリアードを妻に 一週間クローン

20番 笹木こうき ☆□

転生先『Fate/Grand Order』

・きあらさま…

・49人目のレイシフト適性者

・2人目のマスター

21番 北崎深谷 ☆■

転生先『インフェクション』

・帝王(地)

- ・英雄↓かわいそうな人
- ・猛毒水竜

22番 黛克英 兵藤一誠 ☆□

転生先『ハイスクールD×D』

● ♪ゾロ目特典♪ 憑依転生↓兵藤一誠

・『WS』『悪魔の英雄』 仮面ライダー

・上級悪魔：新世代抑止力

・新魔王：『八炎の龍神王』

23番 今井恵太 ☆□

転生先『魔法少女リリカルなのはvivid』

・キヤット大好き。

・喫茶店経営（細々）

24番 二階堂のぞみ ☆■

転生先『GANTZ』

・ビームぶっぱ女剣士艦長

25番 浦戸和成 ☆□

転生先『ONE PIECE』

・海軍本部准将

・パートナーポケモン「ラティアス」

・クビシメロマンチスト

26番 小野智一 ★■

転生先『ONE PIECE』

・妖鳥ハイビが運んできた悪魔

・娘にも孫にもひ孫にも、玄孫にまで手を出したくそエロ野郎

・数千人は殺した。数千人は犯した。数千人は子を作った。

27番 上野義光 ☆■

転生先『暗殺教室』

・鬼ハバタキ『羽撃鬼』

・鬼ハバタキⅡ吸血鬼

28番 能山北斗 ☆■

転生先『思いたつたら乳日』

・恐喝屋

・『鑑定』の有効利用⇒おっぱい大きくてえっちな女の子を探す。

29番 潮谷光人 ☆■

転生先『僕のヒーローアカデミア』

・雄英高校サポーター科1年

・複合アパレル企業C t c社長

・生命戦維との融合体

30番 太田信夫 ☆□

転生先『F a t e / s t a y n i g h t』

・クレDで怪我人治療

・善人(???)「ほっとけない！」

・完全被害者 かわいそうなことになった

31番 林実 ★□

転生先『オーバーロード』

・アインズ様に対して不可侵条約を取り付けることに成功

・悪魔召喚者

・悪魔つ娘ハーレム主 兼 エルフ守護神

32番 滝川駿 ★■

転生先『BLEACH』

・嫁／黒崎夏梨

・職業／探偵：殺し屋

・超能力者（後天的）
エスパー

33番 黒岩勇悟 ☆■
木場 祐斗

転生先『ハイスクールD×D』

・ホエールファンガイア【キング】

・「まじかるー…」

・憎刀『』 限定奥義「笑裏憎刀」

・ヒロインIIギヤスパー（♂）

34番 小原直希 ☆□

転生先『ポケットモンスターDPt』

- ・前世死因：家族みんなでゲームソフトを買いに行ったら交通事故。
- ・来世死因：観光に行ったら■■■■で蒸発。

35番 福田正晴 ☆■

転生先『IS』

- ・IS学園入学：比較地獄

- ・落ちこぼれ

- ・邪神降臨

- ・神代回帰

36番 後藤旭 ☆□

転生先『なんちやってファンタジー』

- ・『奇運』

- ・まるで主人公

- ・フラグ乱立、本人無自覚

- ・睡姦（されるほう）

- ・世界的英雄

37番 田中一喜 ☆□

転生先『魔法少女リリカルなのは（無印）』

- ・A's時、フェイトちゃんに一目惚れ
- ・計画立てて接近し、好感度を少しずつ稼ぎ…
- ・専業主夫

38番 石松幹 ★■

転生先『九泉之島』

- ・「心ふきこみマイク」悪用
- ・6歳にして娘たち100人以上
- ・“神”と交わり、子をなし、不死身に
- ・作者評：「この人頭おかしいよ」

39番 佐橋之二^{ゆきじ} ☆■

転生先『ONE PIECE』

- ・「鬼だよ」
- ・サザンドラ：家族、親友
- ・牛鬼：悪友、相棒、外道仲間

40番 銅田弥 ★□

転生先『ポケットモンスターSM』

・マツサージルーム・ドウタ 経営者

・「Fair^{フェア}ル」(ウルトラオーラ無し)

・ポケナー(R-18 カッコがち)

41番 吉原照孝 ☆□

転生先『Fate/zero』

・『ALPHA』 「……アマゾン」

『ブラッド・アンド・ワイルド!!ワ・ワ・ワ・ワイルド!!』

・召喚鯖…キヤスター 「カエサル」

42番 青木純 ☆□

転生先『BLEACH(並行世界：斬魄刀異聞篇✓)』

・キチキチ……

・燃えろ『剎月』!

・嫁!!????(CV・白石涼子)

43番 荒井将太郎 ☆■

転生先『ONE PIECE』

・マルチステッキ 『イーチアザー』^{自 然 体}

・エリチャン、エリチャン、メカエリチャン！

・ダブル鋼鉄魔嬢！ デジ クロスッ！

・無限宇宙 ジ・エンド・オブ・メカエリチャン

44番 川上珠 ☆□

転生先『ハイスクールD×D』

・冥界下り

・高圧縮タキオン粒子ミサイル（着弾地点は原子崩壊消滅）

・原作が迷子（人は宙^{ソラ}へと手を伸ばす）

45番 吉田識 ☆□

転生先『Fate／EXTRA』

・初っ端から「記憶消去」「感情消滅」「意思消失」の三重デバフ

・魔王モード：ノッブ

・『自分自身を探す物語』

46番 竹本康 ★■

転生先『IS』

- ・サイコキネシス圧殺
- ・シロシロ監禁術
- ・だるま篠ノ之博士

47番 広川琢磨 ☆□

転生先『ポケットモンスターDP Pt』

- ・ポフィン屋
- ・創造神

・「ときこのほうこう」ドーンッ！ — DEAD END —

48番 白澤ゆきと ★■

転生先『ハイスクールD×D』

- ・セト神のスタンドDISC
- ・幼児性愛者（無自覚）
- ・嗜虐趣味（無自覚）

49番 金森慎吾 ☆□

転生先『PSYREN』

・原作介入ほぼなし。

・シェイプシフター

・ラブラブ夫婦（一方通行）

50番 五十嵐空 ☆□

転生先『Fate/Grand Order』

・引きこもりマスター（鯖なし）

・カメハウス

・人理焼却？そんなことよりゲームしようぜ！

51番 木村明生 ★■

転生先『ONE PIECE』

・フィジカル中堅

・聖地襲撃

・綿毛空賊団

52番 多賀始 ★■

転生先『ゲゲゲの鬼太郎（6期）』

・カブキさん

・『魔王の小槌』の鬼纏まとい

襲色鬼王碧落紅鉄漿かざねいろきおうへきらくべにとかね

・乳から生まれた乳太郎

・乳間性交バ○スリセ○クス

53番 久里次郎 ☆■

転生先『いぬやしき』

・ソープで一財産作ったったWWW

・さすらいのネタバレおじさん。

54番 梶原洋平 ★■

転生先『ファンタジー世界』

・恋人×どくどく

・暗殺者↓魔王軍

・龍の花婿

55番 森山恋 ☆□

転生先『ハイスクールD×D』

・ロギア

・元暴走族

・森山家、火炎父・閃華裂光娘・溶岩気球↑NEW！

第二部

☆□ 1番 高野誠 享年17歳の場合

.....

? ? ? ? ? ?

「神様の気まぐれにも困ったものですねえ。ひと段落したと思ったら面白いからもう一回送るとか、まあいいですけど」

コンコン

「おっと、さつそく来ましたか。どうぞー」

ガチャ

「えっと.....」

「どうも初めまして転生第二弾、記念すべき一番手、高野誠さん。どうぞ席にお座りくだ

「さっ」

「もしかして神様転生ってやつですか？」

「はい、『かくかくしかじか』というわけです」

「なるほど」

「では、転生先の世界を決めます。サイコロをどうぞ」

「はい……………やつ！」

から からからから

?…?

「！」

「おー、当たりです。おめでとうございませう！」

「っし…！」

「では、早速ですが、転生先を決定していただきます。どこに転生しますか？」

「……………今すぐですか？」

「ああ、いえ。時間はたっぷりあるので、どうぞごゆっくりお考え下さい。なにせ一生を

左右する選択ですからね」

「確かに」

「でも、これ決めないと特典の選択に移れないので」

「はい、わかりました」

.....

.....

.....

.....

「(スピー……)」

「………決めました」

「へ？ あ！ はい、何の世界ですか？」

「『ひなこのーと』でお願いします」

「はい、わかりました。参考までにですが、なぜこの世界に？」

「えっと……転生するの、主人公の生まれる土地に転生するなら、ひな子さんの生まれ育った、存在しているのかも不思議なほどの、ド田舎に産まれるわけですよね」

「ですね。物語の舞台は別ですが」

「そんなド田舎なら、同い年同士、幼馴染として、こう、その………仲良くできるかなあつて……」

「ああ……まあ、そうなるかはあなた次第ですよ。頑張ってください」

「はい！」

「さて次は特典です。特典というのは『かくかくしかじか』というわけです」

「なるほど………武器とかだったら困りますね」

「日常系の作品ですからね………ではまず、『アイテム特典』の個数を決めます。どうぞ」

「ほいっと」

からん

「2ですね。では2枚くじを引いてください」

「はー」

がさ()そがさ()そ

1142・・・1144

「おー」

「あれー？ 混ぜてなかったんでしょうか。こんな連番気味になるなんて」

「いやー混ぜたはずなんですけどねー。っと、説明します。」

まず、1142番。これは『ルリリの入ったモンスターボール』です」

「ポケモン？」

「はい、皆さん同じ反応を成されます。この特典はあくまでモンスターボールが特典で、中のポケモンはオマケ…というのが神様の言い分となっております」

「そ、そうですか…」

「このボールの中のルリリはゲームと同じように懐かせてレベルを上げればマリルに進化します。レベルを上げることで わざも覚えていきます。そのわざの方はルリリを見つめると浮かび上がる仕様になっています。ゲームが基本ですね。凶鑑ない訳です。体力やレベルも凝視することで浮かんできます」

「レベルを上げるって、どうするんですか？」

「バトルしてくだされば」

「ばとる」

「そこら辺の野生動物に『みずでっぼう』撃つて、瀕死にさせれば経験値もらえますよ」

「ええ……」

「まあ、高野さんの転生先なら強くする必要ありませんし」

「そうですね。えさはどうすればいいんでしょうか」

「普通の食品で大丈夫です。特典の一部なので空腹で死ぬことはありませんが、ポケモン自身の自我がありますので食べたいそぶりを見せたら食べさせてあげるのがいいでしょう」

「わかりました」

「では次、1144番は『ニョロトノの入ったモンスターボール』です」

「ニョロトノですか…ポケスベのニョたるうを思い出しますね」

「ゴルドのですか、ニヨロボンとの連携攻撃とかカツコよかったですよね」

「僕は『ほろびのうた』で仮面の男のクソ強^グデリバード倒したのが印象に残ってますね」
「そういえば、ニヨロトノってことはレベルは？」

「はい。最初からレベル25です。当たりですね。育成の手間が短縮されるわけです。これは神様の気まぐれですね」

「喜ぶべきなんでしょうか…？」

「うーん…」

「では次、〃能力特典〃です。サイコロを」

「はい。6以外！」

からん からから

「よしっー！」

「おめでとうございませう。2なので『鑑定』ですね」

「いやー助かります。僕人の名前おぼえるの苦手で…学校の先生の名前もクラスメイトの名前も、全く覚えられないので…。話しかけようにも名前が出てこないせいで「ねえ」とか「あのー」とか声掛けで気づいてもらおうとしたり、肩叩いたりして気づいてもらおうとしても相手が女子だと使えないですからね。ホント助かります」

「よかったですね。では」

あなたは2つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「さようなら高野誠さん」

「ありがとうございます」

☆□ 2番 川上朝陽 享年22歳の場合

「次がつかえてますよつと。はいはい。では次の方どうぞー」

ガチャ

「なぜ、俺は死んだはず……」

「(逆にならないタイプのテンプレ) どうも、番号札2番 川上朝陽さんですね。ご着席ください」

「……………」

「はい、いろいろ疑問に思われていると思いますが、あなたは死にました。そして、転生者として転生していただきます。詳しく説明すると『かくかくしかじか』というわけです」

「なるほど、大体わかった。つまり『まるまるうまうま』なわけだな」

「はいそういうわけです。ということでは転生先を決めます。サイコロをどうぞ」

「こんなサイコロに來世の運命がかかっているなんて なっ！」

からん！ からから

?…??

「『なんちゃってファンタジー世界』です。これははずれですね」

「はずれなのか？」

「それはそうでしょう。なにせ文明が未発達で道徳も行き届いていない世界なわけですから。力のないものは淘汰され搾取される世界ですよ」

「説明をお願いします」

「はい。川上さんの転生する世界は、剣と魔法・勇者と魔王の存在するファンタジー世界です。魔王が復活する混沌の時代に、勇者の生まれる田舎の村に転生していただきませす」

「他に情報は……うーん、生活魔法と呼ばれる魔法が一般に普及しているので、病気になるリスクはそこまででないってことくらいでしょうか、あと日本語じゃないとか」

「他に何かないのか？」

「すみません。転生先については、他の既存の作品世界でも詳しい説明はしてはいけないうことになっているんです。神様いわく『知らないのは仕方ないよね、知らないなら知

らないなりにどう生きるのか楽しいし』とのことで

「……………」

「すみません」

「では次は特典の選択ですが『かくかくしかじか』です」

『まるまるうまうま』。ではサイコロを返す。

いけっ！

からっ！ かつ！ かつ！

「よし」

「おめでとうございませす。ではくじを引いてください。5枚まとめてでも、1枚ずつ5回でもOKですよ」

がさ(そがさ)そがさ(そ

1969・・・1013・・・1691・・・728・・・1493

「はい、ではまず1969番これは『実物カメラ』です」

「『実物カメラ』?」

「はい。ドラえもんひみつ道具の一つで、なかなか驚異的な道具です。当たり前ですね」

「当たり前、ですか…その『実物カメラ』は何ができるものなので?」

「『フェルミラー』って知ってますか?」

「聞いたことがあるような…なんだったか」

「写した物を、鏡の中から取り出せるひみつ道具です。いくらでも複製品が生み出せるというわけですね。ただ鏡なので、取り出したものは文字やらが反転してしまうという欠点があり、しかもスイッチを切っておかないと鏡の中の自分が抜け出してしまう恐れもあります」

「これはその『フェルミラー』の完全上位互換です」

「もしかしてカメラで撮った物が複製されるとか?」

「まさにその通りです。『アイテム特典』なのでメモリーやフィルムにあたる部分も制限ありませんし、他の道具を複製することも可能です」

「は? それは、いいのか? そんな、掟破りな」

「OKですよ。どうせ気づくでしょうし。なら今教えた方が川上さんの来世にいい影響を与えることになるでしょうし」

「……………ありがとう」

「いえいえ——さて、二個目は1013番『なんでもなおし×∞個』ですね」

「ポケモンのどうぐ……だったか?」

「はい。使うと手持ちのポケモン一体の状態異常をすべて回復させるアイテムです」

「ポケモン今のところいないが……………はずれか?」

「いえいえいえ! とんでもない! 当たりですよ、大当たり。これはヒトにも使用可

能です。そういうふうに設定変更がなされています」

「まじか」

「マジです。神様が『ポケモン引けなかつたやつからしたら大外れじゃん。おもしろくもないしねー。あ、効果範囲拡大すれば逆におおあたりじゃね？ よししようしよう』と」

「つまりこれは無限の万能薬ということか」

「ですね。おめでとうございます」

「……………」(無言のガッツポーズ)

「では、次行きましょう次もいいものきそうですね。1691番これは……………」

「なにか」

「いえ、1691番は『キカイソダテール』です」

「またドラえもののひみつ道具か 効力は？」

「『機械を育てることのできる液状の薬剤。機械にひと液垂らすと大きくなる。単に大きさが変わるだけではなく成長し、玩具のミニカーを本物の自動車にまで成長させることもできる。』です。つまり、その……………ファンタジー世界では全くの役立たずというか

「……………」

「そう、か……………（…ま、まあまだ2つある、そもそも前の2つだけでも破格の特典だ）」

「4つ目は723番で、えつと『虹霓劍』カドホルレです」

「それは、どつちの？」

「あ、はい。劍の方です」

「フェルグスさんのか…（というか宝具。俺受け取っていいのか？ 英雄の生きた証、歴史そのもの、そんなものを俺の武器として振るっていいのか？ いいわけがない、いや、しかし……………」

「（悩んでる！ こういうタイプは頑固だからなあ）大丈夫ですよ。説明した通りコピー品ですから。元にしてそれらしいものを神様が作っただけですから」

「……………そうか」

「はい。説明は必要ですか？」

「いや、問題ない。FGO materialで読んだから知っている」

「そうですか。では最後の特典を」

「最後は1493番『オレガノ』です」

「？」

「えっと、正しくは漫画『そらのおとしもの』に登場する医療用エンジエロイド「Ore gano」（オレガノ）です」

「『そらのおとしもの』？なんか聞いたことあるような…」

「そらおとは『かくかくしかじか』というお話で、その作中に出てくるシナプス人の作ったロボットのような天使のようなもの、量産型の一体です。作中で仲間になったオレガノ、別名ミニイカロスは発声機能を後付けされましたが、このオレガノはオリジナルのつとり、発声器官を持っていません」

「その名の通りオレガノは医療用、つまり傷を治療することに長けています。その力は瀕死の重傷を負った主人公桜井智樹をあつさり回復させたほどです」

「他に特筆すべきは……エンジエロイドなので泳げない、飛べる、感情が極端に希薄、ヒトに比べて力が強い、と言ったところでしょうか」

「なるほど、ありがとうございます」

「あ、忘れてました」

「ん？」

「おっぱい、やわらかいですよ」

「ブツ!!」

「あははははははは」

「…さて気を取り直して、次は『能力特典』です」

「……………」

「そうすねないでください。さあ、振って」

「……………くっ！」

から、からから

「む……………」

「6、ですね。つまり『はずれ』……………」

「……………」

では転生に移ります

あなたは5つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「行ってらっしゃいませ、川上朝陽さん」

「お世話になりました」

☆■ 3番 羽田野栄太 享年12歳の場合

「次の方、どうぞー」

ガチャ

「ここはどこですか？ お姉さんは天使さま？」

「（子どもかー） はい、確かに私は天使のようなものですね。そしてここはあなたの次の人生について決める場所です。3番、羽田野栄太さん。席に座っていただけますか？」

パタン キイ・・・

「僕の名前、僕死んじやったの？」

「はい、残念ながら。手術がうまくいかなかったようですね」

「そつかあ…まあしようがないよね。お父さんとお母さん悲しませちやったな」

「（落ち着いた子だなあ…まあやりやすいけど）では説明をさせていただきます。『かくかくしかじか』というわけで、転生にあたり、転生する世界と特典をサイコロで決めていただきます」

「はい、わかりました」

「ではどうぞ」

「(サイコロ初めて触ったかも、きれい) えいつつ!」

からから ころん

??

「5と2、ポケットモンスターの世界ですね」

「ポケモン? やった!」

「では、もう一度振ってください」

「え? なんですか?」

「ポケモンは世界選択の後に、転生する地方も決めてもらうことになっているんです」

「ちなみに内訳は

?・・・カントー・ジョウト地方

?・・・ホウエン地方

?・・・シンオウ地方

?・・・イツシュ地方

?・・・カロス地方

?・・・アローラ地方

となっっています」

「うーん…（僕が知ってるのはイツシュとカロスだけだし、4か5が出るといいけど）」

「では、青い方のサイコロを振ってください」

「はい。　　っ！」

からん

「やった！」

「おめでとうございます。5が出たので羽田野さんの転生先はポケットモンスター世界の、『ポケットモンスターX・Y』の舞台、カロス地方となります」

「では次に特典についてです。特典とは『かくかくしかじか』で羽田野さんにはまずはアイテム特典の数を決めていただきます。どうぞ」

「はい、つや！」

からん

「はい、2ですね。ではくじを2枚引いてください」

「はー」

がさ がさ こそ

19・・・1030

「引きました」

「はい。ではまず19番これは『トゲトゲの実』です」

「もしかして、ワンピースの悪魔の実ですか？」

「はい、漫画『ONE PIECE』のアラバスタ編にて登場した敵の一人、ミス・ダブルフィンガーの食べた悪魔の実。体のありとあらゆる場所から鋭い棘を伸ばすことのできる超人「棘人間」になれる悪魔の実です」

「うーん」

「なにか？」

「悪魔の実ってことは、食べると泳げなくなるんですよ」

「それは、そうですね…」

「それは嫌だなあ…って思ってる」

「ああなるほど。大丈夫ですよ。悪魔の実を特典として獲得するだけで強制的に能力者になるわけじゃありませんので。ずっと放置しておくという選択肢もあります」

「なるほど、わかりました」

「はい。では次は1030番、これは『ヤドンの入ったモンスターボール』です」

「ポ、ポケモン、ですか？」

「ああ、すみません。間違えました、正しくは『ヤドランナイト＋キーストーン＋メガバングル＋ヤドンの入ったモンスターボール』です」

「は？」

「えと、つまりメガヤドランになれるように準備された特典ということですね」

「そ、そうですか…」

「まあ、旅立つ前からポケモンと触れ合える、パートナーポケモンができると思えば」
「そうですね」

「では『能力特典』です。サイコロをどうぞ」

「はい、それっ！」

からんからから

？

「はい、2です。『鑑定』の能力です」

「これは役に立つのですか？」

「ええ、それはもう！ ポケモンの世界なら、相手のポケモンのHPや技の構成も丸わかりにできます。これから羽田野さんの転生するポケモンの世界はゲームと違ってポケモンのレベルや技をトレーナーが数値化して見ることはできないので、とてつもないアドバンテージですよ」

「そ、そうなんですか…（なんかズルいな…）」

「なにはともあれ、これで終了です」

では転生です

あなたは2つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。転生を實行します。それではよき人生を

「行つてらっしゃい、羽田野栄太くん」

「ありがとうございます。天使さん。行つてきます！」

★ ■ 4番 坂井東磨 享年19歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「ここは（もしかして）」

「はいどうも、番号札4番の坂井東磨あずまさんですね？ どうぞお座りください」

「は、はいっ！」

パタン

「では説明を行います。坂井さんのご想像の通りここは転生先や特典などを決める場所です。ただし自由ではありません。『かくかくしかじか』というような仕組みになっています」

「なるほど…（転生先が不安だな、そりや可愛い女の子ときやつきやうふふしたいけど死の危険とか冗談じゃないし…。それに特典も決められず…か）」

「では早速、転生先を決めていただきます。サイコロです。どうぞ」

「はい！（頼むぞっ！）」

からん！　ころころ

??

「あつ……………」

「あちやく5と5、神様が勝手に転生先を決めるかんじですね」

「これ、どうなるんですか？　神様って（過酷な世界に転生させられるのか？）」

「あの神様は結構愉快的な面があるので…」

「で、俺は何の世界に転生するんでしょうか」

「はい、……………あゝ」

「え?!　な、なんですか」

「いえ、えつと…すみません」

「いや、だからどこに」

「転生先は転生直前にお知らせします。今言えることはそれだけです」

「ええ…（気になる。というか絶対過酷な世界だろ?!　うう）」

「では次に特典の選択に移ります。特典とは『かくかくしかじか』です。まずは「アイテム特典」の数をサイコロで決めてもらいます。どうぞ」

「えええい！」

ひゅん かんっ！

「!!」

「おお！ おめでとうございます 6が出たので6枚くじを引いてください」

「(っしー！ っし!!)」

がさ(っ)そ がさ(っ)そ がさ がさ(っ)そ がさ がさ(っ)そ がさ

502・・・48・・・1007・・・1239・・・1673・・・1773

「では順番に解説していきます。まずは502番、これは『ゾディアーツスイッチ（ヴァルゴ）』です」

「ゾディアーツ？」

「おや、仮面ライダー見てないのですか」

「はい、最後に見たのは確か：仮面ライダーキバでした」

「そうですね：このゾディアーツスイッチは仮面ライダーフォーゼの敵怪人ゾディアーツの幹部級である『ホロスコープス』の一体、乙女座のヴァルゴに変身できるアイテムとなっており、（正確にはヴァルゴとして覚醒できるスイッチなだけ、そこまで説明しなくていいかな）」

「乙女座？ 俺、男ですが」

「ああ、劇中でも変身者はおっさんだったのでそこは大丈夫ですよ」

「そうなんですか・・・」

「ええ、『ヴァルゴシヨック』と呼ばれて：つとそれは置いて、変身するヴァルゴ・ゾディアーツ能力の説明を行います」

「よろしくお願ひします」

「まず、幹部級ゾディアーツ『ホロスコープス』共通の能力として備えている「戦闘員（のようなもの）であるダスタードを生み出す」ことができます」

「そしてヴァルゴの特殊能力として、空間を操り瞬間移動を行ったり、対象を遠く離れた場所に転移させたりすることができません。その能力は攻撃手段としても転用でき、空間を削り取る光弾を放つこともできます」

「他には単純に力も強いですね。また、宇宙空間でも活動可能です」

「……………（すげえ…超強いじゃん。空間系の能力とか最高では）」

「こんなところでしようか、よろしいでしょうか」

「はい。次お願いします」

「はい、次は48番。『チヨキチヨキの実』です」

「悪魔の実ですか？ 確か…はさみ……………あつ イナズマとかいう黄色とオレンジのやつ」

「はい正解です。革命軍幹部エンポリオ・イワンコフの部下の革命家、イナズマの食べた悪魔の実。腕をはさみに変え、物を紙のように切り、形を変えることができる超人「ハ

「サミ人間」に変える悪魔の実です」

「これは食べるものですよ。これって自分以外にも使えますか？」

「？ ああ、はい。坂井さんが譲渡した方が食べた場合はその人が「ハサミ人間」になります。ただ、メリットがあるかどうかは…。悪魔の実は食べきりなので、一回しかありません。そうした場合坂井さんは能力者になれないということもお忘れなく」

「はい」

「では、3個目の特典です。1007番『まんたんのくすり×∞個』です」

「『まんたんのくすり』？ それに∞個？」

「えっと、ポケモンはご存知ですよ？ それです」

「あつ！ あれですか。えーっと、体力を全回復させる、あれですか？」

「はいそれです。『かいふくのくすり』と違って状態異常までは治してくれないあれです」

「人間に効くんですか？」

「そこは神様が設定変更を行って、人間にも効くようにしています。なかなかの当たりですよ。要は、瀕死の重傷でもこれを使えば怪我も完治して体力も回復するわけですか」

ら」

「ん？ ひんしでは使えないのでは？」

「ああ、すみません、言い違えました。ポケモンの『ひんし』を人間の『死』と考えてのひんし状態です。要は生きてさえいれば『まんたんのくすり』ぶっかけて復活させられるというわけです」

「それは…すごいですね…」

「ただ、病気は『状態異常』扱いなので治りません。四肢の欠損とかなら怪我扱いで回復するのですが……」

「なるほど、わかりました」

「4個目の特典は1239番。これは『タテトプスの入ったモンスターボール』です」

「ポケモン？（番号近いしまさかと思っただけど、ポケモンかあ…なんだっけなあ、思い出せん）」

「はい。タイプは『いわ・はがね』のシールドポケモン。たてのかせきから復元される古代ポケモンの一種で「盾」と「（トリ）ケラトプス」を合わせた名前のポケモンです」

「あー、そうだ。黄色い体で、黒い丸い固そうな顔面のポケモンですか」

「そうです。ちなみに進化体はトリデプス。30レベルで進化です」

「進化。そういえば進化とか経験値はどうやって？」

「適当に野生動物を襲えば経験値獲得できますよ」

「うええ……………」

「……………」

「……………次行きます」

「はい」

「5個目の特典は1673番『おはなしボックス』です」

「それは？」

「はいこれはドラえもんのみつ道具の一つで、映画「ドラえもん 新・のび太と鉄人兵団」はばたけ 天使たち」で使用された道具です」

「外見は電子炊飯器に似たもので、その中に入れて操作すると、物が人語を介する動物に変化するという機能を持っています。劇中ではロボットの人工知能をヒヨコに変えていました」

「へー」

「……………（興味なしか）では最後の特典です」

「最後は1773番『ジャック豆』です」

「ドラえもののひみつ道具ですか？」

「はい。そして、読んで字のごとくジャックと豆の木をモデルにしたひみつ道具です」

「外見は豆そのもので、これを土に埋めるとすぐに芽が出ます。そして水をやって「のびろ」と言うところぐんぐん伸びて、雲の上まで伸びます」

「それ、使い道ありますか…？（目立つ。絶対目立つ…!）」

「そうですねえ…方角を指示すればその向きに伸びてくれるので、移動手段として使えますかね？…まあ確実に異常事態として認識されるでしょうけど」

「ですよね…」

「では次に『能力特典』を決めていただきます。サイコロをどうぞ」
「はい（翻訳！ 翻訳来いっ！）」

からん からから

「」（固まっている）

「その、残念でした、ね…：はい」

では転生に移ります。

あなたは6つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。転生を实行します。それではよき人生を

「さようなら、坂井東磨さん」

「ありがとうございます」

「あ」

「？」

「坂井さんの転生先は『エデンの檻』になります。がんばってくださいーい！」

「！ え?! ちよ、ちよつと待ってくだ」

「さよーならー」

「ちよつとー！ー！」

★□ 5番 霜越洸 享年18歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「ここつてもしかして…」

「番号札5番、霜越洸さんですね？ どうぞ席にお座りください」

キィ

「あのこれつてもしかして『神様転生』ですか？ 自分、死んだ覚え、ないんですが」
パタン…

「ええ、神様転生です。最近の人は察しがよくて助かります。そして、えーと、霜越さんは…就寝中の事故死となっておりますね。本棚が地震で倒れて下敷きになって、です」

「そうなんですか…（詫び系じゃないのか。なら邪神的なのか？）」

「では転生についての説明をさせていただきます。『かくかくしかじか』となっております」

『まるまるうまうま』なるほど」

「というわけで、転生先の世界を決めます。サイコロをどうぞ」

「……………（自由来い、自由来い！） つ！」

からからからから

?…??

「（違う…！ そうじゃないっ…！）」

「6と5、神様が決める、ですね。では神様に問い合わせを行います
……………はい、はい。え、わかりました」

「どうですか？」

「残念ですがお教えすることはできません。転生直前にお伝えします。その……………頑張ってください」

「なんですかそれ！（すごく悲しいものを見る目だよ！ 怖いよ！）」

「次に特典を決めていただきます。特典は『かくかくしかじか』というふうになっています

す。サイコロ赤いのを渡してください」

「はい」

「ではどうぞぞ」

「っ！」

からから

「……………」

「おー。まあまあですね。では3枚くじを引いてください」

「はい（まあ、一つとかじやないだけましか）」

がさ(そ)がさ(そ)がさ(そ)がさ(そ)

1384・・・3・・・1924

「説明をさせていただきます。1384番、これは『Zガン』です」

「『Zガン』？」

「はい。漫画『GANTZ』に登場する武器の一つです」

「あー！ あーはいはい。あれですね。大阪編で登場した重力で押しつぶすような」

「はい。100てんめにゆ〜で手に入る上位武器で、対象を圧殺する銃です」

「（これは幸先がいい。いい感じに強力な武器が手に入った！）」

「……………」

「では2つ目の特典は番号3番、『スベスベの実』です」

「え」

「説明すると、『スベスベの実』は漫画『ONE PIECE』に登場する女海賊、金棒のアルビダの食べた悪魔の実で、食べた者を摩擦ゼロの全身スベスベ人間にします」

「え」

「スベスベになったことで物理攻撃はほぼすべて無効。そして、副次効果があり「美容的な意味で」全身スベスベにもなり、無駄な脂肪やそばかすが消え、食べた者を絶世の美人に変えてしまいます」

「!」

「はい、ちなみにこの特典は霜越さんだけが使えるわけではありません。他の方に食べさせることも、もちろん可能です」

「はい、ありがとうございます」

「では最後に。1924番『予定メモ帳』です」

「(おお?)」

「これはドラえもののひみつ道具の一つで、書き込んだことが現実に起こるようになるひみつ道具です」

「おお! (大当たりキター!!)」

「まずこのメモ帳は『(空欄)が (空欄)と・に (空欄)で (空欄)』という書式の紙がとじてあります。その空欄の部分に書き込むことでそれを現実にすることができます。」

例えば、ドラえもんが書いたものでは『(パパ)が (今すぐ)と・に (おかし屋)で (どら焼きを買ってくる)』と書いたところ、仕事をしているはずのパパが、書いた直後にどら焼きを買って帰ってきました。

ただし、こじつけに近いところもあり、正確に細かく指定しないと予想外の形で書いた予定が実現することになります。

のび太くんが『(静香)が (のび太)と・に (今ここ)で (チューをする)』と書いたときにはキスではなく、しずかちゃんのがび太にへペンのインクをチューへとぶっかけしました。チューではなく、接吻と書いて入ればできたかもしれませんが、このように書き方によって思っていたのと違う結果にもなってしまうこともあります」

「でも、すごい道具ですよね」

「そうですね。使い方さえ謝らなければ、現実化可能なことならできないことはないといってもいいでしょう」

「(すごい……！ やった！ やった！)」

「では次に『能力特典』を決めていただきます。サイコロを振ってください」

「はー」

からから

「よっし！（自分ツイてる！ もうこれ最高じゃね？ 向かうところ所敵なしな感じ）」
「Iなので、『アイテムBOX』ですね。使い方は感覚で分かるようになってるので、赤ん坊時代の暇つぶしにでもどうぞ」

「はー」

では、転生を行います

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「いつてらっしゃいませ、霜越洗さん……………あなたの転生先は『名探偵コナン』です。あ
なたの転生に幸多からんことを、お祈りします」

「? ………………!!!!!!!!」

ま、待って。ちよお! 待って———!!

☆□ 6番 星野快仁 享年27歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します……」

「はい、番号6番 星野快仁ひとしさんですね。席にお座りください」

パタン

「は、はい」

「では説明を行います。『かくかくしか』」

「ちよ、ちよつと待つてください！ ここ、転生？ え？ 私死んだんですか？ 記憶に

ありません！ いつも通り仕事して、電車乗って、それで……それで？ あれ？」

「………星野さんは残念ながらお亡くなりになっています。帰宅途中に駅の階段から足

を踏み外し、頭をぶつけてそのまま亡くなりました」

「は、は、は、………私の両親は、どうになりましたか！ 父は認知症で、母一人じゃどう

しようもなく、私が私が頑張らないと、私が稼いで、面倒を見ないといけないんです

！ 私が！」

「星野さんのお父様とお母様は亡くなりました」

「は」

「お父様がうっかりガスの元栓を開いたまま忘れて、お母様がそれに気づかず…引火して」

「ああ。ああ。……う、つく。うあ、く。うううう！」

「落ち着きましたか」

「はい。失礼しました」

「いえいえ。『かくかくしかじか』ということで転生してもらいます。このサイコロで転生先を選ぶことになります」

「転生ですか。現実感がなくてよくイメージできませんが、わかりました。その」

「はい？」

「この転生する権利を別の誰かに譲渡することはできませんか？」

「私は未練がないわけではありませんが、第二の人生を送るほどではありませんし、こんなつまらない男を転生させるより、別の方の方が神様も楽しいと思うのですが」

「それは、できません。この転生は選ばれた時点で決定事項です。権利の譲渡は認められません」

「そうですか」

「では、どうぞで」

「はい」

からんかちかち

??

「(ああ…) 2と4なので『ハイスクールD×D』の世界ですね」

『『ハイスクールD×D』…? これはどんな作品なんですか?』

「えつと、詳しく説明することはできないんですが、平凡な高校生の主人公が悪魔になって、敵対する堕天使や悪魔、怪物や神様と戦う現代バトルハーレムファンタジーです」

「よくわからないんですが…」

「すみません。本当に詳しいことは話せなくて。神話で語られる天使や悪魔や神様が実在している世界です」

「なるほど、わかりました」

「では次に特典を決めていただきます。『かくかくしかじか』。アイテム特典の個数を決めていただきます。どうぞ」

「はい」

からんかちんから

「4ですね。では4枚くじを引いてください」

「はい」

がさごそがさごそ

428・・・1378・・・146・・・939

「最初は428番、これは『ダークカプトゼクターとライダーベルト』です」

「ライダー？ 仮面ライダーですか？……うっすら記憶に残っているんですが」

「では手助けをさせていただきます。これは平成仮面ライダー第7作品『仮面ライダーカブト』に登場するライダーの一人、主人公の天道総司に擬態した擬態天道が変身する『マスクドライダーシステム第0号』に変身するためのものです。仮面ライダーカブトの色違いのような感じの」

「なんだか思い出してきました。黄色と黒のカブトムシ……」

「はい。クロックアップはキャストオフして、ライダーフォームになればできますが、ハイパーゼクターはついてこないのです、ハイパーキャストオフ・ハイパークロックアップはできません」

「わかりました」

「2個めは1378番。これは『イベルタルの入ったモンスターボール』です」

「モンスターボール？ ポケモンですか？」

「はいそうです」

「私全然知らないので説明をお願いしてもいいでしょうか」

「もちろんです。まずイベルタルは普通のポケモンではありません。ポケットモンス

ターXYの舞台、カロス地方の伝説のポケモンで、凶鑑のぶんるいは「はかいポケモン」あく・ひこうタイプ。たかさ5.8m、おもさ203.0kgのポケモンです」

「はかいポケモンとは物騒ですが……………」

「物騒なポケモンです。カロス地方の生態系の破壊を司るポケモンで、寿命が尽きると活動を始め周囲一帯の生き物の命をすべて吸い取る、というポケモンです」

「命を…」

「ゲームとアニメでは違うところもありますがこのイベルタルはアニメ・劇場版のイベルタルということになっています」

「どう違うのですか？」

「専用の技でデスウイングというものがありますが、これが『当たったものの命を奪い石化させる』ビーム攻撃になっています」

「……………」

「特典として贈られるポケモンは伝説ポケモンであっても、転生者の指示に従ってくれるので、星野さんが命じればイベルタルは全ての生き物を石に変えてくれます」

「そんなことはしません。絶対に」

「そうですか」

「……………」

「……………」

「3個目くじの番号は146番。これは『アロガンテ 鬪體大帝』です」

「？」

「転生先の世界のリストにもあった『BLEACH』という漫画ご存知ですよね」

「ええはい。ほんの少しですけど」

「その漫画に、星野さんが読むのを辞めた後に出てきた敵、「破面」のうちの一人、セグンダ・エスパーダ 第2十刃 “大帝” バラガン・ルイゼンバーンの刀剣開放の名前です」

「??？」

「この特典について説明する前に、「破面」「十刃」「帰刃」などについて説明させていただけます。『かくかくしかじか』というわけです」

「『まるまるうまうま』。なるほど、よくわかりました。しかしそれだと「破面」の斬魄刀は死神のソレとは違うのですよね。そこはどうなっているんですか？」

「はい、それは、先ほど説明したように死神の斬魄刀にはそのものの自我と意思が存在しています。この特典ではその斬魄刀の意思にバラガン様に入ってもらって、彼と対話す

ることで刀剣開放、帰刃形態になれるという仕組みになっています」
 「なるほど……………」

「それでは肝心の特典『髑髏大帝』^{アロガンテ}について説明します。形状は日本刀ではなく巨大な戦斧。「朽ちろ、『髑髏大帝』^{アロガンテ}」と解号を発することで、戦斧の目が開き、王冠を被り、暗い青色のマントを纏った骸骨、西洋風の死神のような姿に変わることができます。

能力は『古い』帰刃前でも使えるへあらゆる事象や物体の劣化を促進させて自身に接近する動きをスロー化させ、意志を持って触れた物体を老化・崩壊させてダメージを与える能力を強化したもので、使った技は『死の息吹』^{レスピラ}・触れたものを朽ちさせる息。などです。攻防一体の能力で、相手の攻撃すら『古い』の力で無力化できます。

弱点は『古い』の力は本人にも影響を及ぼせること。自分の表面にはじく結界のようなものを張って防いでいますが、転移などで『古い』の力を体内に送り込まれば、自分自身の力で朽ちてしまいます。原作においてもバラガン様は『古い』の力に侵された敵の腕を体内に転移されて消滅しました」

「およそ無敵といっても過言でないですね……………」

「まあバトルものでは、こういう能力は気合で耐えるとかされるものですが、そうはなり

ませんからね、これ。よろしいですか？」

「はい」

「では最後の特典は、939番『カウアッロ・アラート天馬と大空のリング』です」

「？」

「さて、この特典は『家庭教師ヒットマンREBORN!』という漫画に出てくる武器なのですが、星野さん知りませんよね」

「はい」

「では、説明します『かくかくしかじか』で、これはその「匣兵器」とそれを開くための炎を灯すリングのセットとなっています」

「なるほど」

「十年後の『跳ね馬』デイナーノが使用した、馬型匣兵器。死ぬ気の炎を翼として生やし、その翼に触れたものを大空の炎の属性『調和』で炎と調和させ灰にすることができです」

「炎出せるでしょうか」

「それは、星野さんの覚悟次第ですね。波動は大空の物に転生するとき調整されるので、

絶対に灯せないということはないです」

「はい」

「では最後に“能力特典”を決めてもらいます」

「はい」

からからから

「はずれですね」

「そうですね」

……

では転生です。

あなたは4つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「行つてらっしゃいませ、星野快仁さん」

「あの、私の父と母は、成仏しましたか？」

「ええ、成仏なさいました」

「そうですか。ありがとうございます」

★ ■ 7番 木村俐人 享年21歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「はい（なんだ男か）」

「（男性体になっておいてよかった）番号札7番、木村俐人さんですね？ どうぞ席にお座りください」

「わかりました（転生だな、こいつ神様か？ おっと心読まれたりするかも）」

「（勤がいいな）もうお察しかと思います、木村さんには転生をしていただきます。ここではその転生する世界を決める・転生特典を決める・大まかな説明を行います」

「はい（よっしゃ！ 転生キタよ！）」

「ではまずは転生と転生先の世界について説明します。『かくかくしかじか』です」

「なるほど（神様ア…自分で選ばせてくんないのかよ…）」

「ではまずは転生する世界を決めていただきます」

「（なんでサイコロなんだよ）」

「サイコロをどうぞで」

「はい、っふ！（4・4・4・4！）」

からん からから

??

「おお、お（えつと？）」

「2と3なので『IS』の世界です。木村さんの転生先は『IS ヘインフィニット・ストラトス』を模した世界に決定しました」

「よっし！（まあよし。無難。特典はどうすっかなー）」

「次に特典の説明をさせていただきます。『かくかくしかじか』でまずは、アイテム特典の数をサイコロの出目で決めていただきます。青いサイコロを振ってください」

「はい、わかりました（くっそ、特典も自由に決められないのかよ、なんとなくそうじゃないかと思っていたけれどもっ！）」

ピッ！

からん からん

「よし（はー、よかった。4つもあれば使えるのあるだろ）」

「4ですね。ではくじを4枚引いてください」

「はい（頼むぞー）」

がさごそがさごそ

がっさごそ

387・・・1267・・・24・・・1864

「では最初の特典は387番、これは『仮面ライダーインペラーのカードデッキ（契約は転生してから10年後に強制的に）』」

「仮面ライダーインペラー（みんなのトラウマの！）」

「はい、詳しく説明させていただきますと、平成仮面ライダーシリーズ第3作目「仮面ライダー龍騎」に登場するライダーの一人、レイヨウ型モンスター：ギガゼールと契約した仮面ライダーインペラーに変身できる特典です」

「契約強制的について、ISの世界にもモンスターいるんですか？（なんてこった）」

「いいえ、ミラーワールドは存在しますがモンスターは存在しません。この度契約するモンスター：ギガゼールは神様が用意する特典の一部ということになります。インペラーはギガゼールを通じて多数のレイヨウ型モンスターを従えるのも特色なので、そこを再現して、この特典では契約モンスターギガゼール一体と、それに付随する疑似契約モンスター（レイヨウ型）50体の51体セットとなります」

「ちよ、ちよつと待つてください…：契約モンスター以外にモンスターいないんですよね？」

「はい」

「契約つてことはエサ与えないと契約者が襲われるんですよね？」

「はい」

「……………エサは？」

「蟹刑事のように……………ですかね」

「……………疑似契約でも？」

「本家はそこらへん不明ですが、この特典では、疑似契約でもエサ与えてください」

「……………」

「……………」

「(なんてものを引いてしまったんだ)」

「ミラーワールドにおける活動時間はテレビ版の9分55秒。ライドシューターで移動可能で、どの鏡からでも出入り可能です。鏡を使って密室に侵入したりも可能です」

「(メリットと釣り合うか? うーん……………でも使えるな、コレは。ん?)」

「あの、モンスター51体つてのは多すぎじゃないですかね、ファイナルベントでもせいぜい20体ぐらいだったような」

「それは、神様の決めたことなので」

「(かみい……………)」

「次の特典は1267番で『クレセリアの入ったモンスターボール』です」

「クレセリア? ポケモンの? 」

「はい。「ポケットモンスターダイヤモンド・パール」に登場するシンオウ地方の準伝説ポケモン。ダークライと対になるみかづきポケモンです。エスパークタイプ、たかさ1.5m、おもさ85.6gの入ったモンスターボールが特典です」

「1.5m……意外に小さいんですね（ダークライ……そっちがよかつたなあ）」

「そうですね。伝説級ということで、レベルは最初から50となっております。といつてもゲームのように言うこと聞かない訳じゃないので安心してくださいね」

「は、はあ（レベル?）。どうやってレベルを上げればいいんですか?」

「野生動物などを倒して経験値をためてください」

「……………（えー）」

「ダークライが悪夢を見せるのに対して、クレセリアはいい夢を見せる能力を持ちます。それだけでもいい特典と言えるでしょう」

「なるほど（そうなのか……いい夢ってなんだ? 気持ちいい夢かな? そうだと最高だなー!）」

「では3つ目、26番です。これは」

「(どうしたのか)」

「大当たりですね。『ゴロゴロの実』です」

「! (エネルの?! ワンピースのエネルのか! つしやあ!)」

「漫画「ONE PIECE」より、自然系の悪魔の実。作中で食べたのは空島編で強大な敵として立ちふさがった「神」エネル。自信を雷と化し、雷速で移動、触れた者は感電。電撃や電熱を用い、圧倒的な力を見せつけました」

「あれはすごかったですね…(アニメ版は、まだ枠移動する前で…こち亀と一緒にやってたの懐かしいなあ)」

「食えば、雷人間になることができます」

「わかりました(十分すぎるほどだな、ていうかISに電波攻撃とか電磁パルス?とかしたらどうなるんだろう。いやさすがに対策とつてるか、絶対防御とか)」

「最後の特典は番号1864番、『ねむらせまくら』です」

「なんですかそれは」

「ドラえもんのひみつ道具の一つで、名称の通り、周囲にいる人をたちまち眠らせる催眠電波を放射する道具です」

「！ ～～～っ！ (やったやったやった！)」

「(うわあ……) ……5ですね。『能力特典』は『○○○コントロール』に決定しました」

「(―規制―) ニヘラ

「(うーわっ……)」

では、

あなたは4つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

★□ 8番 井上凱斗 享年16歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「こんにちはー」

パタン

「はい、番号8番。井上凱斗かいとさんですね。席にお座りください」

「はーい」

「では、もうお気づきのようですが、あなたにはこれから転生を行っていただきます」

「やっぱり！」

「早速説明に移らせていただきます。『かくかくしかじか』です。転生先と特典をサイコロとくじで決めてもらいます」

「ふうむ……………」

「何か質問はありますか？」

「いえ、大丈夫です。サイコロは」

「はい、これです」

「青は私、好きじゃないんですが…他の色はありませんか？」

「(おお、初めてのタイプ…) そうですね…緑と黄色がありますが」

「では、緑をお願いします」

「どうぞ」

「はい……………」

からんからん からん

??

「うわあ……………」

「5と5…神様が自由に転生先を決定する、ですね」

「振り直しは…」

「できません」

「ですよね…」

「次は特典を決めていただきます。特典は『かくかくしかじか』ですが、まずは〃アイテ
ム特典〃の数をサイコロの出目で決めていただきます」

「はい」

「……………いつもは青なんです、緑で行きますか？」

「…はい。緑好きですから」

からんからん

「……………」

「……2、ですね。ではくじを2枚引いてください」

「(えー、2とか…えー もう、ああああ、ああ)」

がさ(そがさ)そ

555・・・876

「555番、これは」

「なにか？」

「あー、いえ…コホン。555番は『薄刀・針』です」

「……………え？」

「対戦格闘剣花絵巻『刀語』に登場する、天才刀鍛冶 四季崎記紀の作りし完成形変態刀
十二本が一本。最も軽く、美しく、そして脆い刀です」

「ちよつと待ってください」

「はい」

「…………… 確か、薄刀は振るうとして、剣筋を乱さず完璧な軌跡で振るわなければ斬るどころか、刀が壊れてしまうほどの。なんでしたよね」

「はい。仮にそうしたとしても、相手が体の筋をずらしただけでも砕けます。それすら見越して振るわなければいけないということですね」

「この特典には、才能はついてくるんですか？」

「いえ…残念ながら」

「では、この特典は、どう使えばいいと」

「美術品でしょうか」

「………そうでしたね。日本刀は美術品ですよね（どうするどうするどうするどうする

!!）」

「876番は『百貌のハサンのセントグラフ』です」

「百貌？ Zeroアサシンですか」

「はい。特典の説明をさせていただくと、この特典は『Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤ』のクラスカードを模し、3つの使い方ができます。

一つ目は『限定召喚』。短剣を召喚します。

二つ目は『夢幻召喚』^{インストロール}。あなたの体を媒介にアサシンの力を具現化し、デミ・サーヴァントのようになり能力・技術を付与します。ただ、このサーヴァントは宝具やスキルが特殊なので夢幻召喚^{インストロール}でも発動はお勧めできません。

三つ目は『英霊召喚』。アサシン百貌のハサンをサーヴァントとして召喚します。ただし令呪はありません。セイントグラフを介してパスは繋がっていますが、令呪がないため強化や抑制ができません」

「……………分かりました。質問ですが、抑制ができないというのはどの程度でしょうか。百の貌のハサンって、善性の英霊ではなく、なんだかんだいって暗殺教団のトップだった英霊なわけですし」

「どの程度と言われると困りますが、ハサンは自分が作られた存在であることを知っています。そして井上さんが転生者であることも自分の持ち主であることも知っています。その上で、『人格統合？ ないわー』と考えていて、特に望みもないので、真摯に向き合えば力になってくれるはずですよ」

「そうですか、努力します」

「では次は『能力特典』を決めていただきます……………サイコロは」

「緑で

「は、

「……………」

「……………」

「は、ずれ、です、ね」

「(もう、緑、きらい)」

では、転生、です

あなたは、2つの神からの贈り物をもって、別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を實行します。それではよき人生を

「はい。転生先は」

『ヒメノスピア』です。行ってらっしゃいませ！」

「え？ なんですかそれ——」

☆□ 9番 土田水人 享年20歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「ど、どうも…失礼します」

「番号9番、土田水人みなとさんですね。席にどうぞ」

パタン

「あ、あのもしかして“転生”ですか？」

「ええ。やっぱり最近の人は言う前に分かっちゃうんですね。ただこの転生は少々変わったままです、説明させていただきますと、『かくかくしかじか』ということなのです」

「なるほど…まあ、二度目が与えられるのはありがたいです」

「そういつていただく、なんだかこそばゆいですね」

「では、サイコロをどうぞ。転生先を決めていただきます」

「はい…っ！」

からんからから

??

「お！」

「4と4で自由選択ですね。おめでとうございます。では早速決めてください」

「え？今すぐですか？」

「はい。あんまり長く悩まれてもいい選択はできないと神さまがおっしゃられて…20分以内に決めていただきます」

「う、うーん……………」

—20分後—

「決まりました」

「はい、どこでしょうか」

「『ニセコイ』の世界にお願いします」

「…分かりました。転生先が決まりましたので次は特典の決定です。特典は『かくかくしかじか』で、『アイテム特典』の数をサイコロの出目で決めていただきます」

「はい…っ！」

からんからん からん

「多っ」

「出目は5ですね。では5枚くじを引いてください」

「(ニセコイの世界でそんな火力とか武器とか持っていたくないんだけどなあ。とか宝の持ち腐れになるだろ…)」

がさ(そ)がさ(そ)

254・・・968・・・637・・・913・・・868

「特典の説明をさせていただきます。254番は…」

「どうかしましたか？」

「いえ、254番は『アヌビス神の宿った妖刀』です」

「アヌビス神？ それって…」

「はい。ジョジョの奇妙な冒険第三部・エジプト編に登場した「本体が死亡し、刀に宿り続けていた自我を持ったスタンド」です」

「確か手にしたら操られるんでしたっけ？ じゃあ！」

「落ち着いてください。特典としては確かに地雷ですが鞘から刀身を抜き出さなければ問題はありません。使わなければ操られる心配はありません」

「そ、そうですか…（不安だ）」

「次は938番『匣兵器・天空ライオン（レオネ・デイ・チエーリ）＋大空のリング』です」

「匣兵器？ リボンですか。懐かしい」

「この特典は匣兵器と大空のリング、そして大空の炎をリングに灯すための波動込みの

セットとなっています。ちなみにこのセットの天空ライオンは沢田綱吉所有の「ナッツ（形態変化機能オミット）」です」

「そうなんですか（まあ、必要ないしいいかな）」

「3つ目の特典は637番『トリガーハッピー』です」

「？」

「『灼眼のシャナ』の1巻に登場した敵、紅世の王“狩人”フリアグネの所持していた『実体のない弾丸を命中させたフレイムヘイズの内に眠る“王”を目覚めさせ器を破壊する拳銃型宝具』です。この宝具は彼自身がフレイムヘイズ特攻の宝具を作り出そうと、フレイムヘイズに恨みを持つ少年ビリー・ホーキンを魂をより合わせ創り出した宝具です」

「……………つまり、『ニセコイ』の世界においては」

「まあ、何の意味もない特典ですね。残念ながら」

「（全く使えない特典2つ目来たー…いや、いいんだけどさー。はあ）」

「4つ目の特典は913番『聖杯(汚)』です」

「どういうことですか…？」

「Fateシリーズの聖杯の汚染されたものです。冬木の第三次聖杯戦争においてアンリマユに汚染されへどんな願いでも人を殺すという形でしか叶えられない欠陥品」になつてしまった願望機です。Zeroで現れた小聖杯とアンリマユの眠る大聖杯のセットで、手に取つて使用できるのは小聖杯のみですが、それでも願えば人類を滅ぼすことが可能です」

「いや、しませんからね。これも地雷ですね…」

「そうですね…ついでに言うと、汚染されたものとして設定しているのでアンリマユを取り除こうとか、消滅させようとしてもできません」

「そうですか…(半分が死蔵品とか)」

「最後の特典は868番『ナイチンゲールのセントグラフ』です」

「……………」

「…はい。説明を続けます。この特典は『Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤ』のクラスカードを模していて、3つの使い方があります。」

一つ目は『インクルード限定召喚』。ナイチンゲールが腰に下げている回転式弾倉と銃身が一体化した、ペツパーボックスピストルを召喚します。

二つ目は『インストール夢幻召喚』。あなたの体を媒介にバーサーカー・ナイチンゲールの力を具現化し、デミ・サーヴァントのようになり能力・技術を付与します。ただ、このサーヴァントは狂化：EXなので精神が乗っ取られるというか、自我が塗りつぶされてしまう危険があります。

三つ目は『英霊召喚』。バーサーカー・ナイチンゲールをサーヴァントとして召喚します。ただし令呪はありません。セイントグラフを介してパスは繋がっていますが、令呪がないため強化や抑制ができません。抑制ができません」

「（大事なことなので2回言いましたって感じだな）」

「使わなければ、何も無いと思いますが、使えば何かが起きるでしょう」

「そうですね（自分で顕現して走り出すイメージがありありと浮かぶ）」

「では次に『能力特典』決めていただきます。サイコロをどうぞ」

「（頼む！　せめてはずれだけは……！）」

からからから

「1ですので『アイテムBOX』です。おめでとうございます」
「よかった。よかった！」

では転生です。

あなたは5つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「行つてらっしゃいませ。がんばってください」

「ありがとうございます」

☆□ 10番 服部弓太 享年24歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「し、失礼します」

「はい番号札10番、服部弓太さんですね。どうぞお掛けになってください」

「は、はい。えっと……………」

「ええ、その通り。服部さんには転生をしていただきます。私はそのための設定や準備を担当します。まず転生について説明させていただきます。『かくかくしかじか』です。わからないことなど、質問はありますか？」

「(なるほど) いえ、大丈夫です」

「では早速、転生先の世界を選択していただきます。サイコロをどうぞ」

「はい…やっ！」

からからから

??

「おー…おお…」

「3と2なので、服部さんの転生先は『BLEACH』です。説明はありますか？」

「あー…いえ、大丈夫です（一応全巻読んだし、知っているし、まあ大丈夫だろう）」

「では次に特典についてです。特典は『かくかくしかじか』という仕組みになっています。まずは『アイテム特典』の数をサイコロの出目で決めていただきます」

「はい」

かつ！ からんからん

「お、おおー…」

「出目は3ですね。ではくじを3枚引いてください」

「はい」

がささ(そがささ(そ

241・・・992・・・169

「では、特典の説明を始めさせていただきます。241番これは『灰タワー・オブ・グレイの塔のスタンドD I S C』です」

「スタンド？ デイスク？」

「はい。スタンドはご存知ですね？ ジョジョの奇妙な冒険に登場する形を持った超能力。これはそのスタンドを、6部のホワイトスネイクの能力をモデルに、『手に入ればスタンド能力を身に着けることができるアイテム』ということにして、神様が作った特典です。この特典は『灰の塔』なので服部さんは『灰の塔』スタンド使いになります」

「『灰の塔』ってどんなスタンドですか？」

「3部に登場したクワガタの形をしたスタンドで、口から伸ばした針で舌を引きちぎるやり方で殺人を行っていました。特筆すべきはスピードで、序盤とはいえあのスタープラチナもこれを捕らえることはできないほどでした」

「おお……質問なんですけど、スタンドってBLEACHの世界の人から見えますか？ たしかスタンドはスタンド使いにしか見えず触れず倒せないって感じだったと思うんですが」

「そうですね。そこはその通りです。神様もその通りお作りになられているので、死神も虚も破面も滅却師もスタンドを見ることも倒すこともできません。ただ…」

「なんです？」

「この転生に、霊力付与のようなオマケは含まれていませんので、死神や虚が服部さんのスタンドを見ることができないように、服部さんも死神や虚を見ることができません」

「え」

「転生してから何らかの手段で霊力を身に着け、高めれば可能ですが」

「そ、そうですねか……（まあ、原作に関わらなければ、いいのか？）」

「では2つ目992番『ヒールボール×375個』です」

「は？ ボール？」

「はい。ポケットモンスターシリーズにて登場する不思議な生き物「ポケモン」を捕まえる道具、モンスターボールの一種で、捕獲率は通常のモンスターボールと変わらないが、捕まえたポケモンのHPと状態異常を完全回復させるという特徴を持ったボールです」

「え？ いや？ えっと、モンスターボール、ですよね」

「はい」

「モンスターボールって、僕が転生するの「BLEACH」ですけど」

「大丈夫です」

「へ？」

「そうなんてもいいように、この特典はモンスターボールという名ですが、その制限がなくなっていますから」

「どういうことですか…？」

「端的に言って、この特典は「生き物なら何でもボールに捕まえられるモンスターボール」です」

「……………」

「あ、生き物と言いましたが、虚などの霊的存在もちやんと認識していれば捕獲可能です。ただし、捕まえるためにはゲーム同様弱らせる必要がありますが」

「……………」

「それと、この特典は消費系です。ゲームと同様に、捕獲に失敗したボールを再利用することは出来ず、消滅します。ただ捕獲成功したボールは中身込みで特典として登録されるので、もし壊れても、修復されず、ゲットした生き物が瀕死状態になっても収納す

ることで回復されます」

「……………」

「そして捕まえた生き物は、何かを倒すことで経験値を獲得し、レベルを上げることができようになります。レベルを上げればモノによつてはゲームでいうところの進化をするかもしれません。そうでなくてもレベルを上げれば、ソレは力を増し、強くなります」

「……………」

「他の機能としましては、「なつき度」があります。これはゲームでは基本的にポケモンの世話をするこゝで上げられます。手持ちにいれる、レベルを上げる、アイテムを使う、毛づくろい等をするこゝなどですね。それと同じように捕まえた生き物の世話をしたり、コミュニケーションをとるこゝで、システムの「確実に」上昇します。始めは服部さんに攻撃的でも徐々に徐々に態度が軟化して、懐いてきます」

「……………」

「こんなところでしょうか、他に質問は？ ……ない。そうですかでは次に行かせていただきます」

「……………」

「最後の特典は169番『白蛇姫』^{アナコンダ}です」

「えっと」

「この特典はお察しの通り、第3十刃：ティア・ハリベルの従属官の一人、シイアン・スンスンの帰刃名です。この特典は破面の斬魄刀と刀剣解放を“アイテム特典”という形にしたものです。死神の斬魄刀のように斬魄刀の意思として「シイアン・スンスン」がいて、彼女と対話なりを行うことで、帰刃ができるようになります。そうすれば破面としての力を使うこともできます」

「なるほど…これって、気配とか霊圧とかどうなるんですか？」

「はい。まず気配なんかは人間です。基本的に特典は外部から感じ取ることは不可能ですので、破面の力を宿していてもそれを察知されることはありません。霊圧も同様ですが、一般人並ではなくなります。わかりやすく言って、死神や虚、幽霊なんかを見ることが可能になります」

「それは（良しっ！）なのか…？」

「このくらいでしょうか…他に何かありますか？」

「いえ、大丈夫です」

「では次に『能力特典』を決めていただきます。サイコロをどうぞ」
「はい…」

からん からん か

「……………」

「5ですね。服部さんの『能力特典』は『○○○コントロール』に決定いたしました」
「……………」(どうしよう、すごくいらぬ。え、そっち期待されてんのか僕…いやいやいや、無理だって。困る。え、だって、え)」

それでは転生です

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「説明、ありがとうございました」

「いえいえ、お役目ですので。服部さん、行ってらっしゃいませ」

☆□ 11番 芦村義隆 享年23歳の場合

初めまして。

読者の皆いつも応援ありがとうございます！

神さまですよ。

今回は2部始まって初ぞろ目回。なので少し変わったことをしてみようと思うのです。今回は僕が介入する場面があるけど、ちよろつとだけなので、どうか許してほしい。では始まり始まり〜

「次の方どうぞー」

ガチャ

「……………」

「こちらにどうぞー」

「はい」パタン

テクテクテク スチャ

「番号11番、芦村義隆さん。よろしくお願いします」

「あの、ここは……」

「はい、ここは転生先と持っていく特典を選ぶ場所となっております」

「……………神様転生、というと？」

「そうですね。そして私はそれらの説明をさせていただく役目を担うものです」

「……………（俺は確かに死んだはず、なら本当に？）」

「よろしいですね？ 転生と言ってもここの仕組みは少々変わってしまっていて、『かくかくしかじか』という仕様になっています」

「……………（むう、まあ勝手に転生先を決められるよりまし…か？）」

「では、このサイコロを振って転生先を決めていただきます」

「はい（安っぽいな）」

「む」

「？」

「コホン。ではサイコロを振ってください」

「っ」

から——

— p a u s e —

「きゃんきゃん。っと」

— p a u s e —

ん

??

「(おお…)」

「6と5です。神様が転生先を決定することになります。どこの世界になるのかは転生直前にお教えします」

「(結局神様が決めるのか…運ないなあ俺)」

「さて続いては『特典』を選択していただくわけですが、これもサイコロとくじで運任せで決めていただきます。ちなみに特典は二種類あり—(略)—です。『アイテム特典』

の数をサイコロで決めていただきます。青い方を振ってください」
「はい(6, 6, 6, 6, 6, 6)」

から――

――p a u s e――

「ささささ。ふいーつと

――p a u s e――

ん

「おおー！」

「おめでとうございます。6なのでくじを6枚引いてください」

「はい(よっしー！っしー！)」

がさがさ

1680・・・2146・・・184

(ズ)ズ(ズ)

1178・・・1932・・・340

「では特典の説明をさせていただきます。1680番は『山びこ山』です」

「……………え？」

「えっと、その、はい」

『『山びこ山』…ドラえもんのか？』

「はい。機能は、『これに向かって言葉が発すると一定時間後に「山彦」となって帰ってくる。言葉が帰ってくるまでの時間は、1秒間から24時間までの間で調節できる。』でざっくり言うると録音機ですね」

「それただのICレコーダー…（もつと他に、ぐおお…）」

「山彦は一度に複数個登録できますが、機能はそれくらいですね。映画版の『改良型山びこ山』は音や光線も反射できる優れモノなのですが…これはただの山びこ山です」

「(ぐう…)」

「よろしいですか」

「はい(くっ)。次は良いのでありますように)」

「2個目の特典は2146番『断ち斬りバサミ』です」

「ハサミですか？」

「はい。アニメ「キルラキル」に登場した纏一身博士が製作し、纏流子さんが武器とした、対生命戦維兵器です」

「ああ(あれか)」

「この特典のおまけというか、仕様として、断ち斬りバサミの性能をいかに発揮できるようになっています。芦原さんが纏流子さんでなくても、小さくしたり元に戻したり、変形させて《弩血盛武滾猛怒》にすることが可能です」

「それは(武器として…まあよし、なのか？ キルラキルの世界でなくても、普通に刀剣系の武器として使えば…)」

「何かほかにありますか」

「……例えば、不死身系の敵に対しての再生阻害とか、そういう能力はありますか？」

「えっと、残念ながらありません。『断ち斬りバサミ』の力はいくまで生命繊維の生命を断ち斬るものなので、他の物には効果がないと神様が設定していますので」

「そうですか（ぐぬ）」

「3個目の特典は184番『シュリフト聖文字 F』（恐怖）です」

「それは、なんですか」

「漫画「BLEACH」に登場した敵、ユーハバツハが自分の能力を発展させシュテルンリッター星十字騎士団のメンバーに与えた、『シュリフト聖文字』の一つで作中では「エス・ノト」に贈られた文字です」

「（知ってます）……その、アイテムじゃないですよね」

「………そうですね。ほぼ能力に近いものですよね」

「ですよね」

「神様の考えたことなので……」

「(神様…:)」

「説明を続けます。この特典は「The Fear(恐怖)」。命中すると相手に絶大な恐怖を味あわせる光の棘のような矢を放ち、敵を発狂させることができます。そしてこの特典には大きなおまけがついています」

「(もしかして?)」

「滅却師としての力です。虚、霊体を消滅させる矢を放つことは基より、大氣中に偏在する霊子を自らの霊力で集め、操る能力がおまけとしてついてきます。

足元に作った霊子の流れに乗って高速移動する『飛廉脚』

霊子を固めた弓と矢『神聖滅矢・神聖弓』

無数の糸状に縊り合せた霊子の束を動かない箇所接続し、自分の霊力で自分の身体を操り人形のように強制的に動かす『乱装天傀』

自身の血管に霊子を流し込むことで肉体を強化させる戦闘術、攻撃をより高める『動血装』、防御を高める『静血装』の2種からなる『血装』

影と呼ばれる、影の中に霊子による異空間を作ることができる能力。それを通じて拠点の作成や移動を行うことができます。

そして、『滅却師完聖体』の『神の怯え』。The Fear(恐怖)による完聖体

「神の怯え」は棘を飛ばすまでもなく、姿を見せるだけで、相手の視神経から恐怖をねじり込ませ発狂させる。目を瞑つても瞼に焼き付き恐怖は倍増し逃れられず発狂させる。といったような能力を全て習得可能な土台をオマケした特典となっております。」

「はー(すつげえ………ん?)」

習得可能つてことは、特訓しないと使えないということですか?」

「そうですね。『聖文字』^{シュリフト} “F” (恐怖)』自体はそのまま使えますが、滅却師としての能力、おまけの部分は修行して使えるようにする必要があります。なんとなくの使い方は感覚で分かるようになっていきますので、直観に従つて修行すれば大丈夫ですよ」

「はあ……(才能の問題とかあるしなあ……転生先の作品が幼年期から地獄のバトルものだったら、きついかもしれないなあ……)」

「では4個目の特典です。1178番『ホウオウの入ったモンスターボール』です」

「ポケモン? (またアイテムじゃないし……)」

「はい。ポケットモンスター金・銀及びHG・SSの舞台ジョウト地方に伝わる伝説の鳥ポケモン。ほのお／ひこうタイプ、たかさ3.8m おもさ199.0kgの「にじいろ

ポケモン」の入ったモンスターボールが特典です」

「モンスターボールが、ですか…」

「はい。そういうことになっています。鳳凰のレベルは45。生き物を倒すことでレベルを上げることができません」

「私の指示には従うのですか？（ゲームじゃ、人からもらったポケモンはバッジがないと従わないし。俺に攻撃とかやばいぞ）」

「それについてはご安心ください。ちゃんと指示に従ってください。生きていますので芦原さんの対応次第でハウオウの態度が変わったりしますが、とりあえず指示に従ってくれるのは間違いないですよ」

「なつき度 的なものがある？」

「というより普通の、飼い主に対するペットの反応ですね。ポケモンは そのあたり違います。例を挙げると悪の組織の幹部のポケモンとかでしょう。トレーナーが非道を行っても、ポケモンはよほどでないと見限らないし、懐いたままだったりするじゃないですか。それと同じ感じですよ」

「な、なるほど（よく分から、いやうん 分かった）」

「ハウオウの力とかは、どのようなものなんですか？」

「？」

「確か、ハウオウは命を与えられたか、そんな感じだったじゃないですか、それは……」

「ああ、それは………アリです。ただし甦らせるのは4年に一度3体までです」

「その期間の縛りは……？」

「さあ？」

「モンスターボールが特典なので、仮に大ダメージを負い“ひんし”状態になっても、ボールに戻し自身の中に収めれば回復します。

あとは……わざ。覚える技はレベル技のみですが、覚えられる数の縛りが解かれているので、覚えられるだけ全てをいつでも使うことができます」

「わざ……私ハウオウがどんなわざ覚えるのか記憶にないんですけど……」

「問題ありません。HPバーやレベル、使えるわざなんかゲームのように見えますので、それを見れば一発です」

「それなら………」

考えたのですが、もしも私が死んだとして、ハウオウの力で蘇生は可能ですか？」

「えっと………」

………はい、即死でなければ可能です。芦村さんの死と同時に特典も消滅するので、

ぎりぎり瀕死の重傷なら死の直前にホウオウの力で蘇生できます」

「(ギリギリ…タイミングが合わなきゃ間に合わないのか…)」

「5つ目の特典は1932番『アンキパン』です」

「……………(来たよ、ハズレ臭漂うものが…)」

「言わずと知れたドラえもんのみつ道具の一つで見かけはスライスされた食パン。その機能は『ノートや本のページに押しつけ書かれた内容をパンの表面に写して食べる』と、その内容が確実に暗記できる』というものです。ドラえもんいわく味は悪くないので、のび太もジャイアンもそのままでもおいしそうに食べていました」

「そうでしたね。でもこれって確か体外に排出すると覚えたことみんな忘れてしまうはずじゃ」

「そこはご安心を。神様印の『アンキパン』は消化吸収で記憶に完全に定着し、決して忘れないようにアップグレードされています。もちろん食べた時点で暗記完了です。大きい方で出した場合でも記憶に残り続けるということですよ」

「おお（それなら心強い）」

「これは消費系の特典なので、いくらでも出すことができます。この特典がある限り食べ物に困ることはないでしょう。そういう意味では当たりですね」

「おお！（そりやそうだ！なんだ大当たりじゃないか）」

「もういいですかね？」

「はい」

「最後、6個目の特典は340番『タスク牙のスタンドDISCと競走馬（名無し）十爪回復用ハープ』です」

「スタンド、ですか」

「はい。ご存知ですね？」

「それは、はい。ジョジョの奇妙な冒険の、3部から登場する形を与えられた超能力…のような物ですよね」

「大体そんな感じですよ。そしてこの特典はそんなスタンド能力を“アイテム特典”にで

きないかと神様が考えて設定したもので、6部に登場するスタンドDISCをアイデアにした「スタンド能力者になる特典」です。

そしてこの特典は第7部ステイル・ボーン・ラン主人公ジョニイ・ジョースターのスタンド能力『^{タスク}牙』と、そのポテンシャルを発揮するためのおまけである「馬具を装着した馬」と爪を回復させるための「ハーブ」。そして何より重要な「「回転」の概念」からなるものとなっています」

「……………(ジョニイか…:ジョジョリオンやゲームのCMなんかで知ってはいるけど、7部自体は未読だからわかんないんだよなあ)

その、『^{タスク}牙』というスタンドがどんな力を持っているのかについての説明をお願いします。

あと、「回転」というものについても「はい。」

このスタンドの基本能力は

『自身の手足の「爪」を高速回転させ、爪のカッターにすることができきる。

「爪弾」とも呼ばれ、銃弾のように射出することが可能。また、撃った爪はその場ですぐに生え変わるため連射性も高い』

というのですが、『^{タスク}牙』は4部の広瀬康一の『エコーズ』のように精神的な成長を見

せるとともに、スタンド能力も進化していくスタンドです」
「……………」

「第一形態の『タスク牙A c t. 1』は発動時のもので、

そこからジョニイが黄金長方形の軌跡でもって爪弾を回転させることで進化したのが『タスク牙A c t. 2』。能力は進化し、爪弾の威力は倍ほどにアップ。さらに爪弾が着弾した「穴」が数秒間敵を自動的に追尾する能力が追加。その分爪の回復が遅くなりましたが、ハーブを摂取することにより、一分で回復させることができます。

そのためのおまけのハーブです。

そしてトラウマと向き合い、ある聖者の導きにより迷いを捨てたことで進化したのが『タスク牙A c t 3』 「黄金の回転」を纏った爪弾を自分自身に撃ち込むことで、自分の体を「穴」に隠すことができるようになり、体の一部だけを「穴」を介して別の場所へ出すことも可能に。「穴」は任意の位置に移動させることが出来るので、事実上、空中でなければどこへでも移動することができ、体の一部だけを「穴」に巻き込んで移動させるといったことも可能なため、「穴」から腕を出すことで射程距離を伸ばすことができます。そしてその回転する「穴」は、ジョニイ以外の者が巻きこまれると「穴」の回転エネルギーにより破壊されます

馬を黄金長方形のフォームで走らせることによって生まれたエネルギーを、鎧を使っ

て受け取り、応用することによって進化したのが最終形『タスク牙A c t. 4』。「馬の走る力を利用した回転」とツエペリ家に伝わる「黄金の回転」を合わせることによって生まれる、無限の回転エネルギーを内包し、その無限の回転を纏った爪弾は次元を超越し、あらゆる防御や妨害、果ては次元すらも問答無用で貫いて敵にダメージを与えることができます。これによる攻撃は一度当たったが最後、そのパワーからは逃れられることは出来ませんが、唯一A c t. 4による「無限の”逆”回転」を撃ちこむことによつてのみ完全に無効化することが出来ます。

そして「回転」というのは普通の回転ではありません。ジョニイの相棒であり親友となつたジャイロ・ツエペリのツエペリ家が継承する肉体を動かさずに掌にある物体に「回転」を加える特殊技術です。本来は鉄球を回転させその振動が生み出す「波紋」によつて様々な効果を引き起こすことができる「技術」です。鉄球に自然界に存在する「黄金長方形」を見て使用できる「黄金の回転」を加えることによつて真の力を発揮することが出来ます。

この技術は『ジョジョの奇妙な冒険』の世界以外には存在しません。しかし特典のおまけとして転生先の世界であなただけが技術を会得し、極めることができるようになります」

「……………（話が長くて覚えきれない？ ん？ あれ一言一句覚えられてる？）」

「話が長くなりましたが、ここでの説明は芦村さんの脳内に記録されて、転生後も忘れることはありませんのでご安心を。」

「回転」についてですが、2部のジョセフのように、生まれつき使用することができません。ただあくまで使えるだけで、ちゃんと修行して使いこなすまでいかないと、爪弾に回転を載せるまではいかないでしょう」

「ああ、なるほど（心読まれた？）」

「……………」

「他には、特にはないですね。ありがとうございます」

「はい」

「では次に『能力特典』を決めていただきますサイコロを振ってください」

「はい」

からんからんからん

「お」

「出目は1 『アイテムBOX』ですね。おめでとうございます」

「ありがとうございます(むむむ、どう使うか…アンキパン保管しとくとか? いやいや

…倉庫代わりにできるな。本とか入れておくかな)」

では転生です。

あなたは6つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございます」

「はい行つてらっしゃいます。

芦原さんの転生先は——

——『ハイスクールD×D』の世界です」

「！ あなたは？」

「はじめましてこんちやうす。神様だけい」

「神様……」

「うい。神様がなんで出てきたのつて顔してるね。

ああ、違う違う。転生先告げるためだけに来たわけじゃないよ。それくらいならそれにやらせるつて。ボクが今回出てきたのは君の生まれを決めるためさ。

君の転生番号がぞろ目だから。理由はそれだけだよ。

さあ、サイコロを振つてくれ。中身は教えないけどね。どの番号がどんな生まれになつていいのか、それは教えてあげない。さ、振つて」

「……………」

「ほーほー。

2だね。

それなら今度は3つのサイコロを同時に振ってくれ。

説明?それならこの後にしてあげるよ。ほら振って」

? ? ?

「うんうん。2と3と5か。

$2 \times 3 \times 5 \times 1000$ で3000年か。

つてと、説明しよう。このサイコロは生まれを決めるためのもの。そして最初の出目は『3個のサイコロの出目で積を出し、それに100をかけて出た数の年数分原作から遡り生まれる』だ。

そう。君は『ハイスクールD×D』のスタートする西暦2000年代の3000年前、紀元前1000年代。日本でいえば縄文時代に転生する訳だね。

ははは、そう絶望した顔をしなくても大丈夫。君には期限付きの『不老不死』を与えよう。あと『病気への完全耐性』もね。期限は原作が始まるまで。それまでの間、君は若い青年の姿のまま老いることも死ぬこともなく、病に倒れることもない。四肢が欠損しても内蔵が損壊しても修復される。漫画の『亜人』と違って、死ななくても治るけど、痛みはあるからあまり怪我はしない方がいいと思うよ。

ますます絶望したようになったね。……あ、なら『精神耐性』もつけよう。これで君は不老不死でも狂うことはない。そんなに強い効果を持つてはいないから安心してたまえよ。喜怒哀楽は失われぬ。人間らしい情動ができなくなるようなこともない。某鈴木さんの状態異常無効スキルほどじゃないよ。

……いやあ、ごめんねえ。でもま、恨むならこの出目を出した君自身の運を恨んでくれたまえよ。

『僕は悪くない。』

『君が悪い君が悪い』

君が悪い君が悪い

君が悪い君が悪い

君が悪い君が悪い』

『君が悪くて』

『いい気味だ』

なんちやって。悪いのはこんなのを考えて、君に押し付けたボクなんだけど、諦めて。君が3000年と数十年、どうやって生きるのか、楽しみにしているよ。
じゃあ、

『さようなら。またの機会はございません』

芦村君。いやヨシタカ君。長い時を、自由に生きることをお勧めするよ」

「!!!」

☆□ 12番 豊田正人 享年15歳の場合

「次の方どーぞー」

ガチャ

「はい！」

「12番の豊田正人さんですね。こちらへどうぞ」

「はい！失礼しますっ！」

バタンツ！

スチャ

「(おお……)」

「あの！」

「はい」

「ここは、転生とか、そういう感じのアレをするところでしょうか！」

「はい、その通りですが」

「っシヤア!!」

「……………」

「いやー、暴走車に轢かれた時、もしかしてと思ったんですが、まさか本当に転生するこ
とになるなんて！」

「えーつと…」

「あ、すみません。自分そういう作品のファンだったもので、テンション上がってしまった
て」

「いえ、その、大丈夫ですよ。早速転生についての説明をさせていただこうと思うのです
が、よろしいですか？」

「はい！お願いします！」

「はい、『かくかくしかじか』ということになっております。豊田さんの知識にあるよう
な転生は？…？…？を出さなければできません」

「な、なるほど。それにしても物語の世界に転生するとは、そんなものもあるのですね」

「（二次創作の類を知らないことにびっくりですよ）ではサイコロをどうぞ」

「はい。とやあー！」

がちん！ からからから

からん！からからから

「（；。Ⅱ。）」

「……………1ですね。出目の数が1なので、特典の数は1つ。くじを一枚引いてください」
「あ…はい…」

がさ

2370

「豊田さんの特典は2370番『核鉄XIV（14）・忍者刀の武装錬金シークレットトレイル』です」

「えっと（なんだそれ）」

「はいこれは漫画『武装錬金』に登場する核鉄という道具です。」

まず「核鉄」。これは錬金術によって生み出された戦術兵器で、見た目は片手に収まるほどの大きさをした六角形の金属塊ですが、精神の深層にある本能に反応して超常の力を発揮、使用者独自の形と特性を持った「武装錬金」へと変化させ、現代科学の力を遥かに越えた力を秘めた武器を振るうことができます。

また、本能に働きかける事で所有者の治癒力を高め、怪我を治したりもできます」

「(ふんふん)……ん？　使用者独自のものに变化するのがもう決まっていますか？」

「はい。神様が作った特典が原作搭乗のものに限っているので、豊田さんが今回引いた核鉄は必ず「シークレットトレイル」に変化します。

シークレットトレイルとは、忍者刀の形をした武装錬金で、能力は「刀で斬ることで亜空間の入り口を開き、使用者とその遺伝子情報をもったものを移動可能にする」というもの。亜空間内部に潜伏も可能で、潜伏中のモノが接触している物体に対しても、亜空間を移動することで移動・潜伏ができます。水中・空中は空間を開くことができますが、それ以外なら生物にだって潜伏可能です」

「忍者っぽい……！」

「欠点は、武装錬金全般に言えることですが、使用者が生身ということと、シークレットトレイル単体ではごく普通の刀としての攻撃力しかないことですかね」

「ああ、まっ！でもそれは仕方ないです。わかりました」

「では次に『能力特典』を決めていただきます。どうぞ」

「はい……」

から、からからから

「4ですね。豊田さんの『能力特典』は『リスタート×1』です」

「(おおおお……)」

それでは転生です

あなたは1つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「いってらっしゃいませ」

「はいっ！ありがとうございます！転生先で『よき人生』を送って見せますっ！」

★ ■ 13番 鈴木快凜（かいり） 享年14歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「へえ」

「番号13、鈴木快凜かいりさんですね（初見の人この名前読めるのかな）」

「あ、はい。ここは？というか俺はいつたい…？」

「はい。ここは『かくかくしかじか』で、あなたはその転生者として神様に拾われた、というわけです」

「……いや、えつと、は？ 俺死んだ記憶とかないんですけど？」

「事故死でしたからね。本棚が倒れてきて、眠ったまま亡くなられたということではないか？」

「！（本棚の固定緩んでたな…つくそ！そんな、死んだ？俺が？こんな、こんな！）」

「お気持ちお察ししますが、後がつかえていますので、早速転生先を選んでいただけますでしょうか」

「ちくしょう、他人事だからって急かしやがって。いや、でももう、死んだんだよな。怒っていてもしょうがない、か）はい」

「このサイコロで転生先を決めてもらいます。どうぞ」

「(たのむぞ)」

からんころん

?...?

「おー！」

「おー！おめでとうございます！ 6と4が出たので『自由』です。転生先を自由に選択

していただきます」

「自由か………(悩む)」

「どういたしますか?」

「(急かすなつての。といつても、うむむ………やっぱり危険のない日常系か。特典選んだ後なら、まだ選択の余地はあるんだがな、わからないんじや日常系に行くしかないよな。ぬう………ひよっとしてエロ漫画的なのにも行けるのか? いやでもな、恥ずかし

「…」

「……………」

「どういたしますか？」

「（急かすな！）じゃあ、えつと『心配ちゃんは今も汗だく』で」

「ほうほう。それはまたなぜ」

「え、理由ですか？それはその…（言えない。ヒロインが好みだからとかあつさい理由で選んだなんて言えない）」

「（ほうほう）失礼しました。では転生特典の選択に移りましょー」

「は、はい」

「転生特典は2種類あります。概要は『かくかくしかじか』といった感じですよ。では早速サイコロで特典の数を決めていただきます」

「はい（まあ、リラックスして…あの転生先なら武器は必要ない。リラックスリラックス）」

からんからから

「おー、出目は3ですね。ではくじを3枚引いてください」

「はい（意外とよかったな）」

い(ぞ)い(ぞ)い(ぞ)い(ぞ)

1 8 4 1 . . . 5 7 7 . . . 5 7 0

「まずは1841番。これは『どくさいスイッチかっこ（改かっことじ）』です」

「はい…？（かつこ 改 かつことじ ？）」

『『どくさいスイッチ』はわかりますね？』

そう、ドラえもののひみつ道具の一つで「〇〇消えろ！」と思つてスイッチを押すとその人物を消してしまうことができ、消された人物は最初から存在しなかったことになるといふ道具です。因果律ごと消失させてしまいます。

原作ではこれは独裁者を懲らしめるための道具で、消してしまった人も復活しましたが、これはその機能をオミットしています。

つまり、本当にとり返しが付かないものになっています。

ただ、改良された点もあります。原作の『どくさいスイッチ』では、殴ってくるジャイアンを消したらスネ夫が殴ってきて、そのスネ夫を消したら他の男の子が、というように一人消すと別の人間が消した者の行動を引き継いでしまっていました。

その欠点が改良され、うまく因果のすり合わせがなされるようになります」

「……………」

「まあ、こんなものは使わない方が健全でいいですよね」

「そうですね（○）」

「続いては577番『マルチステッキ：ステツプバイステツプとコスチューム（男性用スーツ）』です」

「マルチステッキ？ コスチューム？」

「鈴木さんは西尾維新先生をご存知ですか？」

「はい」

「では〈伝説〉シリーズは？」

「あれは、その…分厚くって…」

「(チツ) そうですね。この特典はそのシリーズの第二巻『悲痛伝』に登場した、魔法少女ストロークこと「手袋鵬喜^{ほうき}」の使用していた、魔法を使うためのステッキと、魔法を発動させるためのコスチュームを組み合わせた特典です」

「魔法少女…」

「はい。ちなみに空も飛べます、念じるだけで簡単に。ステツプバイステツプというのは火星語で『光線』という意味で魔法はその名の通り「ビーム砲」です。

「スターラ○トブレイカー」とまではいかないでも、「ディ○インバスター」並みのビームを連発することができます。当然空に浮かんだままでも」

「(へー、でも使うことはないかなー。もったいないなー)」

「ちなみに『ストローク』は火星語で「勘違い」という意味でした」

「(うわあ……あつけなく地味に死んだんだらうな、その勘違いさん)」

「他には、コスチュームですが、特殊なものなので防御力も相当です。防弾キョツキなんか目じゃないくらいの防御力です。斬りつけられても全くダメージがありません」

「そして、これはデメリットなのですが、魔法を使用すると死にやすくなります」（ん?）」

「この魔法は一見何のエネルギーも消費していないように見えて、実際は『運命力』ともいふべきエネルギーを消費しているのです。それにより、ステッキを使いすぎると死にやすくなり、「偶然死亡」なんていうことになりかねません。注意してください」

「はい（んだそれ! ぜってー使わねえ!!）」

「最後、3個目の特典は570番『切断王』です」

「……………それは?」

「はい、これは先ほど同様西尾維新先生の〈伝説〉シリーズ 第一作『悲鳴伝』に登場する、地球撲滅軍・第九機動部隊隊員コードネーム『恋愛相談』こと「瀬伐井鉈美」に支給された科学の結晶、人類の英知の結晶です」

「地球撲滅軍? 防衛軍じゃなくて?」

「はい。敵は〈大いなる悲鳴〉で人類の三分の一を殺害した「地球」ですので」

「(…なにそれ面白そう。くうく…死ぬ前に読んでおけば)」

「さて、『切斷王』は三本一セットの手斧です。性能は一定の距離ならば投げるだけで必ず対象に当たること。それだけのただの武器です」

「はあ(え? 対人武器かよ。地球と戦うっていうからもつとこう…惑星を切斷する刀とか、そんなのを想像してたのに…しよぼ)」

「何か質問はありますか?」

「いえ」

「ではこれにて『アイテム特典』は終了です。次は『能力特典』、サイコロをどうぞ」
「はい」

からからから

「おち」

「はい、出目は2ですね。では『鑑定』が特典として贈られます。おめでとうございます」
「ありがとうございます」

では転生です

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございます」

「はい、いつてらっしゃいます。心さんと、なかよくなれたらよいですね！」

「なっ！」

★□ 14番 古見亮 享年21歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「し、失礼しますう…」

「はい。14番古見亮さんですね。こちらへどうぞ」

「は、はい」

「(あー)ここは転生をなされる転生者の方に説明をして、転生先の世界や転生に際し贈らせていただく特典を選択させていただく場所となっております」

「て、転生、ですか」

「はい詳しく説明させていただきますと『かくかくしかじか』という感じですね」

「わ…わかり、ました?」

「(なぜ、疑問形…)ではこのサイコロで転生先を決めていただきます。どうぞ」

「はこ」

からんからから

??

「お」

「出目は3と6…『To LOVEる』の世界ですね。おめでとうございます」

「あ、ありがとうございます」

「説明は…」

「大丈夫です。はい」

「続いては特典の選択です。特典は『かくかくしかじか』となっております。まずは「アイテム特典」の数を決めていただきます。サイコロを」

「はい」

からんからからかつ

「ん…」

「出目は2ですね。では2枚くじを引いてください」

「はい」

がさざざざざざざざざざざ

872・・・1820

「では特典の説明をさせていただきます。最初は872番『茨木童子のセイントグラフ』です」

「はあ…」

「この特典は『Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤ』のクラスカードを横し、3つの使い方ができます。

一つ目は『限定召喚』。鬼種の骨で作られた無銘の骨刀を召喚します。

二つ目は『夢幻召喚』。あなたの体を媒介にバーサーカーの力を具現化し、デミ・サーヴァントのようになり能力・技術を付与します。茨木童子が強化を制御できることもあ

り、Bランクですが狂うことはありません。

三つ目は『英霊召喚』。バーサーカー茨木童子をサーヴァントとして召喚します。ただし令呪はありません。セイントグラフを介してパスは繋がっていますが、令呪がないため強化や抑制ができません。彼女は鬼なので特に注意する必要があります。野生動物で、人を喰らう鬼で、猫ではなく獅子です。間違えてはいけません」

「は、はい」

「(……………あー)」

「では次、1820番。これは『チョーダイハンド』です」

「それは……?」

「これはドラえもののひみつ道具の一つで、先にオモチャの白い手が付いた棒のような形をした道具です。この力は『他人の物が欲しいときにこれを差し出して「ちようだい」とねだると、何でももらうことができる。この道具を使っている限り、相手は決して拒むことができない。』というものです」

「(へー)」

「アニメでは、ジャイアンにとられた本を取り返すのと、諸々の仕返しに大事にしている

物を奪うために使用されました。そしてその両方でジャイアンは暴力に訴えることもなく渡していました。そのことから神様はこの特典に「この特典で手に入れたものを取り返そうとすることはできないし、糾弾して取り返そうとすることもできない」という仕様にしました」

「(ふんふん)」

「そんなかんじですね。何か質問はありますか？」

「……………これは正式名称が分からないと、とかの縛りはありますか」

「いいえ。『一番大事なもの』というような漠然としたねだり方でも相手側が勝手に判断して「一番大事なもの」を渡してくれます」

「……………」

「では次に『能力特典』を決めていただきます」

「はい」

からからから

「……………」

「(あー…) 5ですね。『○○○コントロール』……………です」

「はい(〇)」

それでは転生です。

あなたは2つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「行つてらっしゃいませ、古見亮さん」

「…あ、ありがとうございます」

☆□ 15番 前田愛秀 享年7歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「こ、こんにちは」

「はいこんにちは。15番 前田愛秀あいしゅうさん。こちらへどうぞ」

「は、はい」

「えっと、ここは転生するところです。転生っていうのは『かくかくしかじか』ってことです。わかりましたか」

「えっと、はい。なんとか」

「よし。では早速転生先を決めてもらいます。いいですか？このサイコロをコロコロってして、その出た数で決めます。がんばってくださいね」

「は、はい！」

「……………てやー！」

からんころころ

??

「おおーと3が出たので、前田さんの転生先は『IS—インフィニット・ストラトス—』の世界ですね」

「いんふいにとと・すとらとす どういった世界なのですか？」

「えっと…『既存の兵器を遥かに凌駕する性能を持つが、女性にしか動かせないという新兵器「IS—インフィニット・ストラトス」が10年前に発明されたことで女尊男卑となった世界。』でのバトルラブコメディです」

「他には？」

「すみません。あまり詳しい情報は与えられないのです」

「それで すか」

「そうなのです。では次に特典を決めましょう」

「特典？何かくれるのですか？」

「はい。『かくかくしかじか』というふう特典が神様から与えられます。その内の//ア

アイテム特典〳〵の数をまずは決めてもらいます。一つ投げてみてください。よいですか？？」

「はい

………てやー」

からんころから

「おおー!!」

「おおー!! おめでとうございます。出たのは5なのでくじを5枚引いてくださいませ」

「はあ」

がささ(そ)がささ(そ)

1 2 2 6 . . . 1 4 1 1 . . . 5 3 1 . . . 1 8 0 0 . . . 7 4 7

※それぞれの「アイテム特典」の原作についても前田くん知らないのだからいちいち説明していますが、全部書いていたらきりがないので、その場面はカットします。

「1226番は『カイオーガの入ったモンスターボール+あいのたま』です」

「カイオーガ…」

「ホウエン地方の伝説のポケモン、かいていポケモン・カイオーガ。たかさ4.5m おもさ352.0kg タイプはみず 特性は、場に出るとしばらくの間天候が「あめ」になる「あめふらし」

ホウエン地方の神話でこの世界の「海」を作り出したポケモンと言われており、雨雲を操り天候を雨にする能力を持ちます。その昔この能力を使って人々を長く続いた「干ばつ」から救ったともいわれているとか」

「ほへー」

「そしてこの特典におまけとしてついでくる「あいのたま」を持たせることでカイオーガはゲンシカイオーガに原始復帰します。

たかさは約倍の9.8m おもさは430.0kg 特性は「はじまりのうみ」に変化

しています。これはあめふらし以上に強い雨を降らせる特性です」

「ほえー」

「どうですか？わかりましたか？」

「はいっ！」

「………1411番は『アトラクション・M』まじかるです」

「まじかるー？」

「はい。これは『魔法少女オプ・ジ・エンド』に登場するオルタナティブ・マジカル亜種魔法少女という生体兵器の
一体で

くカットく

というお話に登場するわけです」

「ほー」

「で、この『アトラクション・M』まじかるは引力を操る、指揮棒の先にハートがついた魔法の
ステッキを持ったオルタナティブ・マジカル亜種魔法少女。ハート型の髪飾りとボブカットが特徴で、だぼつとし

た袖（萌え袖）をしており、常にニコニコとした笑顔でタレ目。「まじかるー♥」です。
妹キャラで強化後の姿では巨乳です。性格・口調はおっとり」

「きよにゆう？」

「ああ、胸が大きいことです」

「おおー」

「この特典では、オルタナティブ・マジカル亜種魔法少女は会話可能、任意に強化（成長）可能という設定になっています。それに加え、能力限界の“重量6t”という縛りもあつてないようなものになっています」

「ほへー」

「他には…ないですね。では次の説明に移ります」

「はい！」

「3個目の特典は531番『仮面ライダーファイフティーン変身ツール一式』です」

「仮面ライダー！」

「前田さん仮面ライダー好き？」

「大好き！」

でもファイフティーン?てのは知らない」

「仮面ライダーファイフティーンは『仮面ライダー鎧武』に登場した仮面ライダーで、映画に出たやつですね」

「そうなんだ。ぼく、鎧武はDVDで見たけど、映画は見てないから知らないの。どんな仮面ライダー?」

「仮面ライダーファイフティーンは映画『平成ライダー対昭和ライダー 仮面ライダー大戦 feat. スーパー戦隊』に登場した仮面ライダーで、その名の通りアギトから鎧武までの“十五”の仮面ライダーの力を使うことができるのが特徴です」

「ディケイドみたいに?」

「はい。ファイフティーンは『平成ライダーロックシード』というものを持っていて、それを戦極ドライバーにセットし、各ライダーのアームズを装着することで力を使えます」

「おぉー!」

「まあ、アギトからキバは『ディケイドアームズ』を使えば力を使えるので、いらぬ子なのですが」

「確かにー。ディケイドってやつぱり、すごい強い」

「ですね。この特典はそういう訳で『戦極ドライバー(変身者制限なし)』と『ファイフ

ティーンロックシード』『平成ライダーロックシード』のセットとなっております。よろしいですか？」

「はい！」

「4個目の特典1800番は『台風のたまご』です」

「んー？」

「これはドラえもんのひみつ道具です」

「あー。ドラえもんですか」

「おやおや」

「もうずいぶん見てないんですよ。映画も見に行きませんでしたし」

「（1年見てないのがずいぶんなのか）このひみつ道具は未来の気象台の学者が、観測実験のために作ったもので温めると短時間で孵化し、台風の子供が生まれてきます。餌は熱い空気で、ロウソクの火などで熱して与えます。生物であるので成長や睡眠もしません。そして悪戯をしたり、泣いたりもします。ただし言葉は「フーン、フーン」などとしかしゃべれません」

「いたずらですかー」

「なにか？」

「ぼくのもだちに犬を飼っていたのがいたんですけど、おしっこかけられたとか言っていて…面倒そうだなって…」

「大丈夫です。孵化したとしても特典であることは変わりないので、卵だった時同様に、身の内にしまつて飼っていられます。なのでイタズラなんかは外に出している間見張っていて、もししそうになったら仕舞ってしまえば大丈夫ですよ」

「なるほどー。それはえつとポケモンの『もどれ！』みたいなの？」

「そうですね。そんな感じですよ。勝手に出てくることもないので安心ですよ」
「はい！」

「では最後、5個目の特典は747番『アルジュナのセントグラフ』です」
「あるじゆな？ せいんとぐらふ？」

—FGO・その他諸々について説明—

「さて、こんなところです」

「ふおー！ ふおー！」

「はい。この特典は先ほども見ていただいた『Fate/kaleid liner
プリズマ☆イリヤ』のクラスカードを模していて、3つの使い方があります。

一つ目は『インクルード限定召喚』。アルジュナの武装、つまり宝具でもある炎神の咆哮アケニ・ガンディーヴァを召喚します。

二つ目は『インストール夢幻召喚』。あなたの体を媒介にアーチャー・アルジュナの力を具現化し、デミ・サーヴァントのようになり能力・技術を付与します。

三つ目は『英霊召喚』。アーチャー・アルジュナをサーヴァントとして召喚します。ただし令呪はありません。セイントグラフを介してパスは繋がっていますが、令呪がないため強化や抑制ができません」

「ふおー！…ふおー！…」

「(駄目だ、意思疎通ができない…!)」

—しほはらくして—

「…さて、落ち着いていただいたところで『能力特典』をサイコロで選んでいただきま
す」

「はいー！」

「どうぞ」

「……たやー！」

からん からから

「おー!!」

「おめでとうございます！出目は3 『翻訳』です」

「うわー。ありがとうございます。ぼく英語教室に通ってたけど全然うまくなれなく
て。でもこれでお母さんに怒られなくて済むようになります！」

「………そうですね。この特典はどんな言語も理解可能ですからね。英語だってペラペ
ラですよ」

「うわー！」

では転生です。

あなたは5つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「さようなら！　ありがとうございました」

「はい。いつてらっしゃーい！」

「はいーいー！」

☆□ 16番 佐藤実 享年16歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します」

「16番 佐藤実さん。ようこそ、ここは死者を転生させる場です。『かくかくしかじか』という手順で転生していただきます」

「はあ…拒否は」

「できません」

「そうですか」

「ええ、そうですね。早速サイコロを振ってください」

「はい」

からから

??

「おや、6と5が出ましたね。これは「神様が転生先を決める」です」
「……………」

「(マイナス思考駆け巡ってる)。けどまだ楽観的だなこいつ、余裕あるうー)」

「次は転生特典を選んでいただきます。『かくかくしかじか』となっていて、
// アイテム特典〳〵の数をサイコロで決めていただきます」

「はい……………」

ひゅん かつ

「……………うつつうつつ……………」

「(どんまい) まあ一つでもチートなアイテムはたくさんリストの中にありますので。
さ、くじを引いてください」

「はい(悲壮感)」

がさ(い)そがさ(い)そがさ(い)そ

「これっ」

1397

「えーつと……………(あ)」

「どうですか」

「1397番は『ヤンマブリッド蜻蜒断とそれを発射するためのライフル』です」

「は？」

「知らないですか、そうですね）これは漫画『アラクニド』に登場する武器を基に神さまが作った特典です。「アラクニド」は蟲と呼ばれる殺し屋たちのバトルだったりエロだったり色々な面白い作品なのですが、その中で序盤と最後に登場する「銀蜻蜒」と呼ばれる「蟲」の使う武装がこれです。

ヤンマブリッド蜻蜒断は射出後回転しながらトンボを模した翅を広げることにより、あらゆる自然現

象の干渉を避け弾道を自動修正する狙撃弾。有効射程距離は半径5kmです

そしてそれを撃つためのライフル本体。

「どちらも特典なので壊れたり整備不良になることがあっても再出現させれば新品に戻ります。そして弾数は無限です。弾の装填は必要ですが、弾は身の内からいくらでも湧きます。本体は一台しか出せませんが」

「つまり、弾道が安定したただの銃器一式が、私の転生特典？というわけですか…？」

「あー、えつとー…はい」

「転生先は、バトル系とかもあるんですよ。力がなければ生き残れないようなところも…どう生きろっていうんですか」

「まあ、その…」

「……………」

「……………」

「それでは気を取り直して、〃アイテム特典〃を決めましょー」

「……………」

「さ、さあ、サイコロをお願いします？」

「……………はい」

からつころ

「……………」

「おお！ 2なので『鑑定』ですね！ おめでとうございます！」パチパチパチ

「……………」

「（あー、暗い…）」

それでは転生です

あなたは1つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは

ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。転生を実行します。それではよき人生を

「……………」

「転生先は『最終兵器彼女』だそうです。……………強く生きてください」

「(知らないけど、物騒そうだな。いや？ギヤグだったりするかも。バトルラブコメディ
だったりして)」

★□ 17番 八木涼晴 享年19歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します…」

「17番 八木涼晴さんですね。こちらの席にどうぞ」

「はい」パタン

「それでは八木さん。あなたがおそらく今考えている通り、ここは転生の間です。これから八木さんには転生者として生まれ変わっていただきます。詳しく説明しますと、かくかくしかじか」という感じになっています」

「なるほど…」

「理解していただいたところで早速ですが転生先を決めていただきます。サイコロをどうぞ」

「はい」

「振ってください」

「はい…っ！」

からんころんからん

??

「!!」

「おお！ 大当たりく！特典が決まった後で転生先を選択することができます」

「なんというか、その、ありがとうございます？」

「くふふ。では先に特典を決めていただきます——とその前に、特典の説明を」

「『かくかくしかじか』というわけで、“アイテム特典”と“能力特典”があるわけ
です、まずは特典の数を決めていただきます」

「はい。……っ！」

から

「お、おー…。2個か」

「出目は2なので2枚くじを引いてください」

「はい」

がさ(そ)がさ(そ)

2299・・・2268

「では特典の説明を。2299番は『No.042 超一流作家の卵』です」

「なんですか それ?」

「はいこれは、『HUNTER×HUNTER』グリードアイランド(G・I)編に出てきた指定ポケットカードの一枚で説明文によると「1日3時間手の中で温めることで1年後〜10年後に現実となって孵る卵。温める時に願う気持ちが強いほど早く孵化す

る。」です」

「ふんふん」

「以上です」

「え？ほかに説明は？」

「ないですね。ではもう一つの説明に移ります」

「……………」

「2268番は『No. 009 豊作の樹』

先ほどと同じく『HUNTER×HUNTER』グリードアイランド（G・I）編に出てきた指定ポケットカードの一枚で説明文は「ありとあらゆる果実が実る樹。どんなに収穫しても次の日には樹いっぱいに果実が成る。果実の種類と数はランダム。」です」

「はあ」

「続いては『能力特典』を決めていただきます。どうぞ」

「は……」

からからから

「!! (無言のガッツポーズ)」

「5…ですね。なんとというかその…おめでとうございます?」

「あ、はい。えっと。ありがとうございます?」

では転生です。

あなたは4つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「どの世界に転生しますか？」

「……………『けもっ娘どーぶつえん！』をお願いします」

「……………はい。認証されました。いつてらっしゃいませ」

「ありがとうございます」

☆ ■ 18番 渡邊義幸 享年25歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「……………あの」

「18番の渡邊義幸さんですね？こちらにどうぞ。説明しますので」

「え、つと、あ、はい」

「突然のことで混乱されましたか？ここは転生の間、これから渡邊さんにはいくつかの選択をしていただきその結果決まった世界に転生していただきます。転生 とは『かくかくしかじか』でして、『まるまるうまうま』というわけです」

「……………信じがたいですが、受け入れるしかないようですね。それで、私は何をすればいいのですか？」

「まずはこのサイコロを振ってください」

「転生先、ですか…」カラカラカラカラカラ…

ヒュッ

からんからから

?…??

「お」

「おっとつと、1と5の出目、『魔法少女リリカルなのはシリーズ』ですね」

「えっと、これは」

「はい、もう一度、今度は青サイコロ一つを振ってください」

からんからから

「…」

「はい4が出たので『魔法少女リリカルなのはStrikeS』の舞台、ミッドチルダに転生してもらいます」

「StSは主人公がなのは様かスバルさんかどつちか微妙なので神様も唸っていましたが、若い方がいいだろうということで、スバルさんと同じ年に転生してもらいます。原作開始時には15歳ですね」

「ちなみにリリカルなのはについてはご存知ですか？ ……ご存知ですか。その続編です」

「次に特典を決めていただきます。『かくかくしかじか』になっていまして、まずは『アイテム特典』の数を決めていただきます。どうぞ」

「……………はい」

からからからから

「出目は2ですね。では2枚くじを引いてください」

「はっ」

「(´)そがさ(´)そがさ

2 2 3 8 . . . 4 7 0

「2238番、これは『ロコン（アローラのすがた）の入ったモンスターボール+こおりのいし』です」

「ㄱアローラのすがたㄱ?」

「はい。ポケットモンスターS・Mの新要素で、『リージョンフォーム』と呼ばれる従来のポケモン達の新しい姿で、アローラ地方の独自の自然環境に適応し、ほかの地方とは異なる姿をしているものが出て、その一体がこのロコン、所謂ㄱアローラロコンㄱです」

「ポケモン…最近のは全く知らないんですね…ゲームボーイの、四角いカセット以来ですよ」

「赤ですか? 緑ですか?」

「赤です。あの頃、懐かしいなあ……」

「……………はい。で、ロコンは きつねポケモン、たかさ0.6m、おもさ9.9kg、こおりタイプです」

「こおりタイプ？」

「リージョンフォームではタイプが異なったりするのです。ロコンの場合は本来の姿と真逆のこおりタイプで、進化に必要な石も「ほのおのいし」ではなく「こおりのいし」です。ちなみに進化させるとこおり／フェアリーの複合タイプになります」

「フェアリータイプ、ですか？」

「ポケットモンスターX・Yから追加されたタイプで、ドラゴンタイプの天敵です。ドラゴンの攻撃を無効化し、一方でドラゴンの弱点として効果は抜群、というタイプです。他にはあく・かくとうにも効果抜群です。」

弱点はどくとはがねです」

「なるほど…ずいぶん変わったんですね。なんというか…訳が分からないくらい」

「何かありますか？」

「……………レベルアップにはどうすればいいですか？」

「皆さん聞かれます。」

バトルをしてください。生き物を戦闘不能にすれば経験値が入ります。そうして、そ

の経験値が貯まればレベルアップします。レベルアップすればわざわざも覚えることができます。そのシステムはゲーム同様ですね。傷ついた場合はボールに戻して身の内に収めれば回復します」

「生き物…カラスとか虫とかでも？」

「人間が一番狩りやすくオイシイ相手ですよ」

「……………さすがに、それはちよつと」

「470番『アイスエイジメモリ（I）』です」

「メモリー？」

「いえ、メモリです。『ガイアメモリ』。『仮面ライダー』の敵である人間が強化された怪人『ドーパント』。そのドーパントに変身するためのアイテムが『ガイアメモリ』です。ガイアメモリには「地球の記憶」が込められていて、メモリに内包された「地球の記憶」を注入することで、変身します

「アイスエイジメモリは、その名の通り『氷河期の記憶』を内包したガイアメモリで絶対零度の冷気を放出する、空気中の水分を氷結させて武器化する等の能力を持ったアイス

エイジ・ドーパントになることができます。

「ガイアメモリを使うためには「生体コネクタ」という刺青のような、メモリを体内に挿入するためのモノが必要となります。なのでそのコネクタを転生時に渡邊さんの体に付けさせていただきます。アイスエイジは原作でメモリ挿入が描かれていない唯一のドーパントなので、コネクタの位置を渡邊さんが決めていいことになっています。どこにしますか？」

「えつと……どこがいいとか、おすすめはありますか？」

「ん〜そうですね…。コネクタはデザインが禍々しいので、目立たない場所に付けるといいと思います。ただ、足の裏とかだと、咄嗟に使えないので…ん〜普段は服で隠れて、咄嗟に表出させやすい所とかですかね」

「……………舌、でおねがいします」

「はい。かしこまりました。」

最後に、メモリには適合率があります。これはメモリとの相性とも言え、高すぎると過剰適合者となり、低いと力を引き出せなかつたりします。十全に特典を使えるようにこちらで適合率を上げさせてもらいます」

「はっ」

「……………気を強く持つてください」

「…？はい」

「では次に『能力特典』を決めていただきます。どうぞ」

「はい」

からからん

「お」

「おー！おめでとうございます。3『翻訳』ですね。ミッドチルダは文字が違うのでこれがあればスタートで苦勞しなくてすみますよ」

「おお、それはよかった」

それでは転生していただきます。

あなたは2つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「いってらっしゃいませ」

「ありがとうございました」

★□ 19番 白井俊樹 享年12歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「……………なんですかここ」

「19番、白井俊樹君ですね？どーぞこちらに」

「もしかしてどつきりとかですか。早く帰してくれませんか、訴えますよ」

「んー。(めんどくさいな。死んだことを理解してない子)……………うん。ばーん☆
ぐちゃ ボンツ

「へ？！ あ！ああ！ う、うでえ！僕の腕エ！この、この！腕があ！」

「もしもーし。大丈夫ですかあ？」

「だ…い…丈夫なわけッねえだろっ！ どこに目えつけてやがる！このくそが！」

「おーこわ。でも大丈夫なはずですよ。痛みもないはずですよ」

「はあ!?……………は？」

「不思議ですか？その疑問の答えは簡単です。白井くん、君は死んでいる。亡くなっ

ちやつてるんでーす☆

「は？」

「不幸な事故でしたね。本当に。即死だったので全く記憶にないようですが」

「うそ……」

「嘘ではないですよ？まあどんまいです。来世に期待してください」

「ふ、ふざけるなあ！」

「ふざけてませんって。「来世に期待」つても軽口じゃないですよ？ここはそのための場所ですから」

「あん？」

「ここは神さまが救い上げた魂の来るところ。転生者のスタート地点です。『かくかくしかじか』というわけで転生をしていただく、そういう訳です」

「ふざけるなよ！神の遊びなんかで、第二の人生とか、くそっ！僕の人生はここからだったのに……ちくしょう……」

「（おーおー、嘆いてる嘆いてる）……それでは早速ですが、転生先を決めていただきます。よろしいですね？」

「（こつちのことも考えず、くそ。嫌だといったらまた体を壊す気か）わかりました」

「（おっと、鋭い）ではサイコロをどうぞ」

「はい（やすつぽ）」

「む、」

「ひ」

っから からから

?…?

「おっと、6と2…ポケットモンスターの世界ですね」

「ポケモンか…」

「では転生する地方を決めるため、一個もう一回振ってください」

?…?カントー・ジョウト地方

?…?ホウエン地方

?…?シンオウ地方

?…?イツシュ地方

?…?カロス地方

?…?アローラ地方

「はこ」

からかつ からからから

「はい。4が出たので『ポケットモンスターBW』の舞台、イツシユ地方に転生先が決定いたしました」

「……………(ブラック・ホワイト…おじさんが貸してくれたアレか。聞いたことのないじゃなくてよかった)」

「次は特典を決めていただきます。特典というのは『かくかくしかじか』という概念で、『まるまるうまうま』という2種類が用意されています。まずは“アイテム特典”の数を決めてもらいます。どうぞ」

「(なんでこんな茶番を……)」

からからから

「やっ……！ ……」

「(照れが入りましたね。ワロスワロス) 出目は5ですね。ではくじを5枚引いてくださ

い」

「は」

がさ(そ)がさ(そ)

15111...1741...1781...1180...2335

「はい、それでは説明を始めます。

まずは1511番『魔法のターバン』です」

「ターバン？」

「はい。絨毯ではありませんよ？」

これは漫画『マジ』の主役 アラジンが所持していた魔法道具です。広げると樽を十数個乗せられるほどの大きさになり、留め具の赤い宝石が本体で、そこが無事であれば布地自体が破壊されても修復することができ、アラジンは後に単独ならば身につけるだけでもターバンを広げずに飛行能力を使うことができるようになりました」

「つまり、飛ぶことができるようになる道具ってわけ？」

「はい。ざっくり言うとそのとおりですね。ちなみに、おまけとして『魔力』^{マジイ}を持った人として転生です。おめでとうございます」パチパチー

「マジイ？」

「はい。「マジ」の世界の魂だったり何だったりの“ルフ”、そのルフの生み出すエネルギー

ギーで、生命に至るまであらゆる自然現象を引き起こす。まあMPのようなものです」
「つまり…魔法使いになれたり?」

「セ?」

「…さあ?つてどういうわけですか」

『『マジ』の世界では魔法を使うにはルフに命令を送るため、強いマゴイを体内に宿していなければなりません。このおまけは、あくまで“おまけ”なので大小はランダムなんですよね。なのでまあ…転生してみない事にはわからないんですよ」

「(っち。ちよつとわくわくしたのに)」

「まあ、使える可能性もあるので、これでも読んでみてください。ここでの記憶は転生してから一言一句忘れないので」

ドサツ〈漫画『マジ』関連書籍(シンドバットの冒険含む)〉

「…ありがとうございます」

—数時間後—

「1741番、これは『クローン培養器』です」

「それは一体……」

「『クローン培養器』は皆さんご存知 青だn：猫型ロボットドラえもののひみつ道具の一つです」

「(こいつ……) それでこの道具は？」

「はい、これはまあ、名前からお察しだとは思いますが、クローンをつくる道具です。

実際の人間と全く同じコピーを作り出す道具で、人間の爪や髪の毛などの体の一部を入れて作動させると、直径1メートルほどの卵が出てきて、コピー元の人間と寸分違わない人間が孵化します。風貌や体格、年齢はコピー元の人間と同様であるものの、知能や運動神経は赤ん坊同然のため、育成や教育の必要があります。しかし成長速度は並みの赤ん坊よりはるかに早く、わずか1日で小学生並みにまでなる……とこんなところで。生まれた時から成体とか、寿命が短そうですね」

「はあ……」

「原作では、のび太くんの家に謝って配達された未来デパートの商品で、のび太はジャイアンとスネ夫のクローンを作り、自分で教育しておとなしい二人に作り上げようとしま

した。でも勉強を教えれば答えを間違え、運動をすれば教え子に負ける、そんな感じですっかり侮られ、本物と同じ性格にクローン二人は成長してしまいました。そして例のごとくドラえもんに助けを求めるが、クローンといえど人間。どうするか二人は悩み、結局クローン二人が『クローン培養器』に備え付けられていた「とりけし」のスイッチを押してくれたことで（つまり自殺してくれたことで）解決しました」

「んんん…なんというか…のび太作ってどうするつもりだったのか…」

「さあ？何も考えてなかったんじゃないですかね」

「……………」

「次は1781番『新種植物製造機』です」

「(番号が近い…またドラえもん?)」

「(お♪)これは先ほどと同様にドラえもんのひみつ道具の一つで、その名の通り新種の植物を作り出す道具です。種や球根の細胞内の遺伝情報をレーザーメスや電子のりで作り返えることで、意のままの植物を作り出すことができます。」

「アニメでは

スイートピーの蝶

チューー！リップ（蜜を口移しする唇型の花）

ちゅーリップ（ネズミの花）

ラツパのような楽器ユリ

通話可能の鳶

躍る大根

かぼちやの馬車

なすの馬

ベルのようなスズラン

ハープのようなひまわり

ギターのような瓜

などを作りました。

「大根を料理しようとしたママのせいで、大根たちが反逆し、なんだかんだあつて新種植物製造機が壊れ、新種植物たちは元に戻りました。なので、もしも白井くんが反逆されたら道具をぶつ壊せば大丈夫ですよ

「ちなみに自立行動する植物は自分で増えようとすることがあります。そこらへんもお

気をつけて。作るたびにしまっておくといいかもですね」

「はい」

「続いては1181番『ポチエナの入ったモンスターボール』です」

「え？ モンスターボール？」

「はい。モンスターボール、です。ポケモンというナマモノを特典にするために神さまが屁理屈をこねた結果ですね」

「(ポケモンの世界にポケモンの特典：ハズレか。ポチエナってなんだよ)」

「ポチエナとは、ポケットモンスタービー・サファイアで初めて登場した“かみつきポケモン”。たかさ0.5m おもさ13.6kgのあくタイプのポケモンです。Lv.18で進化するとグラエナになります。ハイエナがモデルのポケモンです」

「んん(やっぱり伝説とかでもない普通のポケモン…ポケモン世界でポケモンもらってどうすんだよっ！)」

「何かありますか」

「いえ、なにも」

「最後は2335番『No. 078 孤独なサファイア』です」

「なんですかそれは」

「はいこれは『HUNTER×HUNTER』グリードアイランド（G・I）編に出てきた指定ポケットカードの一枚で、説明文によると『このサファイアの持ち主は巨万の富を得るかわりに一生を一人で過ごす。友人、恋人、家族すらすぐに持ち主の元を離れていくだろう。』です。カードの状態で持っている分には何もありませんが、『ゲイン』と言って実体化させると効力を発揮し始めます」

「巨万の富…具体的には？」

「はいそうですね……へー一生金に困らない。むしろ金の方からやってくるみたいな感じですね。くじを引けば大当たり、宝くじでは特等、カジノではテクニク無しでもぼろ勝ち、ぼーっと道を歩いてるだけでも数百万円は軽く手にできるほどですね」

「（なんか怖いな）それで？ 一人で過ごすってのは」

「はい、一人で過ごすというのはそのままです。関わる人間、関わる人間みんな離れてい

きます。白井くんの転生先ならポケモンもですね。これを実体化させると、手持ちのポケモンもあなたのもとを去っていきます」

「えっ？じゃ、じゃあ僕の特典のポケモンも？（損でしかない!）」

「ああ、それは大丈夫です。特典を失うことはありません。ポチエナだけはあなたの側にいますよ。」

他の人間やポケモンはあなたとの関わりが一週間になると去っていきます。『関わり』を詳しく言うと、触れたり、会話したり、他者があなたと接していると感じ、あなたもまたその人と接していると感じることで『関わり』が持たれたとなります。その合計時間が一週間、つまり168時間に達するとあなたの前からいなくなり、『関わり』を持つことは出来なくなります。死んだわけではありませんよ？

ただこれはあくまで個人、人に対してだけで、例えば通販なんかでは届けてくれた人が変わるだけでずっと使用可能です。どこかの会社との電話や、寄付なんかをするとしても、対応する人が変わるだけで関係を続けることは可能です」

「……………（いや、寄付とかしないし）」

「（こんなところでしょうか）」

「はい」

「では続いては『能力特典』です。サイコロをどうぞ
はい」

からん

「……………」

「わーお。出目は6『ハズレ』ですね。残念でした」
「クッソ」

では転生です。

あなたは5つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「いってらっしやいませ〜」

「さようならー!」

☆□ 20番 笹木こうき 享年17歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「こ、こんにちはー…」

「こんにちは。20番、笹木こうきさんですね。どうぞこちらに」

「は、はい！」

パタン スト…

「では、

おめでとうございます。笹木さん、あなたは神様転生の権利を得ました！」パチパチ

パチー

「おおっ！（やっぱり！）」

「お気づきの通り、ここはいわゆる神様転生を行う場所です。これから笹木さんには転生先と特典を決めていただき、二次元世界に転生していただきます」

「（死んじゃったのはすぐくつらいけど、まさかこんなことがあるなんて！神様ありがとう

うー!」

「転生のシステムが、笹木さんの知っているテンプレとは違うので、まずはその説明をさせていただきますね。『かくかくしかじか』………という感じですよ。わかりましたか?」

「………（運任せか。できれば転生先は現代がいいな。やっぱり自分が転生する側になつてみると中世ヨーロッパとか死んでも行きたくないしな。殺伐とした世界も嫌だな。『自由』なら最高なんだが……）分かりました」

「ではまず、転生先をサイコロで決めていただきます。どうぞ」

「はい。ふむ……」

からん、からから

??

「あ………」

「はい、出目は5と1なので『Fate／シリーズ』に転生、ですね。それではもう一

度サイコロを、今度は一つ振ってください。出目でどの作品の世界に転生するかを決定します」

*

? . . . s t a y n i g h t

? . . . z e r o

? . . . E X T R A

? . . . A p o c r y p h a

? . . . k a l e i d l i n e r プリズマ☆イリヤ

? . . . G r a n d O r d e r

「ではどうぞ」

「……………(3は無理！3は無理！できれば5！お願いします！)」

からんっ からから

「あ、あああ………」

「あ……出目は6 よって笹木さんの転生先は『Fate/Grand Order』の世界に決定しました」

「質問があります」

「はい、どうぞ」

「自分、マスターになるんですか？ あと、自分の中の記憶や知識は、千里眼持ちだったり、ギル様だったりに見られて大丈夫なんですか？」

「んー……。まず、あなたは2015年にマスター候補、一般から集められた『数合わせ』の一人、11人目の一般人・49人目のレイシフト適性者としてカルデアに連れていかれます。拒絶は不可能です。原作からしてカルデアが舞台なので。ただ、『退場』したいというなら何もせず流れに身を任せていけば爆死できますよ。」

笹木さんの原作知識は完全にブラックボックスと化し、グランドキャスターだろうがピーストだろうが知識の出所が「ゲーム」だと知ることは出来なくなります。ただへこいつは何でそんなことを知ってるんだ？と怪しまれる可能性は大です。がんばってください」

「ええええ……。……(がんばれってなんだよ……)」

「他にはありますか？」

「もういいです」

「あ、はい」

「次は特典を選択してもらいます。この転生では2種類の特典を贈らせてもらうんですが『かくかくしかじか』：となっています。まずは“アイテム特典”の数をサイコロで決めます」

「はい」

からからからから

「ん、ん、ん…」

「出目は3ですね。では3枚くじを引いてください。くじに書かれた番号の物があなたの特典になります」

「落ち着け、落ち着け。大丈夫、大丈夫。いざとなれば「ぐだお」か「ぐだ子」の、主人公に丸投げしてカルデアに留守番してればいい。くだらないのが来たって大丈夫。むしろそっちがいい。『過ぎた力は身を滅ぼす』って言うじゃないか。うん）」

がさ、がさ、がさがさ

1153・・・2193・・・1044

「はい、では説明をさせていただきます。

1153番『ソーナノの入ったモンスターボール』です」

「モンスターボール？」

「はい。モンスターボールです。中のポケモンをおまけにして、アイテム特典ということにこじつけをした、そんな神さまの浅知恵です。

ほがらかポケモン ソーナノ、たかさ0.6m おもさ14.0kgのエスパークタイプです。進化先はロケット団の名物キャラ、がまんポケモン ソーナンス」

「…（ん？）普通に進化するんですか」

「ええ しますよ？15レベルで進化ですね。」

レベルアップには、ゲームではポケモンバトルが必要でしたが、転生先にはポケモンがないので、野生動物や人間を相手にリアルバトルを繰り広げて経験値をためてください」

「ええ？ Fate 世界でリアルバトルとかやばいだろ。魔術師がくるだろ、暗示かけられて一発アウトだろ。オーマイガーだろ。ううん…原作スタートまでは外に出さないのが無難か？ いやでもなーLv. 1でエネミーに立ち向かえるとは思えないしなー……いや、ちよつと待て、待て待て待て待て！」

「教えてほしいことがあるんですけど」

「はい」

「ソーナノって、攻撃わざ、なかったような」

「あー…そうですね。ソーナノ時代は代名詞の『カウンター』『ミラーコート』も覚えていませんね」

「じゃあ？」

「ゲームと同じで、一旦出して、交代して代わりに戦ってください。それなら経験値入るの」

「誰が？」

「笹木さん？」

「まじですか？」

「マジです」

「そーなの？」

「そーなんです」

「……………」

「……………」

「続きいきます」

「はい（ううう…）」

「2番目1044番は『アチャモの入ったモンスターボール+メガバングル・キーストーン+バシヤーモナイト』です」

「（……………よっしやあああああー！）」

「（おお…）ひよこポケモン、アチャモの入った、先ほどのと同じモンスターボールの特典です。その上で、メガシンカできるようにオマケがついています。」

アチャモ、たかさ0.4m、おもさ2.5kg、ほのおタイプ。ハウエン御三家の一体で、アチャモの時点でも摂氏1000度の火球を吐けるという、よく考えたらマグマ並みの熱さを生めるポケモンです。16レベルで進化。「わかどりポケモン」ワカシヤモになり、36レベルで「もうかポケモン」バシヤモになります」

「えつと、これアチャモに戦ってもらえれば、自分がソーナノの代わりに戦う必要はないってことで、いいんですよね？」

「そうなりますね」

「……………よしっ！」

「他には…あー、ないですね。では次に行きます。いいですか？」

「はい」

「最後は2193番——」

「(え、なに)」

「失礼しました。2193番『アルターエゴ・殺生院キアラのセントグラフ』です」

「……………(ぎゃああああ！ちよ！それ、おま！まじでか！)」

「……………はい。この特典はこの特典は『Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤ』のクラスカードを模していて、3つの使い方があります。

一つ目は『限定召喚^{インクルード}』。キアラさんが武器として扱う魔神柱が召喚されます。

二つ目は『夢幻召喚^{イストール}』。あなたの体を媒介アルターエゴ・殺生院キアラの力を具現化し、デミ・サーヴァントのようになり能力・技術を付与します。ただ、このサーヴァントは「あれ」なので精神が乗っ取られるというか、自我が塗りつぶされてしまう危険があります。「極めて高い」です

三つ目は『英霊召喚』。アルターエゴ・殺生院キアラをサーヴァントとして召喚します。ただし令呪はありません。セイントグラフを介してパスは繋がっていますが、令呪がないため強化や抑制ができません。抑制ができません。カルデアに行つて、マスターになり、令呪を得れば、その令呪で影響を及ぼすことも可能ですが…自害させても、特典なので消滅しません。あなたに命がある限り、一生滅びることはありません。ただ、笹木さんが召喚をしなければ、勝手に飛び出してくることもないんです、そこはご安心を」

「何一つ安心できないんですが（ガチャで課金しても来なかつたくせに、今になってなんで来るんだよ！いらねえよ、怖えよ、チエンジできねえかなア！）」

「あー、まあ、そうですね。本当に…」愁傷さまです」

「あの、このキアラって、セイントグラフの状態でも動いたり話しかけてきたり、そういうバグった要素持つてたりしませんよね？」

「大丈夫です大丈夫です。バグが起こる可能性はありません。勝手に動いたりなんてしませんよ」

「不安だ…（自分が信用できない。召喚しなければいい、っていうけど、自分考えなしの大馬鹿で、こらえ性もないからな。もし召喚したら、溺れてしまう自信がある。なのに根拠なく「大丈夫だ。」と思って召喚してしまいそうで怖い。自分が信じられない）」

「（本当になんで来ちゃうんだよ…）クリーニングオフ、できませんか…？」

「ごめんなさい。かわいそうだから、してあげたいんですけど、駄目なんです」

「ううう………（ ; ω ; ; ; ）」

「……………気を取り直して、次は“能力特典”を決めていただきます」

「……………はい」

からから

?

「出目3 『翻訳』ですね。これがあれば礼装だったりに頼ることなくレイシフト先の人とも会話ができるし、魔術用語・文字の書籍をすらすら読むこともできます」

「いいない」

「まあ、そういわず」

「……………」

それでは転生です。

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「いつてらっしやいませ〜」

「死なないように頑張ります！」

☆ ■ 21番 北崎深谷（たかや） 享年18歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「あく……えっと」

「21番、北崎深谷たかやさんですね？ こちらにお掛けになってください」

「は、はい」

パタン ストン、

「さて、ここは『かくかくしかじか』の事情で北崎さんに転生していただく世界・特典を決める場です。早速ですがこのサイコロをどうぞ」

「は、はあ…（うおーっ！ 転生とか！ まじかよ！ 前世に悔いはないし、よし！ 父さん母さん、孝行できずすみませんしたつ。俺、来世で幸せになります！）」

「このサイコロは北崎さんの来世を決定づけるものです。『まるまるうまうま』という転生先が存在しています。よろしいですか」

「はい（転生先、運任せか…まあ『自由』が出ればいいし）」

「理解いただけただけのであれば、サイコロをどうぞ」

「っ！」

からんからん

??

「！（よっし！）」

「出目は4と4、北崎さんが自由に転生先を決めることができます」

「……うーん。アドバイスとかはありますか？」

「特典がはつきりしないうちに転生先を決めることになるので、日常系の作品を選ぶ方が多いですね。ですが結局は北崎さんの人生ですので、好きなように決められた方が後悔などがないと思います」

「（そりやそうか……日常系といっても思いつかないし……『ちびまる子ちゃん』？『サザエさん』？……ないな。やっぱ可愛いヒロインのいる作品がいいな。画風がな……」

……うーん、どうすつかなあ。やっぱモテたい……なあ。生前一度もモテたことのない俺が美少女とイチャイチャするには……特典の戦闘力に賭けるしかないか？力がも

のをいう世界…バトル系？ 現代日本がいいな、インフラも娯楽も日本最高だし、異世界転移系とか無理…舞台は日本。特典がカスでも何とか生き残って活躍できる………）」

「決まりましたか？」

「はい。『インフェクション』の世界でお願いします」

「はい…ちなみにこれにした理由は？」

「色々あったんですが、主人公をぶつ殺して立場を乗っ取っても心が痛まないからです」
「はあ」

「俺、この漫画はマガジン本誌で連載されてた分しか知らないんですけど、超常的なナニカはなく、敵は頑張れば倒せるレベルだし、ヒロインはエロ可愛い。主人公は色々暴走してる変なのでした。だからまあ、いけるかなって」

「……………（———）」

「えつと…」

「ありがとうございます。では次に、特典を決めていきます。特典は『かくかくしかじか』という2種類があり、先に『アイテム特典』の数を決めます。サイコロを一つ振ってください」

「はこ」

からん からから

「つー！（2個とかうわあ…バトル系にしないでよかった、か？ともかくいい道具がゲットできるといいんだけど…）」

「出目は2 というわけで2枚引いてください」

「はい（戦闘系か、便利なヤツ、頼みます！神様かなんかそんな感じのやつー！）
がさー（そがさー）そ

1663・・・399

「まず1663番、これは『おかし牧草』です」

「……………（ハズレひいちゃった。語感から漂うほのぼの感…）」

「これはかのS・F作品の傑作、『ドラえもん』のひみつ道具の一つで、缶に入った牧草

です。お菓子に食べさせることで、菓子が牧畜のように自活し、繁殖を行うようにすることができます。動き、繁殖をするようになったお菓子は、その後は1時間以上牧草を食べずにいると元の菓子里に戻ってしまい、家畜状態にはなりません。菓子里に雌雄の性別は不明ですが、繁殖させるには同種の菓子里が2個必要です。

この牧草には種「おかし牧草のたね」があり、これを地面にまいて菓子里用の牧草地を作ることできます。なのでこの特典は正確には『おかし牧草（缶詰タイプ）＋おかし牧草（種 自生タイプ）』といったところですかね」

「ええ…（そりゃ子どもにとってはお菓子里が増える夢のアイテムかもしれないけど…いらねー）」

「劇中ではチョコレートやキャンディ、ロールケーキにわたあめ、どら焼きが繁殖してました。グミ・固焼きせんべい・ガムは番犬になっていました」

「なぜ」

「さあ、使用者がなってほしいと思う生態の家畜に育つのでは？」（適当だー…：使う気ないからいいけど）」

「2つ目は399番『オーガギア』です」

「?」

「（仮面ライダー555ファイズ見てないのか）これは『仮面ライダー555ファイズ』の劇場版に登場する仮面ライダーの一人、仮面ライダーオーガに変身するためのアイテムです。天と地、二本の帝王のベルトのうちの一本。デルタギアを参考に作られた、金色のフォトンストリームと同じ帝王のベルトである天のベルト『サイガ』を大きく上回る出力を誇ります」

「へー」

「（こいつ…）イメージがわからないようなので、こちら用意しました『劇場版仮面ライダー555 パラダイス・ロスト』です」

「え、見ろと?」

「はい」

「いや、いいですよ（仮面ライダーなんて…）」

「（イラツ☆）見ろ」

「はい」

— 観賞中 —

「どうでしたか?あれが北崎さんの特典となるわけですが」

「まあまあですね。（かけー!）」

「具体的には変身アイテムのオーガフォン・オーガドライバー、そして専用武器の『冥王

の剣』オーガストランザーが特典となります」

「あー…質問なんですけど、その…仮面ライダー555の変身ベルトってもしかして、えっと『オルフェノク』？じゃないと使えないんじゃないですか？」

「(おっと、) はい」

「じゃあ、その…まさかと思うけど、もらった方がいいけど、あのファイズギアに拒絶されたあの男みたいに…？」

「いえいえいえ。神様もそこまでイジワルじゃないですよ。ちゃんと使えますよ。安心してください。ちゃんと北崎さんがオーガギアを使えるようにしてくれますから。」

オルフェノクとして蘇るようにね(ボソツ)

「え？」

「すみませんが暗示をかけさせていただきます。オルフェノクに覚醒して使えるようになるまで、人間のまま使って即死するのは可愛そうですから」

「うわ、なにをする！……うあー…」

「…北崎さん、あなたの引き当てた特典『オーガギア』は人間には使えず、しかもただのオルフェノクでも使えない代物です。心・技・体に優れた選ばれし者しか変身出来ないという制約が存在します。故にこの特典には『転生者が死んだときオーガに変身できる

だけの力を持つオルフェノクとして覚醒』というおまけがついています。そうやって初めてあなたはこの特典でもって仮面ライダーオーガに変身することが出来るわけです。というわけで、あなたは一度死ぬまで今言ったことを忘却し、オーガギアをしようとは思わない……手を叩くと目を覚まします」

パンツ！

「…あれ？」

「大丈夫ですか、ぼんやりして」

「えっと、はい大丈夫です」

「では次ですね」

「(あれー?)」

「次は『能力特典』を決めていただきます。サイコロを、
「はい」

からんからん

「出目は3 『翻訳』ですね」

「ああ……1がよかったのに」

「残念でした」

「……………」

では転生です。

あなたは2つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

転生を実行します。それではよき人生を

「行つてらっしゃいませ」

「はいっ！ありがとうございます！」

『インフェクション』

友人たちによつて、学校の倉庫に閉じ込められてしまった高校生・天宮晴輝と、そこに居合わせた少女・磯波きらら。ただのいたずらのはずが……、なぜか開かない扉。二人は三日に及ぶ苦闘の末、どうにか倉庫を脱出した。ところが、外の世界は一変。人を襲う“保菌者”によつて、町は埋め尽くされていた!!

マガポケの『インフェクション』あらすじより抜き出し

』

☆ ■ 22番 黛克英（兵藤一誠） 享年20歳の場合

読者の皆様おはこんばんにちは。

神様ですよ。

今回は2回目のぞろ目回。

今回も 僕が介入する場面があるけど、ちよろつとだけなので、どうか許してほしい。
では始まり始まり〜

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します…」

「はいどうも〜。22番 黛克英かつひでさんですね？どうぞこちらに」

「は、はい…」パタン

ストン…「あの、僕死んじやったんですか？」

「はい。覚えていらっしやらないのですか？」

「……………あー。思い出しました（警官から逃げてたら、車にはねられた んだよな…な

なんてこった。大学受験失敗して父さんに迷惑かけて、その上こんな死に方するなんて。まだ今までの金も返してないのに…」

…ごめん、父さん」

「(かわいそうに…)」

「ま、死んじゃったものはしょうがないですね！それでそれで、ここつてやつぱり神様転生だつたりするんでしょうか！（転生ですか！特典ですか！やつべー、テンション上がるーう！言葉おかしくなる！）てか、この人神様かなあ？邪神系転生とかヤダな。いやいや、神様ならこの思考読んだりして…やつべ。今からでも悲しみ感じるべきか？いやいやもうこうして考えてる時点で——」

「(訂正、かわいそうじゃないわ。たくましいな、うん) よろしいでしょうか」

「…あ、はい」

「黛さんの考えている通り、ここは死んだ方を神様が無作為に選び、特典を与えて転生させる、そんな場所となっております」

「(やつぱ、読まれてた！い、今も読んでます…?)」

「はい、読んでますよ」

「(…・ω・) おーのー…)」

「詳しく説明すると『かくかくしかじか』という仕組みです。よろしいですか？」

「はい（ややこしいな。転生先も特典もサイコロの目次第…僕の他にも転生者いるな。22番ってことはバトロワになったりとかするのでは…）」

「それはいいですよ。転生者の皆さん、それぞれ別個の世界に転生するので」

「（心オツ！）驚かせないでくださいよ」
「申し訳ありません。」

では、早速ですがサイコロをどうぞ」

「はい……………」（——神様）」

からか——

——p a u s e——

「祈られたら 応えなくちやあね」

——p a u s e——

「正しく応えはしないけど」
ん

??

「（おお…）」

「6と5です。神様が転生先を決定することになります。どこの世界になるのかは転生直前にお教えします」

「神様…（頼むぞ神様、頼むぞ神様！）」

「続いては特典です。『かくかくしかじか』でまずは“アイテム特典”の数を決めていただきます」

「はい（神様お願い、最大お願い！）」

ヒュツ!!

カツ!

— p a u s e —

「おっけー」

— p a u s e —

かちん

「おお！」

「おめでとうございます。6なのでくじを6枚引いてください」

「はい！（神よ！あなたが神か！神だった！）」

がさごそがさごそ

147・・・1884・・・486・・・1225・・・1647・・・932

「では特典の説明をさせていただきます

まず1つ目は147番『タイプロン皇鮫后』です」

「ん？（どっかで…）」

「これは『BLEACH』に登場する敵十刃エスパルダの紅一点 第3十刃トレス・エスパルダのティア・ハリベルの斬魄刀の帰レスレクション刃の解号名です」

「（あゝ…ん？）あの、この特典って、破面の斬魄刀が特典になってるってことですか？」

「そうですね。」

「……………ええ、はい。黛さんのお考えの通り、死神の斬魄刀との違いとか、そもそも斬魄刀とは持ち主の魂を——とか、お考えのことは分かります。しかし、神様がそう設定して用意されたので、この特典はこういうものなんです。死神の斬魄刀と同じように、この特典にはティア・ハリベルその人が、斬魄刀の意思として存在します。彼女と『対話と同調』『具象化と屈服』を行うことによって、破面の力を使うことや刀剣解放ができるようになります」

「（かなり当たりじゃないか？…破面の力、それも第3十刃の力がゲットできるかもってのは、いきなりラツキーじゃん！しかも、ハリベル様ツ！『いつも息子がお世話になってます』のあの人が、とか！あ、でも触れない……………視姦で十分）」

「（うわあ…）『皇鮫^{タイプロン}后』の能力は、もともと持っていた水を操る力が増大するというものです。攻撃の速度と射程が跳ねあがります」

「はー（あの水操るのって、解放前も出来んだ。知らなかった）」

「続いて、2つ目の特典は1884番『着せかえカメラ』です」

「（聞いたことあるのキター）」

「はい。ご存知、ドラえもんのみみつ道具で、映画なんかでは割と登場することの多い、

便利で有名なアイテムです。

服のデザイン画をカメラにセットして、対象となる人に向けシャツターを切ると、その人の着衣がデザイン通りのものになります。複数の対象者を一度に着替えさせることも可能です。

説明によると、衣服を一旦分子にまで分解し、再構成するという原理で着替えさせるので、デザイン画を入れずにシャツターを切ると、服の分解だけが行われて再構成がされないように、対象者は全裸になってしまいます」

「無作為にパシヤパシヤすると全裸パニックを引き起こせるというわけですね」
「……………まあ、そういう使い方も可能ではありませんね」

「3つ目の特典は486番『オーズドライバー＋オーメダルセット＋鴻上フアウンデーシヨンのメダルシステム等』です」

「！」

「要は仮面ライダーオーズの変身アイテム、補助アイテム、武装諸々まとめてに若干のオマケをつけた特典というわけです」

「……………（やったーッ！ オーズ、オーズ、オーズ！好きなの来たよ、うれしいよ！）」

「ドライバーとメダルの内容は、『CSMオーストライバーコンプリートセット』の内容を元に再構成したセットになっていて、

ドライバーとコンボ可能なコアメダル各種（3種×3枚＝計9枚の組）

タカ・クジヤク・コンドル

ライオン・トラ・チーター

クワガタ・カマキリ・バッタ

サイ・ゴリラ・ゾウ

シャチ・ウナギ・タコ

プテラ・トリケラ・ティラノ

コブラ・カメ・ワニ

イマジン・シヨツカー

スーパータカ・スーパートラ・スーパーバッタ

エビ・カニ・サソリ

サメ・クジラ・オオカミウオ

シカ・ガゼル・ウシ

セイウチ・シロクマ・ペンギン

ムカデ・ハチ・アリ です」

「えー…つと…」

「イマジンメダルとシヨツカーメダルは1枚ずつスーパー系も1枚ずつで、それ以外が3枚組なので計113枚のメダルですね」

「膨大…」

「さらにセルメダルを無限枚です。『真のオーズ』として覚醒した折には必要になるでしょうから」

「〔『真のオーズ』……………！ やつべ、暴走する。しかも113枚もコアメダル取り込むとかやばいじゃん！ 転生したと同時にメダルの器化だよ、ウヴァさんの二の舞だよ！ とんだはずれじゃないか…手厚い特典が呪いレベル…！ 〕」

「つと、大丈夫ですよ。そうはなりません。特典は体内にあるわけではなく、一体化するわけでもなく、なんとか魂に寄り添うというか…とにかく黛さんの危惧されたことは起こりません。黛さんがご自身の考えでメダルを器を溢れさせるほど飲み込まない限り、暴走する危険は皆無です」

「そうなんですか。よかったです…」

「続けます。最後鴻上ファウンテーシヨンのメダルシステムは

・ライドベンダー

・カンドロイド各種

・メダジャリバー です。バースシステムに関しては別枠なのでありません

欲しかったら自作してください。セルメダルはありますし、技術と知識と資金があれば似たようなのができるかも…ですよ？」

「は、はあ…（僕の力と頭じゃ無理だな、うん）（オーズ…うろ覚えだなあ。こんな事ならDVD借りて見ておけばよかった）」

「では、見ますか？」

「（またナチュラルに心を） 見るとは？」

『仮面ライダー○○^{オーズ}』です。全48話と夏映画にMOVIE大戦2つ、あと春のレッツツゴ―仮面ライダーも、お望みなら『小説 仮面ライダーオーズ』も用意しますが？」

「是非！」

——視聴中——

「ポップコーンどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

——読書中——

「コーヒーどうぞ」

「ありがとうございます。 あつっ！」

「ふう…面白かった」

「それはなにより」

「では次に行きましょう。」

1225番『レジロツクの入ったモンスターボール+レジアイスの入ったモンスターボール+レジスチルの入ったモンスターボール』です」

「おお！おお？（モンスターボール？……あー、また神様の無理矢理感のある特典か）」
 「はい。そんな感じですよ。ポケモンを特典として贈るために神様が考えた『生き物が特典じゃないから！入れ物が特典だから！たまたま入ってるだけだから！』という感じですよ。」

その中でもこの特典は当たりです。なんとたつて3体セットですからね。

『いわやまポケモン』 レジロツク 高さ1.7m 重さ230.0kg

『ひょうざんポケモン』 レジアイス 高さ1.8m 重さ175.0kg

『くろがねポケモン』 レジスチル 高さ1.9m 重さ205.0kg

三体合わせてレジ系とも呼ばれる、ポケットモンスターブルー・サファイアに登場した伝説のポケモンです」

「はい（知ってる。というかギガスいないんだな）」

「あー、レジギガスは初出がポケットモンスターDP・Ptなので…らしいです」

「なるほど…」

「わざ はレベルわざだけです。が忘れることなく、一度覚えれば全て使用可能です。ポケモンが倒された場合、ボールをいったん自分の中に戻すことでひんしから回復させることができます。」

「…こんなところでしょいか」

「そうですね…あ、その『わざ』、僕知らないんですけどそれについてはどんな風になっているんですか?」

「はい、それは『ゲームのように使えるわざやHP、レベルなどが表示される』ようになります」

「なるほど」

「5つ目の特典は『ウルトラスーパーオールマイティワクチン』です」

「(ドラえもん?)」

「はい、ドラえもんです。ドラえもんのひみつ道具の一つで効果は『あらゆる伝染病に効果のある強力な万能ワクチン。地球上にない病原体をも退治することができる。』というもので、端的に言ってこれを使えば感染性の病気にかからなくなります」

「すっげ…」

「それ以外説明することもないので。すっげえ」

「はい」

「最後、6つ目の特典は『ボンゴレリング(7)』です」

「おおおお…(リボンか!…リングか)。僕、炎灯せそうにないよなあ。覚悟とか、受験勉強さぼってだらけてた僕が、なあ……)」

「……………この特典は黛さんもお察しの通り、『家庭教師ヒットマンREBORN!』のボンゴレファミリーの秘宝にして、世界を維持するトゥリニセツテの一角を担うものです。この番号のボンゴレリングは、原作の未来編のラストに登場の『原型のボンゴレリング』です。よって、ボンゴレギアではありません。

そして、この特典のおまけとして、黛さんには全属性の波動をプレゼントします」

「おー！（全属性☑）」

「特典を100%使いこなせるように、という神様の意向です。イメージは嵐の守護者：獄寺隼人さんのさらに強化バージョン。彼の場合はメインの『嵐』に出力で劣るもの、計5つの炎を使うことができました。その上位互換で、

『1人が複数の属性の素質を持つこともあるが、大抵の場合は波動の強い属性は1つのみで、残りは微弱であるとされる』

という原作設定をブレイクし、黛さんには全属性平等の波動をプレゼントです」

「それはまた、スペシヤルなチート感ですね（期待しないでおう。結局下地があるだけで炎を出せるかどうかは僕の覚悟次第なんだから）」

「ここまではマーレリング・ヴァリアーリングの特典と同じなのですが、さらにさらに、この特典にはおまけがつきます」

「まだあるので」

「はい。」

そのオマケとは、ズバリ ブラッド・オブ・ボンゴレ ボンゴレの血[〃]です」

『超直感』!?!』

「あー、そつちじゃなくて、『血統』の方です。まあソレも付いてくるのは間違いじゃ

ないんですが」

「(おっと) ……なぜ？」

「『リング争奪戦編』でラストに『7つのリングを集めた時「ブラッド・オブ・ボンゴレ」に新たな力を授ける』とありました。『受け継がれしボンゴレの至宝よ 若きブラッド・オブ・ボンゴレに大いなる力を！』の言葉と身に着けた七つのボンゴレリングでXANXUSザザがその力を手にしたものの『ブラッド・オブ・ボンゴレ』を継いでいなかったためリングに拒まれてしまいました。そうならないように、のオマケです」

「はー……………」

「あと、説明は…」

リボーンの世界に転生するのでなければ、その世界に『死ぬ気の炎』というモノは存在しません。その世界の人間にこの特典を貸し与えることで、『死ぬ気の炎』を扱えるようにすることもできます」

「(力を分けるとか、こわいなあ。僕だけのとっておきにしておいた方が得だと思うんだけど……………まあその時になったらまた考えよう。うん)」

「続いては『能力特典』です。では」

「（サイコロですわね）はい」

からん、からからん

「（~~~~ツ）」

「あ〜…出目は6 はずれ ですね。なんというか」

「はい、はい。大丈夫です（ハズレかよ………！翻訳が欲しかったな〜！あー、あー！）」

では転生です。

あなたは6つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございます（ありがとうございます）

「はい行つてらっしゃいます。

黛さんの転生先は——

——『ハイスクールD×D』の世界です」

「な！ な」

「はじめましてこんちやーす。神様だけい」

「神様…（神様？やばいこの展開は、）」

「ういっうい。

さあ、サイコロを振ってくれ。

その結果君は……………くふふ（ゝゝ♪

まあ、さつき君がやってたのと同じさ。中身は教えないけどね。さ、振って」

「……………（やばいやばいやばい。主人公不遇スタートの物語冒頭だ。神様、邪神だったのかよ！僕、聞いてない!!）」

「邪神とは面白い事を言うね。まあ、いいよ。神様寛容だから。ゆるしてしんぜよう。二度目はないよ？」

「振れ」

「()」

「ほおほお……………」

「な、なんなんですか」

「いんやあ？ べえつにい？」

「え、あの（出目3の意味は）」

「教えない。ドーせ、転生したらわかることだしねー。『ハイスクールD×D』も知っているよね？」

「……………はい、そこまで詳しいわけじゃないですけど」

「なら問題ないだろう、タブンネ。」

「それじゃあ、さようなら。今度こそ転生だ。せいぜい楽しませてくれ給えよ」

「ありがとうございました…」
「じゃあの」

☆□ 23番 今井恵太 享年18歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「……………」

「23番 今井恵太さんですね。こちらにおかけになってください」

「……どこだ ここ」

「(おーつと…) あのー」

「チッ!」

ギッ!

「はい、えーつと、今井さんあなたはお亡くなりになりました。ですが神様から第二の人生を送る権利が与えられました。おめでとうございます」

「はあ? (頭大丈夫か?)」

イライラツ☆「(説明は最低限でいいな、うん)では、説明しますね。『かくかくしか

じか』というわけです。なのでサイコロどうぞー」

「(何言ってるのかさっぱりわかんねえ。サイコロ振って?どうなるんだよ?説明が足りねえよボケが)」

からからから

??

「ほほー(リリカルか、似合わねえ。ぶげらー)」

「なんだよ」

「いえいえ。もう一度、今度は青いサイコロ一つを振ってください」

「くっ」

からからから

? (転生先『魔法少女リリカルなのはvivid』)

「なるほどなるほど。今井さんの転生先は『魔法少女リリカルなのはvivid』の世界です。本作においての主人公である高町ヴィヴィオと同一年になるように、原作ストーリーの十年前に転生していただきます」

「(さっぱりわからないが、生まれ変わるっていうのは分かった。魔法少女とか知らねえし、わけわかんねえ。頭がおかしくなりそうだ) その、なんだっけか、それはどんな話なんだ?」

「…引く？」

「はい。くじ引きです。引いていただいたくじに書かれた番号と対応する特典が今井さんに与えられます。

さあ、どうぞで」

「(くそが…)」

がさがさがさ、

865

「えとえと、865番は…(わーお)」

「……………」

「865番は『タマモキヤットの 세인트グラフ』です」

「……………(なんだそれ。ドラえもんの親戚か?)」

「この特典は『Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤ』のクラスカードを模していて、3つの使い方があります。」

一つ目は『インクワールド限定召喚』。タマモキヤットのエプロンを召喚します。

二つ目は『インストリアル夢幻召喚』。あなたの体を媒介にバーサーカー・タマモキヤットの力を具現化し、デミ・サーヴァントのように能力・技術を付与します。このサーヴァントは狂化：Cですがまあ、キヤットなので、精神が乗っ取られるというか、自我が塗りつぶされてしまうとかの危険はありません。ただちよつと野性っぽくなるだけです。

三つ目は『英霊召喚』。バーサーカー・タマモキヤットをサーヴァントとして召喚します。ただし令呪はありません。セイントグラフを介してパスは繋がっていますが、令呪がないため強化や抑制ができません」

「さっぱりわからない」

「よろしいですね？よろしいですね。

では次、〃能力特典〃を決めていただきます。サイコロを」

「(……………もう、いいや)」

からからん

「出目は4『リスタート×1』ですね。不慮の事故など寿命以外の原因で死亡した時、回避可能な時間に戻って 1度だけ やり直しができる能力です。よかったですね！もしまた恨まれて殺されても生き返れますよ！」

「え、俺、殺されたのか？」

「ええ、はい」

「え？だ、だれが」

「それを教えるのは私の仕事には入っていないので。では転生させていただきます」

あなたは1つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を（棒読み―）

「つと、まてっ！」

「ではさようなら〜」

☆■ 24番 二階堂順平(二階堂のぞみ) 享年27歳

(0歳) の場合

「次の方どうぞー」

………

「？」

スタスタスタ、

ガチャ

「あうー」

バタン！

「………」

…ガチャ

「…うー」

キイ…

「え、まって、え。…おかしいな。私の担当6歳以上の男性を転生させることのはずなんだけど、おかしいな。すぐく赤ん坊だったな、おかしいな。」

よし、連絡しよう」

『もしもし、…はい、はい。何かの手違いだと思わんですが、こつちに転生者として赤ん坊が送られてるんですが……はい、え？……やつぱり手違いでしたか。では迎えに来てもらえますか？はい、はい、はいなるべく早く——』

…突然割り込んでそれですか？ いや、ルールが…はい、はい、確かに「ルールはあなた様」…分かりました。いつも通り転生者として転生させればいいんですね？はい、はい…はい、失礼します』

カチャ

「うー」

「よしよし。お兄さん見てくださいねー。必殺『イケメンスマイル』ー！」

キヤツキヤツ

「24番、二階堂のぞみさん。いずれ物心がついたとき、これを思い出して夢かと思うかもしれませんが、これは夢ではありません。あなたは前世で赤ん坊の頃、まだ物心のついていなかった頃に事故死し、第二の人生を送る機会を得ました。今この時のあなたには、この私の言葉は ただの音にしか聞こえないでしょうが、ここで起こったこと・知っ

たことは一言一句魂に刻まれ決して忘れないようになっていきます。だから来世で物心ついたころ思い出して私の説明を理解してくださいね」

『かくかくしかじか』

「では、転生する世界を決めていただきます。

……のぞみちゃん、手の平ちよつとごめんねー」

(手を広げさせ、サイコロをのせる)

「ううー！」

じたばた

??

「……あー、えつと『神様が勝手に転生先を決める』に決定しました」
「だうー」

「(神自重しろよ、振りじゃないぞ)ごめんねー、おやつどうぞー」

「あぶうー！」

「(そつと頭の上にサイコロを置いて……)」

からからからから

「出目は4 特典4個だね。では“アイテム特典”を選ぶくじを引いてもらいます。
ごめんねー。お手手かりるよー。」

（指先に吸着性を付与。小指以外に一枚ずつくつつくように設定！ つっこむ！）」

ぺたぺたぺたぺたり

2221・・・684・・・233・・・2056

「では説明します。退屈だろうけど聞いていてねー。」

赤ん坊の二階堂さんが“特典元の原作”の諸々を知っているとは思えないし、特別に、世界観だったり説明だったり、常識的な範囲内の情報をインプットしますね。

キュウワワワ（四つの特典の原作基礎知識）

まず1個目の特典は、2221番『コソクムシの入ったモンスターボール』です。みず／むしタイプののそうこうポケモン。Lv. 30でグソクムシヤに進化します。人や動物をなぎ倒せば経験値が入り、レベルを上げることができます。インプットした知識にあるように、二階堂さん自身が代わりに戦い、トドメをコソクムシにささせることでも経験値をゲットできます」

「2個目の特典は684番『燦然と輝く王剣』です。

原作で、アーサー王伝説の叛逆の騎士、サーヴァント：セイバー モードレッドの主武装で「如何なる銀より眩い」と称えられた、アーサー王の『約束された勝利の剣』に勝るとも劣らぬ宝剣です。

王の意向を増幅する力を持っていて身体能力向上やカリスマ性の付与という恩恵を担い手に与えます。原作のモードレッドは勝手に持ち出して、担い手と認められていなかったため恩恵を受けられず、宝具のランクも下がっていました。しかしこの特典では二階堂さんを宝具の担い手と『燦然と輝く王剣』も認めます。よってモードレッドと違い、宝具使用時の各種ボーナスを受け取れます。

ちなみに真名解放でビームも打てます。当然ですが」

「3個目の特典は233番『ストレングスのスタンドDISC』です。

ジョジョの奇妙な冒険の3部に登場したシリーズ初のスタンド能力を持つ人以外の動物、オランウータンのフォーエバーのスタンド『ストレングス』のスタンド使いになれる特典です。

「ストレングス」は物質と融合しそれを自由自在に操る能力を持ったスタンドです。原作では小舟に取り憑くことでタンカーにまで強大化させ、船内のクレーンやプロペラ、ガラスの破片までもを操り主人公一行を窮地に追い詰めました。その名の通り、尋常ではないパワーを持ったスタンドです」

「4個目の特典は2056番『裸の太陽丸』です。

アニメ『キルラキル』に登場した反制服ゲリラ組織「ヌーティストビーチ」の旗艦で「最後の切り札」にして「最後の一枚」。基地モード、船モード、上部甲板をたたむことで「グレートマツパダガー」という突撃モードに変形可能。

道頓堀^D口^Tボ^Rとチャコペンミサイル装備の対生命繊維ヘリも船の一部として特典に組

み込まれています。

ちなみに動力は人力。ハムスターのくるくる回るアレを人が回して動力を確保しています。本来なら人を乗り込ませて動かす必要がありましたが、二階堂さんは一人でも裸の太陽丸を航行させることができますね」

「……」ウトウト

「さて次は『能力特典』を決めてもらいます」

（うつらうつらの頭にセット）

から……ん

「出目は4ですね。では二階堂さんの能力特典は「リスタート×1」、不慮の事故など寿命以外の原因で死亡した時、回避可能な時間に戻って1度だけやり直しをすることが出来る能力です」

「だうう……」

それでは転生です。

あなたは4つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

あなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「……………転生先は『GANTZ』です。強く生きてね」

「ぶあー！」

☆□ 25番 浦戸和成 享年25歳の場合 【前編】



夢を見ている。

俺は暗い夜道を一人で歩く一人の男の後ろを歩いてた。佇まいから闇に潜む悪党ではなく、清廉潔白な人物であると感じられるような紳士だった。数歩後ろを歩く自分にその紳士が気づく様子はない。これは過去に起こったこと。呪いに刻まれた記憶でしかない。俺はただ見ているだけ。

しばらく歩いた後、自分たちは町から離れた場所にひっそりとたたずむ廃墟のような建物に到着した。男が扉を開ける。

「んー！ー！んー！ー！」

今、俺の目の前には口と手足を縛られ暴れる男がいる。男はきよろきよろとあたりを見回しながら体をよじって拘束から抜け出そうともがいている。

そして自分の横にいる紳士を見て驚いたように動きを一瞬止めた。

「んー！ー！んー！！」

男は何かを訴えかけるようにしているが、自分も自分と一緒に来た紳士も一顧だにせず、紳士は男の口をふさぐ布を取り除いた。

「——ツガ！ ガリバルディ裁判官！ た、助けてくれたんですね。ありがとうございます。います！ ここはどこですか?! 私は、気が付いたらここにいて！ 脱獄を企てたわけでは——」

ガリバルディ、と呼ばれた紳士は男の言葉を無視し、どこに持っていたのか分厚い本を取り出し開いた。

「被告人、マイルズ・ワグナーは殺人と遺体損壊の罪で死刑が求刑されていた。しかし一部の博愛主義者が騒ぎ立てたため減刑され、懲役刑となった。違くないか」

ガリバルディは冷たく平坦な口調で問いかけた。

「さ、裁判官？」

一方の男、ワグナーは目の前の裁判官が突然自分の裁判結果について語り始めたことに混乱しているようだった。

「沈黙は肯定とみなす。許しがたい事だ。許されざることだ。罪を犯した犯罪者が罰を受けずにこのうのと生きるなど間違っている」

変わらない口調で、しかし確かな熱を持ってガリバルディは言う。ワグナーは何かに気づいたように顔色を変えた。

「! ま、まさか裁判官、いや、そんなまさか!」

「ルールは守られなければならない。例外を作つてはいけない。ルールは人を守れなくなる。人がルールを守ることで、ルールも人を守ってくれる。何より、私のなかの『正義』が罪人に罰を与えるべきだと言っている」

ガリバルデイは本――立法律ルレック書を捲りながらワグナーを睨めつける。

「あなたが! 法の番人であるあなたが! 殺人鬼?!」

「違う。私は正義を執行しているだけだ。ルールブックに定められている通りに、死刑判決とそれに伴う死刑執行を自ら行っているに過ぎない。私は殺人鬼などではない」

「判決を言い渡す。被告人、マイルズ・ワグナーを殺人・遺体損壊の罪で死刑に処す」

言つて、ガリバルデイはワグナーに近づいていく。

「そ、そんな! 俺は、あんな事したくなかつたんだ! 気が動転して! さ、裁判でも証明されたはずだ! 俺は被害者だつたんだ!」

ガリバルデイは無言でワグナーの体を引っ張り、廃墟の奥に設置された絞首台に歩いていく。

「いやだつ! いやだあ! 殺さないで! 助けて! いやだ!!」

ずるずる、ずるずる、引きずられていく。

「——つかひゆ」

びくびくとふるえ、やがて動かなくなつた。無理矢理に吊るされ、殺されたワグナーの死に顔は恐怖に染まっていた。

ガリバルデイは遺体を眺めたあと、下ろす作業に取り掛かつた。これから町の辻に吊るしに行く予定だからだ。彼はこうして見せしめを行うことが正義だと信じているんだらう。

「なあ、ガリバルデイ」

おれはいつものように問いかける。これは夢で、彼に届かないとわかっている。しかし毎回問わずにはいられない。

「正義のため って言つてたよな。ならなんで、あんたは殺した後に笑みを浮かべるんだ？」



『プルプルプルプルプル プルプルプルプル』

目を覚ます。子どもの頃から悪夢に付き合ってきたがこの寝起きの気怠さはどうしようもない。

『プルプルプルプル ガチャ』

目を覚ましてくれた電伝虫の受話器をとる。

「もしもし、こちらウラド」

できるだけキリつとした声を心掛けてこたえる。

『こちら本部。数分前、ポイント45にて天上金を輸送中の船から救助要請が入りました。至急現地に向かい、海賊の拿捕と輸送船の救助を行ってください』

「了解。飛行許可は？」

掛けていたコートを羽織り、鏡の前で最低限の身だしなみのチェックをする。…よだれ。

『下りてます。…もしかしてウラドさん、お休みでしたか？』

「いや…うん。少しウトウトと。別に調子悪いとかじゃないから、大尉が心配することじゃないよ」

電伝虫が目を伏せている。なんだろう。

『…准将は自分のことに無頓着なところがありませんから』

自分は怒られているのだろうか。うーん、そんなつもりはなかったんだが。

「わかったわかった。それではフローウエレ大尉、出発するので切るぞ」

『はい、ご武運を。ウラド准将 』

『ガチャ』

電伝虫を切り、バックを持ち、コートをしつかり着用し、窓を開ける。

さて、

「出てこい、ラティアス」

俺はボールから出したラティアスの背にまたがった。

『カズナリ！ 散歩？ なでなで？ 』

「仕事。てか、分かっているだろ？」

仕事であることは状況からしても一目瞭然のはずだが。頭の中に響くラティアスのテレパシーにこたえながら、腕に嵌めたメガリングに手を当てる。

『ぶー。分かっているっ！ 言ってみただけなの！ 』

「ごめんて。でもいつも言っているだろう？ 仕事中に冗談はナシだって。ほら上昇上昇」

ラティアスを促し、上空に昇らせる。ここでいいか。

「いくぞラティアス」

『うん！ 』

——わがキーストーンの光よ、ラティアスナイトの光と、結び会え。
いぎー！

「メガシンカ!!」

めきめきめき、とラティアスの体に変化し、薄紫色の体色のメガラティアスに姿を変えた。

『カズナリ、どこに飛べばいいの?』

ラティアスのテレパシーにイメージで返答する。

『…サウスブル南の海』の……うん、うん。わかった。とぶよ カズナリ! しっかり捕まってるの!』

「あいよ」

次の瞬間、急加速して景色が後方に消えていった。マリージョアを眼下に置き去り、空を翔る。



どうしてこんなことに。この思いがトムの頭からずつと離れなかった。

彼の名はトム。職業は船の航海士。『天上金』を輸送する船の船員で、現在進行形で

命の危機にあった。

「このくそ野郎！ 何が「天竜人への上納金である天上金に手を出す馬鹿はいない」だ！ 馬鹿はてめえだろうが！ 訳の分からないことを言つて、護衛艦を拒んだ結果がコレか！ ふざけやがって）」

この場にはいない船の船長への怒りを心中で叫ぶ。彼は知らないが船長は嵌められていた。この船を襲つた「スピア―海賊団」は子飼の女を船長にすり寄せ、言葉巧みに「護衛をつけない」と言わせたのだ。彼らの作戦は用意周到で、この襲撃をかけた海域もどの支部からも離れていて、海軍が来る前に天上金を詰め込み船員を皆殺しにし、トンズラするのに十分な時間があるはずだった。

「おらあー！ さっさと運び込めー！ もたもたしてるとぶつ殺すぞー！」

銃を持った海賊がトムに銃口を向け脅す。

「ううっ！ 俺、殺されるのか……」

トムにはわかつていた。海軍の助けは来ない。来たとしても間に合わない。この荷運びが終わつたら、犯人が誰か知る自分たちを海賊は皆殺しにするだろうということ。これが普通の略奪なら、名を上げるためあえて船員を生かして捨て置くこともあつただろうが、「天上金」に手を付けたとあつては悪名どころの話ではなくなる。

「モーシエ……ごめん」

トムは結婚を控えた妹に心の中で謝った。幼いころに両親を亡くし、妹を育てるため日雇いの仕事を掛け持ちし、その合間に勉強して航海士の技術と知識を学び、今の職に就いた。全ては妹に苦勞をさせないためだった。その甲斐あつて妹は健やかに成長し、恋をして、彼氏を作った。最初は反対したが二人の愛に根負けし、この仕事から帰ったら友人と相手の家族を呼んで結婚式をするはずだった。それなのに……とトムは海賊船に運び入れながら絶望した。

「(ここは海の上で逃げ場なんてない。監視されてて妙な行動をとろうとしたら殺される。終わったな……)」

『天上金』の一部を置き、船に戻りながらトムはため息をつく。

「ふざけんじゃねえぞ！ てめええ!!」

突然の怒声と共に、船室から何かが飛んでくる。

「が、あ……………」

「(せ、船長?!)」

それはぼろ雑巾のようになった船長だった。血を垂れ流し立ち上がることもできないほどボロボロになっている。

「リ、リーダー！ どうしたんです?!」

海賊の一人がリーダーと呼ばれた大男に駆け寄る。

「ああ?!」

「どうもこうもねえよ! こいつ海軍に救助要請出してやがった!」

トムも他の船員も、海賊も、息をのむ。

船員は「もしかしたら助かるかもしれない」と希望を抱き

海賊は「もしかしたら海軍が来て捕まるかもしれない」と恐怖を抱いた。

「リーダー…その救助つてえのは…」

「ああ?! ああ…ハッ! 来やしねえよ。快速船で来ても間に合わねえさ! それに俺たちの船も最新の快速船だ。追いつけやしねえ。ただな、そうだとしてみな、勝手に海軍呼びやがったそいつへの怒りが収まらねえんだなあ! これがっ!!」

「ひいっ!」

傍にいた海賊が腰を抜かす。リーダーと呼ばれた大男の怒気にその場の全員が恐怖で動けなくなった。

大男が歩く。それだけで恐ろしくてたまらない。船長の前まで進み、話しかける。

「おい、勇敢な船長さんよ。無駄で、余計なことをしてくれたな。お前の愚行のせいで俺はお前に殺意を向けなきゃならなくなったし、八つ当たりで船員を惨殺しなきゃいけない

くなつた」

「……………」

船長は何も言わない。

「お前、俺を知らないのか？ 俺は“怪拳”のフーフアイター。懸賞金5000万ペリーを賭けられた男だ！」

トムは総毛だつような恐怖を感じた。

「(ゴ)、5000万ペリー!? こんな辺境の海域になんでそんな大物が?! 聞いたことないぞー!」

「リ、リーダー。教えちやまずいんじやあ……………」

「あ?! ……そうだったな。……………まあいいだろ! 荷物もあらかた積み終わつたし!

こいつらを全員ぶつ殺せばいいだけの話だ! おい! 船長には黙つとけよ」

「(船長? こんなヤバい奴の、さらに上がいるのか? だめだ。海軍が助けに来てくれ
たつて、支部の海兵たちじゃ相手にならないつ! 殺されちまう…! 俺も! そいつ
らも!」

トムが、船員の誰もが絶望し、死への恐怖におびえる中

「へ、へへ…」

小さく、笑い声があった。

「(船長?)」

「ア? 何笑ってやがる? くそやろう。…あー、そうだお前から殺してやるよ。他のやつらは銃弾でさっさとくたばってもらうが、お前は俺様が直々に殺してやる。俺の異名の元になった、この拳でなあつ!」

「お前らは終わりだ。たかが5000万の首、どうにでもなるはずだ。お前らはもう終わりだ」

小さく、ぶつぶつと何かを言う。その言葉は誰も聞き取れなかった。

「何か言ってるが——そろそろ死んでもらおうかア!」

フーフアイターが船長の胸ぐらをつかみ、無理やりに立たせる。固く握りしめ、振りかぶられた拳は船長の顔面に叩きつけられる瞬間を待ちわびているようであった。

そしてトム達船員にも海賊は銃口を向けていた。

「(だめだ…死ぬ!)」

死を覚悟した瞬間、船長が叫んだ。

「私は! もうおしまいだ! こんな事になれば! 帰還できてもクビにされ! 人生終了だ! だが私だけあの世には行かん! 貴様ら海賊も道づれだ! すぐにでも」

竜しよ——

——ばん

と そんな擬音が付くような風に、船長の顔面は粉碎された。

「近くでわめきやがって。うるさくて一発で殺しちまつたじゃねえか、物足りねえぜおい！」

「せ、せんちよう……」

思わず声を出す。今回の事態を招いた戦犯でも、船長だった。トムは自分がなぜ声を出すほど感情が動いているのかわからなかった。

声を漏らしたことでフーフアイターがトムに目を向けた。

「憂さ晴らしだ。お前も殴る。」

おいお前ら！ 俺が殴ったら撃て。皆殺しだ！」

おお！ と海賊たちが雄叫びを上げ、船員は震え恐れおののいた。

フーフアイターがトムの前に立つ。トムは頭が真っ白になった。

「おらいくぞオ!!」

「(モーシエ……)」

トムの脳裏に浮かぶのは見られなかった妹の晴れ姿。

「(お前に)」

迫る拳、一瞬後には自分は死ぬと、そうトムの本能は告げていた。

——ぶおおん

「あれ？」

「っ??」

トムは自分の上をかすめていった風を感じ、自分がなぜまだ生きているのかさっぱりわからなかった。

そして目に移る光景。

空から伸びる縄がフーフアイターを吊るし上げ、フーフアイターがじたばたと悶えている光景が理解できなかった。

船にいる誰もが呆然とソレを眺めていた。誰にも理解できなかった。

「…間に合わなかったか」

声の方向に目を向ければ、そこには今までいなかった男が船長の死体の前にいた。

黒髪の年若い男だった。横顔からも20代前半といったところか。なぜか分厚い本を持つている。

男は黒いスーツの上に真っ白なコートをしつかりと着込んでいた。そのコートには背中に二文字、大きく刻まれた文字があった。

『正義』の二文字。

「(海兵?)」

状況に誰も理解が追い付けぬまま、その海兵はフーフアイターに目をやる。

「殺人、海賊行為。以上の罪により死刑。台を蹴れ、へ判決執行のルールブック」

「っ！　　ゝゝゝっ!!」

じたばたともがく。縄は外れない。引きちぎれない。そして

「……………」

…

…

……………

「っ！　て、てめえ！」

海賊の一人が叫び、海兵に銃口を向ける。釣られたように他の海賊も銃口を向けるが全員腰が引けている。ありていに言ってビビっている。何が何だかわからない。目の前の海兵がリーダーを吊るした、その原理がわからない。今銃口を向けている自分も吊り上げられてしまうのではないか、という恐怖がぬぐえないのだ。

「…　そうか、てめえ能力者だな！」

海賊の一人がハツと思いついたように言った。

「(能力者?)」

「……………」

「おい！ お前らビビるんじゃないやねえ！ こいつはきつと超人系だ！^{パラミシア} 撃てば殺せる！」

「そ、そうか…！」

「ビビらせやがって…！」

「こいつを殺せばきつと分け前たんまりだ！」

「撃つ！」

ニヤニヤと余裕を取り戻し引き金を力をもめる海賊およそ20余名。

海賊の言葉から再び絶望の淵に立たされる船員たち。トムも（やはりだめだったか

…）と諦めそうになる。

しかし、ある疑問が顔を出した。

——銃口を向けられているのに何でそんなに平然としているんだ？

——そもそもこの人はどこから現れたんだ？

「撃てえ!!」

引き金が引かれ、無数の銃弾が海兵を撃ち抜く…はずだった。

バキンッ！ ボンッ！ バゴンッ！

「ぎゃあ！」

「ひいっ！」

「な……………！」

「ひゃあ！」

海賊の持つ銃は一斉に暴発し、銃弾は一つも発射されることなかった。

「（な、なにが起こったんだ…？ あの海兵がやったのか？）」

『ラティアス、ナイス』

『えへへー。もつと褒めてー』

『はいはい。精密なサイコパワー多重処理お見事でした。帰ったら褒めてやるからまだ降りてくるなよ』

『うん！』

ザザザザ！！

突然大きな音が鳴った。船の上にいた者が音の方向に顔を向けると、音の意味が一目でわかった。

海賊船が高速で逃げていっていた。この船の仲間を見捨て去って行っていた。

「おい！ うそだろ！」

「船長ー！ 俺たちを置いていかないで！」

「そんな…」

海賊たちが悲鳴を上げる最中も海賊船はみるみる遠ざかっていく。尋常でない速さだ。

「…さて、そろそろいいか」

海兵の声。トムは声の方向を見て、自分の耳と目を疑った。海兵が消えていた。

「ぐ！」

「ふぐっ」

「っ！」

そして、ばたりばたりと倒れる音が連続して、気が付くと船の上の海賊は全員気絶させられていた。

「ふう…」

たった一人の、この海兵が一瞬でやってのけたのだとその場の誰もが理解した。

「(あれは…っ！)」

トムの目には一瞬だったが海兵の腕が青緑色の鱗に覆われているのが見えた。

「(確か動物の能力を使えるのが…動物系^{ゾオン} だったか？ いやでもさっきの縄は…んん

？ 一体何なんだ？」

「この船の責任者はどなたですか？ 自己紹介が送れましたが自分は、救助要請を受けて飛んできた海軍本部准将のウラドです」

その紹介におおずおおずと船員の一人が手を挙げてこたえる。

「私が副船長のドラムスです。船長がその…」

ちらり、と顔を粉碎された船長の遺体に視線を送る。

「…ああ。なるほど、そうですか。ではまずお伝えします。現在本部より連絡を受けた近郊の支部からこの船に向かって、海兵と船が出ているはずですよ。あと数刻後には到着すると思いますので、それまでこの海賊たちの見張りをお願いします」

えっ？ という困惑が広がる。

「どういうことでしょうか…」

「私はこれから先ほど逃げ出した海賊船を追いかけ、乗っている海賊を捕縛しなければいけません」

「それはっ……！」

副船長の沈黙の理由はトムにも痛いほど理解できた。

ウラドと名乗った彼は海兵で、海を荒らす海賊を取り締まるのが仕事。だから逃げた海賊を追いかけるのも分かる。でも、自分たちは被害者で今倒れている海賊たちが起き

上がってきたらどうしようもない。不安と恐怖が続いている。どうかここに残つてくれ、と願わずにはいられないのだ。

「残つていては…:くれないのですか…?」

「…それはできません。海賊を逃すわけにいかないというのがありますが…:何より天上金を取り戻さなければ、皆さんの命にもかかりますので」

「(あ…:!)」

「なので、行つてきます。それと、海賊たちのことなら大丈夫ですよ。半日ほどは目を覚まさず、覚ましたとしても痺れで動けませんから。支部の海兵には「ウラド准将が海賊船の拿捕に出ている」と伝えてください」

そう言うとうラドは船の側面に移動し空を見上げた。

『ラティアス、降りてきて』

『はーい!』

するとすごい速度で何かが降下してきた。

「(な、なんだあれ?!)」

それは青紫の不思議な生物だった。同じく空を飛ぶ鳥の類とは全く違い、羽ばたくこともなく空中に静止し、ウラドに笑いかけているようだった。

ウラドはその生き物の背に、ひよいつと飛び乗った。

「あ、そうだ。副船長さん」

「はい」

「船員はこれで全部ですか？ 海賊船に取り残されたりとかは」

副船長ドラムスは周りを見渡して

「……………えっと、全員います。海賊船に取り残された船員はおりません」

「そうですかそれはよかった」

「では行ってきます」

「あ、あの！」

トムは思わず声をかけていた。

「助けてくれて、ありがとうございます！」

するとウラドは笑って、

「仕事ですから」

と言つて飛び去つて行つた。先ほど逃げた海賊船以上のスピードであつという間に見えなくなった。

「——そうだ！ “竜将”だ！」

突然副船長が声を上げた。

「わっ。いきなりなんですかドラムスさん」

「思い出したんだよ。あの生き物、どつかで見た事あると思ってたら、みんなも覚えてるだろ？ 2年前のマリンフォード頂上決戦で！」

「……………ああ!!」

その場の全員が思い出した。2年前の戦争で、妙な生き物が空を飛び回り海賊船や名だたる海賊たちを吹き飛ばしていた映像を。

「あの、えつと…アレですか！」

「そうだ、そしてその上に乗って操っていたのが彼、“竜将”ウラドだったんだよ」

「はえー…。副船長よく知ってましたねえ。俺知りませんでしたよそんなの」

うんうん、とその場の全員が首を縦に振る。

「お前ら…。ニユース・クールの新聞見てないのかよ。偶に取り上げられてるぞ？」

さっ、とその場の全員が目をそらす。

「……………とりあえず、どうしますか？ ウラド准将の話では支部の海兵隊が来るってことでしたけど」

「そうだな…」

副船長は気絶する海賊たちと、二つの遺体を見て、うーんと唸った。

「……………海賊たちはロープで縛っておこう。ウラド准将はああ言っていたが、縛っていた方が安全のはずだ。起きてしまう前に縛るぞ。それから船長の遺体は…布でくるんでおこう」

「死んだ野郎はどうしますか」

「こいつはそのままでもいいだろ…」

「ですね…」

「よし！ さあ動け動け！」

「(ウラド准将…)」

トムは海の方を向こうを一瞥して海賊を縛りあげる作業に加わった

☆□ 25番 浦戸和成 享年25歳の場合 【後編】



俺とラティアスは船を出発してすぐに目標に追いついた。

「見えたな」

『うん、確かあれだよね』

現在上空で停止してプランを練っている最中なわけだが、

「方向と速度からいつの間違いない。さてどうすつかない」

『いつもみたいにとーん！ ってカズナリがマストと船を撃ち抜いて沈めるじゃダメなの？』

まあ確かにそれが手っ取り早いし、いつもはそうしてる。今もつい癖で（赤いXマークのついた）二丁拳銃を取り出しちまったけれども。

「だめだめ。あの船には天上金が積まれてるから、船を攻撃してもろともに沈ませるわけにはいかない。一応あの船に乗ってるのは海賊だけという話だったし、船に乗ってる

やつら全員ぶつ飛ばすかな」

ラティアスには悪いけど降ろしてもらってさつきと同じように「剃刀」でこつそり侵入するかな。

『むー！ また空でお留守番ー?! やだやだ私も一緒に戦いたいー!』

「駄々きた…）いやいや！ 一緒に戦ってるって。ほら、離れていても心は一緒とか、そういうのだよ！ うん！ さつきだって、銃弾止めて暴発させてくれただろ？」

まああれくらい避けられたけど。

『うー！ テレパシーで分かるんだからねー!』

「ごめんごめん。とりあえずここで待ってて。もしもなんてないし、あつてもすぐ回復するって分かってるけど、お前が傷つくのは見たくないんだよ。それに、俺のかつこい所 みてもらいたいし」

これは本心。

『……分かった。がんばってね』

おつとつと。これはそっけない感じに見えるけど、照れてる時の反応ですね。いじつた方がいいのかな？ それともそつとしておいた方がいいのかな？

『！ 早く行って!』

「はいはい」

俺はラテイアスの照れを背中に、「習得しててよかった超人体術六式」応用編「剃刀」でもって音もなく降下していった。

ひゅんひゅんひゅん つと。はい到着。

海賊どもは……合計32人か。それなりだな。なんとなく強そうなのは一人だけ。それも正面切つて余裕レベルか。ルールブックで吊るすのもありだけど、「デキる海兵」として、討伐ではなく捕縛したいなあ……。昇進のためにも、余裕でしたよーつて印象付けたいし。

それならこれだな。

「……眷属器・『パララク・パラシーフ剛神鱗甲』」

俺の腕を青緑色の鱗が覆う。マゴイ魔力を元に身体能力が強化されていくのが感覚で分かる。軽く腕を回し見聞色の覇気で敵の位置を探る。

近く、一人でいる海賊を探り、強化された「剃」で瞬時に近づいて、

「……っ！」

気づかれる前に鱗に覆われ、鋭くどがった爪で「指銃」。

「うっ!」

魔力を眷属器に流し、大本の精霊『バアル』の属性である“雷”に変化。あとは強さを調節して爪の先から放つ!

「っ?!」

体内に電流を流された敵は気絶する。

「名付けて、『雷光拳』」

なんて。拳じゃなくて指だろとか、パクリじゃねえかとか、自分で自分にツツコミ入りたい気分だ。便利な技だし、習得に時間と労力のかかった技だし、オリジナルのかわいい名前にしようと思ったんだけど、ネーミングセンスないんだもんー俺。

「『雷光拳』」

「っ?!」

何が大変だったかって、やっぱり一番は流す量の調節だよ。初めの頃はラティアスを実験台にしてたけど、完成近くなったら人体実験しないで、俺の体に電流流して、そのまま失敗したもん。死にかけたもん。…もんとか言うのと、きめえな。

「『雷光拳』」

「っ?!」

あんときは死ぬかと思ったなー。意識が一瞬で飛んで、ラティアスが自発的に「いやしのねがい」使ってくれなきや即死だった。

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

そもそも雷に変化させて放出するのも大変だった。なんと麻痺して「リフレッシュ」を使ってもらったことか。ラティアスに体内のエネルギーをモニターしてもらって、試行錯誤してなんとか…だったし。

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

そこいくと、覇気は楽に習得できた……いや、いやいやいや。

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

あれを楽と呼ぶな。感覚おかしくなってるぞ俺。

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

「ガープさんのあれは修行でも特訓でもない。いくら死ぬ気で頑張るって言っても、他所の家の、ガキを無人島に放置するか 普通? いや結果的に生還してるけど。」

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

「当時はラティアスもレベル低くて、猛獣を相手にゾンビアタックしか手がなくてなあ…。」

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

「ルールブックも条件に当てはまらず使用不可。拳銃は幼いので炎が弱く使い物にならない。本気で眷属同化も視野に入れてたよ。」

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

…まあ、無人島サバイバルのおかげで見聞色の覇気に目覚めたし、ラティアスのレベルも上がった。『死ぬ気』の感覚を掴めたし……ためになることばかりだな。

「『雷光拳』」

「っ?!」

いやいやいや！ 思い出せ浦戸和成！ 迎えに来た時のガープのジジイの爆笑を。殺す気でかかったのにとまたやすく攻撃を回避され、拳骨落とされた悔しさを！

「『雷光拳』」

「っ?!」

…今でも近接戦闘では勝てるヴィジョンが思い浮かばないからなガープさん。マジどうなってるんだ。老いてなお健在にもほどがあるぞ…。

「『雷光拳』」

「っ?!」

勝つだけなら、ラティアスのサイコキネシスで一瞬だけでも動きを止め、最大火力の『決別の一撃』を撃ち続ける……とかか。

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

…だめだな。リロードの瞬間攻撃が途絶える。俺の場合拳銃をいったん消してまた出すっていう反則技で、原作より早くできるけど、無理だな。

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

せめて俺が武装色得意だったらよかったんだけど。…六式特訓時、教官に聞いたときも、「お前は見聞色特化で、武装色の才能がこれっぽっちもないな」って言われたしなあ。

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

あれかねえ。『PSYREN』でいうところのトランス偏重型サイキッカーみたいなもんかね。だったら、予知ができるレベルになりたい。せつに。

「『雷光拳』」
イナスマチエスト

「っ?!」

才能がないのが致命的だけれども。俺だって転生してからこのかた、必死で修行して力に驕らず自分を磨いてきたけど、そんなの誰でもやってる事なんだよな。

「『雷光拳』」

「っ?!」

俺だけが特別なわけじゃない。俺より強い奴はいっぱいいる。正面切つての殴り合いじゃ俺はせいぜい「中の上」。新世界の「上の上」の海賊たちにはとてもかなわない。

「『雷光拳』」

「っ?!」

制空権とつて『判決執行のルールブック』を使えば負けはないと思うけれども。あれ集中心力があるからなあ。

「『雷光拳』」

「っ?!」

頂上決戦でも、黒ひげ吊りあげたはいいが「音越」に撃たれて、集中力と一緒に縄が切れちまったし。

「『イナズマチエスト
雷光拳』」

「っ?!」

まあ結局、俺にできることはこうやって、俺でも倒せる海賊をぶっ飛ばして捕まえることだけってわけですな。

「『イナズマチエスト
雷光拳』」

「っ?!」

「よし終わり!」

残りは10人。船底で集まっているな。飛び込んで一網打尽にするとするか。

『回復いる?』

びっくりした。

『…そうだな、頼む。「いやしのはどう」』

『うん! 届け、私の愛の力!』

「アホなこと言っているが、効果は本物。なんとなく『金色のガッシュ!!』の月の石の光を連想した。ベリーメロン…。」

『聞かなくても伝わってるけど、なんで足をそろえて両手を上に掲げてるの?』

「違う、ラティマス。これはVの体勢をとっているんだ。こうしていれば俺にもギャグ補正が入るような気がするんだ」

華麗なるビクトリウム様の加護が受けられたら俺はきつとポケキャラになれる。あるいは神祖の加護が得られるかもしれない。今まで気づかなかったけどVの体勢ってローマのローマと同じだな。

そうか、ローマはローマでローマもローマだったのか…。ローマのローマをローマすること、ローマもローマにローマするかもしれない。あれ? ローマ、ローマと言って? ローマ! ローマになってる! おおローマ!!

『……………「リフレッシュ」する?』

「いらん いらん。十分回復したし。……茶番はこれくらいにしてサクツと捕まえてしまえますか」

——扉の先の敵、9体の位置把握完了。

—— 気配から、こちらを察知した様子もなし。

意識を切り替え冷静に。

取っ手に手をかけ、開くと同時に

速攻!!

「イナスマチエスト
『雷光拳』」

—— × 10 !!

一人 二人 三人 四人、瞬く間に突き刺し電流を流す。

五人 六人 七人 八人、狭い中でも超スピードで動けるように訓練した甲斐があり、些細なミスもなく攻撃を感知させることなく敵を無力化していく。

九人 じゅっ!? ??

十人目、おそらくこの海賊団の船長だと思われる男を攻撃した時、指先に痛みが走った。とつさに飛びのき、見てみれば俺の指が、眷属器を纏い強化された俺の指が切り裂かれていた。

そしてこうなった理由は、今自分が攻撃した海賊を見ればすぐに分かった。俺が攻撃したところから黒い突起が生えていた。攻撃する前はそんなものは生えていなかった。

能力者だ、そう思った。体から何かを生やしている様から「超人系」^{パラミシア}の悪魔の実能力者。連想するのは『トゲトゲの実』だが、その能力者は生きている。俺のような例外を除き、悪魔の実は同世代に一つしか存在しない。きつと『キロキロの実』と『トントンの実』みたいに似たような能力だが別の悪魔の実ということだろう。

「なんだ？ なにがどういうことだ？ お前、さっきの海兵か。じゃあこいつらが倒れてるのも、俺の自動防御が発動してるのも、お前の仕事でいいんだな？」

「…ああ、そうだ。この船に乗っているお前以外の海賊には全員おねんねしてもらった。あとはお前だけだ。降伏するなら今のうちだが？」

俺の降伏勧告に海賊はにやりと笑って、

「へえ？ そりやすごいな。逃げた俺等に追いついて、たった一人で俺の部下を全滅させるとはな。でも降伏なんざするわけがないな」

「……………」

「だつててめえはたった一人なんだろう？ だから奇襲を仕掛けてきた。そして哀れにも手痛いしつぺ返しを食らった。その指、痛そうだなア？」

「……………」

表情を変えないように努めるが、こいつの言うように超痛い。早くラティアスに回復

してもらいたいが、敵の力が何なのかわからないままツツコむのは危険だ。武装色がつかえれば「とりあえず殴る」という脳筋戦法が取れるが、使えない俺は用心深いぐらいがちようどいい。新兵時代、能力者相手に半身をぶつ飛ばされた時からの心得だ。

「……………こんなもの、なんでもない。降伏しないというのならさつさと倒して俺の昇進の糧になってもらおう。お前のような無名の海賊を捕まえたところで大した名誉にはならないがな」

安い挑発。だが海賊、それも四つの海で燻ってるレベルなら逆にプライドは高い。引っかかるはず。

「なんだと?! 馬鹿にするな! 俺はクロス海賊団船長 “千本鎗” のエイルハルト! 懸賞金1億200万ベリーの賞金首だ!」

「“千本鎗” ……か」

自己紹介どうも と言つてやりたい。おかげで力のタネが割れた。

『ヤリヤリの実』の鎗人間つてところか。トゲトゲの上位互換? 〈自動防御〉つて

言つてたな。元々の性能かは分からないけど、衝撃に反応して体表がヤリに変わるのか…こいつ自身は俺の動きについてこれなかった、なのに発動した。反射的に変わったのか まさに〈自動防御〉だな。

「そうだ！………つて、喋っている場合じゃねえか。お前をぶつ殺して、こいつらたたき起こしてさつきと逃げないとなあ！」

言つて、千本鎗は両手をこちらに向け、大きく太い鎗に変化させ、

「『鎗玉』！」

「おおつと！」

ドガツ！とさつきまで俺が背にしていた壁を二本の鎗が貫いた。

思つた通り伸ばしてきた。なかなかの速さ、破壊力だったが回避は容易い。一応大げさに避けたけど、穂先が分裂したり唐突に曲がったりもしなかつた。

「カツ！ よく避けやがったな！ だが次はどうだ？ この逃げ場のない室内で、俺の異名の元になつた技——」

全身から鎗を生やして『鎗千本』つてんでしょ。予想つくわ。

「——『鎗千本』を避けられるかあ!？」

やっぱり。

「千本鎗」の体中から大小様々おびただしい数の鎗が生えて襲つてくる。逃げ場はないと言わんばかりに。

……技を見て思ひ出した、『雷光拳』の著作権元、「イナスマチエスト鈎かぎ蟲」岩峰正一郎に敬意を表して！

すべて避ける！

「なっ!!」

(「紙絵・柔軟骨外し」)

「習得していいよかった超人体術六式」パート2

相手が次に移るよりも早く、奥の手を放つ。

眷属器『剛神鱗甲』に魔力を流す。最初の攻撃で受けた傷が、眷属器に力を与える。

眷属器の持つ「受けた衝撃を攻撃に転嫁させる能力」を発動する。

純粹に増したパワーでもって鎗を押しつけ接近する。千本鎗は慌てるが、逃がしはしない。

——魔力同様、この世界で俺だけが持つエネルギーを右手に集中させる。

——触れられないなら触れる前に壊す。

——覇氣使いや六式使い、ただ殴っただけではこちらの拳が砕けるような相手を、それでもぶん殴って殺すために編み出した必殺技。

——防御をぶち抜き、触れるまでもなく敵を「分解」する。

「原子に還れ」

『憤怒の炎』を「魔力操作」の要領で破壊力を制御し放つ。

名付けて――

「ひっ！」

拳を振りぬく。

「――『アトミックファイスト原子拳』」

「……………」

拳は〈自動防御〉を突き抜け、千本鎗の胴体に穴をあけていた。腕を引き抜くと、絶命した遺体から鎗が消え、倒れ伏す。

「……………（痛い）」

超痛い。

テンション上がっちゃって奥の手出したけど、そのせいで腕がボロボロだ。さながら『僕のヒーローアカデミア』の初期緑谷のように。

治るから怪我してもいいってわけじゃないのですよ。痛いもんは痛いのです。

上空を飛行中だろうラティアスをいったん特典として収納し、ここでボールから出す。

『え、あ！ また大怪我してるー!!』

「ごめんごめん。テンション上がっちゃって。とりあえず「いやしのはどう」お願い。痛みで泣き叫びそう」

『もー！ もー！』

暖かな光が俺を包む。少しすると俺の体は傷一つなくなっていた。

「さんきゅー」

『遊びで大怪我しちゃだめだよ！』

「いや仕事だよ」

『でも、怪我しなくても勝てたでしょ?!』

「うん……まあ……」

能力が分かった時点でどうにかなった。そもそも『判決執行のルールブック』を使えば戦闘にすらならなかった。

『だめだよ……。カズナリ死んだら、死んじやうんだよ？ 私は死んでも大丈夫だけど』
「……ごめんなさい」

ラティアスをなだめた後、海賊たちを縛り上げ、さあ帰ろう！

帆を張って、ラティアスのサイコパワーで風を起こしてもらい、輸送船の元に戻った。



「……では、天上金はこの海賊船に積み込まれているということですので、支部の皆さんも手伝ってあげてください。その後海賊たちを連行をお願いします」

「はい。了解です！ 准将！」

「えっと、それじゃあ……『プルプルプルプルプル プルプルプルプル』……失礼『ガチャ』 もしもし」

『もしもし、ウラド准将、フローウエレです』

「大尉、どうした。救助なら完了して海賊も支部の海兵隊に預けるところだが」

『新たに救助要請が入り、出動命令が出ました。至急向かうようにと』

「あー……了解。幸い自分は傷一つない、すぐに向かう。場所は？」

『ポイント25です』

「えっと……（『偉大なる航路』じゃねえか。なら俺が行くより……ってそうか、
レヴェリ）
世界会議のせいで有能な海兵が外に行ってるのか」

『准将？』

「分かった。すぐに向かう」

『ガチャ』

ウラドは海兵と船員たちに顔を向けた。

「…自分はまた別の救助場所に行かなければならなくなりました。なので皆さん。この場はお任せします」

「分かりました。」

お前たち！ ウラド准将に敬礼！

指揮官の声に合わせ、その場の海兵たちがビシッ！ つと敬礼をする。

「ウラド准将！ ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

船員たちが口々に感謝を告げる。

ウラドは彼らに一礼し、背を向け、

「ラティアスー！」

空に向かって叫ぶと、船員たちが先ほど見たように“竜”が降りてきた。

「あれ？」

誰ともなく疑問を持った。

「(似てるけど? 色が違う...?)」

降りてきた竜は赤色だった。

「では」

軽く会釈しウラドは竜の背中に飛び乗り、腕の輪っかに触れた。

「…………『メガシンカ』!!」

そういうと竜はめきめきと姿と色を変え、青紫色の竜に変わった。

そして驚く彼らをおいて彼方へと飛び去って行った。

「あれが『竜将』ウラドか…………」



「だ………………。ちかれた〜」

俺はいくつかの任務を終え、お仕事終了のお電話が鳴ったので、家に帰ってきていた。転生する前の俺はアパート暮らしだったので、マイホームとか憧れがないではなかったのだけど、仕事が忙しすぎて『偶に帰って寝るだけの場所』と化している。

「ただいまー♪」

元気よく帰宅の挨拶を口に行っているのはラティアスだ。ずっと飛んでいたというのに微塵も疲れていないのはさすが準伝説ポケモンといったところだろうか。

「んー？ 私ボールに戻されてたしー、かいふくしてるから」

そうだった…ずるいなあ。

「今日の夕ご飯は私が作るから！ 元気出してっ！」

ぐっ！ とラティアスが腕を曲げて両手でガッツポーズ：『がんばるぞい！』のあのポーズで笑った。

「それはたのしみだなあ。じゃあおれはソファァーで横になるから出来たら起こして…」

言つて俺はソファァーに倒れ込んで寝た。おやすみー、ぐう…。

ゆさゆさ、ゆさゆさ 体が揺さぶられている

「はい、はい…」

目を開けると、見事なまでのケモノ娘がいた。というか ラティアスだった。

「夕ご飯できたー。おきてー」

料理するにあたって人型に変わったらしい。

それにしても、本当に良かった。最悪ゴリラになっても我慢しよう、と思つてラティアスに『ヒトヒトの実』食わせたけど、人型が女性らしくて本当に良かった。

多分、♂が食うか ♀が食うかで伸びる部分が違うんだろう。

「はいはい。起きた起きた起きました。それで今日のメニューは何ですか？」

聞くとラティアスは笑つて

「カルボナーラ！」

と言つた。

「ごちそうさまでした」

食つた食つた。

「どうだった？ 美味しかった？」

「うん。普通においしかった」

「うぬぬう… 厳しい評価あくもつと褒めてよ〜！」

「そうはいつでもなあ・・・」

「ちゃんと褒めないでだめなんだよ！ えつと〜…あれ！ “じゆくねん離婚” つての

されちゃうよ！」

「ビシィ！つと指を突き付けてくるが何を言っているのやら。」

「お前俺と一心同体みたいなものだろ？ 離婚とかありえないだろ」

「きゅんっ！」

なんだその鳴き声は。

おまえの鳴き声は「ひゅあぁーん！」だろ。

「ときめいちやった音。私の乙女心にストライツ！ だったの！」

「でしたか」

正直事実を言っただけのつもりだったから、そういう受け取り方されると恥ずい。

「…………カズナリ、この後どうする？」

ちらちらこちらを見て聞いてくる。ああ…これはあれですね。

「この後は、報告書をまとめて、それが終わったら寝るかな」

「じゃ、じゃあ寝る前に呼んで…」

「は？」

「これはあれですね。間違いない。」

報告書を書き上げたのでボールに強制収納し、自室で出す。

「お、終わった？」

見るからにそわそわしている。そしてナチュラルにポケモンの姿から人型に変わった。

「終わった」

「じゃ、じゃあ…首 絞めて！」

「……………はい」

俺はルールブックを取り出し、ラティアスを条件殺害の対象にする。

「——殺人の罪により、ラティアスを死刑に処す——台を蹴れ。判決執行のルールブック」

現行犯ではなく過去の罪。頂上決戦で海賊たちを殺した罪でラティアスを吊り上げる。ルールブックは、そして俺の中の価値観はラティアスの罪を死刑に相当すると認めた。

「っ!!」

縄が食い込みラティアスの気道をふさぐ。

「っ！っ！」

ラテイアスは呼吸できず悶え、苦しみ、

「~~~~~! ……………」

やがて動かなくなった。

「……………」

俺は無言で絶命したことで効果が切れ床に倒れたラテイアスをボールに戻した

「出てこい、ラテイアス」

「~~~~~♪ はあ、ん。気持ち、よかったあ…」

びくびくと快感に悶える赤いドラゴンがボールから出てきた。

「カズナリい。もう一回、もう一回、やってえ…」

ふう ふう と吐息を漏らしてこちらを見上げて懇願してくる。世が世ならハートマークが瞳の中に書き込まれてるんだらうな というぐらい、情欲に濡れた目をしてい

……………まさかこうなるなんて思ってた。ルールブックによる殺人衝動を抑えるため、『代償』^{インステット}が必要だった。でも「定期的に首吊りにしてもいいよ」なんて言ってくれる奇特な人が見つかるわけもなく、しょうがなくLv.1だったラテイアスに『ヒトヒトの実』を食わせ、吊るした。初めの頃は本当に苦しそうにしているなあ…。俺も

ごめんな ごめんな と罪悪感と共に謝りまくっていた。代償行為をした日はいつもより丁寧に世話をしたり、なでなでしたり、遊んだり、ボールから出して一緒にベッドで寝たりした。

まあそれがいけなかったんでしようねえ。パブロフの犬的な感じで、あるいは「なつき度」の仕組みとおかしなつながりができたのかもしれない。気が付いたらうちのラティアスは「首絞められフェチ」の変態ドラゴンになってしまった。意識が遠のいていく瞬間が最高に気持ちよくて「こん こん」ってくるんだとか。その擬音は何だと聞いたら「お腹の下の方に届く快感の擬音」と教えられた。やかましいわ。

∴現実逃避終了。何べんも繰り返したためにラティアスに対しては集中しなくてもルールブックを使用できるようになったため、思考中もじわじわ首吊らせていた。あ、死んだ。

「……………」

無言でラティアスをボールから出す。

「はっ！ はっ！ くくん、んあ ん。……っ！！」

声も出せないくらいびくびくに蕩けている。とろとろでびくんびくんびちゃびちゃだった。

「……………ラティアス」

ラティアスは俺の顔をとろんとした顔で見て、こくんと頷いた。

——規制——

一息ついて、隣でまどろむラティアスを見つめて思う。

「(これでよかったんだよな…)」

考えるのは仕事のこと、将来のことだ。

自分が就ける(両親に報いるためにも)社会的に立派で、『殺害遺品』^{キリング・グッズ}の呪いと殺人衝動を発散できる職業ということで海兵になることに決めて、そのために努力して頑張つて、今この地位にいるわけだけど、雇用主である海軍・世界政府はどうなるのか、先行きが見えず不安でならない。

もうすぐ「世界会議」^{レヴェリエ}が始まる。もう原作知識はない。これからどうなるかがわからない。

不安だ。とても不安だ。最近はそのことばかりが頭をよぎる。俺たち海軍はルフィたちからすれば敵サイドだ。この先の展開次第ではどうなるかわからない。原作が少年誌だからそこまで悲惨なことにはならないと思うが…こんな普通に満ち足りた生活

はできなくなるかもしれない。

怖い。俺は弱くて、ここが限界点だ。これから先インフレしたらついていけない。どうしようもなく強い奴に殺されるかもしれない。

怖くて怖くて、

「カズナリ……」

！

「寝言か……」

ラティアスの頭を撫でる。

「んんっ……」

かわいい。

……考えても仕方ない。今さら海賊になろうだなんて考えられないし、未来を心配しても今を捨てられないなら変えられない。

これから先の未来がどうなっているのかはわからないけど、偶然で得た第二の人生『おもしろおかしく』過ごしてみよう。

そう決意を新たに、俺は眠りに落ちていくのだった。まる。

★ ■ 26番 小野智一 享年14歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼しまーす……?」

「26番 小野智ともかず一さんですね。こちらにどうぞ」

「はい? はい(うわーなんだかわからないけどエロい。乳袋とか初めて見たやべえ)」
「……………」

スタスタスタ スチャ…

「小野さん、あなたは残念ながらお亡くなりになりました」

「え?(え?)」

「ですがあなたは神さまの力で別の世界に転生する権利を得ました。小野さんには、いわゆる神様転生というものをしていただきます」

「はあ……………」 (死んだ覚えはないけどそうか、僕は死んだのか。ぐはー、童貞のまま死んでしまった。このおっぱいさんのおっぱい揉んでみようかな。頼んだら揉ませてく

「んねーかなー」

「(うわあ…)…小野さんにはこれから転生先と転生するにあたって神様から贈られる特典”を決めていただきます。転生先と特典は『かくかくしかじか』です。何か質問はありますか?」

「(いーじゃん いーじゃん! 要は力を得て世界を好き勝手出来るってとだろ?)」

「そうですね」

「(よっし! ……あれ?) (心の声、聞こえてたりしますか?)」

「はい。ばっちり」

「(あっちゃー…。ま、いいや。死んでるし本音隠す必要もないか) 天使さん? おっぱ

い揉んでもいいですか?」

「だめです」

めりめりめり。ぼきぼきぼき

「ぐ! つがああああ!!」

「セクハラは駄目ですよ? 分かりましたか?」

「くくく! ……そんなエロい姿してるアンタが悪い!」

「…そこまで言うなら」ペアア…!

「え…男…だと…」

「ほら、男性体ならいいですよね？　ではサイコロを振ってください。転生先を決めます」

「(くそ、やっちゃまった！　まさか変わるなんて…！　目の保養が…！)」

からからから、からん！からから

？…？

「出目は3と1『ONE PIECE』の世界ですね」

「よっし！　よし！　ありがとうおっぱいの神様！」

「そんな神さまじゃないです。腕雑巾搾り○されたのに懲りないですね、小野さん…」

「あつはつは。もう忘れました！　そんなことよりエロスですよ！」

「スゴイデスネー。」

「気を取り直して続いては『アイテム特典』の数をサイコロの出目で決めていただきます」

「はい。……裏技とかないんですか？　特典が10個とか100個とかになるよとか

そういうの」

「ないです」

「ちえー。おっぱいの神様！ 僕にご加護を！」

そいやっ

からんからん

？

「うぬう…！」

「出目は3ですね。ではくじを3枚引いてください」

「神い…。(そりゃあ中間で、良いか悪いかでいったらいいけども！ 3かく。頼むいい

の来てくれ〜！)」

い)そい)そい)そ

2219・・・1489・・・1589

「では引いた特典の説明をさせていただきます。

まず2219番『ネマシユの入ったモンスターボール』です」

「寝ましゅ？」

「ネマシユはポケットモンスターSMに登場した、くき・フェアリータイプのポケモンで、分類は「はっこうポケモン」。Lv. 24でマシエードに進化します」

「強いポケモンなんですか？ 僕小学校でポケモン引退したから最近のとか知らないんですよ」

「ネマシユはSのポケモン凶鑑によると『点滅しながら 発光する 胞子を あたりにばら撒く。 その光を 見た者は 深い眠りに おちる。』」

マシエードはUウルトラサンSのポケモン凶鑑で『獲物を 眠らせ 腕の 先から 生気を 奪う。 仲間が 弱ると 生気を 送って 助けてあげる。』という説明がされているポケモンです。 殴り合いをする系統のポケモンではないですね」

「ほほお、つまり眠らせて弱らせて抵抗できなくしてからやっちまえと、もとい犯せと、そう言っているわけですか？」

「:ゲスな考えは正直どうかと思いますが、そういうふうにはポケモンにやらせるのも可能ではありませんね。 ネマシユは「きのこのほうし」もレベルアップで覚えるのでそれを使った方がいいと思いますよが」

「なぜですか？」

「「わざ」ではない「発光し眠りにさそう胞子」は対象が設定されていないので小野さんも眠ってしまうからです」

「そうなんですか…教えてくれてありがとうございます！」

「いえいえ。あ、レベルアップはそこら辺の動物とバトルという名の戦闘を行えば経験値ゲットで上がっていきますので。『ONE PIECE』の世界なら海のでかい魚とかを倒すのもありますね。Lv. 1では覚えているわがが「すいとる」・「おどろかす」・「ねをはる」・「フラッシュ」なので、まずは海で魚を釣って、釣り上げた魚にネマシユをくつつけ「すいとる」で殺して経験値獲得で地道にレベルを上げていくのがいいと思います」

「ほうほう」

「次の『アイテム特典』は1489番『要撃用エンジエロイド タイプγ ガンマ HARPY ハーピー ×2』です」

「なんですかそれは。えんじえろいど？」

「漫画『それのおとしもの』に登場する生体兵器、サイボーグ的なアンドロイドです。女性型だからガノノイドですか。心臓には動力炉があり、武装を持ち、首輪をつけている有翼の天使のような姿の存在です。ロボットのようですが、生体部品を用いて作られているので食事をしたり風邪を引いたりもします」

「なんと！ ではやれるのですか?!」

「(……………こいつは) まあ、はい」

「よっしやー!! そうだ！ そのハーピーって、まさか伝承通りのババア顔じゃないですよ？ ちがいますよね！」

「ええ、ちゃんと美少女ですよ。原作では量産型とされていますが、この特典では登場した金髪と緑髪の姉妹ハーピーを贈ることになっています。

「武装は作中使用していた超光熱体圧縮発射砲。撰氏3000度の気化物体を秒速4kmで撃ち出すというバズーカ砲のような形の兵器です。

「彼女たちは小野さんのため造られたという認識でいます。知識などは常識的な知識を持っています。

「特典として贈られただけでは「インプリンティング刷り込み」がなされておらず、「マスター主人」と登録されていません。なので出したらすぐにでも「インプリンティング刷り込み」してください」

「マスター、ですか…つまり2体の奴隷持ちですか！ やっべ、よだれが止まんねっ」
「……………」

まあ、大事にしてください。あまりひどく扱おうと反逆される可能性もありますから。ポケモンの「なつき度システム」と違って「インプリンティング刷り込み」は最初に好感情を持たせるだけですから」

「え、そうなんですか…。まあ、よつぽどでない限り大丈夫ですよ。僕はそんなへまはしませんよ」

「…ふーん、そうですか」

「最後の特典は1589番の——っ!!」

「どうしました？」

「いえ……えー、1589番の『悪魔のパスポート』です」

「………? ——ッ!! ぐぐぐッ!!」

「説明聞きますか？」

「効果は知ってるけど、一応お願いします」

『悪魔のパスポート』はドラえもんのみつ道具の一つで、紫色の表紙にクラウン系の悪魔の顔と「PASSPORT of SATAN」と書かれた手帳のような道具です。

「このパスポートを見せればどんな悪事も「いいんです いいんです」と許されるという最強の免罪符です。」

「ドラえもん曰く、『それさえ見せればどんな悪いことをしてもいいという、おそろしい

悪魔のパスポート』。

「戒める系のひみつ道具とは異なり、使用をやめても、しでかしたことは取り消されません」

「うへへえへへへ。もうドキムネがたまりませんなあ！ あー、だめだー。顔のニヤけが治まらん。だめだわー、これは」

「……………」

「では最後に、『能力特典』を選んでいただきます」

「はい！ 5番欲しいです！」

「サイコロに祈ってください。どうぞ」

「サイコロよ！ エロの神よ！ 頼む！！ 頼むっ！！」

「からん！ からんからん！」

「ノオー！！」

「出目は1『アイテムBOX』ですね」

「くっそ！ くっそ！ 天は我を見放した！」

「まあまあ、『アイテムBOX』もかなり有用ですよ？ 生き物以外なら何でも、いくらでも入るんですから。腐りませんし」

「ん〜ん〜。まあ、…そうですね。出たのはしょうがないですし。振り直しとか」

「できません」

「ですよね…」

それでは転生です。

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

転生を実行します。それではよき人生を

「まあ、あなたの人生ですし：好きに生きるのも勝手ですが」
「はい！ 好き勝手させていただきます！」

☆■ 27番 上野義光(よしみつ) 享年20歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します…」

「27番、上野義光さんですね。こちらへどうぞ」

「あの、これって転生とかですか？」

「おっと、察しがいいですね。そうです。転生です。ですがまず、ご着席お願いします」

「はい！」

カチャ…キイ…

「これから上野さんにはいくつかの選択をしていただき、その結果決まった世界に転生していただきます。転生のシステムですが、『かくかくしかじか』でして、『まるまるうまうま』というわけです」

「ははあ…サイコロですか。サイコロとか子どもの頃にお爺ちゃんとすごろくに使ってた以来ですね」

「そうですか。では、これをどうぞ」

「はい……そいやっ」

からっ、からから

?…??

「おっ!」

「おー。出目は5と4 『自由』ですね。この出目では特典を選ぶ前に転生先を決めていただくこととなりますが」

「うーん……………どうするか……………」

「決まりましたか?」

「……………はい。」

『暗殺教室』でお願いします」

「おお、それはまたどうしてですか?」

「あー…その、私ここに来る前、大学生だったんですけど、その…高校でさぼってたせいで受験失敗しちゃって……………さぼり癖が就いちやっただのもあって大学の勉強も全然うまくいなくて…それでその、殺せんせーに『手入れ』してもらいたいなあ…って」

「あくなるほど」

「それに『暗殺教室』の世界なら特典が役に立たなくても、少なくとも死ぬことはないでしょうし」

「たしかにそうですね」

「次に特典についてのサイコロ振りです。『かくかくしかじか』となっていて、まずはアイテム特典〃の数をサイコロの出目で決めていただきます。どうぞ」

「はい…そおい！」

かつ、かかかか、から

「おっ、四！」

「出目は4、ということのでくじを4枚引いていただきます」

「はい…！」

がさ(そがさ(そ

1579・・・418・・・2360・・・222

「それでは特典の説明をさせていただきます。

まず一つ目の特典の1579番は『あいすボックス』です」

「アイス？」

「いえいえ、それもそうなんです、氷のアイスでもあり、LOVEの愛でもあります。

これはドラえもんのみみつ道具の一つです」

「ドラえもんですか」

「はい。順を追って説明すると、

ある日のび太くんはしずかちゃんが出木杉くんの家に入っていくのを目撃します。気になったのび太くんは出木杉宅の外から二人の会話を盗み聞こうとするのですが、しずかちゃんが「わたしプリンだ〜い好き！」と言った後半だけ聞いて、てつきりしずかちゃんが出木杉くんに告白でもしたのかと勘違いし、大きくシヨックを受けてしまい、とぼとぼと家に帰りました。その憔悴ぶりはジャイアンとスネ夫も思わず心配してしまうほどで、ドラえもんはそんなのび太くんを元気づけようと、のみみつ道具を取り出します。それが上野さんの引いた『あいすボックス』です」

「ふむふむ」

「この道具はドラえもん曰く22世紀でよく使われている、愛をプレゼントする道具で「愛してる」って言葉と「ムード音楽」が液体となって入っているそうです。一時的なも

のですが対象にした相手に好意を抱いてもらえると、いう効果を持っています。

使い方は簡単。まずは製氷機の形をした道具の側面にあるマイクに、対象にする人物に好意を抱いてほしい相手、作中ではのび太くんの名前を吹き込みます。そうすると「野比のび太」という名前も液体となつて道具の中に入ります。そうしたものを冷やし固めると、ピンクのハート形の氷が出来上がります。そしてその氷が溶けると『ぼくのび太、好き好き大好き、とつてもとつても愛してる』という音声メッセージが流れ、それを聴いた者は、氷から発せられた名前の主を好きになる。という効果を発揮します」

「……………なんか催眠術というか、洗脳というか、タブーな感じの道具ですね」

「ですね。」

ちなみに内蔵のコンピューターで声を変え、自分以外を好きになる氷を作ることも可能です。アニメではのび太くんはパパやママがケンカした時に使おうと二人の名前を入れた氷も作っていました。

その後のび太ははずかちゃんに氷を学校で渡そうとしますがことごとく失敗し、先生や低学年の生徒、ジャイアンに氷からの音声を聞かれ、愛を向けられることになってしまいました。オチはドラえものの『愛は物に頼っちゃだめなんだよなあ』という言葉でした」

「それは……まあ、そうですねえ……」

「これらの例から、同性にも特に問題なく効果が発揮されることや複数人に同時でも音声の影響は出るということが分かります。結構タイミングがシビアな道具ですね」
「あんまり使いたいものじゃないですね…」

「続いて二つ目の特典は418番『変身音叉十音撃吹道 烈空十音撃鳴』です」

「ん？ ……ああ！ 響鬼のやつですか?! うわつ、懐かしい…」

「ご存知ですか」

「ええ、まあ。最近の仮面ライダーは知らないんですけど、響鬼の頃は普通に見てたので、なんとなく」

「えー、面白いのに」

「いやだって、朝8時とか起きられませんって。うちビデオデッキもなかったから録画した後で見ることもできませんでしたし」

「…………。説明すると、この特典は劇場版 仮面ライダー響鬼と7人の戦鬼に登場する劇場限定の鬼『羽撃鬼』^{ハバダキ}に変化することができるようになるものです」

「はい」

「ただし、何もせず鬼になれるわけではありません。鬼になるためには厳しい修行を積み、心身を鍛え上げる必要があります」

「え、そうなんですか」

「そうなんです。尋常ならざる修練の果てに人は鬼へと変化することができるのです。」

『羽撃鬼』^{ハバタキ}は鷲の意匠をとった鬼で、空を飛ぶこともできます。音撃吹道^{フルート} 烈空を使つて鬼石を発射し 清めの音を、撃ち込んだ鬼石に伝えて敵を爆散させる『音撃奏・旋風一閃』を必殺技として持ちます。ちなみに福岡の鬼です」

「へ」

「何でもありません。そんなところでしようか。正直体を鍛えても14歳で鬼になれるとは思えませんし、なれるとしたら原作後でしようね」

「ですか…ハズレひいちゃいましたかね…」

「三つ目の特典は2360番『核鉄C』^{かくがね}（100）・防護服^{メタルジャケット}の武装錬金 シルバースキン』です」

「ぶそうれんきん？」

「武装錬金はジャンプで連載され、連載終了後にアニメ化した全十巻のバトル漫画で

す。これはその漫画『武装錬金』に登場する核鉄という道具です。とても武器らしい武器です。

まず「核鉄」。これは錬金術によって生み出された戦術兵器で、見た目は片手に収まるほどの大きさをした六角形の金属塊ですが、精神の深層にある本能に反応して超常の力を発揮、使用者独自の形と特性を持った「武装錬金」へと変化させ、現代科学の力を遥かに越えた力を秘めた武器を振るうことができます。

また、本能に働きかける事で所有者の治癒力を高め、怪我を治したりもできます「へへ、知らなかったけど、そんなのがあったんですね」

「はい。本来なら上野さん独自の武装錬金に変化するはずですが、神様が作った特典が原作登場のものに限っているのです、上野さんが今回引いた核鉄は必ず戦士長 キャプテン プラボーこと『防人 衛』^{まもろ}の防護服の武装錬金 シルバースキンへと変わります。

この武装錬金の特性は「外部からのあらゆる攻撃の遮断」。防護服の名の通り、全身を覆う武装錬金は外部からの攻撃に対して瞬時に硬化し防御し、ABC兵器などにも効力を発揮します。

防護服を相手に裏返しに着せることで、「外部からのあらゆる攻撃の遮断」防護服を「外部へのあらゆる攻撃の遮断」拘束服にして相手を拘束する『シルバースキン・リバーズ』という裏技もあります。これは相手に着せていたとしても所有権はこっち側にある

わけなので拘束服の内圧を上げて圧殺することも可能です。

「防護服は元々 六角形の微細な構造体の集合で、他人に着せるために射出する時や、防御力を上回る攻撃を加えた時はチップ状に分解されます。そしてその射出したチップは再構成させ、ある程度自由に形を変えられますが、精密操作は出来ません」

「わかりましたか？」

「はい、なんとなく。あとは使ってみて考えます」

「最後、四つ目は222番『石仮面』です」

「……………ジョジョ？」

「ですです」

「一部と二部に出てきた、吸血鬼にする？ あれですか？」

「はい、あれです。あ、究極アルティミット・サインの生命体 用ではなく、ディオが「おれは人間をやめるぞ

！ ジョジョ——ッ！」ってやったほうのです」

「確か…血を浴びると針みたいのが突き出して、脳を押して人間を不死身の吸血鬼に覚醒させる……んでしたよね？」

「そうです。石仮面の裏にある8本の『骨針』が頭蓋骨を貫き、脳を強く刺激することで

脳の未使用領域を活性化させ、不死身の超生命体へと変化させるのです。

吸血鬼化することで得られる恩恵は、圧倒的な身体能力と再生能力。再生にはエネルギーが必要で、そのエネルギーを摂取するために吸血を行います。発達した犬歯で噛みつき吸血することもあれば、指を血管に突き刺しそこから吸血することもできます。

また人間を屍生人ゾンビにするエキスを生成可能で、それを注入しゾンビ化させることもできます。

弱点は太陽光を浴びる。脳を一瞬で破壊される。燃やされるなど、再生が追い付かないダメージを与え続けられる。などがあります。他に波紋法の波紋エネルギーがありますが、ジヨジヨの世界に転生するわけではないのでそれは気にする必要はないでしょう」

「なんとなくどきどきわくわくする気持ちはありますけど、やつぱり日の下を一生歩けないのは無いですね。血を吸って生きるのも、うええって思いますし」

「まあ普通そうですね。お日様をもう拜むことができないのは、ちよつと…:ですよね」
「はっ」

「では『能力特典』を選択していただきます。サイコロです。どうぞ」

「三、三、…つ、こいつ！」

から、からからからから、

「よっし！ よっし！」

「おー、出目は3 『翻訳』が“能力特典”として贈られます。英語の授業とか超楽になると思いますよ」

「いやー、最高にハッピーです。自分高校時代英語いつも赤点で、一年の一学期中間テスト以外全部補習でしたから。卒業も危うくなっちゃって。来世では数学対策だけやってればいいと思うと気が楽です」

「そうですか。おめでとうございます」

では転生です。

あなたは4つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございました」

「お元気で、『よい人生を』」

☆■ 28番 能山北斗 享年19歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します」

「はい、28番の能山北斗さんですね？ こちらの席にどうぞ」

「はい、失礼します」

パタン…

「それでは能山さん、あなたはこれがどういうものか分かっていますか？」

「………天国息と地獄行きを決める、というわけではなさそうですね…。」

異世界転生ですか？」

「イエエス。大体その認識で合っています。能山さんは一つの人生を終え、その上で今の人格・記憶、そして神様から贈られる“特典”を持って、漫画・アニメ・ラノベなどの創作物をモデルにした世界に転生していただきます」

「はあ…二次創作とかでよく見るあれですか」

「あれです。といっても私共の転生システムは『かくかくしかじか』となっていて、

ほんの少し能山さんのご存知のものとは異なりますが」

「そうですね、サイコロですか：不正はありませんよね？」

「それはもちろん。断言しますよ。不正はありません」

「そうですか。なら早速、始めますか？」

「おお、乗り気ですね。はい、サイコロです」

「ちよつとわくわくしていまして。こういうのに中学高校と憧れてたりしたもので

「では、どうぞ」

「はい……………（ファンタジーはなしで！）」

からっ、からから

??

「おっ！」

「おー、おめでとうございます！ あたりですね。

出目は6と6なので『特典決定後選択の“自由”』です」

「ううん…どこにするか…」

「とりあえず、特典を決めてください。特典とは『かくかくしかじか』で今から決めていただくのは『アイテム特典』の数になります」

「はい………まあ、なんでもいいか。軽〜く
からん、から

「あゝっ！」

「あー………出目は1なので特典くじを一枚引いてください」

「はい……慎重に……せめて便利なものを……
がさっ

1019

「1019番は『タウリン×∞個』です」

「タウリン？」

「タウリンとはゲーム『ポケットモンスター』シリーズに出てくる、いわゆるドーピングアイテムの一つで、使用するとポケモンの基礎ポイントの「こうげき」努力値を10上げるができます」

「ポケモン用、なんですか…」

「いえいえ、こんなこともあるうかと！ 能山さんのようにポケモンとセットでゲットされなかった方のために、神様設定で“ポケモン以外にも使用可能”となっていますので大丈夫ですよ」

「…どういうことですか？」

「つまり、人間が飲んでも効果を得られるということですよ。例えば能山さんがこれをがぶ飲みすれば、超人的な「こうげき」力を得られるということですよ」

「おお！」

「ちなみに原作の設定では上昇に上限があるのですが、これについてはその上限が取っ払われています」

「つまり？」

「飲めば飲むだけ、力が増していき、ドラゴンボール的攻撃力を手に入れることだって出来るというわけです！ 岩を砕き、山を動かし、星を破壊する！ そんなスーパーパワーが飲み続けられ宿ります！」

「…そこまでいくと恐ろしいですね。気になったのですが、そのタウリンって、あくまで「こうげき」の値を上げるだけなのでは？」

「そうですね。お考えの通り、この特典は「こうげき」を上げるだけで、「すばやさ」や「ぼうぎよ」の値は上昇しません。だから、そうですね…またドラゴンボールで例えると、超トランクスのようにスピードが伴わない状態になります。なので一般人相手ならともかく、バトル漫画の世界の怪物や超人相手では手も足も出ないかもですね」

「やつぱりそうなんですね…速度が違うと戦いの土俵にも立てない、と」

「ですね。では続いて“能力特典”を決めていただきます」

「はい」

からん、からから

「出目は2 『鑑定』です」

「これは、どこまでわかるものなんですか？」

「そうですね…まず名前や年齢なんかの基本的な情報が浮かび、次いで身長や体重と

いった身体データ。注視すれば知りたい情報がポンポンと浮かんできますよ。愛想や義理といった訳の分からないパラメーターも存在しているようですね」

「なるほど…寿命とかは出ますか…？ あ、えっと『DEATH NOTE』の死神の目で見れるみたいな」

「あー、それは…『鑑定』では不明のようですね。この特典は過去と今現在の対象の状態を数値化して見せてくれる特典なので」

「そうですか」

「それでは転生なのですが、転生先は決まりましたか？」

「……………はい。」

『思ったたら乳日』でお願いします」

「…おう。えー、つと琴義弓介先生作の竹書房刊の『思ったたら乳日』で、よろしいんですか？」

「はい」

「……………理由は聞かないでおきます。では」

あなたは1つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

☆ ■ 29番 潮谷光人 享年17歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「お邪魔します…」

「はい、29番の潮谷光人こうじんさんですね？ こちらの席のどうぞ」

「はい」

「さて、潮谷さん。あなたは残念ながらお亡くなりになりました」

「ああ、やっぱりでしたか」

「落ち着いていますね」

「まあ…頭に何かが当たったような気がして、意識が遠のいていきましたからね。これは死んだなど、思いましたよ」

「ははあ…ちなみに潮谷さんの上に落ちてきたのは花瓶でした。住人の不注意ですね。ちよつとベランダのコンクリに置いていて、それを忘れて体を動かし落下、運悪く落下地点に潮谷さんが通りかかり…という」

「自分のことながら運が悪いですねー…事実は小説よりも奇なり、ということでしょうか」

「まあそうとも言えますね。それでは、これからの話に移らせてもらってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい」

「これから潮谷さんには『転生』をしてもらいます。ご存知ですよ？ 詳しくジャンル分けすれば『神様転生』というものです。アレです」

「あー………はいはい！ 今や書店の一スペースが丸々それであることも珍しくなくなつたアレですか」

「ま、といつても、今回潮谷さんに行つてもらつ『神様転生』は少し毛色が異なるのです
が」

「というと？」

『かくかくしかじか』

『まるまるうまうま』。なるほど」

「ほかに質問はございますか？」

「うーん、と…例えば、リストの中にある『ハイスクールDXD』なんかでは、一般人が『神器』を持って生まれてきたりするじゃないですか、自分が転生した場合、『神器』つ

て宿ったりするんですか？」

「はい、可能性はあります。転生する世界によつては私たちの神様が贈る“特典”とは別に、その世界の何かを宿して生まれてくることも十分にあり得ます。ただ、『神器』の場合ですと、あれはなんだかんだ言つて確率極小です。原作にたくさん登場するといつても、ほとんどの人類は持たずに生まれてきますからね」

「確かにそうですね」

「他にはありませんね？ ではサイコロをどうぞ」

「転生先ですか……ろくろくううう……ろおおつくううう……！」

ヒュ からからから

?…?

「出目は6と4 『自由』ですね」

「あっちゃー。んー……先に決めるんですよね？」

「はい」

「うーん……」

からっ からからからっ から

「あ、ああ、あああ……ああ」

「あー、出目は1 よつてくじを一枚引いてもらいます」

「まあ、しやーなし、しやーなし、うん」

「どうぞ」

「はい」

がさごそがさごそがさごそ

2064

「はい、特典の説明を行わせていただきます。

2064番は『三つ星極制服・あつさえ詔の装＋生命戦維』です」

「獄制服？ 生命織維？」

「あー、違います違います。極制服は『極まった制服』、生命戦維は『生命を持った戦う織維』です」

「ふんふん。で、それはどんなものなんですか？」

「これはアニメ『キルラキル』に登場したもので…つて、潮谷さん『キルラキル』見てないんですか」

「んー…。あー…なんか聞き覚えが…ああ、あれですか、あの、恥ずかしい感じの…」

「なるほど、大体わかりました。『恥ずかしくつて見れないよう』と、そういう感じだったわけですか」

「いやだって、今思い出してもなんか、その、アレな感じで…」

「もったいない！ 実にもったいないですよ、潮谷さん！ あのアニメ、格好はあんな感じで、画像で見れば『何事か』という感じですが、色つぼさはほとんど感じられませんからね？ 動いてしゃべれば大違いです。」

あの、エグゼイド レベラー同じですよ。画像で見れば『なんだこのゆるキャラ』と思うようなものでも、動けばかつこよく見えたでしょ？ それです。ストーリーも勢いすごくて熱量すごくて、熱くなれるバトルものですから。超面白い作品でしたよ」

「そう、だったんですか…あのー」

「だめです」

「まだ言っていないんですが」

「だってー。見なかったのはあなたが悪いんですしー。見せてくれて言われてもー」

「関心煽つといて、そりやないですよ」

「ごめんなさい」

「では脱線した説明の続きを行います。この特典は本能字学園裁縫部部長の伊織 糸郎の使用した三つ星極制服とその極制服の特徴を活かすために必要な生命戦維セットとなっておりませう。

極制服とは、本能字学園生徒会から学園に在籍する一部の生徒に与えられる「生命戦維」と呼ばれる特殊な赤い繊維が編み込まれた制服で、特徴として服のどこかに星が描かれ、その星の数に従い一つ星は全体の10%、二つ星は20%、三つ星極制服は30%の生命戦維が編み込まれています。

編み込まれた生命戦維が着用者に力を与え、超人的な身体能力発揮可能となる、一種の戦闘強化服で、編み込まれている生命戦維の量に比例してその効果は高くなります。そのため星の多い極星服程強い力を得ることが出来ますが、着用者自身の生命戦維耐性や精神状態によって発揮出来る力が左右されてしまうなどその効能には個人差もあるため、生命戦維の割合が多くなり過ぎると常人では制御が利かなくなり暴走してしまう

危険も孕んでいます。

一つ星極制服は特徴のない平凡な強化型。

二つ星は「○○部特化型」と枕につく部の特色・ルールになぞらえた強化服で一つ星とは強化度合いも比べ物にならない感じ です。格好も派手派手です。

三つ星は通常の制服形態から各人の得意とする戦法を行う戦闘形態の「装」へと変身する機能を有しています。その際装着者は全裸になります。原作では改良版の「○○の装・改」あらためが登場したりしました。

50%配合の五つ星極制服が実験的に作られ登場しましたが、暴走してしまいました。100%生命戦維で作られた戦闘服を『神衣』かむいといいますが、これは特別に生命戦維適性が高い存在にしか着こなすことができなない代物です。原作では「鮮血」と「純潔」が該当し、それぞれ「人衣一体」・「人衣圧倒」によつて服と一体化することで力を引き出せますが、暴走の危険を抑えるため露出度は極制服と異なり非常に高くなります。ただ、適性が高ければ暴走の心配もないように洗脳された流子は純潔を全身に纏っていましたし、羅暁は「神衣・神羅纈纈」しんらかうけつを…と話がそれましたね、

あつらえ 誂の装は三ツ星で纏った姿はドレス状の黒い衣装にミシンのようなアームが背中に付いており、バイザーとマスクで顔が隠れている格好になります。その4本のハンドミ

シン状のアームを使った高速での極制服製造に特化して生命戦維があれば極制服を縫い上げることができません。極制服の作り方に關しては、ある程度はオートでも作れるようになっていますが、質の高いものを作るには潮谷さんご自身の手で製作を行わないと作れないようになっていきます。オートはあくまで入門ガイドです。さすがに何の手がかりもなく強化装甲服を縫い上げろつたって無茶な話ですからね。

そしてごく制服製作用の素材として、生命戦維をおまけです。

生命戦維とは、先ほど訂正したように『生命を持った戦う繊維』で、その正体は、宇宙から飛来した地球外生命体です。他の生物のエネルギーを喰らって生きる寄生生命体。ですが肉体内部に直接寄生すると、宿主となる生き物が生命戦維のエネルギーに耐え切れず死んでしまうため、その皮膚表面を覆う、つまり「服として着られる」ことで効率的にエネルギーを摂取する特性を獲得しているというわけです。

『キルラキル』の世界では生命戦維こそが、人類に英知を与え、進化を促した生命体とされており、自分たちのエネルギー源としてふさわしくなるまで進化を促すまで眠りについているという設定でした。

つまり極制服や神衣は、脅威となる存在そのものの力の一部をもって、脅威に打ち勝とうとする、仮面ライダー鎧武とかまどマジとか、グレンラガンとかな感じの力でもあるというわけです。

ざっくり説明して、こんなところでしょうか。何か質問はありますか？」

「……………はい、はい、あー…オーケーです。だいたい…分かりました。生命戦維ってのはどんな感じで出てくるんですか？ 糸巻きな感じとか、既製品のボビンみたいな感じですか？」

「いえ、スパイダーマンみたいな感じですね。一本ぬるりぬるりと出現します。体内から生成されるわけではなく、体表面に沿うように出現します。ある程度の長さで出すのをやめて糸巻きにして保存しておくこともできますよ」

「なるほど…それでその、生命戦維…安全なんですか？ 寄生生命体とか、不安でしかないんですけど…」

「ご安心ください。『特典』として再現されたものなので、地球を覆いつくして宇宙に散らばろうとか、そういう原作のような目標を抱くこともありません。おおもとの原初生命戦維が『アイテム特典』だったらまた違いましたか」

「本編そんなことになってたんですか…うあー、見ておけばよかった……………」

「いいですか？」

「はい、大丈夫です」

「では次に『能力特典』を決めていただきます。サイコロをどうぞ」
「はい、えいやつ」

からん からから

「出目は3 『翻訳』ですね」

「おっ！ これはなかなか、うれしいやつですね」

「では、転生です」

あなたは1つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をも、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございますました」

「行ってらっしゃいませー」

☆□ 30番 太田信夫 享年11歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「しつれいしますっ」

「はい、30番 太田信夫さんですね？ こちらの席にどうぞー」

「はいっ」

「えっと、信夫くんよくわからないかもしれないけど」

「大丈夫です。わかってます！ 僕死んじやったんですよ」

「え、あ、うん」

「やっぱり…できれば天国に行っておばあちゃんに会いたいです。でもやっぱり、賽の河原で石積からですか？」

「よく知ってるねー…いやいや、そうはならないんだよ。『かくかくしかじか』でね？」

その神様転生をしてもらったことになったの。で、ここはそのための場所。閻魔様の前つてわけじゃないんだよ」

「……………なんだかわかんないけど、わかりました。じゃあ、サイコロですか？ 振ればいいんですか？」

「うんうん。まずはサイコロの出目で転生する世界を決めるのね？ リストはこんな感じ」

「一つもわかりません！」

「あー…じゃあ、決まったら簡単な説明だけするから、とりあえず振ってみて」

「はい！ やあつ」

からん、からからから

？…？

「出目は4と1…(Fate系列か…きびしいなあ)

「この出目ではさらにリンクがあるから、もう一回、今度は一つのサイコロを振って」

「はっ」

ひゅっ からからからから

「出目は1…信夫くんの転生先は『Fate/stay night』に決定です」
「ふえいと」

『Fate/stay night』はどんな願いも叶う万能の願望機を賭けて、過去の英雄や伝説上の存在を使い魔として現代に召喚する、魔術師達のバトルロイヤルそれに関わった人々を描くFateシリーズの第一作。原作はノベルゲームでアニメ化や漫画化もされている人気作です」

「ほへー」

「世界観としては『魔術』がある世界になっています」

「へーつまり戦うやつなんですか、なるほどわかりました」

「……………そうですね。では続いている『特典』についてです。『かくかくしかじか』となっています。まずは『アイテム特典』の数を決めてもらいます」

からん からから

「はい、出目は2 特典くじを2枚引いてくださーい」

「よし！ むむむ…」

がさ(そがさ)そ

2326・・・265

「では特典の説明をしていきます。

まずは2326番、これは『N.O. 069 長老の毛生え薬』です」

「毛生え薬って、髪の毛ふっさふさにするやつですか？」

「はい、そうですね。この特典は『HUNTER×HUNTER』グリッドアイランド（G・I）編に出てきた指定ポケットカードの一枚で、説明文によると「塗った所がフサになる薬。塗る時は手袋を着用すること。でないと手の平や指先にも毛が生えてしまう」だそうな」

「ほあー…つまり髪以外の毛も伸ばせる薬なんですね」

「です。原作では200ml入り10人分生やしたらなくなる分量ですが、この特

典としては使い切ったら補充されるのでジャンジャン使っちゃってください」

「んー…丸刈りにされたら使います。お母さん、切るの下手なのにお金の無駄だからって床屋で切らせてくれなくて。」

……………ああ、転生するんでしたね。ごめんなさい…」

「いいえ。慰めにならないかもだけど、新しいお母さんお父さんは普通にいい人だから」
「……………はい！」

「次の特典は265番 『クレイジー・ダイヤモンドのスタンドDISC』です」

「すたんど？」

「スタンドというのは…『かくかくしかじか』で…このクレイジー・ダイヤモンドは近距離。パワー型のスタンド、パワーもスピードも一級品。固有能力は『治す』です」

「直す？」

「はい、まあ回復的な感じですね。怪我した人や壊れた物を元通りに直す能力です。あえて元通りではなく、中途半端に直したり、二つのものに同時に能力を使うことでくつつけたりもできます。ただし、自分の怪我・病氣・亡くなった人は治せません。」

治すにはスタンドで触れる必要がありますが、物であれば欠片に触れるだけでも復元

可能です。こんなところでしょうか」

「すごいですね」

「はい、すごいです」

「……………」

「……………」

「……………？ えつと」

「……………あ、はい、次行きましようか」

「続いては『能力特典』を決めてもらいます」

「はい！ またサイコロですか？」

「はい、またサイコロです」

からんころから

「残念、はずれー」

「はずれかー…」

「ドンマイ！」

「はい！ ドンマイ！」

では転生です。

あなたは2つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「行つてらっしゃいませ。がんばってください」

「はい、ありがとうございます！」

★□ 31番 林実 享年14歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「どうも失礼しまーす」

「31番の林 実みのるさんですね。こちらへどうぞ」

「あ、はい」

パタン

スチャ

「(もしかして…)」

「あゝ」

「はい」

「ここは、転生とか、そういう感じのアレをするところでしょうか！」

「はい、その通りですが」

「やった!!」

「……………」

「いやー、やってみるもんですね！ まさか本当に異世界転生できるなんて！」

「えーつと…」

「あ、すいません。ついテンションが上がってしまつて」

「いえ、その、大丈夫ですよ。早速転生についての説明をさせていただこうと思うのですが、よろしいですか？」

「はい！お願いします！」

「はい、『かくかくしかじか』ということになっております」

「なるほど…なんにしても、転生してハーレムオリ主になれるってことですよね☑」

「あ〜……………」

「なんですか？」

「いえいえ、なんでもありませんよ（ハーレムねえ…年齢とオタク歴からいって、健全っちゃ健全なんだろうけど、想像力が足りないなあ…。彼女いない歴〓年齢のDTが志しても無理な話なんだよなあ。立場を置き換えて相手側から考えてみれば、奇特な人でもない限り愉快な関係に思えないことが想像できるだろうに）」

「あ、サイコロでしたね。（良いのを頼みます！）」

からんからから

?...??

「お〜! (キてる!これは主人公フラグ来てるんじゃない?!)」

「出目は6と5。なので転生先は『神様が決定』です。」

次は特典を決めていただくわけですが『かくかくしかじか』な仕組みとなっております。初めに「アイテム特典」の数を決めてください」

「はい

(6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6 6
!!!)

からん!からからから

「おおー」

「はい、出目は4 なので特典は4つ。くじを4枚引いてください」

「はい（むーん…）」

がさ(そがさ(そ

がさ(そがさ(そがさ(そ

547・・・1618・・・1467・・・1022

「はい。では特典くじの説明を始めさせていただきます。

まず一つ目は547番『ゲームアドライバー+仮面ライダーズナイプ保有のライダーガ
シャツト各種+ガシャコンバグヴァイザーⅡ^{ツヴァイ} 他』です」

「……………花家先生ですか!!」

「そうですね。『仮面ライダーエグゼイド』に登場するドクターの一人、元放射線科医の
花家大我先生の変身する仮面ライダーズナイプへの変身アイテム各種セットです」

「セット付属のライダーガシャットは

バンバンシューティング

ジエットコンバット

ドラゴナイトハンターZ

ガシヤットギア デュアルβ

仮面ライダークロニクルガシヤット×2本

ゼビウスガシヤット

バンバンタンクガシヤット

です」

「ちよつと待つてください？ さつき言つてたセットにバグヴァイザーもありましたよね？ つまりポーズが使えるクロノスにも変身できるんですか?!」

「はい。ただし——」

「よつしや！ 時間停止とか勝ち確チートキタ！」

「(何度も敗れていましたけどね…)」

「ただし、です」

「はい？」

「ただし、クロノスに変身するためにはバグスターウイルスに完全な抗体を体内で作る必要があります。わかりますよね？」

「え、ええ。わかつてますよ。そもそも変身するには適合手術をしなきゃいけないくて、バグドライダーIIを人の身で扱うには、あらゆる種類のバグスターウイルスの感染をものともしない完全な抗体を身につける必要がある……でしただけ？」

「正解です。そして、この特典においては、『適合手術』は神様が転生の折に施してくださいますが、それ以上の『完全な抗体』を与えてくれるなどはしてくれません」

「え× じゃあ、どうすればいいんですか！」

「原作において、花家先生が行ったように苦しみ悶えながらもクロニクルガシャットを使つて抗体を生成し続けてください。起動しても問題なくなれば変身できるようになりますよ。本編の発言だったりから、目安は7年間ですが、プロトガシャット使用とか花家先生の場合とは異なるでしょうから10年ほど苦しめば適合できるかもしれませぬね！」

「……………（まじかー。痛いのも苦しいものやだよー。ま、いつか。変身できなくつても。スナイプにはなれるんだし）」

「ちなみにデュアルβも原作通り変身の反動が来たりします。ある程度慣らしていつてから使わないと、カイザギア装着者みたいになるかも…」

「えええ……………」

「他、何かありますか？」

「えと、うーん……………あー！」

俺、バグスターウイルスの感染者になるわけじゃないですか」

「はい、そうですね」

「病院とか、健康診断で『新種のウイルスだ！』とか、騒がれたり悪用されたりしませんか……？」

「大丈夫ですよ。適合手術で得た抗体が残留するウイルスを駆逐してくれるので、そういう時は変身や抗体作りを控えればモーマンタイです」
「そうですか、よかったです」

「では質問は以上のもので、次の特典の説明に移ります。

2つ目の特典は1618番『タケコプター』です」

「タケコプターですか？」

「はい」

「あの『そくらをじくゆうにとくびたくいなく♪』の？」

「はい」

「……………」

「……………」

「あー……………えー…つと。」

…なにかでタケコプターがマジであつたら飛ぼうとすると頭皮が持っていけると

か聞いたことがあるんですけど、そういうのは」

「大丈夫になっていきます。神様パワーで作られたものですから。揚力ではなく反重力によつて飛行するタイプです」

「なるほど（よくわかんないけど）」

「時速80kmで飛び続けると8時間でバッテリー切れになりますが、一回特典として消費せよバッテリー満タンで再出現します」

「続いて3つ目の特典は1467番『キング王の駒（かっこイット悪魔の駒）』です」

「（かっこ）を口で言いやがつとぞ（こいつ）」

「なにか？」

「いえいえいえいえ」

「林さんもご存じのとおり、イットウィルピース悪魔の駒とは『ハイスクールD×D』に登場する、人間を含めた他種族を悪魔に転生させる原作の始まりにかかわるアイテムです。使用することで転生悪魔となり、人外のパワーや一万年の寿命、万能言語能力などの体質を得て、魔力を用いた魔法を扱うことができますようにもなります」

「はい」

「そしてそんな悪魔の駒の、存在しないとされている『王』^{キング}の駒。それが林さんの3つ目の特典です」

「たしか、10倍とか100倍とか尋常じゃない強化がされるんでしたっけ？」

「はい。それとともに、増大する力に耐えきれなくなるものもいる、という欠陥があるのですが、それは神様パワーで何とかなるようにしてありますのでご安心ください」

「そうですか。んー、でもなー。一万年の寿命とか、ぶっちゃけ長すぎですよね」

「あー、まあそうですね。でも林さん飽きたら自殺すればいいじゃないですか（前世みたいに）」

「それもそうですね！ 飽きたら…えーっと、銀十字で心臓でも貫いて自殺することになりますー！」

「最後に4つ目の特典は1022番『キトサン×∞個』です」

「無限個？ キトサンってなんかの薬ですか？」

「はい、無限個っていうのは、『消費系アイテムだけどいくらでも出して 使えるよ』という意味です。」

そして『キトサン』はR・Sルビー サファイアからポケモンシリーズに加えられた、「とくぼうを上げる」基礎ポイント上昇ドーピングアイテムです」

「? (とくぼうを上げる? なんの意味があるんだ?)」

「直接的に言うのと、これを飲み続けると魔法とか、超能力とか、そういう物理的な攻撃以外の攻撃が全く効かなくなります」

「は」

「わかりやすく言うと、全身幻想殺しイマジンプレイカー(ただし攻撃でない回復や補助は効果あり)みたいなものです。例に挙げただけで実際幻想殺しイマジンプレイカーというわけではありませんよ?」

「はい、ええ。はい」

「むしろ『C・D・E : BREAK』の「珍種」の体質のほうがりやすいかもしれ
ません」

「うん? なんですかそれ」

「知らないんですか。これは失礼しました。」

なんにせよ、これを飲み続け「とくぼう」を限界値以上に高めれば、林さんの転生する世界がなんであれ、物理的な手段でもってしか害せなくなるということですよ」

「いいですね、それは」

「あ、イマジンプレイカー
幻想殺しと違って、攻撃を無効化するだけで、異能で生まれたものを消したりと

か、そういうのはできませんので。

それと、魔法で強化した拳 とかは「物理攻撃」判定なので注意してください」

「そうなんですか（あぶねー。つまり魔剣士とかモンクとか、そういうのがやばいってことか）」

「では次に『能力特典』を決めていただきます。どうぞ」

「はい……！」

から、からからから

「しまったー……」

「出目は3 『翻訳』ですね」

「はあー…（悪魔に転生するんだから、いらねーつての。いや？ こっちは読み書きもで

きるようになるみたいだから？　いいっちゃいいんだけどね？」

「それでは転生です」

あなたは4つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

二度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「ハーレムオリ主になれるように頑張ります！」

「あー、はいはい。せいぜい刺されないようにお気をつけて。」

あ、林さんの転生先は『オーバーロード』の世界です。

「はいはい」

「
へ
？
」

★ ■ 32番 滝川駿 享年27歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「し、失礼します…?」

「はいどうもー。滝川駿さんですね？　まずはこちらにお座りください」

「は、はあ…」

「さて滝川さん。残念ですが、あなたは亡くなりました」

「ええ☒」

「アパートの階段から転落死と書いてありますが、記憶にありませんか？」

「そんな…おもいだして、きました。」

「そう、ですか…私、死んじゃったんですか…」

「はい、そしてここはそんなお亡くなりになつられた方に第二の人生を送る場となっておりますー。『かくかくしかじか』」

「『まるまるうまうま』なるほど。そんなものがあつたんですか。それで、私が、転生者に?」

「ええ。ちなみに拒否権はございません。サイコロを投げ、くじを引き、異世界に転生してもらいます」

「わかりました。なんだか不思議とワクワクしてきましたね」

「いいですね! ではテンションが上がりになられたところで、転生先を決定するため、サイコロを振っていただきます、どうぞ!」

「はい!」

かしゃかしゃかしゃ

からん からから

?...?

「お」

「はい、出目は2と2 なので滝川さんの転生先は『BLEACH』の世界です。ご存知ですか?」

「はい。学生時代ジャンプ買ってましたから。単行本も飛び飛びでしたが買って、アニメも見えました」

「それは結構」

「では、次に滝川さんが得る特典についての説明をさせていただきます。『かくかくしかじか』で、まずは『アイテム特典』の数をサイコロの出目で決定します」

「はい。……………」

からん からからから

「また2ですか…」

「ですねー。出目は2。なのでくじを2枚引いてください」

「はい」

くじくじくじくじくじ

275・・・1615

「では特典の説明をさせていただきます。

まずは275番『ハイウェイ・スターのスタンドDISC』です」

「ハイウェイ・スター…？ それってジヨジヨ4部の、あの有名な『だが断る』の時のあれですか？」

「はい、そうです。その話に出てきたスタンド。遠隔自動操縦型のスタンドで本体は『交通事故を起こした少年A』こと噴上裕也」

「能力は相手の匂いを覚えて標的をどこまでも追跡し、体内に侵入して養分を吸い取る。追跡は、人型から無数のグミ状の足跡のような形に体を変形させて時速60kmでどこまでも追いかけて養分を狙う。60km以上のスピードで追跡対象が逃走しある程度引き離されると、大体の位置を臭いから予測してテレポートして追いかける。エネルギーを吸収するのが目的であるためか、スタンドそのもののパワーは低いとされていますが、それでもシユレッダーを殴りつけて凹ませるぐらいはできるので、普通の人間と同程度のパワーはあるといえます」

「そして副次効果として、スタンド使い自身も異常に優れた嗅覚を持つというものがあ

り、それも今回の特典に含まれています」

「……………もしかして結構当たりじゃないですか？　これ」
「ですね。」

あ、それと、転生先が『BLEACH』の世界なので？　原作ジョジョのスタンド使
い同様に、滝川さんも幽霊が見える——霊感持ちになります」

「あ、そうなんですか…虚とか！　そういえばいましたね！　ハイウェイ・スターで勝て
ますか……………？」

「うーん…。真つ向勝負でも、本領としての養分吸収でも、地力が違いますからねえ…勝
てないかも…？　雑魚ならともかく。虚からもスタンドは見えるわけですから」

「そうなんですか…うー…。遭遇しないようにするのが一番ですかね」
「ですね」

「続いては1615番『E・S・P訓練ボックス』です」

「なんですかそれ」

「はい。これはドラえもんのみみつ道具の一つで、端的に言うとならば超能力者、エス
パーになることができるといったのみみつ道具です」

「エスパー？」

「エスパーとは、この道具の名前にも入っているESP——「Extra Senses Perception」——の頭文字に“er”をつけた超能力者を表す言葉です。

E・S・P訓練ボックスは、3種類の超能力、

念力・透視・瞬間移動

を会得するための訓練を積めるひみつ道具です。

この小箱に向かって、それぞれの超能力を使うイメージを強く思い描くと、徐々にその力が身につけていきます。

早ければ訓練初日から超能力が使えるようになるものの、初めのうちはとても不安定で満足にコントロールできません。超能力を自由自在に使いこなせる一人前の超能力者になるまでには、毎日3時間ずつ訓練して3年かかるそうで、のび太君は一日目から超能力を使えるようになりましたが、訓練不足で10分遅れで能力が発動する羽目になってしまいました。

しかし、訓練不足だったというのに、念力で人ひとり天高く飛ばしたり、噴水の水をすべて瞬間移動させたり、強力なエスパーになっていました。訓練を続ければさらに出力が上がリ、その上ノータイムで発動させられたでしょう」

「なんていうか…すごいですね。それにロマンがある」

「まあ、スタンドは超能力の概念に像を与え、目に見える形で表現したものであるともいいますが」

「では続いては『能力特典』を決めていきたいと思います。よろしいですかー？」

「はい、では振りますね」

「どうぞー」

からからから

「あちゃー…」

「あー、出目は6 『はずれ』ですね。ドンマイです」

では転生です。

あなたは2つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

☆ ■ 33番 黒岩勇悟 享年22歳の場合

やあやあ、神様ですよ。

今回はゾロ目転生という訳なのだが、いつものように始める前に、今回の転生者くんの生前の話をしよう。情報公開だ。

別に、どうしたというわけではないのだがね。じゃ、スタート。

黒岩勇悟 享年22歳

物心つく前に父親の勤めていた会社が倒産、父親は職を失いその後再就職することもなく、家族三人を母親の稼ぎで養う家庭だった。

勇悟の覚えている母はいつも忙しそうで眉間にしわを寄せていた。父は日がな一日酒を飲んで母にあたり、週末になればアルコールの匂いのする男たちと麻雀を行う。それしかしないような人だった。

小中と貧困の中でも母親と、福祉制度の利用によって通っていたが、友達は一人もいなかった。人との関わりがなく、自分の家庭がおかしいということにずっと気づかなかった。

中学卒業の頃、母親が亡くなった。過労死だった。

母親が死に、金を稼ぐものがいなくなったので父は勇悟に働くように命令した。勇悟はそれに従うしかなかった。勇悟は栄養が足りていなかったのか小柄で、中年酒飲みの父に力で逆らうことができなかった。それに、勇悟には家以外行くところがなかった。

それからのはひたすら働かされた。中卒で働かせてくれるところを見つけて働き、仕事が終わったら別のバイトに行つて働き。そうして得た給料はすべて父親に奪われ酒代と賭け麻雀に消えた。

奴隷のような日々を送り、人生に希望を見いだせず、けれど自殺することなんてできなくて、つらくて、くるしくて、頭の中がぐちゃぐちゃで、将来の不安・父親への感情・プレッシャー ストレスで歩きながら失神するほど追い詰められた時、「大丈夫ですか？」「と声をかけてくれる人に出会った。

その人は、「だいじょうぶです」と言う勇悟に何度も話しかけて、「大丈夫ですか？」「と聞いてくれた。何度も何度も。そして勇悟は少しづつ、自分のことを話すようになった。

話しながら、嗚咽が止まらなくなり、父親に対する呪詛の言葉を吐く発作、息が荒くなつて首をがりがりがり掻き毟ったり、顔を真っ赤にしてぶつぶつと何事かをつぶやき続けたり、急に 突然電源が切れたように熟睡してしまったり。まとめれば30分

ほどの話を数時間かけて話し終えるとその人は涙を流して泣いてくれた。

勇悟にとつて、自分の環境はひどいものだという自覚はなかった。自分が苦しい・つらいと思うのは自分の心が弱いからだと思っていた。父の言う「お前より苦しい奴なんていくらでもいるんだ！ 生きていけるだけお前はまだまだだ！ わかつたらさつさと金持つてこい！」というような言葉を事実だと思っていた。あるいは勇悟は自分が「かわいそうなやつ」だと思いたくなかったのかもしれない。

そうしてしばらく、仕事の合間に彼から一般常識や社会で暮らしていくための、本来なら親から教わるような知識を学び、自分の父親はおかしくて、自分の家庭はおかしくて、今の自分と父親の関係は家族ではない ということを認めた。

彼の助けを借りて、父との縁を切り引越しをして新しい、本当の「自分の人生」を始めようとした矢先 殺された。

と、まあこんな感じだね。

そうだね：『不幸だねー不幸だねーそんなキミに、魔法の力を与えよー。』って感じ？
まあ無作為抽出で転生者にしたから、偶然なだけだね♪

：そろそろスタートしますか。前世のことを説明したのは、今回の転生者くんが絶望している、ということ伝えるためだ。生きる気力を無くしている。そのために説明をしても彼は無反応だ。よって、今回の転生説明では、ひたすら説明だけが進む。

返答はない。会話はない。ただ、特典の説明をする天使のセリフだけ。
というわけで、お待たせしました、いよいよスタートです。

ちゃんかちゃんか ちゃんかちゃんか ちゃん ちゃん ちゃん♪

「次の方どうぞー」

「? 不思議ばうわー!」

ガチャ

「33番 黒岩勇悟さんですね。どうぞこちらに……ああ、なるほど」

「——あなたは今、私のことが見えていないのでしょうか、これも仕事なので、始めさせていただきます」

「黒岩さん、あなたは死にました。そして転生する機会を得ました。拒否権はありません。あなたがどう思っている、神様転生をしていただきます。この「転生」というものは『かくかくしかじかまるまるうまうま』というものです。ここでの記憶は転生した後、死ぬまで決して忘れることなく、一言一句記憶しておけるので、後々思い返してみてください」

「それで、黒岩さん。

あなたの転生番号は33番。ゾロ目です。なので他の転生者さんとは違い、転生する世界と特典の数がすでに決まっています。なのでその説明はカットさせていただきます」

「では黒岩さんの「アイテム特典」を決めます。

動かない、動けないようなので…手を貸していただきます」

ぺたぺたぺた

「手にくつついてきた くじを、特典にさせていただきます。

えーつと？」

5 6 1 . . . 1 3 1 3 . . . 6 6 5 . . . 3 4 8 . . . 1 4 1 4 . . . 4 4 2

「それでは特典の説明を ば。

まず561番『誠刀はかり「銓」』です。

これは『刀語』に登場する。伝説の刀鍛冶「四季崎記紀」の作りし完成形変体刀 十
二本が一本。

『誠実さ』に主眼を置いた刀といわれ、刃がなく 柄と鏝しかない一見すると刀には
見えない日本刀です。

分かると思いますがそれ故に武器として全く役に立ちません。どうしようもありません。

とがめさん曰く、『己自身を測る刀。人を斬る刀ではなく、己を斬る刀、己を試す刀、
己を知る刀、だから刃無き刀「無刀」というわけだ』そして刃がなければそれを守るた
めの鞘もいらず、『決意と共に握り、己自身と向き合うための柄と鏝だけがあればいい』

というわけだそうです。

そして、この刀も紛れもなく四季崎の刀。「持つと人を斬りたくなる」という変体刀の「刀の毒」が存在します。刃のない刀で、何を斬るといふのかは…」

「続いては1113番『プルリルの入ったモンスターボール』です」

「……………プルリルどころか、ポケットモンスターすらほとんど知識がない？ 黒岩さんマジですか？？ さすがに哀れすぎて放っておけないので、『ポケットモンスター』についても説明を行わせていただきますね？」

割愛

「——です。これで一般的なポケットモンスターの世界観、概要、設定等々については説明し終わりました。

さて、長々と失礼しました。それでは肝心の『プルリル』についての説明をさせていただきます。

プルリルは ゴースト／みずタイプ

分類：ふゆうポケモン

凶鑑の説明に関連付けて『水死体クラゲ』と呼ばれることもあるポケモンで、レベル40になるとブルンゲルに進化します。

生命エネルギーが大好物で、命を吸い取るポケモンです。
懐かせないと襲われる可能性があるので、ちゃんと世話をしてくださいね」

「3つ目の特典は665番『全て遠き理想郷』です」

「あー…、えっと、『かくかくしかじか』で、そのサーヴァントの持つ宝具の一つがこれです。

『全て遠き理想郷』は型月のドル箱こと青セイバーの宝具、最強の聖剣、約束された勝利の剣の鞘でランク：EXの結界宝具。

真名解放を行なうと、数百のパーツに分解して使用者の周囲に展開され、この世界では無い「妖精郷」に使用者の身を置かせることであらゆる攻撃・交信をシャットアウトして対象者を世界単位で遮断し干渉を不可能にする、この世界最強の守りをもたらすと
いいいます。

他にも所持者に加護を与え、傷を癒し、活力を与える力を持ちますが、本来の持ち主である彼女から魔力を供給されないと効力は微弱なものとなる———とありますがこの特典では本来の持ち主——担い手——が黒岩さん自身になりますので、この治癒能力もセイバー自身が持つのと同等の、まさしく不死身の再生力となります。

ただし、守りとしての真価を発揮するのは真名開放時なのでタイミングはきっちり計

らなければいけません。遮断という性質上、アヴァロンの結界を展開している状態では攻撃することもできません。これぐらいでしょうか」

「4つ目の特典は348番『ヘイ・ヤーのスタンドDISC』です」

「——省略——というわけでして、この特典は7部に登場したスタンド「ヘイ・ヤー」のスタンド使いとなることができる特典です。

ヘイ・ヤーの能力は「励ますこと」、それだけです。スタンド自身が自我を持っているタイプのスタンドで、励ましたりアドバイスをしたりするだけで、持続力を除けばすべてのパラメーターがEの貧弱なスタンドです。

あなたには、一番かもしれませんが。話し相手・相談相手にもなってくれるでしょうし」

「5つ目の特典は1414番『クロノス・M』マジカルです」

「これは『魔法少女オブ・ジ・エンド』に登場する亜種魔法少女オルタナティブ・マジカルという生体兵器の一体で、ステッキを使って『魔法』を使うことができます。

もつとも？　そもそも彼女たちはステッキが本体のようなものなのですが。というのも、彼女はステッキを所持している間はどれだけダメージを負っても再生して、ス

テツキを壊されると粉々になって消滅するという作りになってるからです。

クロノス・Mはステツキからの光線を当てたものを過去に飛ばす魔法少女。「まじかるー！」と発声し、それ以外の言葉は口にしません。外見は頭にヘッドホンのような物をつけ、丈の短いワンピースを着ていて、背中に小さな翼がある比較的人間よりの外見をしています。

ステツキは小さな星形のパーツのついたSF風的大型光線銃。そのステツキで発動させる魔法は時間の神の名前の通り、時に関するもの。

「ずばり『物や人を10年前の過去に飛ばすこと』です。ステツキが破壊されると過去に飛ばされた人間は現代に戻ります。

注意することは、この魔法によって過去に行き、過去を変えると、現在に影響が出るということですよ。例えば、10年前の過去から「今」に至るまでの間に親になっている人間を過去で殺せば、彼ないし彼女の10年の軌跡は消滅し、子どもの存在も消えてしまふことになります。時間の矛盾が起きないように、くれぐれも注意してください」

「最後、6つ目の特典は442番『闇のキバの鎧(キバツトバツトⅡ世)セット+ザンバツトソード』です」

「これは中々に当たりですよ。」

『かくかくしかじか（仮面ライダーキバについて説明）』

そしてこの特典がその、ファンガイアの王が纏うべき最強の鎧なわけです。

一般的には結界を使った『紋章ハメ』が有名なライダーですね」

「全身を赤く染めてしまうほどの強大な魔皇力を内包し、装着者であるキングの魔抗力を掛け合わせることで悪魔のごとき無類のパワーを発揮し、資質に呼応してその力を無制限にまで高める能力を持ちます」

「そして装甲は『核爆発を受けても傷一つつかない』キバ・エンペラーフォーム『インペリアルアーマー』の3倍の防御力を有し、エンペラーフォームのものよりも高純度の『宙』『水』『地』の魔皇石を持ちます。

そしてそんな闇のキバ、『仮面ライダーダークキバ』への変身を可能とするのが、誇り高き名門の二代目たる「キバットバットⅡ世」です。適格者たるキングの肌を噛み、ベルトとして取り付くことで魔皇力を活性化させ闇のキバの鎧を纏わせます。魔皇力を引き出しコントロールすることに長けているとされています」

「この特典には6本の『フエッスル』が付属しています。フエッスルというのはキバットバットⅡ世に噛ませ、吹かせることで効果を発揮する、ベルト両サイドのスロットに装備された召喚・覚醒笛です。

必殺技を放つためのウエイクアップ フェッスル。

キヤッスルドランを呼び出すためのドラッグフェッスル。

ブロンブースターを呼び出すためのブロンフェッスル。

そして封印のためのシールフェッスル3本の計6本です」

「シールフェッスルは原作と異なり、未調整であろうとどんな種族のものでも封印し、Ⅱ世の『闇の盟約』でキヤッスルドランに縛り付け、服従することを義務付けることができるようになっていきます」

「また、武装として『ザンバットソード』も特典中に含まれます。

これはファンガイア皇帝のために最高最良の魔皇石を贅沢にも削り出し作られた魔皇剣で、この世に存在する剣のうち最強の剣と言われる『最強の魔剣』です。それと同時に、ライフエナジーを常に求める『命吸う妖剣』でもあり剣自身が認める資格者でなければ扱えず、力に飲まれ暴走し、命を吸われて力尽きてしまう危険な代物です」

「この特典にはオマケ…というか、特典を十全に扱えるようにするための機能が備わっています。それはズバリ、『ファンガイアとして転生すること』です。それもただのファンガイアではありません。ファンガイアのキングにもふさわしいほどの圧倒的『力』と『才能』を持ったファンガイアの王子として転生してもらいます。何のファンガイアになるかは転生してからの楽しみです。まあ…ファンガイアになることで、本能でライ

フエナジーを求めて人間を襲うようになったりもしますが…別に黒岩さん的にはどうでもいいことでしょうか？」

「最後に『能力特典』のサイコロを…って、無反応にもほどがありますよー？」

まあいいですけど。手動かさないでくださいね？ 私が投げて、当たって跳ね返って出た目で『能力特典』決定しますから」

こんつ　ころころ

「あ。出目は3 『翻訳』ですね。

………黒岩さんの転生する世界的には外れ寄りですねー」
では転生です。

あなたは6つのと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

転生を実行します。それではよき人生を

「……………失礼します」

「はいな。入れ替わって神様だよ？ いえーい、ピースピース」

「……………ふうむ。これも無反応。思った以上に心の傷が深いようだね」

「これは転生しても自殺しかねない…かな？ 別にいつもならそれもそれで面白いと言
えたんだけどなー。今回はゾロ目転生だからなー、うー……………よし」

「黒岩勇悟、きみに『自殺防止』の呪をかけよう。

これで君は自ら命を絶つことができなくなった。そして、そうするよう他者に促すこ
ともね」

「さーて、んじゃあ、うん。

石投げちゃお♪ もといサイコロ投げちゃお」

どい！ ころころ……！

「はい、出目は4。よって、黒岩くんは『ハイスクールD×D』の、誰かにランダム憑依転生してもらいまーす。誰が出るかな誰が出るかなー♪」

「じゃんー！」

『木場祐斗』。

へー、ほー、ふーん。闇の“キバ”の鎧と“木場”祐斗で縁でもできたかね？」

じゃあ今度こそ転生だ。

時系列的には、木場裕斗が木場祐斗になるころ。少なくとも「イザイヤ」でなくなつたころ。悪魔に転生する前後に憑依転生ってことになるのかな？

まあ、がんばって。おもしろおかしく過ごしてくださいな。

ちやお（ゝゝ♪

☆□ 34番 小原直希 享年32歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します…?」

「どうも。えーつと? 34番 小原直希さんですね。こちらの席にどうぞ」

「は、はい……………」

「あの、ここは、どこ、なんででしょうか…病院ではなさそうですが」

「あー、はい。ここは死後の世界で、小原さんに第二の人生を送ってもらうため、サイコ口を振ってもらう場所となっています」

「……………は?」

「まあ、理解できないのも無理ないですが、

小原さん、あなたはお亡くなりになりました。記憶にありませんか?」

「な、何を言って…あ」

く混乱中につき省略く

「落ち着いたようですね。」

『かくかくしかじか』。今説明した神様転生をしていただきます」

「一つだけ聞いてもいいですか」

「どうぞ？」

「私の息子は、妻は、どうなりましたか」

「んー……。二人とも亡くなった後は輪廻転生していますね。記憶も洗い流されていきますし、あなたのごことは記憶にもないですね」

「……………そう、ですか」

「では、転生先を決めるサイコロ

はりきってどうぞー！」

「……………」

からん からから

?…??

「はいはい。出目は4と2『ポケットモンスター』の世界ですね」

「ポケットモンスター、ですか（よりによってポケットモンスターの世界か…あの時、ゲームソフトを買いに行かなければ…ッ！）」

「この転生先はシリーズごとでバリエーションがあるのでもう一度サイコロを、今度は一つだけ振ってみてください」

「はい」

ひゅ からん

「出目は3……『ポケットモンスターDPt』の世界に決定しました。

舞台としては北海道をモチーフとしたシンオウ地方ですね」

「……………」

「大丈夫ですよ。ポケットモンスターの世界はそこまで危険な世界でもありませんし。主

人公に任せていれば悪の組織も壊滅するし、あとは自由に生きられますから」
「はい」

「続いては転生特典です。

『かくかくしかじか』で、
「アイテム特典」の数をまずは決めてもらいます。どうぞ
「はい」

からん からから

「出目は2、くじを2枚引いてください」
「……………」

がささそがささそがささそ

1756・・・1748

「では特典の説明を始めさせていただきます。

一つ目は1756番『ゴルゴンの首』です」

「ゴルゴン…?」

「ええ、メドゥーサといえはわかりますか? 髪が蛇で、見たものを石に変えてしまう有名なそれです」

「ああ…、どこかで見たことが」

「まあ、この特典は神話のゴルゴンの首そのもの、生首ではなく、機械です」

「機械?」

「はい。ドラえもんの秘密道具の一つとしての、『ゴルゴンの首』です」

「ドラえもんですか…」

「息子さんとよく見ていたようですね」

「ええ、最近は…あまり見ることがなくなっていました…」

「このゴルゴンの首という特典は前面にラーメン屋の岡持ちのような蓋の付いた箱型の道具で、この箱の蓋を開けると不気味な咆哮とともに光線を発し、その光を浴びた生物の筋肉をこわばらせ、石のように固めてしまうという機能を持っています。

本体は箱の中に入った首型の石像で、目から光線を放ちます。固まった者を元に戻す

にはその頭に付いた蛇のような髪の毛の上に引つ張ればいいのですが、この石像は亀ぐらいのスピードで動くことができます。

なのでゴルゴンの首の中身を落とすと、襲われて出遭った者の体全体が石にされてしまう危険があるのでそこは注意してください」

「——落とすと、と言いますが、その場合は特典を戻せば、帰ってくるのではないのですか？」

「ん？ あ。たしかにそうですね。失礼しました」

「続いては1748番『光線じゅう』です」

「なんだか、名前と番号の近さから、考え付きますが、これも？」

「はい、ひみつ道具の一つです」

「やはり」

「この『光線じゅう』は原作に登場したものの、結局使われなかった道具で、一撃でマンモスを撃退するほどの威力を持っているという記述を神様が再現した特典になります。」

つまりは火力がすごい未来光線銃という見方で間違っていないせん」

「……………怖いですね」

「んん、まあ確かに。人に向けて撃てば確実に命を奪えるぐらいの威力でもありますからね」

「これは使いません」

「まあ、小原さんのものですし、好きに使ってください」

「『能力特典』を決めてもらいます」

「はい」

「サイコロを」

「はい」

ひゅっ からからから

「……………」

「あー。出目は6『はずれ』ですね。

ドンマイです」

「はあ」

では転生です。

あなたは2つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

☆■ 35番 福田正晴 享年10歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「こんにちは…」

「はいこんにちは。こちらの席にどうぞー」

「は、はい」

「35番 福田正晴くん、ですね？」

「はい」

「残念ですが福田さん、あなたはお亡くなりました。病死です、治療の甲斐なく…
というやつですね」

「やつぱり、そうなんですネ」

「はい。ご両親もたいへん悲しんでいましたよ」

「そうですか…」

「……………突然こんなことを言われて混乱するかもしれませんが、あなたには異世界に転生してもらいます」

「? どういうことですか?」

「『かくかくしかじか』そういうことでして、あなたには特典をもつて第二の人生を送ってもらおうということですよ」

「なるほど…? えっと、よくわからないけど、僕はもつと生きてかかった。だから、その転生します。頑張ります!」

「(話が早くて助かる) そう気張らなくてもいいですよ。」

「それではまず、サイコロを振って福田さんが転生する世界を決めていただきます」

「は」

「ではどうぞ」

「……………つや!」

「からからから」

「?…?」

「出目は2と3…『IS』の世界ですね」

「『いんふいにっすとすとらとす』？ それはどんな世界なんですか？」

「んー…端的に言つて空を飛べるパスワードスーツのようなものが実用化された世界です。ハイスピード学園ラブコメディという感じの、学園ものです。高校生になってからが原作スタートですね」

「パスワードスーツ…！ なんだかワクワクします」

「あゝ（言おうかな？ 言つていいかな？ 言おう）」

「まあ、その、そうは言つてもですね。そのパスワードスーツ、女性しか乗れないんです」「えっ？」

「あつとと、主人公は乗れますよ？ あと原作に関わるために福田さんも。でも世間一般ではそのパスワードスーツ『I S』が女性しか乗れないつので女尊男卑の風潮が生まれてですね」

「……………難しくよくわからないです」

「まあ、転生して大人になってから思い出してください。ここでの会話などは絶対に忘れませんか」

「はゝ」

「では続いて転生特典についてです。『かくかくしかじか』。

「アイテム特典」の数をまたまたサイコロの出目で決めてもらいます。よろしいですか？」

「大丈夫です」

「ではどうぞ」

からんからから

「出目は3、なのでこの特典くじを三枚引いてください」

「はい……………」

がさ(こ)そがさ(こ)そがさ(こ)そ

1 1 5 9 . . . 5 6 8 . . . 3 2 4

「はい。では特典の説明をさせていただきます。

まず一つ目1159番『ハリーセンの入ったモンスターボール』です」

「モンスター？ ポケモン？」

「その通り、ポケモンです。これは『ポケモンがあらかじめ入った』モンスターボールという、割と無理やりな特典です。」

この系統では、ポケモンを出して触れ合ったり指示を出してバトルをしたりすることができます。特典を戻せば傷ついたポケモンは回復します」

「バトルって？」

「野生動物や人間だったりですね。バトルに勝つてレベルを上げればゲームと同じように能力値が向上し、使える技が増えたりします。」

この系統の特典のボーナスとして、特典のHPポガモンや使える技などがまるでゲーム画面のように視界に浮かび上がるという能力？も与えられます」

「わざとか、よくわからないので使います。それで、ハリーセン？ってどんなポケモンなんですか？」

「ハリーセンは第二世代『金・銀』から登場したポケモンで、ハリセンボンをもじっている通り、水を吸って膨らみトゲトゲになったりします。分類は『ふうせんポケモン』、タイプはみず・どく。」

うろこが変化したとげとげには毒があり触れると気を失ってしまうので、懐いてないときは注意してください。」

なみのりなども覚えますが、たかさ0.5m つまり50cmと小さいので、ハリーセ

ンに乗って…とかは難しいかもしれませんが。水を吸って膨らんだ状態なら可能でしょうか？」

「試してみます」

「ほかに何か質問は………ないようですね。では続いて二つ目の特典の説明をさせていただきます」

「はい、お願いします」

「568番『見えない剣』です」

「見えない剣？ それだけですか？ なんか」

「名前つぼくない ですか？」

「はい…」

「もともとの原作の中で名称が明かさず、ただ見えない剣と呼ばれていたもので、このようになっています。変な感じなら、後で名前を付けてやってください」

「え、はい」

「説明に移ります。この見えない剣は西尾維新先生の書かれた〈伝説〉シリーズ一作目『悲鳴伝』に登場した地球撲滅軍・第九機動室副室長、コードネーム『蒟蒻』こと花屋瀟しやう

に支給された科学兵器。刀身・柄だけでなく影さえも見えないため、間合いが把握できない、文字通りの『見えない剣』です。

主人公の空々そらから 空くうに支給されたのが透明化スーツ『グロテスク』なので似たような技術が使われているんでしょう。バッテリー式ですが、いったん特典として仕舞えば充電されますのでご安心を。透明化は大体3時間もちます」

「兵器…どう使えば」

「別に使わなくてもいいんですよ？ 特典引いてもそれを全く使わずに一生を終えた転生者の方も今まで何人もいましたし」

「そうですね、そうですね」

「最後の特典は324番『ボヘミアン・ラプソディー』のスタンドDISCです」

「すたんどディスク？」

「ええまあ、ジョジョの奇妙な冒険とか知りませんよね。ざっくり言うくと、スタンドとは守護霊のようなもので、スタンドを持つているものには見ええず、触れず感じられない。そしてスタンドはそれ特有の何か能力を持っていて、スタンドの持ち主——スタンド使いはその能力を使うことができるって感じですよ。わかりましたか？」

「なんと…なく…それで、ディスクは」

「はい。この特典では先に説明したスタンドを発現できるD I S Cが特典となっているんです。この特典で得られるD I S Cを自分に挿入すれば、スタンド使いになれる…という仕組みです」

「挿入？」

「差すつてことです。頭でも腹でもどこでもいいですが。何も自分に差さず、ほかの人や動物に差してスタンド使いにすることも可能ですよ」

「え?! ……痛くないですか？」

「大丈夫です。まあ心理的に、異物感を感じることはあるかもしれませんが。全く問題ないです」

「ふんふん…」

「で、この特典によって得られるスタンドは『ボヘミアン・ラブソディー』といいます。このスタンドはかなり特殊です。能力全振りで、案山子同然に動かせません。

【破壊力―なし／スピード―なし／射程距離―∞／持続力―A／精密動作性―なし／成長性―なし】とされていて、明確なヴィジョンもなく、作中お決まりのスタンドによる格闘などできません」

「…」

「そしてその能力というのは…アニメ・漫画・絵画のキャラクターをこの世に実在化させ

ることです」

「キャラクターを実体化？」

「要するに二次元の存在を三次元に呼び出す力です。射程距離∞となっている通り、この能力は全世界に及び、能力を発動すると、世界中の創作エネルギーを使って全世界のキャラクターが実体化します。」

その後実現化されたあるキャラクターを好きな人間はそれを目撃したら、『魂』をキャラクターの世界に引きずり込まれ、その物語のキャラクターとしてストーリーを追体験することになります。そんな能力です」

「それは……その、すごいですね」

「はい。ただしデメリットもあります。物語の中に魂が入っている間、肉体と精神は分離しますので、帰る肉体がボロボロになって帰れなくなるかもしれません。それはまあ、永遠に能力を解除しなければ問題ないかもしれませんが、あらゆるキャラクターを実体化するのの中には殺人鬼だったり悪人だったり、ひどいキャラも混じっていて、そんなキャラクターの被害を受ける人が多数現れるかもしれません。」

また、ストーリー参加にしても、肉体と分離した『魂』はその物語と同じキャラクターの結末をたどることになります。どんな物語に入るかは、潜在意識で決まる節があり自由になりません。原作においても童話『白雪姫』の王子様になれたものがいれば、『狼と

七人の子ヤギ』の狼になってしまい腹を裂かれ石を詰められた者もいました」

「……………こわいです」

「使えば、世界中に混乱と破壊をまき散らしてしまいう能力です。なのでもし使うのならばそこも覚悟して使うのがよろしいかと思えます」

「はい……………」

「では『能力特典』です。サイコロを振ってください」

「はい」

からんころころ

「あく……………出目は5『○○○コントロール』です」

「まるまるまるってなんですか？」

「……………いずれわかりますよ。恥ずかしいので説明を放棄させていただきます」

「えっ、えー…？」

では転生です。

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございますましたー」

「はいどうもー」

☆□ 36番 後藤旭 享年22歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します」

「36番 後藤旭さんですね？ こちらの席にどうぞー」

「はい」

「後藤さん、まことに残念ながらあなたは死にました」

「ですよね」

「はい。つきましては転生をしていただきます。神様転生というやつですね」

「ですよね！」

「……流れとしては、転生先を決めていただき、転生特典を選択。そしてそのまま転生、第二の人生をスタートしてもらおうという感じですよ」

「おー！」

「ただ」

「お？」

「転生先や転生特典を後藤さんが自由に選ぶことはできません。かといってこちらが選ぶということでもありません」

「というത്？」

「サイコロの出目とくじの番号によって、転生先と転生特典は選ばれます。つまり良い転生先、良い特典に恵まれるかは後藤さんの運次第ということになりますね」

「なるほど」

「転生先について『かくかくしかじか』となっております。出目6と4か6が出れば転生先は自由に決められるということですね。後藤さんはどれを出したいですか？」

「そうですね……やはり『自由』が一番ですが、それ以外このリストの中から選ぶとすると、ポケットモンスターの世界でしょうか」

「ほほう？」

「ポケモントレーナーになりたいというのが理由ですね。イトマルとかアリアドスとか、虫系のポケモンと家族になりたいなって」

「………ほ、ほほお。虫タイプですか。あ、サイコロです。どうぞ」

「はい。……………」

からからから

?…?

「あく…出目は6と3 『なんちやってファンタジー世界』に転生です」

「なんちやって」

「はい。まあ、魔王と勇者がいて、エルフやドワーフ獣人などなど、ファンタジーなテンプレ要素が盛りだくさんの世界です。『中世ヨーロッパを舞台にしたファンタジー小説』の概念の具現的な、そんな世界です。リアル中世ではなくファンタジー中世ですね。よくあるやつです」

「イメージできました、なんとなく。危険とかは、どんな感じなんでしょうか」

「そうですね。少なくとも成人するまでは、ほとんど危険はありませんよ。これは転生者さん全員に言えることで、後藤さんも例外ではないのですが、貧しくもない優しい両親のいる家庭に産まれることになりましたので」

「つまり、成人したら危険がある？」

「ノーコメントで」

「わかりました」

「続いて、転生特典を決めていただきます。『かくかくしかじか』

『まるまるうまうま』」

「では『アイテム特典』の数を決めていただきます。どうぞ

「……………」

からんからから

「出目は3 くじを3枚引いてください」

「はい」

「(ぞ)(ぞ)(ぞ)(ぞ)そ

30・・・85・・・2332

「では特典の説明をさせていただきます。

まずは30番『イヌイヌの実 モデル「狼」^{ウルフ}』です」

「なるほど」

「ご存じなのは理解していますがこれも仕事なので、せめて短く説明をば。

この特典は漫画『ONE PIECE』に登場する悪魔の実の一種で動物系の実です。

食べればカナヅチになったりするデメリットと引き換えに身体能力を強化した獣・獣人の姿になることができるようになります、以上」

「はい」

「あ、『無生物に実を食べさせたい』なら実をつぶして果肉を塗りたくってください」

「おおぅ…わかりました」

「続いては85番『モサモサの実』です」

「……………被りましたね」

「被りましたね。普通の人間が食べられる悪魔の実は一つだけなので、仮に後藤さんが両方の実を食べたら爆死します。一応言っておきますが」

「はい」

「モサモサの実は超人系の悪魔の実、能力は植物の成長を促し、操ることができること。映画で見たような奇妙な踊りはいらぬことにしたのでご安心ください」

「よかった。さすがにあれは恥ずかしいです」

「あつはつは。これぐらいでしょうかね。次に行きます」

「はい」

「最後の特典は『No. 075 奇運アレキサンドライト』です」

「?.....あ〜...」

「後藤さんがお気づきになられた通り、『HUNTER×HUNTER』グリッド・アイランド編に登場した指定ポケットカードの一枚です」

「あれですよ、忍者? 山賊? の」

「です。カード化されているので「ゲイン」と唱えることで実体化し、効果を発揮します。このカードのランクはA カードの説明欄によると

『所有している者は他の者が決して味わえない貴重な体験をすることが出来る。幸運か不運かは選ぶことが出来ないが.....』だそうです」

「まさに奇運.....つてことですか」

「そうですね。いうならば物語発生装置ともいえるかもしれませんが。いい意味でも悪い意味でも。普通では味わえない楽園の体験になるか、普通では味わえない地獄の体験になるか...博打ですね」

「使わないほうが、いいんでしょうか」

「いやあ、どうでしょうねえ...絶体絶命のピンチなんかでは使えるんじゃないですかね? ピンチから脱しないと『奇運』に出会えませんし。危機を脱することが『奇運』と

なるかもしれませんが」

「なるほど…」

「では『能力特典』を決めていただきます」

「はい」

からからからからん

「出目は1『アイテムBOX』です」

「ファンタジー必須能力が来るとは…ありがたいですが」

「旅をするにはうってつけですね。荷物を持つ必要も、食料の劣化を気にする必要もないです」

「ですね。でも私はなるべく実家で暮らしていきたいなあって」

「そうですね…そうですね…」

では転生です

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を」

「ありがとうございます」

「行ってらっしゃいませ」

☆□ 37番 田中一喜 享年11歳の場合

「女性体で対応する気分じゃないな。見た目男性体になろう。」

よし、次の方どうぞー」

ガチャ

「……………」

「(あら可愛い) こんにちは。37番、田中一喜くんですね? こちらへどうぞ」

パターン キイ・・・

「えと……………」

「はいはい、大丈夫。説明しますよ。一喜くん、悲しい事ですが君は死んでしまいました」

「えっ……」

「そして、死んだきみの魂が今ここにあり、ここから君は新たな人生をスタートすることになります」

「…ぼくは何で死んだんですか?」

「死んだときの記憶がないのですか?」

「はい」

「ふむ……？ えーとですね……………」

……………はいはい、なるほど」

「……………」

「聞きたいですか？」

「（なんだろう……でも）はい、聞きたいです」

「はい。一喜くんの死因、死んだ理由は学校の階段から落ちて頭を強く打ったせいで即死、ですね」

「全然覚えてないです。でも、そうなんですか」

「はい（他殺だったのは……伝えてもしようがないし伝えないでおこう）」

「『かくかくしかじか』で、今言ったような漫画やアニメの世界に転生してもらいます」
「うん」

「そのために、一喜くんにはサイコロを振って転生先とかを決めてもらおうと思うんだけど、わかりましたか？」

「はい、わかりました。だいじょうぶです」

「よし。ではまず、転生先を選んでもらうよ。サイコロね」

コロコロ…

「うくん……………んっ」

からんころころ

?…??

「出目は1と5 『魔法少女リリカルなのは』シリーズだね」

「?」

「この出目はもう一つ分岐があるから、今度は青と赤のサイコロのうち青いほうだけ、一個だけ投げてみて?」

「? はい」

……………ひゅっ

「出目は1・5—1 『魔法少女リリカルなのは（無印）』だね」

「……………?（なにそれ）」

「えっと、これはですね…異世界から魔法トラブルが降ってきて、現地の少女が魔法少

女に変身して協力、リリカルでマジカルに世界を救うお話…かな？（ネタバレはつまらんし、ぼやかすところな感じの説明かな）」

「ううん…？ 魔法少女が戦うやつなんですか…？」

「そうそう」

「リリカルなのはの“なのは”って」

「主人公の女の子の名前だね」

「分かりました」

「まあ、関わりなければ危険はないよ。ストーリーが進むうちに物語の舞台は地球じゃなくて異世界になっていくから」

「なんだ、そうなんですか」

「そうなんです。じゃ、次行こうか」

「転生特典は『かくかくしかじか』で“アイテム特典”の数を先に決めてもらうよ
「はい」

からんからから

「出目は4。特典のくじを4枚引いて」

「はい」

がさ(ぎ)そがさ(ぎ)そがさ(ぎ)そ

525・・・259・・・2211・・・1682

「特典の説明始めます。」

一つ目は525番『ゲネシスドライバー+チエリーエナジーロックシード+シドロックシード+スイカロックシード×3』です」

「ゲネシス…なんか思い出せない…」

「仮面ライダー鎧武に出てきた、錠前ディーラーのシドが変身した、仮面ライダーシグルドの変身セットです」

「シド…？ あー、あの、あの…帽子の、アレロックシードのことです売ってた人！」

「うん。ロックシードを鎧武たちに売ってた黒い服にひげ面帽子のあの人のだよ」

「たしか、腕が毛むくじやらだった？ ん？ 本当に変身できるの?!」

「イエス。変身できます」

「うおー……………」

「シドロックシードは、『S』と書かれたやつで、それを変身した時に持っている弓創世弓ソニックアローのことですに着けるとスイカロックシードを遠隔操作できる。

と説明はこんな感じで、色々自分で試してみた方が楽しいでしょうし？」

「(うんうん)」

「二つ目の特典は259番『アクア・ネックレスのスタンドDISC』です」
「??？」

「スタンドというのは、ジョジョの奇妙な冒険という漫画で出てくる『かくかくしかじか』というようなものなんです」

「えっと、はい、はい。特典でぼくが貰えるのは、そのスタンド能力を得ることのできる『DISC』で……頭とかに差し込めばぼくがスタンド使いになれるん、ですね？」

「その通りでございます」

「? ……えーっと、それでその、アクア・ネックレスってのは? ……どんなのなんですか？」

「アクア・ネットレスは水と同化して出現する遠隔操縦型のスタンドです。同化した水の量によってスタンド自体のサイズも変わり、『水と同化』なので水蒸気にスタンドを同化させることもできます。といっても、遠隔操縦型の宿命で、あんまりパワーは強くないんですが…。特徴として、物質同化なので他の一般的なスタンドと違いスタンド能力者以外にも見ることができ、壁をすり抜けたたりすることもアクア・ネットレスはできません」

「そうなんですか…（あんまり使えなさそう）」

「他には…溶け込んだ水ごと色や形なんかを自由自在に変えることができます」

「はあ（攻撃できるスタンドじゃないんだな…弱そう）」

「三つ目は2211番『オドリドリ ぱちぱちスタイルの入ったモンスターボール』です」

「モンスター…ポケモン？」

「はい、ポケモンです。サン・ムーンで登場した鳥ポケモンで分類は『ダンスポケモン』」

「このオドリドリは『ぱちぱちスタイル』と呼ばれる姿でタイプは『でんき・ひこう』、チアリーダーのような黄色い鳥です」

「ポケモンまで特典になってるんですね…」

「ええまあ、神様の力技ですね。「生き物を特典というのはどうなんだ？」とおっしゃられて、特典のリストに生き物系は入っていなかったのですが…主義をこじつけで曲げになつたらしいですね。」

特典と言えど生き物なのでレベルアップや回復をします。それには『かくかくしかじか』というようにしてください」

「わかり、ました（どんなわざ覚えるんだろう…？）」

「最後、四つ目の特典は1682番『かくれマント』です」

「？」

「この特典はご存知ドラえもののひみつ道具の一つで、「透明マント」と似たような道具です」

「…ってことは、それに身を隠すと透明になるってことですか？」

「はい。周りから自分の姿を隠すマント…というわけです。」

かくれマントは透明マントと違い、足とかが全部隠れていなくても完全に透明人間になれます」

「へー（………悪い事には使わないようにしよう。ぼく知ってる、天狗の蓑の話とか読んだし。悪いことに使ったらばれるんだ）」

「続いては『能力特典』です。サイコロお願いします」

「はい……」

からんからから

「あっ」

「出目は6ですね……『はずれ』です」

「あ……」

それでは転生です。

あなたは4つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい」

★ ■ 38番 石松幹 享年18歳の場合

「次の方どうぞー」

「あー…失礼します?」

「はい、38番 石松幹みきさんですね? こちらにどうぞー」

「あつ、はい」

スタスタスタ

チャ・・・

「…(神様転生かな、38番ってなんだよ、バトロワか? 集団転生か?)」

「石松さんのお考えの通りです。神様転生ですね」

「えつ、…あー、心の声とか聞こえてます?」

「はい、ばつちり。ちなみに番号は転生させた人の通し番号であつて、〃殺し合いをしてもらつて勝者を決める〃とか、そういうものではありませんのでご安心を」

「マジで聞こえてるんですね…(神様すげえ。あとすごいおっぱい…やべ)」

「私は神ではありません。『かくかくしかじか』このような手順で転生してもらいます」

「なるほどー…そんなのがあつたんですねー…いや、僕二次小説? とか知らなかった

んでびつくりですよ。これって、ある作品の世界に介入するってことですよね」

「まあそうですね」

「なろう小説とかは駅前の本屋で立ち読みしてたんで、神様転生自体は分かってたんですけど、いや……………」

「それはそれとして、ともかく。石松さんにはこれからサイコロとくじで『転生先』と『転生特典』を選んでもらい、転生してもらいます。拒否権はありません」

「拒否なんてしませんよ。未練ありまくりですからね、僕。次こそは！ って死ぬ直前に考えて死んだんですよ？ このチャンスを逃すわけじゃないですよ」

「未練ですか？」

「はい。未練というか……後悔というか……」

受験勉強のために必死で勉強して合格したのに、まさか雪下ろし中に足滑らせて亡くなるとか、ふざけんな馬鹿と言いたくなる最期でしたから……………。次こそはマシな人生を送りたいんですよ」

「なるほど」

「とりあえず顔が可愛くて胸が大きくて僕に逆らわず、僕が気を使わなくても僕に一途な、嘘をつかずに従順な美人の彼女が欲しいですね」

「……………（お、おう）」

「奴隷とかでもないんですけど、やっぱり女侍らせてグハハ！　って笑いたいです。ずらつと並べておっぱ——」

「えい」

「ピシャーン！　ゴロゴロ！」

「あばばばばばばば」

「自重してください」

「ぐはっ…すみません。心読まれるならぶっちゃけていいかなと…あと性癖ぶっちゃけるのけっこう気持ちいい」

「もう一回雷落としましょうか？」

「はい」

「では転生先を決めていきます。サイコロをどうぞ」

「…。普通ですね」

「はい、百均で買ってきたサイコロですから」

「百均?!」

「どうぞ」

「おっぱいいっぱいの世界でありますように！」

からんころころころ

?...?

「出目は5と4…『自由選択』ですね」

「つまり転生する世界を僕の好きに選んでいいってことですか？」

「はい」

「よっし！ んー…でもなー…好きに選んでいいと言われると（…候補が全然浮かばないなー…5年間漫画やアニメから離れて生きてきた弊害がつ）」

「……………（あー…だめだな。ビジュアルがいまいちだ。エロい女の子が出てくる系のやつ思いつかない…）」

「……………！ あゝ…」

「？」

「あの、タイトルが思い出せないんですけど…ダメですかね」

「検索しましょうか？」

「は？ いいんですか?!」

「見つければですが。」

キーワード言ってください。ネットで調べますので」

「ネット…。（まあいいや）」

えっと、アフタヌーンで連載されました」

『『アフタヌーン』…』

「で、牛の頭の女が出てきて、全二巻で打ち切りエンドみたいな感じでした」

『『牛頭の女』…『全二巻』…『打ち切り』…出ました』

『『九泉之島』です』

「見せてください…：…：…これですこれ！ あー懐かしい。小学生の頃立ち読みして女体がめっちゃエロいって思ってたんですよ、これですこれ、これにします」

「この世界に転生でよろしいのですか？」

「ええ。覚えてる範囲で、何とかなると思います。バイオレンスだった気もしますが、特典があれば大丈夫ですよ」

「…：…：…そうですね（ハズレを引かなければ）」

「では、転生特典を決めていきます。『かくかくしかじか』、まずは“アイテム特典”からです。サイコロを一つどうぞ」

「ろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく」
からからから

「出目は4…4枚くじを引いてください」

「4かあ…まあいいっす。いいのが出てくれれば。これ引けばいいんですね？ 一枚ずつ？」

「どうぞ」

がさ(こ)そがさ(こ)そ

557・・・973・・・25・・・1753

「はい。では特典の説明をさせていただきます。」

「一つ目は557番『双刀「鎚」』です」

「……………刀語ですか！」

「ご存知でしたか」

「ええ、小学生の頃にアニメ見ました。それだけで、ほとんど覚えていないですけど。えつと…なんでしたっけ」

「双刀「鎚」です」

「そうそれ、かなづち鎚。しろい幼女が持ってたことは覚えてるんですが、どんなのでしたっけ」

「これは作中で日本最高の刀鍛冶、四季崎記紀が作りし完成形変態刀十二本のうちの一本で、重さに主眼を置かれた刀です」

「はあ」

「まあ簡単に言うと、めちやくちや重くて持ち上げることもしかない石の塊です」

「え？ 選ばれしものだけが持つことができるのかさういうのなんですか？」

「いえ違います。普通に重すぎて持ち上げられないということです。多分石松さんも無理です。超怪力の凍空一族でもなければ」

「あー…つまり…」

「はい、ハズレですね。文字通り使えない特典です」

「oh……………」

「次行きましょう」

「二つ目の特典は973番『ボックス匣兵器トルペディネ・フルミネ雷エィ十雷のリング』です」

「トルペ…えっ？」

「失礼しました。雷エィです」

「ボックス…てのは分かります。リボーンですよね」

「はい、それです。それに出てくるアニマル型兵器が石松さんの二つ目の特典です」

「ふんふん…。で、その雷エィってのはどんなのですか？」

「雷エィというのは、家庭教師ヒットマンREBORN! の未来編に登場したレヴィ・

ア・タンが所持していた、エィ型匣兵器。」

雷の炎を身にまとい飛行することができ、纏った炎を増幅する能力も備えています。ちなみにエイの腹にくつついて石松さん自身が飛ぶことも可能ですよ」

「まじですか。空を飛ぶとか、ロマンですね…。」

ボックスって、手のひらサイズの箱でしたよね」

「はい」

「で、その箱に、指輪から出る炎を “カチツ” と注入すれば、出てくるん、でしたっけ？」

「そうですね。補足すると、炎は死ぬ気の炎と呼ばれて、この特典についてくるリングを指にはめて覚悟を炎にするイメージをすることで炎が灯ります」

「なるほど…いやー、結構覚えてるもんですね。自分でもびつくりですよ」

「もう説明はいいですか？」

「あ、もう一つ！ たしか…あ…死ぬ気の炎？ って、ものによつてなんかが違ってましたよね。それ教えてください」

「はい。石松さんが身につけることができる雷属性の炎の性質は「硬化」です。炎そのものは純度が増すほどに鋭く、炎による強化では純度が増すほどに硬くすることができます。ようになる。そんな感じですよ」

「なるほど、分かりました」

「三つ目は25番『ノロノロの実』です」

「お！ 悪魔の実ですか！」

「はい。ONE PIECEの能力者の力の源、悪魔の実の一つ。原作ではフォクシー海賊団船長、銀ギツネのフォクシーが食っていたものです」

「これも覚えてますよ、小学生の頃児童館でワンピースあるだけ全部読んでましたから。あれですよ、ボクシングやったやつ。たしかノロノロビーム？ とかいうのが出せたんですよね」

「はい。これを食べた者は、体から『ノロマ光子』と呼ばれる未知の物質により構成された光線を出すことができるようになります。この光線を浴びた物体は生物・非生物を問わず30秒間動きが非常にのろくなってしまう、ノロノロの間に受けた衝撃などは蓄積し、解除と同時に一気に炸裂します」

「（これってもしかして、かなりの当たり能力では…？）」

「つまり時間停止AVみたいな感じですか？」

「……………まあそうです。といっても、ノロノロ状態でも相手には意識がありますので、そ

ういうことをしたら解除と同時にぶっ飛ばされますよ？」

「なーに、そんな時は殺しますよ」

「…そうですね。ちなみにノロマ光子は光の粒子なので鏡で反射させることができません。まあ試してみるのも面白いかもしれませんね」

「分かりました！ ノロノロにしてその間に全身縛り上げて身動き取れなくしてからやります！」

「………はい、あなたの人生ですし、好きになされたら良いかと」

「はい！ 好きにします！」

「最後、四つ目は1753番『心ふきこみマイク』です」

「なんです、それ？」

「ドラえもんのひみつ道具の一つです」

「あー、確かに響きがそんな感じですね」

で、どんなことができるんですか？」

「では、その道具の使われた回がどんな話を話します」

「まずジャイアンのがび太に「ボールぶつけやがってこの野郎」と怒ってきます」

「ボールを投げたのはスネ夫で、のび太は「自分じゃない」と主張し、見ていた二人の男の子も「スネ夫が投げた」と言います」

「しかしスネ夫がジャイアンをいいように言いくるめてしまったので、結局のび太は殴られ、周りのみんなも何も言えなくなってしまうました」

「いつものように泣いて帰ったのび太。するとママから宿題をしろと言われ、「さっきのことが頭にあって集中できない」と泣きごとをドラえもんと言います」

「ドラえもんはそんなのび太に「心ふきこみマイク」を出します」

「これで相手にさせたい事を吹き込むと、相手はその通りのことを行ってくれるのだ、と」

「試しにママに「宿題をしなくてもいい」と吹き込んでみると、ママはその通りにのび太を遊びに行かせてくれました」

「ジャイアンを謝らせようとさっきの二人に「ジャイアンにもっと強く言って」と吹き込んでみるものの、ジャイアンは強情で謝ろうとしない」

「なので直接ジャイアンに「謝れ」と吹き込みに向かうのび太」

「対面したとたんジャイアンが殴り掛かってくるが「暴力はいけない」と吹き込むことで停止させ「謝らずにはいられない」と吹き込む。強情なジャイアンは一回では言うことを聞かなかつたので、何回も吹き込む。するとようやく謝ってもらうことができた」

「そこでやめとけばいいものを、味を占めたのび太は調子に乗ってスネ夫のラジコンを借りたり、しずかちゃんに逆立ちをさせたりしてしまう」

「ドラえもんはマイクを奪つてのび太に宿題をやらせる。ただやらせるのではなく、「宿題をやりたい！つらくても昼寝したくても、宿題が終わるまでやめないぞ」と吹き込んでやらせたのでのび太は大変つらい心境で宿題をやる羽目に」

「ところが嫌がりながらも宿題をするのび太を見てママは感心し、ご褒美にごちそうを作ってくれることを約束してくれるのでしたとさ」

「こんな感じです。わかりましたか？」

「んー、なんとなく」

「誰かに何かをさせたい場合、このマイクを使ってその相手にその事を吹き込むと、相手はその通りに実行します。「心ふきこみ」と名前にあるように、それをやりたいという心を吹き込むことができるので、無理やり何かをやらせるような他の道具と異なり、相手

は心からそれを実行したいという気持ちに。相手がその事に抵抗する場合もあり、そんなときは連呼して吹き込む必要がある、と」

「今度は分かりましたか？」

「……………つまりこのマイクで『僕とS〇Xしたくてたまらない』と吹き込んだり『好きで好きでたまらない、今すぐ抱いて！』とか吹き込めば最高つてことですね」

「まあ、そういう使い方も……………もういいです。好きにしてください」

「好きにしますつて もー」

「次に『能力特典』を決めます。サイコロをどうぞ」

「はい」

からんころころ

「(ざらつとといったな) 出目は3 『翻訳』ですね」

「あちゃー、5のちんこ出したかったー。絶倫なりたかった…」

「……………（こいつぶつちやけすぎだろ…恥がないのか）」

「では転生です」

あなたは4つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは

ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「いってらっしゃいませー」

「いってらっしゃいますよ。」

「ありがとうございます」

☆■ 39番 佐橋之二 享年24歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します」

「はい、39番佐橋之二ゆきじさんですね？ こちらの席にどうぞ」

「……………」

「……………ここは、一体」

「ここは転生準備室です。現世にて死した人の魂が神によつて掬い上げられ、転生するための受付のようなところですね」

「…？」

『かくかくしかじか』ということですが、その神様転生の転生者に、佐橋さんはなつた…ということですよ。わかりましたか？」

「……………理解が追いつかないのですが、そうですね…。説明を受ける間に自分の最期も思い出してきました。現実なら受け入れます…」

「はい。では、先ほども説明させていただいたように、佐橋さんにはこれからサイコロとくじで転生先と転生特典を決めていただきます。これがそのサイコロです」

「青と、赤ですか（ラッキーカラー紫だったな…紫色のもの身につけていなかったから…なんて、そんな馬鹿なことあるわけないか）」

「まずは転生先をその二つのサイコロの出目で決めます。どうぞ」

「はい（こんなものに人生を委ねるとか…なんだろうな）」

からん　ころころ

?…?…?

「はい、佐橋さんの投げたサイコロが出した目は2と1。『ONE PIECE』の世界に転生してもらいます」

「ワンピース、ですか」

「ご存知ですよね？」

「まあ、少しは。最近のは知らないですけど、アニメ…子供の頃はNARUTOの裏番組で見ましたし。漫画も…えーっと…あのー、あれですあれ、最初の船が燃えるあたり

まで読みました。あとは…テレビでやった映画とかを何度か」

「ふむふむ…（詳しいことは分からない人か）」

であれば、転生特典に移りたいのですが、よろしいですね？」

「あ、はい。お願いします」

「転生特典は『かくかくしかじか』で2種類あります。まずは『アイテム特典』の数を決めていきたいと思います。サイコロどちらか一つを振ってください」

「はい（どう生きるかはともかく、たくさんあつて悪いものじゃない…なら）」

ヒュ

からん からからから

「！」

「おお、おめでとうございます。出目は6、なので『アイテム特典』は最大数の6つで

す

「……！」

「それではくじを6枚引いてください」

がさ(そがさ(そ

がさ(そがさ(そ

2298・・・1334・・・417・・・970・・・1931・・・476

「では特典の説明をさせていただきます。」

「一つ目の特典は2298番『No. 041 超一流パイロットの卵』です」

「えつと……………」

「これは『HUNTER×HUNTER』グリードアイランド(G・I)編に出てきた指定ポケットカードの一枚で説明文によると「1日3時間手の中で温めることで1年後(10年後)に現実となつて孵る卵。温める時に願う気持ちが強いほど早く孵化する」と書かれたカードです」

「……………」

「「ゲイン」と唱えるところのカードは説明通りの力を持った物品に変化します。これの場合には卵ですね」

「つまり、これを使うと卵が出てきて、それを孵化させることで「才能」が手に入る、と？」

「才能も有りますが、将来もですね。この特典の性質は運命決定なので、この特典をちゃんと使うことができた場合、未来が決まります。超一流パイロットとしての将来が」

「……………パイロット、ですか」

「気乗りしませんか？」

「ええ、まあ…というかそもそもワンピースの世界って飛行機あるんですか？」

「あれ？ そういえばそうですね…（エネルギーのあれくらいかな…？）」

「どうなるんですか？」

「申し訳ありません、私にはわかりかねます……………」

「そうですか（わからないなら使うのは怖いな。ハズレか）」

「二つ目の特典は1334番『モノズの入ったモンスターボール』です」

「モンスターボール？ ポケモンですか？」

「神様が選んだ特典には基本的に命あるものはないのですが、「中身が入ってるだけだから、偶々中にポケモンが入ってるモンスターボールが特典なだけだから」と」

「は、はあ……………」

「さて、モノズですが、これはポケモンシリーズの第五世代に当たる『ポケットモンスターBW』に登場したポケモンで

ぶんるいは『そぼうポケモン』。タイプはあく・ドラゴン。

進化するドラゴンポケモンの系譜ですわね」

「ボーマンダとか、そういう感じですか」

「そうですね。それと同じで進化するにしたがってドラゴンっぽくなっていて、最終的に空を飛べるようになる感じですよ。モノズからジヘッド、サザンドラ。最終進化まではレベル64までいかないとできませんが、それに見合った強さを持ったポケモンです」

「ドラゴンですからね」

「はい、ドラゴンなので。」

見かけはメカクレ系の四足歩行の首の短いブラキオサウルスみたいな体型のかわいらしい感じですよ。ですが『そぼうポケモン』と言われてるだけあって性格は粗暴なもの、なんにでも噛みついて体当たりする性質を持っています。これは目が見えないためなのですが、そのため下手に近づくと危険なポケモンともされています。

進化すると「ぼぼうポケモン」だったのが「らんぼうポケモン」になって「きょうぼうポケモン」になります。この特典のポケモンにはゲームを基にしたなつき度システムがついているので、ちゃんとスキンシップをして愛情をこめて育てれば暴れたり噛みついたりはしませんのでご安心を」

「サトシのリザードンのようにはならないですね、よかった」

「そうですそうです。ただし特典といえども生き物ですから、大事にしてあげてくださいね」

「はい」

「それで、進化のためのレベルアップは生き物を倒すことで経験値を得て、というシステムです。疲れたりダメージを受けたりしたらボールに戻してしまってください。佐橋さん自身に特典として戻せばHPやPPは全回復します」

「私自身がポケモンセンターみたいなものということですか」

「質問があるのですが、ポケモンって「わざ」がありましたよね？ それはどうなるんですか？」

「覚えられるのがレベルわざだけになります。モノズが覚えているわざは指示を出すときに頭に浮かぶようになるのでそれを見て技の指示を出してください」

「レベルアップで覚えるわざですか…？　どんなのがあるんですか？」

「(めんど) すみません。それはご自身で確かめていただけますでしょうか…」

「あ、はい。すみません…」

「いえ」

「三つ目の特典は417番『変身音叉・音角おんげきトライアングル+音撃三二角烈節』です」

「(トライアングル…?)」

「これは仮面ライダー響鬼の劇場版、『劇場版 仮面ライダー響鬼と7人の戦鬼』に登場した戦国時代の鬼の一人、ニシキが西鬼にしきに変化するために使ったものです」

「響鬼ですか(見たな、見てたな。忘れたけど、どんなんだっけ)」

「仮面ライダー響鬼の仮面ライダーは仮面ライダーではなく鬼であり、改造手術を受けるでも、変身アイテムを使うでもなく、修行を積むことで音撃戦士として魔化魍を退治する『鬼』になるものです。」

よって、この特典も修行を積まなければ使うことができません。あ、いえ、使えはす

るけど鬼にはなれません。『変身』ができないというわけです」

「ニシキってのはどんな鬼なんですか？」

「西鬼は戦国時代の大阪出身の鬼で、虎のような黄色と黒の鬼です。ニシキ本人は鬼の力を使って数々の盗みを働いた大泥棒です。ただ、鬼として人を殺さないという心情を持っていたようですが」

「泥棒ですか…」

「強盗というより怪盗という感じでしょうか？」

使用武器は三節棍としても使用できる「音撃おんげき三角烈節」。

必殺技は三節棍型からトライアングル型に変形させた音撃三角を音撃音叉で叩いて清めの音を放つ『音撃響・偉羅射威』です」

「え？」

「『音撃響・偉羅射威』」

ちなみにニシキはこの技を放つとき「いらっしやうい」と言っています」

「……………大阪のイメージでしょうか」

「そうなんですかね、多分そうなんでしょうかね」

「四つ目の特典は970番『匣^{ボックス}兵器・晴トカゲ正式名称がわからないので仮称ですが（外付け修羅開匣）+晴のリング』です」

「（ボックス：？ リング：？）」

「『家庭教師ヒットマンREBORN！』、知りませんか？」

「はい」

「んー……………」

まず説明させていただきますと、この特典は戦闘用です」

「兵器って言うてましたね」

「そうです。匣兵器は人間の生体エネルギーをリングに通して変換することで得られる超圧縮エネルギー “死ぬ気の炎” をエネルギー源に動く兵器です。匣兵器には生物型と武器型の物があるのですが、これはそれには当てはまらない、使用者自身を生体兵器に変えるものです。これを修羅開匣といい、本来は体に埋め込んで使用されますが、この特典は外付けバージョンなので普通に開匣するだけでお手軽に、変わることができま
す」

「（何を言っているのかさっぱりわからない……………」

「晴トカゲ、という名前から思い浮かぶでしょうが、修羅開匣によって得られるのは再生能力です。腕を切り離して再生させたり、切り離れた腕自身から残心を再生させたり。正直トカゲの再生能力とはかけ離れているような気がしなくはないですが…まあ、そういう能力が得られます。それに加え、純粋に身体能力が向上します。晴属性の死ぬ気の炎の性質“活性”もあるのでしょうか。」

さて、何か質問はありますか？」

「さっぱりわかりません」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」分かりました。仕方がないのでこれをどうぞ」

スツ…（家庭教師ヒットマンREBORN!）

「ありがとうございます」

「……………」分かりましたか？」

「はい、よくわかりました…マーレリングじゃないんですね」

「はい、それはそれで一纏めにして別の特典になっていますので。でもこのおまけの晴のリングも相応の物ですよ」

「まあ、覚悟がなければ炎は灯せませんし、そうですね…」

「五つ目の特典は1931番『ワープハット』です」

「シンプルな名前ですね（どんなものなのか名前で分かっちゃうな）」

「この特典はドラえもんに出てくるひみつ道具の一つでシルクハットのような形をした帽子です。名前から分かるように、この帽子を被ると、その時に頭の中に浮かべていた場所へ瞬間移動する事ができます」

「やっぱり」

「また、この帽子で誰かと飛ぶ場合、帽子を被っている人の体に触れる必要があります。

孫悟空の瞬間移動と同じですね」

「（あ、分かりやすい）」

「これ以上言うこともないので最後の特典の説明に移ります」

「最後、六つ目の特典は476番『ビーストメモリ』です」

「? なんですかそれは」

「(あー、W^{ダブル}見てないか…) 仮面ライダーWの怪人役、ドーパントに変身するアイテムです」

「敵側の変身アイテムですか?!」

「はい。総合的な名称はガイアメモリといって、星の記憶が込められたUSBメモリのようなものです。メモリの中にはそれぞれのメモリに対応したデータが詰まっています、それを人体に注入することで人を超人へと変える、それがガイアメモリです」

「超人……ですか」

「まあ、そんなものはこれ売る側の宣伝文句であって、実際は怪人ですがね」

「売る?! 売り買いされるものなんですか?!」

「あー、えー、はい。仮面ライダーWはそういう物語だったんですよ。」

それはともかく、このビーストメモリは文字通り『野獣の記憶』が入っていて、これ

を使うことで佐橋さんは「ビースト・ドーパント」になることができます」

「……………」

「ビースト・ドーパントの能力は超人的な腕力と再生能力です」

「晴トカゲのと同じですね」

「あー、ですね。…被りましたね、完全に被ってますね、あつちは炎が尽きたらダメですけどこちらは炎が尽きていようが使用可能ですし、そこで差別化すればよいのでは？」

「」

「そうですか……………」

「で、ですね。ビーストメモリを挿す生体コネクタは左腕に刻ませていただきますので、変身する際はそこにメモリを挿してください」

「……………待ってください、生体コネクタって？」

「あ、言い忘れてましたね。生体コネクタというのは、肉体にメモリを挿入するための……………ほら、PCにUSBを差し込むための穴があるじゃないですか、あれのような働きをするものです。形としては黒い刺青のような感じで…。まあ『ONE PIECE』の世界ならそう目立つこともないと思いますよ？」

「（刺青…なんか、いやだなあ…なんか、なんかなあ……………」

「生体コネクタがないとメモリの毒素に心と体が一気に蝕まれちゃいますからね」

「——待ってください。毒…？ 毒ってなんですか」

「ああごめんなさい。また言うの忘れてました」

「ガイアメモリを使った場合、その力に飲み込まれたり毒素に精神と肉体を蝕まれたりして、暴走したり依存症になったりしてしまうことがあるんです。まあ明言されてないものの、麻薬と一緒にですね。でも大丈夫ですよ、鬼になれるぐらい心身を鍛えたなら、きつとメモリの毒素なんかには負けませんよ」

「（麻薬ダメ絶対、のポスターとかで出てくる『一回くらいなら大丈夫だって』とかの言葉に聞こえてしょうがない……絶対使わないぞ）」

「ではこれで特典の説明は終了です、よろしいですね？」

「………まだ何か言い忘れてること、あったりしませんよね？」

「ないですよ、本当に」

「次は“能力特典”です。サイコロをどうぞ」

「………（何がいいか…ワンピースの世界は言語一緒だし翻訳は意味ないな…『ワープハット』があるから1のアイテムBOXとやらもそこまで欲しいわけじゃないし…鑑定

かな」

からん からからからから

「……………」

「あらら、出目は6 『はずれ』です」

「……………」

それでは転生していただきます。

あなたは6つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「えっと、色々ありがとうございます」

「はい、行ってらっしゃいませ」

★□ 40番 銅田弥 享年17歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「こんにちはー……？」

「はい、こんにちは。40番銅田^{どうたわたる}弥さんですね。こちらにどうぞ」

「……………(察し。転生…神様転生……………？ ナンバリングされているということは、邪神系の転生者サバイバルかな？)」

(ストーン) キー…

「始めに断っておきますが、私は神さまではありません。神の使いです。」

そして、この転生はお考えの通り神様転生ではありませんが、転生者さんが転生する世界は一人一人別々で、転生者同士でバトルすることもありませんのでご安心ください」

「……………心読めます？」

「はい」

「あー……………(サトリン、サトイモ)」

「スイスイスイ」

「サトってオサトが」

「サトポツポ」

「サトリます」

「……………」

「いえーい」

「い、いえーい…」

「(天使さま、案外ノリいいんだな…)」

「それでは、『かくかくしかじか』こういう訳でこういう風に転生してもらうことになります。理解できましたか…?」

「ええつと、はい。(サイコロで決めるとか、TRPGのノリか? いや俺やったことないけどもー。転生先のリスト見る限り楽な世界に行くには自由のがいいな…Fate系の世界に特典持つて転生とか、抑止力案件じゃないか? “世界の意思からくる排除”受けかねんぞ…)」

「では、転生する世界から選んでいただきます。サイコロをどうぞ」

「……………(選ぶって、サイコロじゃん。俺に賽の目を操作する能力や技術なんかないっつーの)」

「どうぞで」

「……………神様仏様、4・5・6の4か6を……………ッ！」

からん からから からん

?…?

「出目は6と2、これは『ポケットモンスター』の世界ですね」

「おお！（割と、いやかなりいいんじゃないか？ 黒い任天堂要素が見え隠れするとはいえ、命の危険はそれほどではないはずだ）」

「ポケモン世界に転生してもらおう場合は、転生する地方を決める必要がありますので、サイコロを一つ追加で振ってください」

「分かりました。」

…振る前に、あの、リストではどうなっていましたっけ…（忘れた）」

「こちらです」

？ カントー・ジョウト地方

？ ホウエン地方

？ シンオウ地方

？ イッシュ地方

? カロス地方

? アローラ地方

「……………分かりました」

「銅田さんのには、どこがいいですか？」

「え? えーつと…(正直どこでもいいっていうか、カロスのフレア団はリアルガチで危険だからそれ以外ならどこでもっていうか…)」

「ふむふむ。サイコロ、どうぞ」

「あ、はい」

かつ からからから

「出目は6ですね。」

銅田さんの転生先は『ポケットモンスターSM』舞台のアローラ地方に決定しました」

「まあ、まあ…(島々か…南国、アローラの自然と海。……………年中水着回(。▽。)キタ

コレ!!)」

「(あ……)では続いて特典の選択に移ります。よろしいですか？」

「はい!」

「転生特典は『かくかくしかじか』で『アイテム特典』と『能力特典』の二つがあります。まずは『アイテム特典』の数をサイコロの出目で、決めていきます」

「はい……………（そんなことより『能力特典』の5番のが気になるんですけど——！）」
「（スルスルスル〜でいこう。心の声なんてキコエナイ）どうぞ、振ってください」
「はい」

からんころころ

「……………」

「出目は2、よって銅田さんの『アイテム特典』は二つです。」

くじを二枚引いてください」

「はい……………（ぐぬう……………転生先の賽で運使っちゃったか？　ともあれ良いの来い！）」

がさ(そがさ)そ

565・・・953

「特典の説明をさせていただきます。

一つ目は565番『グロテスク』です」

「グロテスク？」

『『グロテスク』とは、人類を無意識に滅ぼそうとする地球の尖兵“地球陣”を殺すために、地球撲滅軍・開発室が発明した透明化スーツです」

「(地球撲滅軍…？ 地球人？ なんのこっちゃ)」

「西尾維新先生の(伝説)シリーズの第一作『悲鳴伝』に出てくるハイテクアイテムです」

「西尾維新先生ですかー(納得じゃわ)」

「透明化スーツ『グロテスク』はバッテリー式で、4時間以上の充電で3時間、180分運用可能。充電が切れればコスプレみたいなスーツ姿をさらすことになるのでご注意を」

「なるほど…(バッテリーかよ…コンセント？ 充電つつたつて、え、まじかよ)」

「充電器付きです。使用前にはコンセントから充電して使用してください。

また、スーツ体にぴったりフィットしたデザインになっていて、一人では着脱が不可能です」

「えー!?! 一人で着られないんですか!?! 誰かに手伝ってもらわないと着ることもできないとか、なんですかそれ!」

「仕様です」

「……………(そうだったって…………特典のこと話して、着るのを手伝ってもらおう仲間…? うん……………あ、捕まえたポケモンに着せてもらえればいいんだ!」

「ですね。」

ちなみに透明状態での動きが鈍重にならないために、軽量化されているので防御力はほぼ皆無です。

肩口にスイッチがあるので透明になるときはそれを押してください」

「(……………考え直すと厳しいな、透明なつても何ができるっていうんだ? 犯罪行為に使うにしてもポケモンの感覚をごまかせる気がしないぞ…………)」

「この『グロテスク』は良くも悪くも透明になるだけです。つまり音や匂いを誤魔化すことはできません。歩くときは足音を立てないように、動く時は空気を揺らさないように注意してください。作中でこれを使用した空々空そらからくうも急に動いたことで危うく地球

陣に存在を気取られそうになっていましたし」

「そう、ですか…(役に立ちそうにねえ！ 無理じゃん！ どう利用しろっていうんだよ！ 待ち伏せするとしても3時間じゃどうにもならねえよ！)」

「(どんまい)」

「二つ目の特典は953番『ボックス匣兵器・グーフォ・デイ・ピオウツヤ雨フクロウ+雨のリング』です」

「ボックス兵器…リボンですか！」

「はい。未来編にて敵役となるミルフィオーレ6弔花の一人、グロ・キシニアのサブ匣、フクロウ型匣兵器。鎮静の性質を持つ雨の炎を全身にまとい、作中では雨の炎の洪水で、相手の意識を失わせる戦法を披露しました」

「骸の憑依したフクロウですよ。確か…ムクロウ？」

「よく覚えていますね、それです」

「ですか……リングって俺、死ぬ気の炎灯せるんですか？」

「ええ、死ぬ気になれば」

「死ぬ気に」

「覚悟を炎に変えるイメージ！ 頑張ってください。

ちなみに、ポケモンもリングをはめさせれば生体エネルギーを死ぬ気の炎に変換できますよ」

「へ？ 俺以外もリング使えるんですか？」

「あなたが特典を貸すことで、『家庭教師ヒットマンREBORN！』の法則が伝播します」

「危険ですね…（独占しなきゃ…）」

「……………」

「最後に、『能力特典』を決めていただきます」

「サイコロですね（5, 5, 5, 5, 5, 5, 5, 5, 5!!）」

からん からからから

「……つたぁー!!」

「おめでとうございます（棒読みー）。

出目は5 “能力特典” は『○○○○コントロール』です」

「ありがとうございませす!!（ひゃっほー!）」

それでは転生です。

あなたは2つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございます」

「私は何もしていませんよ……まあ、ほどほどに」

「捕まるような真似はしませんよ！　行ってきます！」

☆□ 41番 吉原照孝 享年14歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「ど、どうも…失礼します」

「41番、吉原照孝さんですね。席にどうぞー」

パタン

「あ、あのもしかして“転生”ですか？」

「ええ。ただこの転生は少々変わっていきまして、説明させていただきますと、『かくかくしかじか』という訳なのです」

「なるほど…嬉しいシステムですね」

「? どうしてそう思われるんですか？」

「だって、諦めがつくじゃないですか。サイコロだったりくじだったり、運で決まったも

のならどんな人生になっても「しょうがないなあ」って」

「はあ……」

「うーん、あれですよ。「こんなはずじゃなかったッ！　なんで俺は……っ！」ってならないっていうか……転生モノで、そもそも転生先や転生特典で間違ったものを選んでしま
うとか、そういうのです」

「ああー」

「転生特典で『無限の剣製』頼んで、エミヤシロウの心象風景に塗りつぶされて………と
か、そういうのですよ」

「なるほどー……」

「では、サイコロをどうぞ。転生先を決めていただきます」

「はい……っ！」

からんころころ

？……？

「出目は4と1…『Fateシリーズ』ですね」

「フェイトですか」

「(おおう、珍しい。知らない系？ 転生とかは知ってるのに？ …なるほど、知っているけど詳しくは知らないのか…)」

もう一度、今度は一つだけサイコロを振ってみてください」

「はい」

からんころころ

「出目は2、よって吉原さんの転生先は『Fate/zero』の世界です」

「どんなお話の世界なんですか？」

「……………えーつと、願いを叶える万能の願望機たる『聖杯』の力を追い求め、七人の魔術師がマスターとなって七人の英霊をサーヴァントとして召喚し、最後の一人になるまで戦いを繰り広げる聖杯戦争という戦いを行う、日本の冬木市という土地を舞台として物

語です」

「魔術師に、英霊……ですか。そういう話なんですね……」

「はい。そして、聖杯戦争は1994年11月ごろに起こりますので、参加する場合はお忘れなく」

「時代、ずいぶんズレるんですね（生まれた年より前じゃん）……別に参加しなくてもいいんですよ？ その、聖杯戦争には」

「それは確かに、その通りですが……参加なされないんですか？」

「別に叶えたい願いなんてないですし、それに戦争なんですよね？ 怖いし戦いたくないんですよ」

「……………（まあ、それはそうか……）」

「では続きまして特典の選定に移らせてもらいます。『かくかくしかじか』、二種類の特典のうち『アイテム特典』の数をサイコロの出目で決めていただきます」

「はー」

から からから

「あっ」

「あ」

「……………」

「………出目は1 なので吉原さんの『アイテム特典』は一つです。くじを一枚引いてください」

「はい、いや、うん。もらえるだけ恵まれていますよね。わかっています」

「……………」

2041

「特典の説明をさせていただきます。」

2041番は『アマゾンドライバー+アマゾン細胞(アルファ版)』です

「アマゾン細胞……? あ、『仮面ライダーアマゾンズ』ですか?」

「おお、ご存知ですか」

「はい。BSでちらつと見たら意外と面白くて、最終回まで見ちゃいました」

「……あー(season2も劇場版も、存在自体知らないな)」

「? それでその、αってことはあれですか? あの赤い方」

「はい本編において、鷹山仁さんが変身した、アマゾンアルファと同じアマゾンになることのできるドライバーとアマゾン細胞です。作中の鷹山仁さんの『アマゾンアルファ』と全く同じ容姿や特性になるように神様が不思議パワーでお作りになったそれを植え付けるという感じになりますね」

「アマゾン細胞……僕大丈夫でしょうか。人食いになったりとか」

「原作の鷹山仁さん同様、人食いの衝動は強くないので十分我慢できるはずですよ」

「そうですか……よかったです」

「ただ、変身するとしたら、タンパク質を消耗するので卵や肉をモリモリ食べて補う必要があると思いますので、そこはお気を付けください」

「はい」

「それと、後天的にはいえアマゾンになるわけですから身体能力などが普通の人と比

べて強化されます」

「…なんかイヤですね。人間じゃなくなるって」

「まあ見かけは人間ですから、いいじゃないですか。アマゾンズドライバーですが、あくまで強化装備であって、『変身』に必要な不可欠ではないので、いざという時には自力でアマゾン態になることもできます」

「え、そんなことできるんですか」

「ええ、できるんです」

「アマゾンオメガの水澤悠も一話で変わっていたでしょう？ あれと同じです」

「あー…あー？ そうだったよーな、そうでないよーな…まあ分かりました」

「よろしいですか？」

「僕変身する予定なんてありませんし、別にいいですよ。便利なのが出なかったのは残念だけど、厄ネタが出なかっただけで十分です」

「まあ確かに…まあ………確かに？（チップ・トリックとかの即死級ではないけど、これも立派な厄ネタじゃね？ ……あー、season1ただと確かにそこまですとは思えない…か…？）」

「続いては『能力特典』です。サイコロを振ってください」

「はい」

「ろん

「出目は4 『リスタート×1』ですね」

「うううん……」

「ご不満ですか」

「まあ、はい……正直言う……いや、不慮の事故で死ぬこともあるし、それを回避できると考えると確かに有用ではあるんですけど……一回死んだらそれでいいんじゃないかなと」

「吉原さんこれから二回目の人生ですけど？」

「いや！ そういう意味じゃなく！」

「冗談です」

では転生です。

あなたは1つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「行ってらっしゃいませ」

「ありがとうございます、行ってきました」

☆□ 42番 青木純 享年21歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

ガチャ

「し、失礼します…」

「はい。42番青木純さんですね。こちらへどうぞ」

「は、はい」

「ここは、一言で言うと『転生の間(仮)』。これから転生をなされるあなたに、転生特典を決めていただいたり、転生する世界を選択していただく場所です」

「て、転生、ですか」

「はい詳しく説明させていただきますと『かくかくしかじか』という感じですね」

「わ…わかりました。よくあるやつですね。最近はアニメも1クールに一本はそれ系のが作られるようになりましたし」

「確かに。」

「ではまず、このサイコロで転生先を決めていただきます。どうぞ」

「はい」

からんからから

?...?

「出目は3と2…『BLEACH』の世界ですね」

「……………BLEACH。……………、あの一つよろしいでしょうか」

「はい？」

「ブリーチって、アニメオリジナルストーリーがあるじゃないですか。その、公式からもパラレルワールド扱いされた世界って、どうなってるんですか？」

「…? どういうことですか？」

「ええつと……………転生する世界は『BLEACH』でも、並行世界扱いのアニメオリジナルストーリーの世界に転生したいな…って」

「ほ……………ほ……………。面白いこと考えますね。」

ちよつと、上に確認しますので待っててくださいね」

「……………」

「——はい、神様？ ええ、転生番号42番の青木純さんが、面白いこと要求？ 提案？
してきたんですけど」

「はい、サイコロの目は3と2で『BLEACH』の世界に転生することが決まりました、
で、青木さん「アニメオリジナルストーリー」の『BLEACH』に転生したいって言っ
てきました」

「はい。はい。はい、始まりは一緒でも、分岐する感じなんですかね？ そうですか。
で、どうでしょうか……………」

「おっ！ そうですか」。

——青木さん、『面白いから、いいよー』だそうです！

「ほんとですか！ ありがとうございます！」

「それでなんですが、アニメオリジナルストーリーといいますが、どれですか？ 『BL

EACH』オリジナルストーリー頻繁にありましたからねー」

「…えーっと、あのー…?」

「…斬魄刀が実体化する話です!」

「もしもし『斬魄刀が実体化する話』らしいのですがー?」

「」

「『斬魄刀異聞篇』? 青木さん、それであってますか?」

「それは、それ! 確かそんな名前のやつだった気がします!」

「合っているみたいです。それでは神様、その『斬魄刀異聞篇』とやらの繋がる『BLEACH』世界をお願いします」

「」

「次に、特典を決めていただくわけですが『かくかくしかじか』な仕組みとなっております。初めに「アイテム特典」の数を決めてください」

「はい(ろく)」

からんからから

「出目は3、青木さんのアイテム特典数は3つです。

くじを3枚引いてください」

「はい…」

「そ、そ、そ、そ………そ、そ、そ、そ！」

1668・・・1319・・・138

「はい。それでは選ばれました特典について説明をさせていただきます。

まず一つ目は1668番『お年玉ぶくろ』です」

「お年玉袋…?」

「まあ、名前だけでは意味が分かりませんよね。…意味は分かるけどそれが何? て感

じですかね?」

「は、はい」

「これはドラえもののひみつ道具の一つです」

「ドラえもん……？ ……あー。あれですか、金鎚でぶん殴ったり、チリ紙再利用したりするとお金が出てくる、松竹梅の」

「おっと、ご存知でしたか」

「ええ、まあ。コロコロで読んだ覚えが、なんとなく、頭の片隅に」

「なるほど……では、詳しい説明を。」

「このひみつ道具は、お正月にドラえもんがのび太くんに出した道具で、*“まつ”*・*“たけ”*・*“うめ”*の3種類のポチ袋からなるものです。」

*“まつ”*はなぐさめ型。痛い目に遭うと、その痛みの分だけお年玉が袋から出てきます。ただし、頭をぶん殴ったぐらいでは1円しか出てこず、最高金額は12,840円。その最高金額を出した人は、12,840円と引き換えに半年間入院したといえます」

「うわあ……」

「*“たけ”*は節約型。リサイクルなんかをすると、お金が出てきます。のび太は一度鼻をかんだティッシュを開いて乾かしもう一度使えるようにして10円出しました。これも極々わずかな小銭程度しか出ません」

「……………」

「最後、うめはごほうび型。人に親切をして「ありがとう」と言われると1000円が出てきます。叱られると、出てきたお金は消え、「ありがとう」以外、「助かった」とか「すまないね」とか、ありがとう以外の誉め言葉には反応しません」

「…ハズレですね」

「まあ、そうですね…。金額小学生基準というか、貰える額も大したことないですし」「使い道…（どう考えても使えない）」

「次2つ目は1319番「リグレーの入ったモンスターボール」です」

「モンスターボール、ですか？」

「はい。基本的にナマモノはアイテム特典には含まれていないのですが、神様が無理矢理ねじ込んだ系の特典ですね。」

ポケモンが入った、モンスターボールが特典である、とそういうことです。この特典はリグレーの入ったモンスターボール。ポケットモンスターBWから加わったブレイクポケモンリグレーが青木さんの2つ目の特典となります」

「リグレー…どんなのでしたっけ」

「宇宙人・リトルグレイの「リ…グレ」をもじったポケモンで、タイプはエスパー単一。覚えるわざも大抵エスパータイプのポケモンです。」

L.V. 42でオーベムに進化。リグレーが水色で、オーベムが茶色のポケモンです」

「あー！ はいはい。アニメで見ました。あれですよ、デントとアイリスの顔が…
オーベム？ の顔になった！」

「ですです。図鑑の説明によると、

リグレーが『強力なサイコパワーを操る。サイコパワーで相手の脳みそを締めつけて 頭痛を 起こさせる。』

オーベムが『強いサイコパワーを持つている。3色に 光る 指で 相手を操り 記憶を 書き換えてしまう。』

という感じです」

「記憶を書き換える…（使えるかな…？）」

「……………（まともな人だと思っていたんだけどな…）」

「3つ目の特典は138番『剝月』です」

「えんげつ……えんげつ………剡月?!」

「『剡月』です」

「ちよ、ちよ、ちよつと待つてくださいい? あの剡月? てかありなんですか、これ!」

「あります」

「これあれですよね。つまり黒崎一護の父親、黒崎一心こと、旧姓・志波一心の、斬魄刀の、『剡月』ですよね!」

「その通りでございます。その『剡月』です」

「どうすれば……?」

「まあ、普通に使えばいいんじゃないですか? 霊圧? は斬魄刀はそうであっても、青

木さん自身の霊圧からなるものとされて、『なに? この霊圧は……?!』みたいな反応されることもないですし」

「自分、死神の霊圧になるんでしょうか。あの……霊絡? とかいうの赤くなったりとか」

「それは………」

「………死神のものにはならないようですね。あくまで人間として、人間が人間として死神の斬魄刀を所持していると、そういう感じになるとのことです」

「あ、じゃあ、魂送とか、始解とか、卍解とか、そういうのができるだけってことですか」

「まあ、平たく言えばそういうことになりますね。あ、それとこれは斬魄刀を特典としたボーナスというか、副作用というかなのですが…青木さんの霊圧が上がります」

「つまり」

「幽霊や虚が見えるようになるということですね。あと、霊圧が高いということはそれだけ虚に魂魄目当てに狙われることにもなるということでもあります」

「まあ、それは仕方ないですよ。力を得た対価と考えれば」

「以上で説明を終了しますが、よろしいでしょうか」

「はい、ありがとうございます」

「最後に、『能力特典』を決めていただきます」

「はい。サイコロですね」

「はい。どうぞ」

「………（六以外ならなんでもいいッ！）」

からんころころ

「出目は2 『鑑定』ですね」

「お」

「分かりやすく言えば、『ステータスオープン』。じぶんにも他人にも使えるそれですね。幽霊に使えば、その霊が死んだ理由や、どこで死んだのかも知ることができます」

「ほー」

では転生です

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を實行します。それではよき人生を

「いつてらっしゃいませ」

「行つてきます。ありがとうございます」

☆ ■ 43番 荒井将太郎 享年20歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します……………」

「はい。43番の荒井将太郎さんですね？ こちらの席にどうぞ」

パタン

「は、はい」

…キィ

「…さて、荒井さん。大変残念なお知らせですが貴方は死にました」

「あ、はい」

「理解なされていきますね。そして、まあこつちも分かると思いますけど『神様転生』というやつです」

「(やつぱり……………」

「私自身は神さまではなく、その使い…天使ということになります。ここで転生する世界と転生特典をサイコロとくじによって決めていただき、第二の人生を歩んでもらいま

す」

「世界…サイコロ…？」

「神様いわく、『転生特典を転生者に決めさせたら俺ツエー^{ルート}ばかりでつまんない。かといつてこつちが決めるのは押しつけがましいというか、結末が読めそう』とのことでした…。

あらかじめ用意された選択肢の中からですが、転生者様自身の運で、一生を左右する選択を行っていたかどうかと、そういうことです」

「な、なるほど……。特典とか、転生する世界とか、どんな感じなんですか？」

「ざっくり言うと、漫画やアニメの世界と、それに登場する不思議な力を持ったアイテムが特典となっています。具体的にどんな特典があるか……とかは秘密なので教えてくださいませ。ただ、荒井さんがお引きになった特典に関しては、それがどんなもので、どんな使い方をするものなのか説明をさせていただきます」

「わかりました」

「ではまず荒井さんが転生する世界をサイコロの出目で決めていただきます。サイコロ

をどうぞ」

「はい。」

「二個同時ですか？」

「同時で」

「……………」

「からん からから」

「……？」

「…、サイコロの出目は青2の赤1 荒井さんが転生する世界は『ONE PIECE』の世界に決定しました」

「ワンピース…」

「二応念のためお尋ねしますが、知っていますよね？」

「ええ、まあ、はい。嗜む程度には？」

「結構」

「では続いて、特典の選択です。まず『アイテム特典』を決めていただきます。サイコロを一つ振って、出た目の数だけくじを引くことができ、引いたくじの番号と一致するリストのアイテムが荒井さんの特典となります」

「つまり、出目が6なら6個、1なら特典1つだけ…？」

「そういうことになります。まあ、アイテム特典の中には全然役に立たないモノや、デメリットにしかないモノもありますから、一概に出目が大きいから、来世でお得ということでもないですけどね。結局はくじ運です」

「わかりました。」

「……………えいつ」

「からんからから」

「——あ、ああ…」

「…ドンマイです。大丈夫ですよ。特典が一つだけでも人生を謳歌して幸せな一生を送った方はいらっしやいますし、…逆に特典が6つでも、その力の多彩さから力に溺れる方や修羅の道を歩まれることになった方もいますし、あまり気を落とさずに」

「はい……」

「くじを2枚引いてください」

がさざんそがさざんそ

576・・・2195

「荒井さんの『アイテム特典』説明を始めさせていただきます。」

まず1つ目、576番『マルチステッキ イーチャアザーとコスチューム（男性用スーツ）』です」

「マルチステッキ…？」

「出典は西尾維新先生原作の長編シリーズ〈伝説〉シリーズ。この特典は、作中の対地球

組織『絶対平和リーグ』が、過去に地球と戦争をした火星の尖兵『火星陣』^{じん}の魔法技術を再現して生み出した兵器の一つで、

端的に言つて魔法の杖と衣装です」

「(すぐく気になる単語の山：でも突っ込まないでおこう…)魔法の杖ということは、つまり魔法を使うデバイス：みたいなものということですか？」

「そうですね。着ただけで防刃・防弾・超防御力に飛行魔法がつかえるコスチュームと、振るえばステッキの固有魔法を自由自在無制限に扱える時計に擬態可能なマルチステッキ。この2つ一セットが荒井さんの一つ目の特典です」

「おお…！ (なんだかすげーそう…！)」

「原作では絶対平和リーグ所属の少女兵たちに支給され、彼女たちを魔法少女にしてみました。コスチュームは魔法少女らしいフリフリふわふわのデザインでしたが、『えっ、これは…大の大人が着てたら恥ずかしいじゃん。見るに堪えんわ』という神様の判断で、デザインをスーツに変更しています」

「(神様ありがとうございます！)」

「コスチュームはステッキがなくても飛行することができますが、ステッキを使うにはコスチュームを着ていなければいけません。」

一瞬で装着！ とか、宇宙刑事や魔法少女のような機能はついていないのでお気を付けください」

「これも含めて特典って、念じれば出てくる感じですか？」

「はい。『出る』と思えば出てきます。『消えろ』と念じれば消すことができ、失くしたり、汚れたり、壊れたりしたら再出現させてください。

ちなみに、『出る出る』と念じてても、もう出てるなら出ません。特典を無限増殖させたりとかそういう真似はできませんのであしからず」

「しませんよ……。……。？ あれ、これ、特典って僕以外にも使えるんですか？」

「ええ、『アイテム特典』ですから、一部転生者自身に宿る系のアイテム以外の特典は、他の方にも使用可能だったり貸与可能だったりします。

出したり消したりの方の決定権は転生者が握っているので奪われても取り返すのは簡単ですけどね？」

マルチステッキとコスチュームは、使用にあたって特別な資格や能力を必要としないので、原作キャラに渡して着てもらって飛行能力を与える…なんてことも可能と言えれば可能です」

「へー」

「もうそれなりに説明をしてみました感がありますが、コスチュームの力について説明させていただきます。」

コスチュームの力その一、『防御力』。これは科学的物理的なものではなく、魔法的なファンタジーなもので、例えば、防弾チョッキや防刃チョッキで攻撃を受けたとして、ノーダメージでも攻撃された分の衝撃は普通に響いたりする。斧を投げられ、繊維の一本も斬られることはなかったが当たったときの衝撃で肋骨が折れて悶絶する。

そういうことはありません。本当の本当にノーダメージで押さえることができます。むき出しの首を絞められたりすれば、その限りではありませんが。

コスチュームの力、その二、『飛行能力』。

慣れれば、超高速で空を駆け回ることができます。

フワフワ宙に浮かんで音もなく動くことも、UFOみたいな変則的な飛行を行うこともできます。

最後に、これはまあ、特典であるということなのですが、荒井さんの体形に合ったサイズで出現します。

飛行訓練を少年時代に練習しようとして、大人用のスーツが出てきても困るだろうというところで、荒井さんが3歳の時は3歳の、20歳の時は20歳の身長体形に合わせてぴったりの大きさのコスチュームとして出てきます」

「……………なるほど」

「さて、肝心の『マルチステッキ イーチアザー』の固有魔法ですが……………」

「……………」

「『自然体』です」

「……………。……………?」

「はい、ちゃんと説明するのでご安心を。」

そもそも『イーチアザー』は火星陣の言葉で『イルアルアズ』：「自然体」という意味を示す言葉で、文字通りなのですが……………ああ、脱線していますね、失礼しました。

この『自然体』の魔法は、使用者だった『パン^{努力}プキン^家』こと杵槻鋼矢さんいわく――己を自然に見せる魔法。

違和感を消し、不自然を削除する……と言えばかつこいいですが、結局見栄を張っているだけなので、首を斬られたのに平然とお茶を飲むとか、そういうのは無理です。

徹夜明けでめっちゃ眠いのを『自然体』の魔法で誤魔化して、自分以外の人間から眠そうには見えなくしても、結局睡眠不足は消えていませんから寝落ちして、魔法が消えて怒られる、とか。そんな微妙な利便性を持った魔法です」

「(び、微妙……………」

「魔法の効果は対人(自身)オンリー。自分以外の人や物に『自然体』の魔法効果を付与するといったことはできません。その上、この魔法は『自然体』に見せるといつても限界があり、空を飛ぶなどのどう見ても自然でない行為をしている時は誤魔化せません。……………常識改変モノのエツチな漫画みたいな真似もできません」

「しませんよー！」

「それは失礼しました。」

かといって、これが使い道のないハズレかといえばそうでもないです。

例えば交渉事で、めちやくちや焦っていたとしてもこの魔法を使っていれば平然としているように取り繕えますし、単純に歩いたり座ったりなら魔法の効果は有用なため『自然体』で、『見えているけど気にしない』…みたいな、疑似的なステルス効果を発揮することが可能です…常識の範囲内で、ですけど」

「そういうられると確かに……………(頭がよくないうまく使えない系の特典だな、これ。僕に使いこなせるかな…)」

「説明はまあ、こんなところでしょうか。何か質問はありますか？」

「……………はい、大丈夫です」

「二つ目の特典は2195番『メカエリチャンII号機のセイントグラフ』です」

「メカエリチャン？ メカエリチャンって、あのメカエリチャンですか？」

「はい。あのメカエリチャンです。MK IIの方ですが。」

この特典はサーヴァントを併記として運用するための特典であり、『Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤ』のクラスカードをモデルにつくられており、

武装を召喚する『限定召喚』、

サーヴァントの“力”を召喚し自身に能力・スキルを付与する『夢幻召喚』、

セイントグラフのサーヴァントそのものを召喚する『英霊召喚』の3種の使用方法が存在します。

ただし、聖杯戦争とは違って、特典であるセイントグラフを通じて荒井さんとパスは通じているものの、サーヴァントへの絶対命令権である令呪が存在しませんのでご注意ください

「令呪ないんですか」

「はい。なのでサーヴァントは人徳でもって使役するのが基本になりますでしょうか。」

怖がったりすると彼女の眠れる嗜虐性を刺激する恐れがありますから、『自然体』の魔法を使って平然と接しているように見せかけるのがよろしいかと」

「そう…ですね…」

「何度でも言いますが、注意してくださいね？ 以前 세인트グラフの特典を引き当てられた人の中には、接し方を間違えて腕を食いちぎられてしまった転生者の方もいらっしやいますから」

「ええ……………」

「いざという時のために手懐け…信用を勝ち取っておくことは大事だと思えますよ。『ONE PIECE』の世界でも充分な力をメカエリちゃんもとい、Ⅱ号機は持っていますし、例えば捕まったりしたときなどに、召喚して助けてもらったりなどできるかもしれませんし」

「それは…そうですね…うーん」

「最後に、 『能力特典』サイコロ選択です」

「……………」

「『能力特典』とは、異世界ファンタジー転生モノで主人公が最初から持っているような定番の能力5つを、出目に対応する一つだけ与えるというものです」

「……5つ？」

「あ、はい。出目ごとに能力が設定されているのですが、6は『ハズレ』となっていますので」

「はずれ」

「はい。『能力特典』なしです」

「(6以外を……ッ！)」

からんころころ

「あー………」

「……………」

「あー……まあ、ドンマイですよ。別になくっても『アイテム特典』が2つありますし！

」

「は………」

では転生です

あなたは2つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは

ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございます」

「行ってらっしゃいませ」

☆□ 44番 川上珠 享年16歳の場合

はろはろー。11話ぶりこんにちは、神様ですよ？

恒例、4回目のゾロ目回だ。

ちよろーつと手出しはするけれど、くじは完全運任せで引いてもらっているから安心してね？

「次の方どうぞー」

ガチャ

「……………」

「はいこんにちは、44番 川上珠さんですね？ こちらにどうぞー（ふーむ、タマと
いうわりに結構厳しいのにな）」

「え、あ、はい…」

「覚えていらつしやらないのかもしれませんが川上さん、あなたは死にました」

「…はい」

「そしてもう一度人生を歩む機会を与えられました」

「はい…？ ああ、そういうことですか。僕はてつきり…（『死役所』的なものかと）」

「ええええ、川上さんが考えている通り、ここは転生の間…みたいなものです。私も死刑囚じゃなくて神様の使いですし」

「（心を）！ えっと、あの…」

「大丈夫ですよ。川上さんが口下手なのはわかっていますから。そのまま聞いてください。」

川上さんにはこれから転生をしていただきます。ただし転生先も特典も、自由に選べるわけではありません」

「………（特典…ああ、「殺しちやってすまん。代わりに○○あげるわ」なやつか）」

「まず川上さんにはサイコロを振るってもらい

『かくかくしかじか』

というわけです。わかりましたか？」

「はい」

「では早速、転生先のサイコロを振ってみましょー！」

「お、おおー…」

「はい、これがサイコロです。青赤の順で、先ほど見てもらった出目と同じ転生先に転生していただくことになります。」

「それでは、どうぞ！」

「からんからん——」

「……………」

「……？」

「はい、出目は6と5なので『神様が自由に転生先を決める』です」

「……………（嵌められてない？ 大丈夫かな…）」

「あー…、神様はそこまで無茶な転生先にはしないと思いますのでご安心ください」

「続いては特典です。『かくかくしかじか』という風になっています。まずは『アイテム特典』の数をサイコロで決めていただきます」

「一番は6個ってことですか？」

「」

「はい、特典の最大数は出目が6であった時のアイテム特典6個です」
「……………(神さま!）」

からんから——

「おっ」

「おめでとうございます! 出目6なのでくじを6枚引いてください」

「はい(よっし!）」

がさ(そがさ)そ

2302・・・1842・・・1826・・・2512・・・2274・・・427

「では特典の説明をさせていただきます。」

まず一つ目は2302番『No. 045 大社長の卵』です」

「???」

「えっと、『HUNTER×HUNTER』って漫画はご存知ですよね？」

「はい」

「そのグリッド・アイランド編ってわかりますか？」

「……………ああ（アニマックスで昔見た気がする。リメイク前？ だっけ？ 新しい方のアニメでもやったんだっけ？）」

「まあ、それです。この特典は、それに出てくる指定ポケットカードの一枚で説明文によると「1日3時間手の中で温めることで1年後〜10年後に現実となって孵る卵。温める時に願う気持ちが強いほど早く孵化する。」です」

「……………（？ つまり……………）」

「つまり、この特典を^{ゲイシン}実体化させた卵を1日3時間温めていけば、将来大社長になれるということです」

「大社長……………」

「大社長です。自分で会社を立ち上げることになるのか、どこぞの大企業の後継者となるのか、それはどうなるのかわかりませんが大社長になれるわけです。カチグミ人生オメデトー！ です」

「はあ……………(喜ぶべき?) なんだろうか? でも、社長つて大変そうだよな…でも社長か…大社長…」

「二つ目の特典は1842番『手投げミサイル』です」

「物騒な…(でもちよつとコミカル)」

「これは『ドラえもん』のひみつ道具の一つでその名の通り手で投げられるミサイルです」

「……………(聞いたことないな)」

「劇場版ドラえもんに登場したひみつ道具ですからね。」

手のひらサイズのミサイルというよりはロケットのような形で、ドラえもん曰く『必ず当たる』。劇中でその威力が披露されることはありませんでしたが、ドラえもんの『龍なんか簡単に退治できる』という言葉にふさわしいだけの威力を持っています」

「やばい(やばい)」

「特典であるので何発でも投げられますし、かなり強い特典だといえますね」

「……………あの、コレを人に向けて投げたらどうなるんですか? (爆発の威力にもよるけど、巻き込まれないかな?)」

「人に向かって投げたら標的にされた人間は間違いなく死にますね。

川上さんは……：……そうですね、近くの標的に向けて投げたのなら、爆風とかが来るかもしれないですね」

「(やつぱり)」

「なにはともあれ、物理的に破壊力大の無尽蔵ミサイル兵器が手に入ったということですね。おめでとうございます」

「……はい(よろこんでいいものなのだろうか)」

「三つめは2512番『わざマシン：ギガドレイン』です」

「ポケモン？」

「はいポケモンです。ポケットモンスターシリーズに登場する、手持ちのポケモンに『わざ』を覚えさせるどうぐ「わざマシン」の一つです」

「ギガドレインって確か……HP回復するやつでしたっけ(……いや、そんなことより、わざマシン貰ってもポケモンの世界に転生するわけじゃないんだから、使い道なくない？

あー、ハズレひいたか)」

「はい。ギガドレインは草タイプのHP吸収系のわざの最上位で、与えたダメージの半分を吸収し、自身のHPを回復せるわざです。」

そして、川上さんが心配なされている問題ですが、ご安心ください。ちゃんと使えますよ、川上さん自身が」

「僕が？」

「神さまいわくー』あ、これポケモンだけしか覚えさせられなかったらポケモンの特典引けなかったやつらギャン泣きじゃん。やつべ』とのこととして、特典としてのわざマシンは人間にもわざを覚えさせることができるようになっていのです！」

「おお、おお……（つまり、僕がギガドレインを覚えて、敵に「ギガドレイン！」ってしたらキューンポポボン、キュインキュインキュインッ！ っとなるわけか！）」

「そうですね。ギガドレインは特殊わざなので、特別接触する必要もなく攻撃可能ですよ。あと、コレはあくまで「アイテム特典」なので、他の人にも使わせることはできません」

「（…：そうか、他の人にも。……あ、そうか、死にかけの人に覚えさせれば、体力を回復させて助けたりとかできるのか！）」

「そうですね、そういう使い方も可能です。最後に一つ言っておくと、おぼえた技はゲームのポケモンと同じ「わざ」なので、使う度にPPを消費します。なので、使っている

とPP不足で使用できなくなります。ギガドレインのPPは10。なので10回使ったら改めてわざマシンを使つて覚え直してください。わかりましたか？」

「はい(覚え直しか…連続使用は避けた方がいいのかな? ……いや、違うな。能力の拡散防止に使えるのか。わざのもとになるわざマシンは僕が持っているわけだから、僕が誰かに使わせてもその人は10回しかギガドレインできない。そういうことか)」

「……………」

「四つ目の特典は1826番『どこでもドア』です」

「どこでもドア……………」

「言わずと知れた代表的なひみつ道具ですね。行きたい場所を口にしてドアノブをひねれば、そこと繋がる。遠く何光年も宇宙の先や、異次元以外ならどこへだつて行ける夢の道具です。瞬間移動というわけではないので、ドアから出てくる場面を目撃されたらかなり怪しいですがそれ以外はとても有用な道具といえるでしょう」

「そうですね」

「ちなみに、このどこでもドアは、転生先の地図と川上さんの思念読み取りのハイブリッ

ト形式なので、異次元でも宇宙の先でも川上さんが一度行ったことのある所ならどこでもドアの記憶装置に座標が記録されて、どこでもドアで行くことができるようになります」

「あ、つと…（異次元とかある世界なんですか？）」

「神様次第なので分かりませぬ。ただそのような世界であった場合、ということですよ」「わかりました」

「五つ目の特典は2274番『No. 016 妖精王の忠告』です」

「またHUNTER×HUNTERですか」

「ですね。今度の特典の説明文は「あなたに足りないもの、直した方がいいところなど優しく諭して的確なアドバイスを与えてくれる。たまに呼んでもいないのに現れることがあるが少しうっとうしい」ということで」

「……………」

「要するに、実体化させるとRPGゲームの王さまみたいなふくよか髭もじやの妖精爺さんが出てきてアドバイスをしてくれるという「アイテム特典」です」

「……………」

「ある意味あたりだと思えますよ？ 何の裏もなくあなたのことを思って優しくアドバイスをしてくれる相棒と考えれば」

「……………そう、ですかね」

「あー、まあ、年を取ればわかりますよ」

「えっ、はい」

「ラスト、六つ目の特典は427番『ホッパーゼクター＋ベルト他ツール×2』です」
「？」

「知らないのか……）ではこちらの映像をご覧ください」

* 小一時間 *

「(地獄兄弟……そういうのもあるのか……)」

「はい、分かりましたね？ 彼ら矢車想・影山瞬が変身する仮面ライダーキックホッパー・仮面ライダーパンチホッパーへの変身ツール一式がこの『アイテム特典』です」
「2セットですね」

「はい。地獄兄弟的に2セットであるというのと、もともとホッパーゼクターはリバーシブルなので、パンチとキックで特典を分ける理由はないということでした」

「なるほど…いや、たしかに（2セット…誰かに…いやいや、そもそもゼクターは資格者じゃないとだめじゃない？ 僕は変身できるのか？）」

「ゼクターに川上さんは資格者として登録されていますので変身は問題ないですよ。ただ川上さんのお考えの通り、川上さん以外が変身するのは難しいですね。資格者に選ばれないと」

「やっぱり…」

「『アイテム特典』の次は『能力特典』です。

サイコロをどうぞ」

「はい」

からんからから

「出目は2 “能力特典”は『鑑定』です」

「……………（できれば、翻訳がよかった…大丈夫かな。大社長になるとして、外国語出来ないのは問題じゃないか？）」

では転生です。

あなたは6つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございます」

「はい、いつてらっしゃいませ」

「は？ え？ (ここどこ？ 真っ暗で何も見えない)」

「どうもこんにちは、神様です」

「(声が耳元に！)」

「ひっひっひ。声だけを届けているからね。触れようとしてもそこには何も無いよ」

「……………」

「んー、それじゃ早速サイコロを振ってもらおうかな。何のためにか、そういう質問は受け付けないからそのつもりでね？」

「……………」

「ほーほー、出目は1か。」

それなら今度は3つのサイコロを同時に振ってくれ。

説明？それならこの後にしてあげるよ。ほら振って」

「…………… (なんなんだいったい)」

? : ? : ? : ?

「ヒューツ！ デカい目が出たねー！」

$6 \times 5 \times 5 \times 5 \times 5 \times 5 \times 5 \times 5 \times 5 \times 5$ で150年かー…。

おっと、ごめんごめん。説明しよう。

このサイコロは生まれを決めるためのもの。そして最初の出目「1」は『3個のサイコロの出目で積を出し、出た数の年数分原作から遡り生まれる』だ。

え？ 転生先？ 知らないはずだけど聞く？ 『ハイスクールD×D』って物語の世界。

ね？ 知らないでしょ？

どんな世界って…、天使とか悪魔とか墮天使とか、妖怪とかドラゴンとか神様とか、そういうやつが実在する世界だよ。

ははは、そう絶望した顔をしなくても大丈夫。君の特典は戦闘に向かないものが多いけど、原作前に死なれちゃ面白くないからね。

君には期限付きの『不老不死』を与えよう。あと『病気への完全耐性』もね。期限は原作が始まるまで。それまでの間、君は若い青年の姿のまま老いることも死ぬこともなく、病に倒れることもない。四肢が欠損しても内蔵が損壊しても修復される。漫画の

『亜人』と違って、死ななくても治るけど、痛みはあるからあまり怪我はしない方がいいと思うよ。

……あ、大社長の卵とかがあったね。表に出るなら老いてないと不自然か……：……なら『認識操作』もつけよう。これで君は不老不死でも怪しまれることはない。君の年齢や衰えについては誰も深く考えられなくなる。

例えば、君が結婚して子供を作ったとして、妻子が君の年齢をとつくに超えていたとしても

『あれ？ お父さん若くない？ ——ん？ 私今何を考えてたんだっけ？』ってなる。だから安心するといい」

「——！」
「アハハなんかいつてる（@のび太）。

じゃー行つてらっしゃーい」

☆□ 45番 吉田識 享年12歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「……………」

「こんにちはー、45番 吉田識さんですねー？ とりあえずこっちの来て座つてもらつてもいいですかー？」

「え、あ、う、はい」

「初めまして。私は天使です」

「へ？」

「うふふ、すみません。えつとですね…『かくかくしかじか』というわけで、残念ながら吉田さんは転生することになったのです」

「そんな……………ッ！（僕…僕…まだ、おっぱい触ったこともなかったのに！）」

「えー、それでですね？ これから吉田さんにはサイコロとくじでもって転生先と特典

などを決めていただきます。ここまで理解できていますか？」

「え、あ、はい（天使さんのおっぱいに夢中でよく聞いてなかったけど領いところ。………
とりあえずサイコロを振ればいいんだよね？」）

「……………」

それでは、サイコロをどうぞ。この青赤二つのサイコロを、まずは同時に振ってみてください」

「はい（えいつ）」

からんころころ

？…？

「あー…（Fate／シリーズとかかわいそうに）」

「え、なんですか？」

「いえなんでもありません。出目は4と1。今度はサイコロを一つ振ってください（s

t a y n i g h t ならまだましかな？ プリズムマ☆イリヤも関わらなければ一番

いいか？」

「？ はい」

から からから

「（あー……………）えーっと、出目は3 なので『F a t e / E X T R A』の世界に転生です」

「えっと、そのエクストラ？ ってのはどんな世界なんですか？」

「……………（さすがに何の知識もなしでというのは可哀想かな）。」

西暦2030年代の近未来、月面で発見されたあらゆる願いを叶える願望機、己の担い手たる者を選ぶため聖杯は128人の霊子ハッカーをマスターとして霊子虚構世界「S E . R A . P H」に招き、各々に地球上の歴史に記された過去の英雄たちの影法師「サーヴァント」を与える。

マスターたちは厳正なルールの下でトーナメントを行い聖杯を求めて戦う。

…と、そういうストーリーの物語でして、吉田さんはその128人の霊子ハツカーの一人として月にアクセスして聖杯戦争を行ってもらうことになります」

「霊子ハツカー…？」

「ああ、別に考えなくても大丈夫ですよ。時期が来れば勝手に月に飛ばされますから。転生者の方にはストーリー強制参加の仕様がありますので、神様パワーでぽぽーん！ つて」

「ならよかった」

「……………（全く危機感がない…霊子ハツカーの腕が皆無で月に行ったらどうなるかとか考えないのか…？）」

「それでは続いて、〃アイテム特典〃の数を決めていただきたいと思えます」

「はい」

「ではこちらのサイコロをどうぞ」

「（黄色だ…）……………。っ」

からっ からから

「あ」

「あ」

「……………」

「……………ま、まあ、月の聖杯戦争は基本サーヴァント同士の戦いで、マスターにできることはそんなにはないですから。特典が少なくとも問題ないですよ」

「そうなんですか（よかった）」

「……………」

それではくじを一枚引いてください」

「はい」

がさごそがさごそ

1261

「それでは特典の説明をさせていただきます。」

1261番『ユクシー・エムリット・アグノムのポケモンボール』です」

「ポケモン……？」

「ポケモンです。生ものです。」

「この特典は当たりですね。神様が『UMAトリオは三体揃ってこそだろお！』と言って一つの枠に収めたので、この特典はくじ三枚分に等しいともいえます」

「おおー！（なんだかわからないけど！）」

「それで吉田さんはユクシー・エムリット・アグノムについて教えてあげましょうか？」「え？ えーつと……（どうしよう……なんとなく黄色とピンクと青の三匹ってことしか知らないや……でも、知らないっていうのはカッコ悪いし……）」

………（ふふん♪）」

「（……）そうですか。それでは最後、『能力特典』のサイコロに行きましようか」

「はいー！」

かちん

「出目は3 『翻訳』ですね」

「翻訳？」

「ええ。外国語をスラスラ読んだり話したりできるようになりますよ」

「え〜…僕頭いいからそういうのいらないうでけど」

「(イラツ☆) まあまあ、出てしまったものは仕方ありませんので」

では転生です

あなたは1つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「天使さん さようなら！」

「さようなら」

★ ■ 46番 竹本康 享年26歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「へえ」

「46番、竹本康やすさんですね（犯人はヤス）」

「あ、はい。はじめまして………ここは？ とうか俺はいつたい……」

「はい。ここは『かくかくしかじか』で、あなたはその転生者として神様に選ばれた、というわけです」

「……いや、えつと？ 俺死んだ記憶とかないんですけど」

「だいぶ酔っていらつしやいましたからねえ……」

「(………あー。酔っぱらって帰って……、あー、)」

「お気持ちお察ししますが、後がつかえていますので、早速転生先を選んでいただけますでしょうか」

「はい（死んだものはないか……冷凍庫全滅事件といい、酔うとろくなことがないなあ）」

「このサイコロで決めてもらいます。どうぞ」

「(どれかなー…まあ、ワンピースとかなら少しは知ってるけど、働き始めてから読まなくなっただけかなあ…)」

えいつ、と」

からんころん

?…?

「お?」

「出目は3と3。竹本さんが転生するのは『IS(インフィニット・ストラトス)』の世界です」

「インフィニット・ストラトス…」。なんだったかな、確か大学時代に見た覚えが…あるような…ないような…あ! コスプレ大会みたいのしてた気がする。それですか?」

「それですね。アニメの二期でそんな場面がありましたし」

「よく覚えていないんですが、たしかハーレム系っていうんですか? そういのでし

たよね」

「はい」

「……………」

「次に竹本さんに贈られる『アイテム特典』の数を決めていきます」

「またサイコロですか」

「またサイコロです。ただし今度の一つ」

からんからから

「わお、また3が出ましたね。愛されていますね」

「数字に愛されるってなんだよ。」

「ああ、いや失礼」

「いえいえ。それではくじを3枚引いてみてください。くじに書かれた番号と対応する

ものが、竹本さんの特典になります」

がさ(そがさ)そ がさ(そがさ)そ

76・・・1207・・・260

「一つ目の特典は76番『シロシロの実』です」

「…ワンピースの悪魔の実ですか」

「はい」

「聞いたことのないやつですね。メタ的な敵を修正液^{ホワイト}つちやうつてことですか？」

「いえ、シロシロの実のシロはお城の方のシロです」

「ああ…」

「原作での能力者はカポネ・ベツジ。シロシロの実の能力は食べた者を文字通りの意味で一つの城とすること。体内を要塞化し、兵士や武器、その他さまざまな物体を身の内に圧縮収納することができる、という能力です」

「城人間つてことですか」

「そうですね。収納した人や物は自身から離れると元のサイズに戻す事が可能で、体内

から大量の部下や砲撃を四方八方に出せるために自身が小型の要塞のように敵を蜂の巣に出来ます。また、「城」ということで、普通の人間以上の『強度』を持つています。なのでこれを口にしたものは少なくとも城を破壊するほどの攻撃でなければびくともしない頑丈な肉体も手にすることが出来るわけです」

「なるほど……ちなみに『インフィニット・ストラトス』の世界つてどうですか？」

「そうですね……ISという兵器があるのですが、ん……死にはしなくても結構な怪我（そんかい）を受けると思いますよ」

「えー……………」

「気を取り直して、シロシロの実際の説明を続けます。」

能力者は体内に自分の分身を作ることでもできます。要するに魔人ブウと同じですね」

「ああ、ベジットの時みたいなの？」

「はい。違いは、分身が動いていても本体を動かすことができるという点ですかね。本体が無防備になるということもなく、戦闘や移動を行うことができます」

「そりゃあいい」

「また、城内は「自在空間」であり、壁を歪めて砲を形作ることも、体内に入れた人間を床の中に沈めてしまうことも何でもできます」

「ん？　なんでもっ？」

「……………。あとは技的には、物理的に肉体を変化させて自分で動いて戦う城となる
『ビッグ・フアザー』
『大頭目』つてのがあります」

「二つ目の特典は1207番『ルナトーン・ソルロックの入ったモンスターボール』です」
「ポケモンですか」

「ポケモンです」
「確か月みたいのと太陽みたいなのでしたよね。あとはえつと…双子のジムリーダーが
使ってた気がします」

「よくご存じで」
「俺、初めてのポケモンがエメラルドでしたから。あのころはゲームし放題だったし、結
構遊んだもんですよ」
「なるほど。」

ルナトーンとソルロックは竹本さんがおっしゃったように、月と太陽をモデルにした
岩石上のポケモン。

分類は二体とも『いんせきポケモン』で、タイプも「いわ・エスパー」で共通です」

「セット売りみたいなポケモンなんですね」

「はい。なので神様も、一つの特典の枠に二体突っ込んだのだと思います。

どちらかというと、ソルロックがアタック型で、ルナトーンがサポート型ですね。技の構成もそんな感じですよ」

「ん？ そういえば、技とか回復とかはどうすればいいんですか？ 図鑑もポケモンセクターもないじゃないですか」

「回復は『アイテム特典』として身の内に収めることで行われ、技の構成やレベルなどのポケモンの情報はゲームであるようなウィンドウが視界に表示されますからそれを見てください」

「なるほど……レベルはどうやって上げればいいんですか？ やっぱりバトル？」

「生き物とバトルすれば経験値が貯まりレベルが上がる仕様になっています」

「……………」

「もうよろしいですか？」

「ええまあ、なんとなくわかりました」

「三つ目の特典は260番『アクトン・ベイビーのスタンドDISC』です」

「スタンド……？ ああ、ジョジョですか」

「です。『アクトン・ベイビー』はジョジョの奇妙な冒険の第四部に登場したスタンド能力の名前で、その能力を封じ込めたスタンドDISCが竹本さんの三つ目の特典になります」

「……………思い出しました。DISCつてあれですか、神父さんのですか。…つてことはそれを押し込めばスタンド使いになれるというのが」

「はい、そういうことです」

『アクトン・ベイビー』は透明な赤ん坊こと、静・ジョースターのスタンド。その能力は透明化。自身と周囲の物や人を透明にすることができるといわれています。

スタンド ヴィジョン 像はスタンド自体が透明なのか、描かれることはありませんでした」

「あー…なんとなく思い出してきました。確か、ジョセフ爺さんが買った物したりした回ですよ。はいはい……………制御とかは出来るんですか？」

「ご安心ください。それこそ原作のように赤ん坊をスタンド使いでもしないかぎり、暴走したりはしませんよ。まあ、慣れないうちはうっかりミスをしてしまうかもしれません」

「よかった…ん？」「スタンド使いにしないかぎり」……………？」

「はい。この特典はあくまでDISCなので、竹本さん以外の誰かに挿し入れてスタン
ド使いになってもらうことも可能なのです」

「……………」

「最後に『能力特典』です」

「はいはい、サイコロですね」

ひよいつ

からからん

「あ」

「出目は6 『はずれ』ですね」

「……………振り直しとかは？」

「できません」

では転生です

あなたは3つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございます」

「さようなら」

☆□ 47番 広川琢磨 享年13歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「……………間違えました」

「あーあー、大丈夫ですよ。広川さん、広川琢磨さんですよね？ あってますよー」

「え？ あ、んん？」

「とりあえず、疑問に思うことも多いでしょうが、諸々説明させていただきたいと思えますのでこちらの席にどうぞ」

「はうっ、……………はい」

「……………そうですか、お——私死んじやったんですね」

「はい。お爺ちゃんのこと、恨んでいないんですね」

「うん、まあ……うっかり落ちたのは私のせいですし、お爺ちゃん目とか耳とかあんまりだったし、しょうがないですよ」

「そうですか」

「それで私はこれからどうなるんですか？ やっぱり石積みですか？」

「いえいえ、確かに親より先に死んでしまいましたが、広川さんには河原で石積みではなく、異世界への転生をしてもらいます」

「転生？」

「『かくかくしかじか』というまあ、暇を持て余した神々の遊びですね」

「……………生き返れるんじゃないんですね」

「ええ、それは、はい」

「いや、ありがとうございます。死んで思ったけどやりたいこといっぱいあったし、…ありませんでしたし」

「ではまず転生する世界をサイコロで決めていただきます」

「……………いくつか聞いたことのないのがあるんですけど」

「(あー、ISもアニメもう5、6年前? だもんねー…今の若い子は知らないよね。と
いうかこの子深夜アニメ自体まだ見たことのない系か)」

決定した後に簡単に転生先の説明をしますので、とりあえずコロツと、どうぞ」

「はい、……………コロ、つと」

ころころころ

?…?…?

「お」

「出目は5と2 『ポケットモンスターの世界』ですね」

「ポケモンか…」

「えっと、ポケモンが出たので、もう一段階、広川さんが生まれる地方を決めてもらいます。赤いサイコロもらいますね」

「はい。……………ん」

ころころころ

「出目は3、広川琢磨さんの転生先は『ポケットモンスターDP Pt』の舞台であるシンオウ地方に決定しました」

「ダイヤモンド、パール」

「あ、」

「？ 大丈夫です、知ってます。まーくん——おじさんが昔のゲームとかくれて、その中にポケモンもあつたから問題ないです。殿堂入りもしましたし」

「そうですか」

「続いて特典です。『かくかくしかじか』そういうわけで、広川さんにはまずアイテム特典〳〵の数を決めていただきます」

「はい」

かつ ころころ

「二ですね」

「ですね。出目は2 くじを二枚引いてください」

がさ〳〵そがさ〳〵そ

1495・・・1640

「はい。それでは特典の説明を行わせていただきます。

まず一つ目、1495番『パイモンの金属器』です」

「?」

「あーつと…これは『マジ』という漫画に登場する」

「『マジ』? マジ…ああ、読んだ覚えがあります。たしかその、アリババとかアラジンとかそういうあれですよね」

「それですそれです」

「おじさん、漫画とかもいっぱい持ってたので、おばあちゃんの家にお泊りしたりしたときに、持って帰って読んだりしてたんです」

「へー（おじさんグツジョブ！ 説明が楽になった！）」

「それでその、金属器ってのは、あれですよね、なんていうんでしたっけ、あのでっかい巨人みたいな人」

「ジンですか?」

「あ、はい、たぶんそれです。そのジン? が入ってる、星みたいなマークがある剣とかのことですよね」

「ふわっふわだな記憶…間違つてはないけど）そうですね。それであつてます。

パイモンの金属器は、煌帝国第一王女、練白瑛の持つ扇形の金属器で、狂愛と混沌の精霊にして風を操るジン“パイモン”が宿つています」

「んー……………」

「思い出せませんか？」

「はい…」

「まあ、分からないことは転生後にパイモンさんに聞いてください。魔装とかマゴイとかいろいろ気づけば教えてくれるかもしれないよ」

「わかりました」

「（かも、で納得するのか…危ういなあ…）」

「二つ目の特典は1640番『創世セット』です」

「そうせいセット？」

「ひらがな発言。創世って言葉の意味わからない？ いや、言葉が連想されないのか）
創世セットというのは映画『ドラえもん のび太の創世日記』に登場したひみつ道具
の一つです」

「あ、ドラえもんですか。どんな道具なんですか？」

「はい、創世セットはなんと、世界を一から作り上げる道具なのです」

「…あ、創世ってそういう……え？ つまりどういうことですか？ 世界を作る？」

「ありていに言って、宇宙創造の神になれる道具です」

「宇宙……なるほど、つまりシミュレーションってことですか。創世日記っていうのは
そういう……」

「違います。本当に、まじで、言葉通り、お手軽に宇宙を作って、星を作って、生命を作っ
て、しかもその作った宇宙に入り込むこともできる、そういう道具です」

「……………ふあああ」

「説明を続けます。

改めまして、この『創世セット』は未来デパートで小学生の夏休み自由研究用にと売られている道具で、映画の中では、自由研究のテーマが決まらないのび太くんのため、ドラえもんが購入した道具として登場しました。

特殊空間に広がる広大な宇宙空間を舞台とし、もうひとつの太陽系を自らの手で創造する道具のセットで、いくつも惑星が形成されたり、地球のように生物が発生して知的文明が形成されたりするかどうかは、本人の技量次第。映画ではのび太くんがのび太くんなので、そもそも太陽系を作ることには失敗したり、作った太陽が小さかったせいで頻りに寒冷期が訪れるようになってしまったりしていました」

「失敗もあるんですか…責任重大」

「セットの内訳は大きく5つ。

一つ目、ベースマット。神様シートとも呼ばれ、この道具で作り出す宇宙への入り口となります。シートをステッキでとんとんとすると入り口が開き、もう一度叩くと閉じる仕組みで、丸めておけば場所をとることもありません。

二つ目は宇宙の素。

レプトン、クォーク、ゲージ粒子の3種類の瓶詰め、ベースマットの中の空間にばらばらと撒いて、ステツキでよくかき回すとビッグバンが起きてマットの中に新たな宇宙が創り出されます。ちなみに、爆発は結構な規模なので、かき混ぜるのはマットの外で行ってください。

三つめはコントロールステツキ。

これがビックバンを起こしたり入り口を作ったりするために使うステツキです。文字通りこの道具のコントロールのための杖で、ベースマットの開閉に用いる他、スタート、ストップ、倍速、巻き戻し、スロー、キャンセル等の各ボタンがあり、創世のスピードを速めたり、巻き戻してやり直したり機能は多岐に及びます。

倍速では現実の一時間で、マットの中では三億年が経過するように設定もできます。

また、天辺のボタンを続けて二度押すことで惑星目掛けて雷を放つこともでき、映画では地球を雷で刺激することで、海中の有機物質から生物を発生させていました。

四つ目と五つ目はフワフワリングと神さま雲。

神さまというよりは仙人のようですが、要するに神様なりきりセットです。どちらも使用者に空を飛ぶ力を与えるものであり、これを使えば宇宙空間でも問題なく移動できます。神さま雲のほうはただ乗るだけでなく、寝床としても使用可能で、雲を毛布のよ

うに羽織ることもできます。

あと、これは神さまからのサービスで、フワフワリングに言語翻訳機能が搭載されていますので、人間のような知的生命体が生まれたときはそれで会話を聞いたり話してみたりすると面白いかもしれません」

「……………頭がこんがらがってきた。

えつと？ そのリングを付けていれば言葉が分かるんですか？ ならポケモンの言葉も分かったり？」

「いえいえ、これはあくまで創世セットで作った宇宙の中でのみ使用可能です。他では使えません。それじゃ、ほんやくこんにやくもオマケした感じになっちゃいますからね」

「む……………」

「なにか質問などがありますか？」

「ちよつと待つてください。

……………

……………お——私が転生するのってポケモンの世界なわけじゃないですか」

「そうですね」

「なら、創世セットでできる世界もポケモンがいるんですか？」

「いえ、ポケモンはいません。」

あくまでこの特典は、22世紀の科学技術で作られたひみつ道具ですからね。順当に科学的に、ポケモンという摩訶不思議な存在は生まれることはないでしょう」

「そうですか」

「あ、でも」

「？」

「作った星にポケモンを放してしまえば、長い時間の中でそれが繁殖して進化して、ポケモンのようにそうでない、ポケモンの栄える惑星が生まれるかもしれませんね」
「なるほど」

「それでは最後に『能力特典』を決めてもらいます」

「はい つと」

からからからん

「あ」

「出目は4 『リスタート×1』ですね」

「死ぬ予定とかないんですけど」

「不慮の事故はいつでもだれでも起こり得るものですよ」

「…そうですね。うん、俺もそうだったわけだし、そっか」

それでは転生です。

あなたは2つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございます」

「貴方の人生に幸あらんことを」

★ 48番 白澤ゆきと 享年27歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「…」

「えっと、48番…白澤ゆきとさんですね（ゆきとさん…、聞き覚えが…なんだっけな）」
「えっと、ここは一体」

「困惑はもつともだと思いますが、ご説明しますのでまずはこちらにどうぞ」

「…はい」

「まず白澤さん自身自覚がないようなのではつきりさせますが、ここは死後の世界です」
「え？ じゃあまさか」

「はい。残念ながら白澤さんはもうお亡くなりになられています（思い出した。さくらちゃんだ）」

「…そんな」

「死因は急性心不全。倒れた貴方を周りの人が心肺蘇生したり色々しましたけど結局ど

うにもならなかったみたいですね」

「……………。私は死んで、死んだとして、それで私はこの死後の世界でどうすればいいんですか？」

「(切り替え、早)それは『かくかくしかじか』です」

「『まるまるうまうま』。なるほど…転生、特典。まるで漫画やアニメのようですね」

「あつはつは、そうですね。でもここにいるあなたにとつては紛れもない現実です。これから現実になる物語です。あなたが主人公かは、分かりませんがね？」

「なるほど。まずは転生先でしたっけ。おすすめはありますか？」

「(お、)そうですね…おすすめはやっぱり日常系ですかね。『自由』の出目が出たら、そうするべきだと思います。それこそ「サザエさん」とか」

「うーん…」

「とにもかくにも、サイコロです。どうぞ」

「……………」

ヒュッ

からんからんからん

? : ?

「あら」

「ん」

「…えー、出目は1と4。白澤さんの転生先は『ハイスクールD×D』の世界です」
「ハイスクールというと、高校が舞台の話なんですか？」

「ですね。それに加えて悪魔とかドラゴンとかそういうファンタジーな要素もある、学園バトルラブコメディものです」

「…バトルですか」

「まあ異常に関わらなければ問題ないですよ。この転生では、どうあつても物語の舞台に上がるということになりますけど、介入をするかどうかは白澤さん次第ですからね」

「わかりました」

「では特典についての説明をさせていただきます。『かくかく』

『しかじか』

『まるまる』

『うまうま』

「『アイテム特典』の数を決めますのでサイコロをどうぞ」

「はい」

からん からからから

「はい、出目は4 特典のくじを4枚引いてください」

「ふむ…」

がさ(そがさ)そ

1427・251・2423・1805

「二つ目のアイテム特典は1427番『アシッド・M』です」
 「??？」

「この特典は漫画『魔法少女オブ・ジ・エンド』」

に登場した^{オルタナティブ・マジカル}亜種魔法少女の一体で、一言で説明すると“未来人型殺戮兵器”です」

「物騒すぎるのですが」

「モンスターパニック映画のモンスターの役割を担うような存在です。見た目は(◇) (◇) (◇)な目と顔をした可愛らしい少女。先端がラップパ状のステッキを持っていて、そこから溶解液を噴射・操作し、人間は殺すか『まじかるゾンビ』として復活させることができます」
 「(えげつな。マジカルゾンビってなによ)」

「あ、はい。『まじかるゾンビ』というのは、亜種魔法少女がステッキで殺害した人間がゾンビになって蘇り、人間を襲う木偶人形になることを言います。亜種魔法少女と違っ

「再生能力がないので頭部を破壊すれば活動を停止します」

「待ってください。再生？」

「あ、はい。この特典『アシッド・M』には再生機能が付いています。というか、本体がステツキなのでそれを破壊されない限りいくらでも復活して人間を襲うことができます。まあ、この特典の形式だと傷ついたら引つ込めればいいだけなのであまり関係ないんですけど」

「…………。その、まじかるさんは意思疎通できるんですか？」

「意思疎通、ひいては使役ですが、可能です。基本は「ま・じ・か・る」と口にするのみですが、白澤さんの命令には従うし、待てもお座りも殺れ、もできますよ」

「最後の物騒。…まあ一つ目でなかなかの武力が手に入ったと喜ぶべきか……………」
「分かりました。次お願いします」

「最後に、アシッド・Mの魔法ですが、ぶつちやけステツキを持てば白澤さんも赤の他人も使用可能ですのでご注意ください」

「(ガワいらないうん…)」

「二つ目のアイテム特典は251番『セト神のスタンドDISC』です」

「セト神…エジプト9栄神ですか」

「おや、ご存知ですか」

「ええまあ、ジヨジヨはそれなりに」

「では説明は省いても？」

「いえ、セト神つてどれだったっけなのでお願いします」

「かしこまりました」

この特典は、嵐と暴力の神「セト神」を封じ込めたスタンドDISC。原作での本体はアレツシー。口癖は『えらいネエ〜』

「繋がった。若返らせるやつですか」

「です」

セト神は影のスタンドであり、本体の影となり、影が交差した相手を若返らせる能力を持っています」

「シヨタナレフ…確か記憶とかの内面も若返るんでしたっけ」

「はい。とはいえ、若いままでも強い相手には効果は薄いでしょうけどね」

「ああ…ドラゴンとかいるんでしたっけ（確かに幼体でも強そうだな…あとは若返りのスピードか。ファンタジーな種族といえは長命が基本だから、一瞬の交差では若返らせきれないかもしれんな…）」

「ご質問は……ないようですね。DISCは一度入れれば取り出せませんのでご注意を」

「三つ目のアイテム特典は2423番『医者医者〜Docteur, docteur〜』です」

「いしやいしや?」

「はい。これは『快盗戦隊ルパンレンジャーVS警察戦隊パトレンジャー』に出てくる敵

組織ギャングラーが大怪盗アルサーヌ・ルパンから奪った不思議な宝物、ルパンコレクションの一つ。本編では幹部怪人のライモン・ガオルフアングが所持していたコレクションです」

「(色々追いつかない…)」

「要するに、ドラえもののひみつ道具のように摩訶不思議な現象を起こす道具の一つです。本編の設定では異世界の代物だから人間には扱えませんが、その制限はカットされています。」

そしてこのコレクションは『超重傷ダメージも完全に治癒させる生命のライフタンク』と説明にあるように、どんな致命傷を負っても生きてさえいれば傷を癒し全回復させる力を持っています」

「つまり…仙豆的な？」

「あ、その例えドンピシャです。こっちは爆散しても回復する分即効性と不可思議性が上ですけど。あと、この特典はオマケとして、半自動的に作動します。身につけていればほとんど不死身になりますよ」

「不死身…(いいこと、なんだよな？ それこそここに来たような突然死や事故で死ぬこ

とがなくなるわけだし、…でも傷が治るのを他人に見られるのは…)

あの、半自動ということは作動させないこともできるんですか？」

「はい。誰かに預ければ効果はその人に移ります。いざとなれば“戻れ”と念じれば戻ってきますし。あとは、寿命には反応しないので、白澤さんが老衰なされる時も作動しませんね」

「なるほど…埋めておくとかでも大丈夫ですか？」

「問題ありませんよ」

「ラスト四つ目のアイテム特典は1805番『チッポケット二次元カメラ』です？」

「名前でなんとなくわかるかと思いますが、この特典はドラえもんのみみつ道具の一つです」
「聞いたことないですね」

『チツポケット二次元カメラ』は撮影した物体を二次元の写真に変えることができるひみつ道具です」

「インスタントカメラ的な？」

「的的な。シャッターを押すと、レンズを向けていた対象の物品が消え、カメラの裏側に写真にされた元三次元の品物が収まる、という感じですよ。」

本編では、のび太くんが捨てられそうになったコミック雑誌の束を写真化したのを皮切りに、ゴルフバッグやぬいぐるみ、ドラえもんなどに犬に車に、果てはジャイアンの母ちゃんまでも小さな写真に収めてしまいました」

「生き物もできるんですか」

「はい。ただし写真にされた生き物は意識を保ち、痛覚というか触覚を有したまま、自力では絶対に戻れない状態が続きますのでご注意を」

「戻るにはどうすれば？」

「普通のを三次元に戻すときも同じなんですけど、お湯をかければいいんです。お湯一滴を写真に滴らせればむくむくと立体的になっていき、写真にする前と変わらない状態になります」

「お湯…：カップラーメンみたいですね」

「そうですね。ちなみにお湯といってもお茶でもなんでも、単純に温度が高い液体なら

何でもいいみたいです。

さっきの話で、最終的にのび太は自分で自分を写真にしまって戻れないと絶望するんですか、犬のマーキングで戻るといふオチになりましたし」

「マーキングということは」

「ええ、はい。——おしっこです」

「Oh…」

「『アイテム特典』の後は『能力特典』のコーナー！」
どんどんぱぱぱぱぱぱ

「サイコロ一つ、どぞ」

「はい」

からんからからから

「あつ」

「はい、出目は5 『○○○○コントロール』です」

「(いらねえ…)」

「まあまあ、そんな嫌そうな顔しないでくださいよ。これがあれば、ほら、うっかり立ち上がれなくなつた時とか便利ですよ？ あとはセルフ感度3000倍ごつごつことか」

「最低じゃないですか」

「あつはっは」

それでは転生です。

あなたは4つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。転生を実行します。それではよき人生を

「いってらっしゃいませ〜」

「ありがとうございました。行ってきます」

☆□ 49番 金森慎吾 享年16歳の場合

「次の方どうぞ―」

ガチャ

「ど、どうも…失礼します」

「番号49番、金森慎吾さんですね。席にどうぞ」

パタン

「…：…これでもしかして“転生”ですか？」

「ええ。やっぱり最近の人は言う前に分かっちゃうんですね。ただこの転生は少々変わったいてまして、説明させていただきますと、『かくかくしかじか』ということなのです」

「なるほど…（産まれなおせる時点で相当いいなこれ）」

「では、サイコロをどうぞ。転生先を決めていただきます」

「はい」

からんからから

?…?…?

「お！」

「5と4で自由選択ですね。おめでとうございます。では早速決めてください」

「え？ ちよつと考える時間とかは…？」

「んーと、あんまり長く悩まれてもいい選択はできないと神さまがおっしゃられました
…20分以内に決めていただく決まりに………」

「う、うーん………」

——10分後

「決めました」

「どこにしますか」

「『PSYREN』の世界でお願いします」

「おおー……あれ、金森さんよくぞ存じですね」

「ジャンプ+のアプリで読んで面白いなって。なにより超能力がある世界ですし……
転生の説明の通りなら、何もしなくても第一ゲームには参加できるんですよね？」

「ああ、なるほど。∴確かにこの転生システム的に参加できますよ。テレホンカードも必然として手に入れて、サイレン世界に行つて、大気を吸つて、サイキツカーとして覚醒することが出来ます（死ななければ、だけど）」

「では続いて、金森さんの転生特典を決めていきたいと思ひます」

「よつ、待つてました」

「転生特典は『かくかくしかじか』という仕組みで、まずは『アイテム特典』の数をサイコロの出目で決定します」

「サイコロですね、それじゃ投げます」

からん からから

「はい。出目は2、くじを二枚引いて下さい」

「はいはい」

がさ(そがさ(そ

1822・・・628

「では特典の説明をさせていただきます。

まず一つ目は1822番『ツキの月』です」

「月？」

「はい。これはドラえもんのひみつ道具の一つで、『劇場版ドラえもん のび太のアニマル惑星』で“とつとつきのやつ”として登場したものです」

「ドラえもん…ああ、ツイてるとかツイてないとかの、幸運的な意味での「ツキ」ですか！」

「その通り。この道具はゴツゴーションギクという薬草から作られる、三日月の形をした飲み薬で、効果は『飲めば3時間、信じられないくらいツキまくる』というものです」
「あからさまにご都合主義」

「ですね。ちなみにこの手の道具にありがちなしつぺ返しや、不運の揺り返しがこの道具にはありません。ただ、今までツイていた幸運がなくなるので、落差で不幸になったと言えなくもありませんけど」

「ふむ……これを飲んでいれば第一ゲームも突破できますかね？」

「どうでしょう……。ツキの月は飲んだ人間が普段不幸なほど、幸運になるので、金森さんでどのくらい幸運バフが効くかは……。それに、3時間で公衆電話までたどり着けますかね……？」

「うーん……………」

でもまあ、好きな時にラック補正をつけられるアイテムがゲットできたと考えれば、嬉しい、です？」

「では続いて、二つ目の『アイテム特典』、

628番『贄殿遮那』です」

「シヤナ？」

「お、ご存知です？」

「え、あ、いえ、にいちや——叔父の本棚に、そんなタイトルのがあつたなど」

「あなるほど。それは多分これの原作のですね。」

『贄殿遮那』はその灼眼のシヤナに登場した………（宝具とかどうか説明めんどくさいな）端的に言うとうと武器であり、刀です」

「刀」

「正確には全長約130cm、刃渡り約108.3cm、柄約21.7cmの鞘を持たない大太刀で、能力としては『刀そのものに対するあらゆる力の干渉を受け付けない』というものです。刀自身にしか効果は及ばないので、使用者も守るとかそういうバリア的な効果は期待できません」

「んー、と…よくわからないんですけど、つまりどういった武器なんですか？」

「例えばこれから金森さんが転生する世界の主人公である夜科アゲハさんの『暴王の月』^{メルゼズドア}。あれをこの贄殿遮那を構えた金森さんが喰らつたとします」

「はい」

「すると、贄殿遮那は傷一つないが担い手の金森さんは普通に食われて消えるという感じになります」

「あ、ああ……そういう……P S I^{サイ}を切り裂いて無効化とかは？」

「無理ですね。どこその右腕のような異能を打ち消す効果は持っていませんので。言つてしまえばこの刀は 破壊不可能な大業物 っで感じで、「普通の刀では俺の腕に耐えられん！」みたいな達人の使うもので、担^{あな}手^たが素人剣士だったら、鉄パイプ以下の代物ですね」

「うわー……そういう感じですか（剣道とか習うかな？ うーん、でもな……）」

「最後は『能力特典』選択です。準備はよろしいですか？」

「大丈夫です！」

「ではどうぞ」

からんからんからん

「出目は3、『翻訳』ですね」

「…やったー！ つしやー！ ツ！」

「おめでとうございます」

「ありがとうございます!!（これで英語の授業が地獄じゃなくなる!!）」

では転生です。

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「行ってらっしゃいませ」

「行ってきます！」

☆□ 50番 五十嵐空 享年20歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「こんばんわ〜…」

「こんにちは。50番、五十嵐 空さんですね。どうぞこちらに」

「はいー」

パタン スト…

「では、

おめでとうございます。五十嵐さん、あなたは神様転生の権利を得ました！」パチパ

チパチー

「マジですか。飛んでみるモンですね」

「モンですねー。自殺だろうが他殺だろうが事故死だろうが、神様は死に方で人を差別したりしないのです。」

お気づきの通り、ここはいわゆる神様転生を行う場所でこれから先、五十嵐さんには転生先と特典を決めていただき、二次元世界に転生していただきます。まあ五十嵐さんがここに呼ばれたのは偶然ですけどね」

「わーいわーい」

「喜びが独特ですね。転生のシステムについて、まずはその説明をさせていただきます。

『かくかくしかじか』………という感じです。わかりましたか？」

「はい。まるで脳みそに情報を叩き込まれたかのように」

「表現も独特ですね。ともあれ理解してくださったのなら準備完了。

転生先をサイコロで決めていただきます。どうぞ」

「あい、さー」

からん、からから

からからから

??

「おー……」

「はい、出目は5と1 なので『Fate／シリーズ』に転生ですね。ご存じですか？」

「ZEROとHeaven's FeelとプリズマイリヤのアニメとFGOですかね」

「結構知ってますね……」

「中学生の頃知って、そっからです」

「なるほど。それではもう一度サイコロを、今度は一つ振ってください。出目でどの作品の世界に転生するかを決定します」

—※※※—

? . . . stay night

? . . . zero

? . . . EXTRA

? . . . Apocrypha

? . . . k a l e i d l i n e r プリズマ☆イリヤ
? . . . G r a n d O r d e r



「ではどうぞで」

「たりゃー」

からんっ からから

「おー」

「出目は6。五十嵐さんの転生先は『Fate／Grand Order』の世界に決定
しました」

「やったー？」

「おめでとうございます（喜んでいいのか困ってる？ どういう感情だこれ）」

「次は特典を選択してもらいます。2種類の特典を贈らせてもらうのですが『かくかくしかじか』で、まずは“アイテム特典”の数をサイコロで決めます」

「はい。投げても？」

「どうぞ」

からからからから

「んー。やったったー」

「出目は6。くじを6枚引いてください。番号の品物があなたの特典になります」

「わーいわーい、やったった、やったった」

「喜んでるんだよね。喜んでるんだよね？」

がさ、がさ、がさがさ

「んー？ んーんーんー」

がっさがっさ、がさがさがさ！

1595・・・11・・・1602・・・128・・・1237・・・303

「それでは特典の説明をさせていただきます」

「二つ目の特典は、1595番『味見スプーン』です」

「スプーン？」

「はい。見た目は何の変哲もない一口サイズの小匙ですが、このスプーンはその名の通

り味見をする機能を有するアイテムとなっています」

「んー?」

「まあ、ぶつちやけドラえもののひみつ道具です」

「あー」

「使い方は簡単。食べ物の写真にスプーンをつけるだけ。そうすることで写真の食べ物を掬い取って味見することができます。」

ただし『味見スプーン』なので、食べられるのは一枚につき一回、一口だけです」

「ふむん。……カタログとかで一枚にいくつも載ってるケーキとかはどうなるんですか?」

「独立していれば一つずつ一口食べられますよ。ハサミか何かで切り離せばどうとでもなりますしね。ちなみに、スプーンは一つで何枚にでも使用可能ですし、味見スプーンを取り換えれば一度味見した写真ももう一度味見することができますよ」

「ふむー」

「続いて二つ目の特典は、11番『マネマネの実』です」

「悪魔の実」

「イエース」

「ボンちゃんさん？」

「ざつつらいっ！」

「イエーイ！」

「いえーい」

「ゴホン。はい、そういうわけで『マネマネの実』です。食べた者を、右手で他人の顔に触れる事でその人物の声・体格・傷跡といった身体的特徴を完全にコピーし、自分の体に自在に反映させる事ができる「マネ人間」にする超人系悪魔の実の一つです」

「変身……じゃないんですっけ？」

「そうですね。あくまで“マネ”であり、記憶や人格、身体能力などは写し取ることはできません」

「そうそう。あのー、えっと……オカマ拳法？ がナミさんの真似したままだと出せない

とか、ありましたよね」

「ええ。ついでにいうと、右手で記憶した当時の記録にのっとなので、月日が経ったりなんだりで元の人物と一致しなくなることがあるのでそこは注意してください」

「はい」

「能力の解除方法はマネってる時に左手で頬を撫でることです。以上でよろしいですか？」

「はい」

「三つ目の特典は、1602番『あなただけの物ガス』です」

「あなただけの物ガス？」

「これまたドラえもののひみつ道具の一つで、効果は読んで字のごとく「ガスを吹きかけたものが他人にとられなくなる」、つまり「あなただけのものになる」ひみつ道具なわけです」

「へー」

「アニメでは、のび太君にガスを吹きかけられた漫画本は彼以外に読まれることを拒み、ジャイアンをぼこぼこにして、しずかちゃんはまだでペットの犬のように従順？ 盲目？ な感じになってしまいました（鳥の雛の刷り込みみたいな感じだったかな）」

「うわあ」

「まあ、その後間違つて先生にガスをかけてしまつて「のび太だけの先生」になつた先生にひたすら勉強を教えられるというオチがつくのですがね」

「あつはつは」

「このガスを吹き付けられたものは、吹き付けた者以外の他者からの干渉がほぼ不可能となり、対象が人であつた場合は人権無視の強制労働だつて可能なヤバめのひみつ道具です。」

先生の例を見るに、別に絶対服従させられるわけではないのでご注意ください」

「はい」

「四つ目の特典は、128番『眠七號』です」
「？」

「『BLEACH』の護廷十三隊十二番隊副隊長 涅ネムの正式名称です」
「あー、あの。ミスカで、コキュツしおしくつてなつてた」

「ですです。」

涅マユリの無から新たな魂を生み出す被造死神計画「眠」の七號目の個体。かの天才の義骸技術・義魂技術の粋を集めて作られた最高傑作の人造死神で対外的には彼の娘とされています

「死神ってことは……どうなるんですか？」

「この特典は世界によるんですけど……。」

はい、FGOの世界においては受肉した英霊的な感じになりますね」

「んー？」

「つまり魂魄を削って敵を粉碎する「義魂重輪銃」のような技や、怪力といった超人的な能力はそのままに、現世に干渉可能な肉の器を持つて顕現するということです」

「んー……ん。なるほど」

「見た目や気配は普通の人間そのものといふかなので基本的に人外バレすることはないと考えますよ」

「そうですかー」

「そうですよー」

「五つ目の特典は、1237番『コリンクの入ったモンスターボール』です」

「モンスターボール？」

「はい。この特典は生き物だけど生き物じゃないことにしてポケモンを特典にしちやおう！ という神様の横紙破りでできた特典で、せんこうポケモンコリンクが入っています」

「コリンク…コリンク…コリンク？」

「でんきタイプの、水色の猫みたいなポケモンです。進化系はルクシオとレントラー」

「ああー！ ダイヤで出てきたあれですか。あのー…アレ！」

「多分それです」

「えつとえつと、ツツコミのルクシオですよね」

「え？」

「ポケスぺでパールに助けられたあれです」

「よくわかりませんが多分そうだと思います」

「よかった」

「よかったですね」

「最後 六つ目の特典は、303番『ココ・ジャンボ』です」

「？」

「ココ・ジャンボは、亀です」

「??」

「スタンド使いの」

「あー」

「分かりました？」

「アニメで見ました。あの、あれ、鍵はめ込むと中に入れるやつですよ」

「その通り、正解です。スタンド名『ミスター・プレジデント』により、体の中に部屋を作ることでできるジョジョ第5部に登場する動物のスタンド使いその人——もとい亀です」

「確かトイレないんでしたよね。ジツパーでトイレ作ってたの」

「はい。電気は通っています但水道は通っておらず、そのためトイレだけでなく風呂場や洗面台もありません。

部屋と外は出入りが自由であり、スタンド発動の文字通り鍵キとなつてゐる鍵カギの宝石部分を通して外と中を行き来することができます」

「んー、亀の部屋…カメハウス…カメルーム？」

「カメハウスですね」

「さて、〃アイテム特典〃が決まったところで、〃能力特典〃も決めていきましょう！」

「はいさー」

「ではサイコロを」

「ほいさー！」

からん からから

「あちやちやー」

「あー、出目は6 『はずれ』ですね」

「うぬぼあー」

それでは転生です。

あなたは6つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をしても、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは

ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。転生を実行します。それではよき人生を

「いつてらっしやいませ〜」

「ありがとうございますましたー」

★ ■ 51番 木村明生 享年22歳の場合

「次の方どうぞー」

「はいっ！ よろしくお願いします！」

ボタン！

「51番、木村明生さん。こちらの席にどうぞ」

「はい！ ぐぐぐっ！」

「……あの」

「ああ、すみません。ちよつとテンション上がっちゃって！」

キィ……

「あの、一応確認なんですけど……これ、世に言う転生ってやつですか？」

「はい、その通りです」

「やった！ やった！ うっひゃっほうっ！」

「落ち着かれたようなので、転生のシステムや特典についての説明をさせていただきます」

「はい」

『かくかくしかじか』

『まるまるうまうま』

「以上です。何か質問はありますか」

「はい！」

「……どうぞ」

「やりたい放題していいんですか!!」

「……あー。」

「……いいですよ、別に。特典によつては世界を破壊することすら可能なものもありますし、ヒロインに振られた八つ当たりで星を砕いちやったりしても全然OKです。」

「ただし自己責任で、好きに生きちゃってください」

「わかりました！ 好きに生きます！」

「ではまず、サイコロを2つ同時に振って転生先を決めていただきます」
「はい、いきます…！」

* *

? ? ? : ? ↓ ONE PIECE

? ? ? : ? ↓ BLEACH

? ? ? : ? ↓ IS

? ? ? : ? ↓ ハイスクールD×D

? ? ? : ? ↓ 魔法少女リリカルなのは

・ ・ ・ ?? 無印

?? sts

?? v i v i d

? ? ? : ? ↓ TO LOVEる

? ? ? : ? ↓ Fate /

- ・ ・ ・ ? stay night
- ? zero
- ? EXTRA
- ? Apocrypha
- ? kaleid liner プリズム☆イリヤ
- ? Grand Order
- ? ? ? : ? ↓ポケツトモンスター
- ・ ・ ・ ? カントー・ジョウト地方
- ? ホウエン地方
- ? シンオウ地方
- ? イツシユ地方
- ? カロス地方
- ? アローラ地方
- ? ? ? : ? ↓なんちやってファンタジー世界
- ? ? ? : ? ↓自由
- ? ? ? : ? ↓神が勝手に決めます
- ? ? ? : ? ↓特典決定後、自由選択

* *
* *

からん からから

? : ?

「お！」

「はい。出目は3と1 『ONE PIECE』の世界に転生です」

「よっし！ 知ってる世界！」

「おめでとうございます？」

「ありがとうございます！」

（ワンピ！ ワンピ！ おっばいっばい夢いっばい！ 致したい！ 致したい

！）

「続いて特典、〃アイテム特典〃の獲得数を決めていきます」
「はい。……振っても？」
「どうぞ」

ひゅっ

からん からから

「あ」

「あ」

「……」

「出目は1、というわけで木村さんのアイテム特典は一つだけとなります」

「ううん……」

「くじを引いてください」

「はい………！」

がさがさがさがさつ！

1145

「はい。それでは得点の説明をさせていただきます。」

木村さんが引かれたのは1145番『ハネッコの入ったモンスターボール』です」

「羽っ子？」

「ハネッコ。」

タイプはくさ・ひこう。分類は“わたくさポケモン”で たかさ0.4m、おもさ0.5kg。モチーフは進化系含めてタンポポのポケモンです」

「……………あー？ あー、あー、あー。あれですよ、あれ。ポケスペでヤナギ老人と戦った時の「ふっかああっ!!」の」

「それはハネッコの進化系のポポッコですね。」

ハネッコがタンポポの葉っぱ、ポポッコはタンポポの花、ワタッコはタンポポの綿毛をモチーフにされています」

「あー！ 完全に思い出しました。ピンク色と緑色と青色ですよ！」

「それですそれ」

「……………で？ 俺の特典はそれですか？」

「はい」

「それだけ？」

「はい」

「確か、そいつってそんな強い奴じゃないですよね…？」

『つよいポケモン よわいポケモン』

そんなの ひとつの かつて

ほんとうに つよい トレーナーなら

すきなポケモンで かてるように がんばるべき』 つてポケモンの名言があります
けど」

「いやいやいや、40cmのふわふわ綿毛ですよね☒ それがたった一体！ 無理でしょ
！」

「無理とは…？」

「うっ……、それは…その…。」

その、俺 t u e e でヒヤッハーとか…？」

「(笑)」

「ぐぬぬ」

「失礼しました。でもまあ、人には弁えるべき分というものがあつてですね」

「ぐはっ」

「特典としてのポケモンはフレーバーテキストが再現されているので、ワタツコまで進化させれば風に乗って世界一周もできますよ」

「おっ！ 空飛べるんですか！」

「はい。ワタツコだけなら」

「え」

「そらをとぶ」覚えませんしね。木村さんが子どももだつたら…ギリギリ大丈夫かもですけど、大人では絶対に浮かび上がらせられません。

ハネツコ4体が気球みたいにすれば…話は別でしょうけど」

「俺がもらえるの1体だけじゃないですか」

「———そうですね」

「では最後に『能力特典』を決めていただきます」

「はい」

からからから

ひゅっ

からん からから

「おー」

「はい。出目は1、『アイテムBOX』です。生き物以外無限収納、無限保存です」
「航海にはあり、ですかね」

それでは転生です。

あなたは1つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

あなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございました」

「行ってらっしゃいませ」

★ ■ 52番 多賀始 享年14歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「……」

「52番、多賀始さんですね。どうぞこちらに」

「……」(コクリ)

「……混乱なされるのももつともですね。

多賀さん、あなたは亡くなりました。

ここは転生をなされる転生者の方に説明をして、転生先の世界や転生に際し贈らせていただく特典を選択させていただく場所。あなたは二度目の人生を送る機会を得たのです」

「……」

「あー……つと。んんっ！ 『かくかくしかじか』で多賀さんにはまず、転生先を決めてもらうためサイコロを振ってもらいます。よろしいですか？」

「……」(コクリ)

「はい。ではどうぞぞ」

からからから

?…??

「おー！ 出目は4と6！ これは当たりですね！」

「……」

「うう……。……多賀さんの転生先は特典が決まってから多賀さん自身に選んでいただくことになります」

「……」

「それでは特典についての説明を。『かくかくしかじか』で、まずは“アイテム特典”の数を決めていただきます。サイコロをどうぞ」

「……」（コクリ）

からんからから

「あらまあ、出目は6。多賀さんに贈られる“アイテム特典”は6種に決まりました。くじを6枚ここから引いてみてください」

「……」（コクリ）

がさがさ　　ごそごそ

4 1 4 . . . 1 7 1 5 . . . 2 7 3 . . . 2 5 7 1 . . . 1 2 7 2 . . . 2 0 1 0

「はい。それでは特典の説明をさせていただきます。

一つ目の特典は414番『音叉＋鬼鞭＋鬼傘＋音撃棒 烈翠＋音撃鼓＋音式神 消炭鳥』の歌舞鬼変身セットです」

「？」

「あ、歌舞伎じゃなくて歌舞鬼ですよ？ 鬼のほう、仮面ライダー響鬼の劇場版に出てきた戦国時代の鬼の」

「……？」

「え？ ひよつとして知らない系ですか？」

「……」（コクリ）

「えー。でもそつか…14歳なら仮面ライダー響鬼は生まれる前の作品…そつかー、知らないのかあ」

「……」

「ああ、ごめんなさい。えつと、この特典は仮面ライダー響鬼という物語の中で、魔化魍

と呼ばれる妖怪変化・化け物から人を守るため、体と心を鍛えて鍛えて鍛え向いた末に人が変化する『鬼』と呼ばれる音撃戦士に変わり戦うためのアイテムです」

「……」

「ちなみに設定の都合上、多賀さんはそのままでは鬼にはなれません。『使いこなすため』ではなく、そもそも『使用するため』に修行が必要な特典ということですね」

「作中では様々な『鬼』が登場し、魔化魍と戦っていましたが、その中でも今回多賀さんが変身の可能性を与えられる歌舞鬼は戦国時代、強大な魔化魍である「オロチ」を討伐するため集まった七人の鬼の一人で、太鼓と撥を使う『打』の鬼でありながら、音叉を変化させた音叉剣や傘といった多彩な武器で戦うユニークな戦士です

（過去の話とか魔化魍サイドとかそういう話はしないでいいだろう）」

「……」

「この特典の特徴は、なんといっても『変身できる』！ ということでしょう。鬼としての力も魅了的ですね。映画でも、鬼の一人がその力でもって文字通り一国一城の主、要は殿様になっていました。」

また、鬼の放つ音撃―清めの音―は怪異化生、妖怪変化の類には効果抜群なので、そ

ういう点でも優れていると言えますね」

「何か質問はありますか？」

「……」（フルフル）

「続いて二つ目の特典は1715番『強力ハイポンプガス』です」
「？」

「この特典はドラえもののひみつ道具の一つでその機能は「肺活量を10000倍にすること」です。

外見は理科の実験で使われるようなガラス製のポンプ装置。

のび太くんが泳げず困っているのを見るに見かねたドラえもんが、溺れないようにと出してくれたひみつ道具で、中に入っているガスを吸うことで肺が強化され、通常の1

000倍まで空気を吸い込んでおけることができます。

肺活量が1000倍になるので抑えて呼吸しなければ、ただ息をするだけで人や物が飛んで行ったりしてしまいます。『一息エアロブラストの空気弾』というやつですね」

「三つ目の特典は273番『ハーヴェストのスタンドDISC』です。スタンド、ジョジョの奇妙な冒険、ご存じですか？」

「……」（コクリ）

「（あら意外）ハーヴェストは？ スタンドDISCは？ わかります？」

「……」（コクリ）

「（あらあらまあまあ）でしたら、説明は最小限でいいですね。」

ハーヴェストは本体を重ちーこと矢安宮重清とする4部登場の群体型スタンド。その数500体以上で、射程距離と持続力が優れ、杜王町全体は軽く行けるほど。圧倒的な数とそれを活かした応用性によってパツと見た印象とは真逆の恐ろしさ凶悪さを誇

るスタンドであると言っでいいでしょう。

弱点は500体にもなる群体型ゆえの一体一体のパワー不足。あるいは普通のスタンドが当たり前にできるスタンドの攻撃をスタンドで防御、ということが難しいこと」

「……」

「スタンドDISCはご存じプツチ神父のホワイトスネイクの能力によつて物質化された、いわばスタンド能力そのものの結晶です。今回の特典、『ハーヴェストのスタンドDISC』はまさにそうであり、これを挿し込むことで挿入された生き物をスタンド能力者にする特典です。

何か質問はありますか？」

「……」（フルフル）

「では四つ目、2571番『わざマシン：スピードスター』です」

「……」

「わざマシン。つまりはポケモンです。ポケモン、知ってますよね？」

「……」(コクリ)

「よかった。この特典はそのポケットモンスターシリーズに出てくるわざマシンの一つになります。本来は……:というかなんというか、わざマシンはポケモンに使うものですが、この特典は人にも使用可能です」

「……」

「つまり！ 多賀さんがスピードスターを放つことができるようになる！ ということなのですっ！」

「スピードスターは威力60、必中のノーマルタイプ特殊わざ。」

設定を元に、星形の弾を降下範囲内の全体にばらまき攻撃するわざとなっています。必中技なので適当に使っても必ず当たります。

ノーマルタイプなのでゴーストタイプには効果なし。幽霊や悪魔、妖怪といった霊的存在には効果がないというわけです。

PPについては回復しません。スピードスターのPPは20なので覚えてから20

回使用すると使えなくなるので、再度わざマシンで覚えなおしてください。そうすればまたスピードスターを放てるようになります」

「何か質問はありますか？」

「……」（フルフル）

「五つ目の特典は1272番『ビクティニの入ったモンスターボール』です」

「……」

「はい。ポケモンです。モンスターボールです。生き物です。」

イツシュ地方における幻のポケモン、ビクティニ。

ぶんるい：しよりりポケモン タイプ：エスパー／ほのお

たかさ：0.4m おもさ：4.0kg

フレーバーテキストから『無限にエネルギーを作り出し触れた相手に分け与える』だの『ビクティニを連れたトレーナーはどんな勝負にも勝てる』だの言われているポケモンでもありません」

「……」

「人でも動物でも、バトルをして勝利すれば経験値をもらえ、レベルアップ。当然ですが覚える技はレベルわざのみとなります。」

回復はいったん消して、もう一度ボールから出すことで完了します。つまり多賀さん自身がポケモンセンターみたいなもの、というわけですね」

「こんなところでしようか、何か質問……ないですよね」

「……」(コクン)

「ですよねー」

「最後、六つ目の特典は2010番『魔王の小槌』です」
「？」

「はい。『魔王の小槌』は漫画「ぬらりひよんの孫」に出てくる刀：妖刀です。妖怪の「畏」……あーっと……妖力？ とか？ そういうエネルギーを斬る度吸い取って自身の力とすることで、どこまでも際限なく強く鍛え上げられるのがこの刀の特徴であり、それは対妖怪の特効武器といえるでしょう。

強くなる武器、強くなる刀というとジョジョの奇妙な冒険第三部エジプト編登場のスタンド「アヌビス神」が連想されるかもしれませんが、あちらが経験で対処能力や技術が強化されるのに対して、こちら『魔王の小槌』は単純に出力・パワーが増大するという感じでしょうか。切れ味が増す、圧が増す、「畏」が増すというように」

「……」

「ついでに言うと『魔王の小槌』とは、ぬら孫で江戸時代に生まれた大妖怪「魔王・山本五郎左衛門町」の心臓が変化して生まれた刀、「山本の本の心臓」という妖怪でもあります。とはいっても、刀が喋りだすわけでも刀に意思があるわけでもありませんが……ご使用の際にはくれぐれもお気をつけ下さい」

「……………」(……コクリ)

「では『能力特典』のサイコロタイムです！

どうぞぞつ！」

「……」

かつ

ころころころ

「はい。出目は4、『リスタート×1』ですね。ゲーム的に言うなら残機あり、何かでうつかり死んでしまってもその原因までさかのぼって、死を回避する機会を与えてくれる能力です」

「……」

「どこまで戻るのか、はその死の要因によつて変わります。何でもない事故なら事故が起こる少し前までかもしれません。根の深い問題：怨恨による殺意からの死亡などなら、その原因が芽生えるところまで戻るかもしれません。説明は以上でよろしいですか？」

「……」（コクリ）

あなたは6つと1つの神からの贈り物をもつて別世界に転生します。

今のあなたの自我を保つたまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。転生を実行します。それではよき人生を

「それではそれでは最後の最後！ 多賀始さん！ あなたが転生する世界を高らかに宣言してください！」

「……………」。

『ゲゲゲの鬼太郎』で」

「はい！ 転生先『ゲゲゲの鬼太郎（アニメ6期）』!!
行ってらっしゃいませ！」

☆ ■ 53番 久里次郎 享年26歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します…?」

「どうも。えーつと? 53番 久里次郎さんですね。こちらの席にどうぞ」

「は、はい………」

「あの、ここは、どこ、なんででしょうか…病院ではなさそうですが」

「あー、はい。ここは死後の世界で、小原さんに第二の人生を送ってもらうため、サイコロを振ってもらった場所となっています」

「なるほど、つまりここはそういう場所ですか」

「はい?」

「今流行りの異世界転生的な」

「異世界転生ファンタジー 廃れつつも息長いですよねー。いつまで続くんでしょう」
「もう文芸の一ジャンルとして確立した感がありますよね」

——それはともかく、どうなんですか？」

「おつとつと。ええ、はい。久里さんのお考えの通り。そういう場所ですよ」

「おお……！ ……ということとは私死んでしまったんですか。『黙示録アリス』のコミック第4巻、漫画喫茶で見つけて今度読もうと思っていたのに……っ」

「お悔やみ申し上げます。」

さて、さてさてさて。気を取り直してこちらを向いて、私の説明に耳を傾けてくださいませ。これからの人生、これからの来世にかかわる重要な説明です」

「はい」

『かくかくしかじか』

『まるまるうまうま』

「はい。こんなところでよろしいでしょうか。説明を終了し、転生世界の設定に移ります」

「お願いします」

「ではでは久里さん、サイコロを二つ、同時に振ってください。出た目がそのまま久里さんが生きる世界となります」

「すう、はあー。すう、はあー」

「(声に出すんだ……)」

「ふっ!」

からんからん からんからんから

?…?

「お」

「ん」

「サイコロの出目は5と4、よって久里次郎さんの転生先は『自由』です」

「4は…今決めるんですしたっけ？」

「はい。特典を決める前に、おねがいます」

「んー……………んー……………」

……………ちなみに他の転生者の方で、この『自由』を出した人は例えばどんな世界を選んだとか、教えてもらうことってできますか？」

「そういうのは、あんまり教えられないんですけど……………」

そうですね、傾向的にはやはり日常系の世界でしょうか。特典が使い物にならない場合も考えられますし、リスク回避という意味でも命の危険がなく、インフラがちゃんとしている現代の日常系がいいなーという感じで『自由』ではそういうのがよく選ばれていると感じます」

「んー。そうですかー……………」

「……………決めました」

「ようやくですか」

「はい、お待たせしてしまつて」

「いえいえ、ここでは時間の流れもありませんから。」

「それで、何にするのですか？」

「『いぬやしき』でお願いします。漫画版でもアニメ版でも、劇場版でなければいいので」

「『いぬやしき』…？ 奥浩哉先生の？」

「はい」

「決められた理由を聞かせていただいてもよろしいでしょうか」

「んー、えーつとですね。」

「理由で一番は、主人公の年齢です」

「年齢？」

「はい。さっきの説明によると、私が転生するのは転生した世界の主人公が生まれた年なんですよね」

「そうですね、原作開始時に同い年になるようにということなので」

「で、そういくと、この『いぬやしき』の主人公の犬屋敷さんは確か60歳手前ぐらいだったと思うんですよ」

「……ですね」

「作中で明確に西暦何年とは書かれてなかった気がするんですけど、ワンピとか進撃の巨人とか、某大統領とか、そういう要因からして原作スタートは2010年代になるわけじゃないですか」

「そうなりますね」

「で、その約60年前生まれで、1950年代に転生して生きていくと……このシステムならそうなるわけで、ざっくり昭和生まれになるわけですよね？」

「まあ、はい。それがなにか？」

「昭和生まれということは、つまり！ リアルタイムで仮面ライダーやウルトラマン、あとはガンダムとか、そういう長寿番組を最初期から追うことができるわけですよ！」

「あくくなるほど」

「ドラゴンボールを週刊のリアルタイムで追っかけてみたりもしたいですね。そんな近所の子どもらにネタバレしてやりたいです」

「最低ですね」

「あとあと、ビデオとかグッズとかも大人買いしたりしてみたいです。いずれ廃れてしまおうとしてもビデオテープでぎゅいんぎゅいんって。あとは楽しそうだしジャンプとかは頑張つて創刊号から買い集めておきたいですねー」
「なるほどなるほど」

「あ、それと、選んだ理由、他にというと特に被害なく物語を終えることができるからですね。中盤の虐殺は煽つたりスマホ使わなければ大丈夫だし、終盤の隕石は放つておいても二人もとい二機が自爆で解決してくれますし」

「ふむふむ……………でもあの作品、奥先生の作品あるあるで治安が割と低めですけど大丈夫ですか？」

「ん……………そう……………なん……………ですよねえ……………」

でも……………現代が舞台で、高齢の主人公で、大体あらすじ把握してるのがこれしか思いつかなくて……………」

……………まあ、作画的に美人はちゃんと美人ですし？ そっちでも、期待が？ 持てますし……………」

「はあ……………」

「特典が良いものであれば！ 最悪駄目でも問題はない！ ……はず！」

「おやし狩りから身を守る程度のはゲットできるといいですね」

「——ですわね！」

「さて、特典です」

「はい」

「『かくかくしかじか』で、まずは“アイテム特典”の数を決めていただきます」

「わかりました」

「サイコロです」

「はい」

「振って。どうぞ」

「はい」

からからからから からん

?

「うぐうう……………ツツ！」

「苦悶に満ちた声いただきました。」

出目は1、よって久里次郎さんの「アイテム特典」は一つのみとなります」

「……………あ、あのう、再トライは」

「できません」

「ですよね……………」

「くじをどうぞ」

「はい……………」

がさ()そがさ()そがさ()そがさ()そ

「えいつ」

32

「それでは特典の説明をば。

久里さんが引かれた番号は——32番。『アワアワの実』です」

「……悪魔の実？」

「です」

「アワ、は……CP9の、……………眼鏡美人」

「カリファさんですね。」

彼女が食べた超人系^{パラミシア}悪魔の実『アワアワの実』が特典となります」

「んー、当たり前ですかね？」

「どうでしょうか。食べるだけでい能力を身に付けられるのは当たり前だとは思いますが、カナヅチになってしまいますし、汎用性があるわけではありませんしねー」

「そうですねー」。

「んん、そうだ。あれ、あのー、あれ。六式？　って私使えるようになったりそういうオマケあったりしません？」

「ありません。そういう世界でもないですし。頑張っても習得は不可能です。仮に久里さんが転生するのがワンピースの世界であれば六式やら覇気やらを習得できるように、ドラゴンボールの世界であれば気弾を放ったり舞空術で空を飛んだりできるようになったかもしませんが」

「ですか」

「ですです」。

つとと、説明がまだでした。知っているかもしれないませんが一応。

『アワアワの実』は食べた者を全身泡立つ“石鹼人間”へと変える超人系悪魔の実。体をこすることで泡を出し、そしてその出した泡を触れることなく自由自在に操ることができるのが基本的な能力です。

体から出る泡は汚れくすみはもちろん力も、あらゆるものをそぎ落とし、あるいはつるつるピカピカに磨き上げることができません。

弱点は水。泡であるため効果は水によって消えてしまいます。

こんなところでしょうか

「はい。大丈夫です」

「さて、いよいよラスト。『能力特典』のサイコロです」

「はい」

「どうぞ」

「やー」

からからから

「出目は2、『鑑定』です」

「おお、いい感じですね」

「ですね」

「目にこう、ぐっ！ と力を入れればいいんですか？ 白眼みたいに」

「意識するだけで大丈夫ですよ。意識するだけで基本的な情報は浮かび上がってくるので、よりディープな情報を求めるときにはこう、ぐっ！ と注視してみてください」

「了解です」

それでは転生です。

あなたは1つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは
ありません。

三度目はありません。二度目の人生を、後悔なく過ごせるかはあなた次第です。
転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございます」

「よい人生を」



54番 梶原洋平 享年12歳の場合

「次の方どうぞー」

ガチャ

「どうも」

「はいどうもー。こちらの席にどうぞー」

「はい」

「54番 梶原洋平さん、ですね」

「はい」

「残念ですが梶原さん、あなたは死にました」

「そうですか」

「……………突然こんなことを言われて混乱するかもしれませんが、あなたには異世界に転

生してもらいます」

「そうですか」

『かくかくしかじか』そういうことでして、あなたには特典をもって第二の人生を送ってもらおうということですよ」

「なるほど」

「理解できたのならサイコロを振って梶原さんが転生する世界を決めていただきます」

「はい」

「ではどうぞ」

「……………つや！」

からからから

?…?」

「出目は5と3…『なんちゃってファンタジー』の世界ですね」

「ファンタジーですか？」

「神さまが剣と魔法のファンタジーをいい感じの『あるある』を詰め込んだ、どの作品にも基づかない異世界です」

「ゲームとかである感じの牧歌的で古典的なものというわけですか」

「そうですね。と、そんなわけで続いて特典の選定に移らせていただきます」
「お願いします」

「ではまず『かくかくしかじか』ということで二種類の特典のうち『アイテム特典』の数を決めていただきます」

「もう投げていいですか」

「どうぞ」

「……………つやー！」

からん からからからから

「お」

「出目は3、梶原さんの『アイテム特典』は3つということになります」

「くじ引いていいですか」

「はいどうぞ」

「んーんー、んー」

がさー(そがさー(そがさー(そがさー(そがさー(そ

1005・・・2474・・・282

「では特典の説明をさせていただきます。

一つ目は1005番『いいキズぐすり』です」

「?・・・ポケモンですか?」

「はい。ポケットモンスターにでてくる回復のための道具の一つです。ちなみに回復量は50で」

「ん?」

「……ああ、剣盾では60でしたね。そっちがいいですか?」

「いや、別に。消費アイテムの特典ならいくらでも出せるんですよ」

「はい」

「なら………そういうえば僕とか他の人とかのHPつてどれくらいなんですか?」

「人によると言わざるをえませんが大人一般人が100前後といったところですかね。この特典の副産物として『鑑定』の“能力特典”無しでも自分や他人のHPを見る

「ことができるようになるので、それとかを使って確認してみてください」

「人に使えて……、けがを治せるんです？」

「はい」

「じゃあ病気とかはどうなんですか？」

「病気は治せませんね。病気で減少したHPを一時的に回復させることはできても根本治療しているわけではないので、容体の悪化とともに回復したHPは再び減っていきます」

「ふーん」

「二つ目の特典は2474番『わざマシン』……」

「またポケモン？」

「またポケモンです。」

これは自分やほかの生き物に使うことで相手にもうどくの状態異常を与えるわざ『どくどく』を覚えさせることができます」

「ほかの人にも？」

「可能です。ただ、毒消しがない以上解除ができないので散逸は避けるべきだと思いますが」

「……………そういえば僕の行く世界ってファンタジーの世界なんですよね。」

ポーションとかそういうキズぐすりの回復アイテムとか、なんにでも効く毒消しとかそういうのはないんですか？」

「ないですね。いや、なくはないんですが、あくまで民間療法程度というか、そういう回復アイテムの類はSSR級の数少ない秘宝扱いで、それ以外の毒消しの薬とかはなんにでも効くとかそういう便利なものじゃないです。」

魔法も梶原さんの行く『なんちやってファンタジー』世界は攻撃や防御に寄ってる感じですよ。回復の奇跡とかも使える人は少ない感じで」

「ふむん。」

「ということは『どくどく』したら毒を治すのは無理ってこと？」

「基本的にはそうですね」

「最後、三つ目の特典は282番『恋人のスタンドDISC』です」

「スタンド……ジョジョの？」

「おっ！ ご存じでしたか」

「しんちゃ——、……おじさんに見せてもらった本棚の中にあっただんで。」

あれでしょ、あの……なんだっけ」

「第三部スターダストクルセイダースに登場した、ステイリー鋼入りのダンが本体である 恋人の

暗示を持つ幽波紋です」

「らばーずってどういう意味ですか？」

「恋人という意味ですね。作中ではエンヤ婆を殺害したりしてましたがどうです？ 思

い出せたりしました？」

「分身したりしてましたっけ？」

「(ニツチな場面思い出したものだな……)」

ではそれも含めての特典の説明をさせていただきます。

スタンド『恋人』は、本体曰く「髪の毛一本さえ動かすことの出来ない、史上最弱のスタンド」で、大きさも目に見えないほどの大きさでしかありません。ただその弱さの代わりに、射程距離・持続力はとても長く、数百キロ遠くでも自由自在に動かすことができます。

『恋人』特有の能力は感覚共有。相手の耳から体内に侵入し、脳に居座った『恋人』は本体に何かあればそれを相手に反映させるなどして本体と相手の感覚を共有させます。本体が足をぶつけければその痛みが、背中を搔かれればその感覚が何倍にもなって相手に返り、本体を痛めつけようものなら、相手にもその数倍のダメージが跳ね返り、場合によつては痛みで相手をショック死させることもできるといっわけです」

「なるほど……いいキズぐすりがあるしいくらでもサンドバックになると、そういうわけですか？」

「いやいや、そんな意図はありませんでしたよ。でも確かにそういうこともできますね」

「痛いのは嫌いです」

「そうですか」

「まあ、原作ではD I Oの肉の眼を携帯していましたが、この特典にそれは含まれていないのであしからず」

「大丈夫です。それでスタンドDISC? ってのはなんなんです」

「あ、はい。スタンドDISCとはジョジョの奇妙な冒険第6部ストーンオーシャンに出てくるスタンド「ホワイトスネイク」の能力で物質化された他者のスタンドを総称するものです。このスタンドDISCを頭か何かに挿すことでそのDISCのスタンドを己の物とすることができる、というものです」

「へー」

「最後は『能力特典』です」

「サイコロ」

「はい」

「……………つや!」

「出目は4、梶原さんの『能力特典』は『リスタート×1』に決定しました」

「やり直し……んんー、はい、はい、はい。うん」

「さてさてさてさて　それではそれでは」

それでは転生です。

あなたは3つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけでは

ありません。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございますましたー」

「はいどうもー」

☆□ 55番 森山恋 享年21歳の場合

はろはろー。11話ぶりこんにちは、神様ですよ？

恒例、5回目のゾロ目回だ。

くじは完全運任せで引いてもらっているから安心しといてねー

「次の方どうぞー」

ガチャ

「失礼します」

「はいどうも。55番、森山恋さんですね。こちらへどうぞ」

「はい」

「こちらは転生所。『かくかくしかじか』そういうわけで、森山さんには転生をしていた
できます」

「なるほど」

「本来なら、森山さんにサイコロを振ってもらって、転生先の世界を決めることになっているのですが……」

「……」

「森山さんの番号は『55』つまり『ゾロ目』なので、神様からささやかな特典と、命令があります」

「命令ですか？」

「ああいえ、強い言葉を使ってしまったが大したことじゃありません。転生先が神様に指定されるといっただけです」

「指定——いったいどこに？」

「それは転生の直前に、お伝えします。」

「それでは森山さん、サイコロを振ってください」

「サイコロつか、やったことないけどギャンブルとかそういう感じっすね。当たり出るかなあ？」

「ああはいはい。振ります振ります」

「かりやかりやかりやかりや」

「ほいさっさっさっ」とつ

からんからから……

「おっ！」

「おめでとうございます！ 出目6なのでくじを6枚引いてください」

「うっし！ 引きますよー！」

がさごそがさごそ

1 5 6 5 . . . 1 2 4 7 . . . 1 2 . . . 5 2 . . . 1 3 8 3 . . . 2 6 8 8

「はい。それでは引かれたくじの番号と対応する『アイテム特典』の説明をさせていただきます」

「お願いします」

「まず一つ目、1565番『PPキャンディー』。出典は天下のドラゴンボール」

「知らねえ……」

「最序盤に出てきてそれ以降登場することがない一発ネタでしたから、知らないのも無理はありませんよ。」

「このPPキャンディーは、仲間入りしたウーロンにブルマが「裏切り・逃亡予防」として舐めさせた下剤のようなものです」

「下剤？」

「はい舐めた者は「ピーピーピー」という声を他人から聞かされると、お腹を壊して下痢ピーしてしまう体質に変わってしまうという、そういうキャンディーです」

「ギャグみたいっすね」

「ギャグ多めだった頃のですから」

「そうっすか」

「そうです。あ、ちなみにですが効果は一月ですのでそこはご注意ください」

「結構長いっすね……一か月自然排出されない毒、薬？ すっげえ」

「次は二つ目、1247番『フワンテの入ったモンスターボール』です」

「フワンテ？」

「はい。フワンテ。ご存知ですね？」

「まあ、ご存じですが……紫の風船みたいで頭に白いうんこがのっかってる」

「ゴースト・ひこうタイプのふうせんポケモン。気球ポケモンのフワライドに進化する、そのフワンテです」

「ポケモンって生き物じゃないっすか。え？ ポケモンもらえるんすか？」

「はい。この特典は生き物だけど生き物じゃないことにしてポケモンを特典にしちゃおう！ という神様の考えなしで用意された特典でして……」

「へー……。あ！ そういえばポケモンもらえるって言いますけどその、エサとか——ポケモンフーズ？とか、どうすりゃいいんですかね？ あとは……ほら、回復とか。ポケモンセンターだっついてないっすよね？」

「それについては心配する必要はありません。あくまで、『アイテム特典』としてですから、たとえひんし状態になっても、本当に亡くなっても、ボールごと森山さんの中に戻していただければ全回復してまた動けるようになります」

「おー！」

「ちなみに進化にも必要なレベルアップは……どうすればいいと思われませんか？」

「え？ んー、そうっすね……。戦う？」

「正解です。野生動物でも人間でもなんでもいいので戦闘行為を行えば経験値を獲得し

レベルを上げることができます」

「つつても、ポケモンがいないのにポケモンバトルつてのも……ポケモントレーナーじゃないんだから、そんなに付き合つてらんないっすよ」

「ポケモンの特典を得られた方の中には放し飼いにする方もいらっしやいましたよ」

「え?! それってありなんすか?!」

「有りか無しかでいえば、有りですね。指示するものがいなくても勝手に戦っていればレベルは上がりますし、もしも負けて死んだとしても、あなたがボールを持っていればその中に帰ってきます」

「うーん……、でもそれってポケモンの判断で好き勝手に動いて指示に従うまま戦い続けるってことっすよね」

「そうですね」

「めちやくちや目立つんじゃないっすか?」

「そうかもしれないですね。しかし地道にやっていたら強くできないかも……それにもしも森山さんの転生先が現代を舞台にしていたら」

「いたら?」

「いえ——ただ学生は、自分の時間をとれないものですよ」
「……」

「三つめは12番『メラメラの実』です」

「エース！」

「はい。エースの実ですね」

「なんでしたっけ———そう、ロギア！ ロギア系！ ひよつとして最強なのでは

……？」

「さあ？」

「ああ、いやでもあの（名前忘れたけど）ライオン亀も『自分を無敵？』と勘違いした口

ギア系の寿命は短い』とかそんな感じのこと言ってたし……いやでもなー！」

「嬉しそうですね」

「そりやあもう！ これって相当なアタリじゃないっすか？」

「確かにそうですね自然系の悪魔の実は数が少ないですし、今までの転生者様でも引き当てられたのは片手で足りるほどですね」

「やっぱり！ いやー、あつはつは！ もってるっすね！ オレ！ えっへっへっへっへ」

「説明は必要ですか？」

「いやーいっすよ。平気平気」

「四つ目は52番『マグマグの実』です」

「はあ?!」

「はい。こちらも、説明は不要ですか？」

「いや、ちよつ待つ ええ……?」

「落ち着くまで待ちましょう」

「落ち着きました」

「落ち着きましたか。意外と早かったですね」

「それで、どういうことなのでしょう」

「普通に運がよかったのでは？」

「いやいやいやいや。引いた自分でもマジかよという気分なんすけど」

「しかしこれが現実です。一度引いたくじは、一度贈られると確定した特典は、変更は不

可能です」

「はい」

「……それで、説明はよろしいですか？」

「えっと、ひとつだけ。質問なんですけど」

「なんででしょう」

「やっぱり、その二つ口にしちゃあ、駄目なんですかね」

「だめではないですけど……体がはじけ飛びますよ？　そういう設定ですから」

「ですよー……じゃあ別の奴に喰わせるのか……」

「五つ目は1383番『ガンツバイク』です」

「ガンツバイク？」

「『GANTZ』分かりますか？」

「そりゃわかるっすよ。テレビで実写のやつ見ましたし、中学ぐらいのころに漫喫で読

みました。大阪編までは覚えてるんですけどそれより後は全然覚えてないっすね」

「作中、かつぺ星人編で初登場したSFチックな車輪搭載型のバイクです」

「かつぺ……恐竜の敵が出てきたやつっすか」

「そうですね」

「うん、うん、思い出してきました。あのあのあれですね、田中？佐藤？鈴木？のおっさんが後ろに乗ってズギンズギンしてた」

「多分そうだと思います」

「目立つなあ……ステルス機能とかついてないんすか？」

「いえ」

「んー、まあ、どこからともなく移動用の足を調達できるのは、利点っすかねえ？」

「そうですね」

「あ、そういえば運転とかは」

「がんばってください」

「あ、はい転びまくって体で覚えます」

「最後、六つ目は2688番『アナザーアギトウォッチ』です」

「アギト？」

「ご存じですか」

「ちっちゃいころに、昔のも全部借りて見たりしてましたし……アナザーアギトってのも聞き覚えがあるようなないような？ でもウォッチ？ 時計？ それはわかんないです」

「では説明を。」

この特典は、平成ライダー20作品目『仮面ライダージオウ』における敵勢力、タイムジャッカーがアナザーライダーを生み出すために使用するアナザーウォッチの一つ。

同名の仮面ライダーの力を宿していて、これを埋め込まれアナザーライダーに変身したものは、力の元となる仮面ライダーの能力を自由に行使することが可能となります」

「敵？ じゃあひよつとして怪人化のアイテムですか？」

「はい。アナザーライダー、この場合はアナザーアギトに変身可能というわけですね」
「んんん……いえ、ちよつと待ってください。アナザーライダーなんですよね」

「はい」

「アナザーライダー、アナザーウオッチ、アナザーアギト……じゃあ、オレの聞いたアナザーアギトっていったい……」

「森山さんの聞いたアナザーアギトは、原典である仮面ライダーアギト本編に登場した仮面ライダーアナザーアギトですね」

「違うんすか？」

「違いますね。見た目はぱつと見同じですけどね。しかし力の元がアナザーアギトは仮面ライダーアギトであって、仮面ライダーアナザーアギトではないので……」

「頭がこんがらがってくるっす……。それで、その変身したりして？ どんなことができまするんですか？」

「そうですね、まあライダーですから単純に優れた身体能力で敵を倒したり、武器作り出してそれで攻撃したり」

「ふんふん」

「特殊能力に増殖能力があります」

「増殖能力？」

「個体増殖能力です。噛みついた相手を自分と同じアナザーアギトにする……森山さんに分かるよう形容すると吸血鬼みたいなものでしょうか」

「吸血鬼」

「血を吸う必要はありませんけどね、噛みつきさえすれば。そして噛みつかれた人間は正気を失った怪物と化し、彼等もその力を受け継いでいるので増えるように言えば際限なく増えていく……そんな感じですよ」

「いやいやいや、やばすぎっしょ。世界滅ぶっしょ」

「ははははは、そんなにすぐには滅びませんよ。多分」

「多分?!

敵側のアイテムってことはなんかやばい副作用とかあるんじゃないですか？」

「いいえ、全然大丈夫です」

「ほんとにいい？」

「ほんとですほんとです。ちょっと、精神的に不安定だったり未熟だったりすると暴走したり闇が増大したりしちゃうだけで」

「ばりばり副作用じゃないっすか！」

「ははははは」

「さて、それでは最後に、*“能力特典”*を決めていただこうと思います」

「またサイコロですか」

「準備はよろしいですか？」

「おっす。よろしいっす」

「ではどうぞ」

からっ からっ からん

「はい。出目は3 『翻訳』です」

「おっしゃラツキー！ これでオレもバイリンガル！ ふっふー！ ……そうだ
ん？」

「質問なんすけど、この『翻訳』ってどんくらいまで訳してくれるんすか」
「どういう意味でしょうか」

「いや、ほら、別の国の人日本語でしゃべってて、んでその日本語が聞き取りずれ
なーって思ったときとかにも使えたりするんすか？」

「アクセントなどが耳慣れず、言葉として認識できない場合ということでしょうか」
「そうっす、それぞれ」

「質問にお答えさせていただきますと、可能です」

「マジっすか！」

「はい。この『能力特典』は所有者の理解できない言語を理解できる言語に翻訳するものなので、『なんだこれ、あー意味わかんねー日本語でしゃべれや!』とでも思えば働きますよ」

「いやそこまでは思わないんですけど、でも安心しました」

「他に何かありますか？」

「や、大丈夫です」

「それでは」

あなたは6つと1つの神からの贈り物をもって別世界に転生します。

今のあなたの自我を保ったまま、赤ん坊からあなたは人生をやり直します。

これからあなたの生きる世界に私たちは関与しません。

あなたがこれから手にする力で何をして、それはあなたの自由です。

私たちはあなたが亡くなった後に、あなたの人生を閲覧しますが、評価するわけではありません。

転生を実行します。それではよき人生を

「ありがとうございました」

「いってらっしゃいませ。良い人生を」

「あー……なんか気配感じるんですけど、神様つすか」

「イエス。神様つす」

「神様フランク」

「そうよー、神様ちゃんフランクなのよー」

「で？ オレは何をしたらいんすかね」

「大したことじゃないし、さっきやったことと同じことさー」

「一つと三つ、三つと一つのサイコロを振ってもらいたい。それだけさ」

「それだけ？」

「それだけ。」

「というわけでほれ、サイコロ。振ってみそ」

「うっす」

「へーほー、出目は1か。」

「そんなら今度は3つのサイコロを振りなさい」

「そうしたらどうなるんすか？」

「いいからいいから」

「おつす」

「?..?..?」

「おー、まあまあかな。」

「うんとね、今の振ってもらったのは年数サイコロなんよ。『3個のサイコロの出目で積を出し、出た数の年数分原作から遡り生まれる』ってね。」

$2 \times 4 \times 5 (\times 1)$ で40年。

「もりもりくんは原作開始40年前に転生ってことでヨロ」

「40年前つすか? それじゃあ目くるめく冒険の日々の時オレおっさんじゃあないつすか。」

ダンディなイケオジになっちゃうつすよ、困っちゃうなく……あ、そういえばオレの生まれる世界ってどこなんすか？ 結局さっきのヒトには教えてもらえなかったし」

「転生先？ 教えなかったの、職務怠慢ネ。もりもりくんが転生するのは『ハイスクールD×D』よ。知ってるね？」

「知ってるつす。昔クラスメイトの一人が学校に持ってきてて、パラパラつと読んだりしました」

「うんうん。あと、もりもり君には期限付きの『不老不死』と『病気への完全耐性』をプレゼント！」

前の奴が老けないので周りとは色々たらぶつたからー、『認識操作』もつけよう。これでも不老不死でも怪しまれることはない。君の年齢や衰えについては誰も深く考えられなくなるよ」

「あざっす」

「よきにはからえー」

「へへー！」

「ほら、いつてらっしやい」

「ありがとうございました」